



ぼくがあこの町に、妹のリサと踏み迷ったのは、今からほんの二ヶ月ほどの前のことだ。当時、ぼくは生活に退屈していたし、家にじっとしている限り、これといった事件も起こりそうになかったので、ここらで一つ旅をしてやろうと思い立ち、妹を誘ってみたのだ。彼女は快く承諾し、さっそくその翌日、これといった計画もないままに、ぼくらは、我が家を後にした。最初の数日間は、ぼくの気晴らしに随分と役立った。汽車の旅は快適だったし、泊まったホテルの窓から見える夜景の美しさは格別だった。ぼくとリサは、これといった悶着も起こさず、互譲の精神で、終始行為を共にした。ぼくが主に彼女に譲ってやったのは、彼女の好きな、観劇やコンサートやダンスホールへ行くことで、人ごみの嫌いなぼくが、そういやな顔もせず、彼女の言うままに付いて行ってやった代わりに、彼女がこのぼくに譲らなければならなかったことは、見物や外出に疲れたぼくが、泊まっているホテルの一室で、のんびりと午後のひとときを過ごす余裕を、このぼくに与えてくれることだった。そんなときは無論、彼女は、ひとり退屈そうにし、ときにはひとりで町の中へ出て行ったものだが、しかし決して、これがぜいたくな望みだと言うことはできないだろう。ただし、ぼくは、それ以上のものを、彼女や、他の人々に要求しようとは思わない。しかし、以上の二点を除いては、彼女とぼくの意見は、概ね一致し、ぼくたちは、互いに譲る必要もなく、共に行動をすることができた。遺跡のあるところをめぐったり、静かな山の散歩道を歩いたり、ときには、まばゆいばかりの海辺の砂浜で寝そべったり、ヨットに乗って遠出をすることもあった。ぼくは、砂浜に寝そべって、ぼんやりと空を見た。空には雲一つなく、キラキラ輝く太陽すら視界には、入って来なかった。青い、無限に広がる午後三時の空が、ぼくの目を満たした。風が吹き、すぐ近くでは、砂浜を洗う波の音と同時に、水と戯れるリサの楽しそうな声が聞こえていた。ぼくは、幸福だった。何も考えず、うっとりした、まどろむようなひとときを過ごすことが、ぼくは好きだった。そこでは、あの陰うつで、胸をえぐるような思考力を働かせる必要が少しもないのである。それから、ぼくは、リサと連れだって、近くにある磯へ行き、彼女の手を取りながら、危なかしげな岩の上を歩き、そこに住む小さな虫や、海中の魚やうになどを観察し、しゃべり、笑い、楽しんだ。気に入ったホテルでは、そういった日が数日間も続くことがあった。しかし、どんなに変化に富む場合でも、たいていは三日もすれば飽きて来るもので、そうなると、またすぐ別の町へと旅立って行った。ぼくたちの旅は、いわば金にものを言わせた旅だったので、気まぐれというものが大いに働く余地があった。一日に、数百キロも前進することもあれば、興味やふとした偶然に妨げられて、ほんの数キロしか進めないこともあった。ひからびた無人の土地を、時速120キロもの速度で、車に乗って突っ切って行くということは、いいものである。が、初めて見る知らない町の中を、そこに住む人々の風俗や言語を見聞しながら、のんびりと歩いて行くということも、決して悪くはない。ぼくたちは、目に見えるもの、耳に聞こえるもの、手に触れるものすべてを楽しんだ。

こうして、旅の最初の数週間は、これといった障害もなく、何不自由なく、存分に楽しみながら、過ぎて行った。

しかし、間もなく、あの決定的な日に出くわさねばならなかった。何が、そうさせたのだろうか？ それは、ぼくたちの気まぐれな旅に対する当然の罰だったのか？ しかし、一概に、あのことを、罰だと呼ぶわけには行かない。なぜなら、その後のぼくたちの身に、なんの変化も、なんの異常も起こってはいないのだから。ぼくは、今では、自分が普通の人間であることを確信している。ぼくは、普通の生活をし、普通の人間的感情を有し、普通の生活で満足している。妹のリサだって、そのことには変わりがない。彼女は現在、旅に出かける以前に勤めていた同じ大学へ働きに出かけているし、まるであんな事件などはなかったみたいに、以前と変わらぬ態度で、ぼくに接し、また世間の人々と接しながら、普通の生活を送っている。ぼくたちが、あの事件のことを人々に語ろうとしなかったのは、いわばこの普通の生活を愛するあまりの方便のようなものだったのだ。ぼくたちは、常識から見ればあまりにも馬鹿げて見えるぼくたちの体験談で世の中を不必要に惑乱させたくはなかったし、なによりも、ぼくたちは、自分たちの静かな生活を守り通したかった。だから、あの事件のことは、ぼくとリサの二人だけの秘密においておかれ、世間の人々がそのことを知らないのはもちろんのこと、この頃では、ぼくたち二人の間ですら、あの事件のことを口にするには、まれになってしまっている。しかし、だからといって、あの町も、あそこで体験した数々の事件も存在しなかったということにはならない。今もなお、頭の中に強烈に焼きついているあの当時のことを、なかったものとして、葬り去ることは不可能である。確かに今は、あの町から遠く離れたところに住み、ここで満足を見い出しているし、仮にあの町へ再び行くことがあったとしても、再びあの町に出会うことができるかどうか定かではない。しかし、そういうことは、もはやぼくの関心外のことである。重要なことは、あのとき、あそこで、ぼくたちが一体何を体験したかということ、ここで再構成してみることである。そして、あの混沌とした、秩序の崩壊を思わせる町の中から、その真の意味を引き出すことである。ともかく、ぼくたちは、あの町で、現在ぼくがここで過ごしているような日常生活からは想像もつかないような、不思議で、恐ろしい、ほとんど不可能な現実をかい間見たのである。

ぼくたちが、その町に出会ったのは、ほんの偶然からだった。いつ果てるとも知れないこの旅を始めてから三週間ほどたった頃、ぼくたちは、そろそろ旅にも飽きて来ていたし、あの簡素で、安逸で、平和な我が家が恋しいとさえ思うようになっていた。ちょうどその日、ぼくたちは、テルリアパンソという名の、とある静かな村のホテルに泊まっていた。このホテルは、この村ではただ一つしかないという代物で、それでも部屋数は十ほどあり、ホテルらしい体裁を整えてはいたが、そのとき泊まっていたのは、周囲の景色を眺めるためにわざわざ三階の部屋を借り切ったぼくたちの他には、近くの湖へ釣を楽しむためにやって来た子供連れの若夫婦しかいないという寂しさだった。

もっとも、ぼくたちは、ドライブの途中で、この村にさしかかり、そのとき目にしたこの村の静かなふんいきがたちまちぼくたちの気に入って、とうとうここで一泊する決意を固めるという形になったわけで、実際は、ここで泊まることは少しも勘定に入っていたわけではないのである。ぼくたちがここでもたつくことになるまでは、ここからさらに数百キロも向うにある、ぼくたちがこの旅の最終の目的地と決めていた、コアンベルという有名な保養地を目指していたのであった。そこはにぎやかな保養地で、この簡素な村とは違って、幾十もの豪勢なホテルが立ち並ぶそのすぐ前には、目も覚めるような青い海と砂浜とが広がっており、恐らく、夏の真盛りのその頃には、至るところで、バカンスに詰めかけた人々に、車の長い列に、海に浮かぶヨットの群れに、あるいはまた、砂浜で戯れるかっぱ族の群れに、お目にかかるはずだった。ここ数日の間、寂しい山の中ばかりを旅していたぼくたちは、そろそろそのような賑やかな世界というものに飢えを感じていた。ぼくたちは、静かな鑑賞生活から解放されて、最後に一度でもいいから、全身を激しく動かしたい欲望にかられていた。浜辺の強烈な日光を全身に浴びて、無数の無名の人々がいるなかで、彼らの声や騒音や波の音を感じながら、ぼくたちのささやかな遊戯を楽しむことは、この長い旅の最後を締め括る絶好の儀式のようにも思われた。前日、夕方には着く予定のその保養地を目指して、胸を踊らせながら、車を走らせていたときには、この小さな村のことなどは、なんの計画にも入ってはいなかったのである。ぼくたちがテルリアパンソにさしかかったのは、前日の正午過ぎのことだった。最初に、モミ林の間から、急に大きな、静かな湖が現れ、そのまま湖岸沿いのハイウェイをしばらく行くと、周囲が山に囲まれて、湖の眺めも一番いいと思われるところに、小さな村があった。ぼくは、たちまちこの村が好きになった。なによりも、このような大きな湖と、晴れた空の下に広がる静かな自然とを有しながら、人々には余り知られていないらしく、ほとんど無人の村のように見えるところが、ぼくの心を捕らえた。それでも最初のうちは、ぼくたちがここで一泊することになるだろうとは、思ってもいなかった。ぼくたちは、湖が見渡せる静かなドライブ・インで車を止めたが、それは無論、このうららかな自然のふんいきを味わいながら、ほんのしばらく、憩いと昼食とをとるためのものに過ぎなかった。ぼくたちが中に入って行くと、中はガラーンとしており、ただ見晴らしのいいテラスのところに幾人かの人々が丸テーブルを囲んで食事をしていたが、そのうちの一つ、ちょうど、ぼくたちがその隣に腰掛けることになった子供連れの人々が、例の魚釣りに来た人々だった。やがてぼくは、彼らと親しくなり、そういう偶然も手伝って、最初の計画を一日延期する気になった。リサは初め、それほど乗り気ではなかったが、ぼくが熱心に頼み込んだこともあって、とうとう一日延期を承諾してくれた。ぼくたちは、その日の午後、ホテルとの契約を済ませると、さっそく裏山に登った。背の高い樹木のおい茂る森のすき間からは、日光が、幻想的な青白い光を、下の方にまで投げかけており、あたりは全く静かだった。ぼくたちは、道に迷うかも知れないことも恐れず、大胆に、どんどん登って行った。こういうささいな冒険は、旅行の至るところでやって来たものだった。

そのために、ときには危うく命を落としかけたこともあったが、こういう冒険が、比較的単調だったぼくたちの旅に花を添えてくれたのは事実である。とうとう山を登りつめて、近くにあった大きな岩の上に立つと、さっきの湖が、はるか眼下に、しかもいっそう雄大で、神秘的な姿で横たわっているのを、見渡すことができた。ぼくたちは、なんとも言えない自然の匂いをかぎ、そうして、周囲の樹木に、まだまだずっと遠くまで連なる山の尾根に、そろそろ夕方の到来を告げる紺色の空などに目をやって、すっかり満足すると、再び、来たばかりの山を降りて行った。

さて、その翌朝、ぼくが目を覚ますと、窓の外は、前日とは打って変わって、曇り空だった。陰うつな雨雲が空一面に重く垂れこめており、湖のほとりの、昨日はあれほど生き生きしていた森の木々も雨に濡れて、もの悲しげな姿を見せていた。そのときは幸いにも雨がやんでいたが、すぐには晴れそうもない分厚い雨雲のことを思うと、またなんどき雨が降ってくるか知れたものではなかった。それを目にしたときのぼくは、せっかく心待ちにしていたこの日の楽しみが半減する思いがした。しかしともかく、ぼくたちは出発しなければならなかった。気分が晴れないままに、階下の人気のない食堂で朝食を済ませ、部屋に戻って持ち物を整理し、それから、近くのガソリンスタンドで車にガソリンを満たして、いよいよ出発というときになって、突然、ホテルの主人がぼくたちのところにやって来た。初め、何か忘れ物をしたのだろうかと思ったが、そうではなく、主人は、ある忠告をしにやって来てくれたのだった。ぼくたちがこれから行こうとしている山の道は、崖崩れが多く、雨の日には決まって数カ所が崩れて危険だから、この日の出発はあきらめて、一日延期してはどうかというものだった。近くにはたまたま、例の釣りに来ている主人もいて、彼は、雨もよりの空をうっとおしげに見上げながら、同じことを、ぼくたちに勧めた。しかし、ぼくは断ることにした。この村でさらに一日過ごすことは退屈に思え、早く次の目的地に着きたかったし、その上、崖崩れと聞けば逆に例の好奇心と冒険心がふり立って来たからでもあった。ぼくは、彼らの親切な忠告に対して、丁寧に断ると、車をゆっくりと出発させた。村を出て、雨模様の湖沿いの舗装道路に出ると、それまで黙っていたリサが、急にぼくに尋ねて来た。

“もし崖崩れにでも会ったとしたら、どうするつもり？”

これに対しては、

“もし、そんなことにでもなれば、そのときこそ本当に生きるか死ぬかが決せられるときだろうな”と、ぼくは軽くうっちゃっておいたが、こうして無理を承知で飛び出して来るといふ偶然が、崖崩れどころか、あの恐ろしい世界への突入の序曲であったとは、そのときのぼくたちには、知るよしもなかった。

間もなくして、ぼくたちの目を楽しませてくれた湖とも別れなければならなくなった頃に、いよいよ、ぼくたちの車は、ホテルの主人たちが心配していた例の山の道にさしかかるようになった。道幅約7メートルぐらい、立派な舗装道路が通っていたが、この道をつくるために自然を犠牲にしなければならなかったと見え、道の両側には、削ったばかりの真新しい土膚がきり立っ

て見えていた。

周囲はすべて雨にぬれてしっとりとしていたが、幸い、そのときは雨が降ってはいなかった。ぼくは、思い切って、アクセルを踏んだ。一本の青い舗装道路は、入り組んだ山の谷間に沿って、どこまでも続いているようだった。山特有の同じような光景が、何度も背後に流れ去って行った。ただ不思議なことに、この道にさしかかってから、ぼくたちは一度も前からやって来る車に出会わなかったし、ときどきバックミラーを覗いても、一つの後続の車も見た覚えはなかった。しかし、この寂しさという点を除けば、ぼくたちは、山崩れにも出会わなかったし、空は相変わらずの曇り空ではあったが、ここしばらくは雨が降って来る気配もなく、ドライブは快調そのものだった。そうして、一時間ほどが流れ去った。単調な景色のせい、それまで助手席にいて、なにくれとなくぼくに話しかけていたリサが、そろそろあくびをするようになり、こっくりとうたた寝をするようになって来た頃、ぼくたちを乗せた車は、初めての別れ道にさしかかった。道の別れ目のところには、小さな標識が立っていた。ぼくは、目を閉じて気持良さそうに眠っているリサをなるべく起こさせまいと、そっと車を、その標識に近づけて、停車した。白いペンキを塗った木製の標識には、簡単に次のように書かれてあった。

右向きの矢印；コアンベル方面 250 Km

左向きの矢印；インゲルート方面 50 Km

コアンベルは、ぼくたちがこれから行こうとしていた例の保養地の名称だった。しかし、インゲルートというこの聞き慣れない名称の町がふとぼくの好奇心を捕らえ、ぼくは早速ガイドブックを取り出して、調べることにした。ガイドブックには、ぼくたちがつい今しがた出て来たばかりの村のことは書かれてあったが、インゲルートについては何も触れられてはいなかった。念のためにぼくは、道路地図をも取り出して、ページを繰ってみた。が、インゲルートという町の名はおろか、すぐそばに見えているきれいに舗装された道路のことも、記載されてはいなかった。こういうことは、これまで一度もなかったことだったので、インゲルートという地図にない町は、たちまちぼくの興味の的となった。ちょうどそのときだった、

“どうして車を止めたの？”と、突然、ぼくの脇でリサの声がした。彼女は眠そうな目で、それまでほとんどぼくの肩に乗りかかっていた頭を起こした。彼女は、どうやら、ぼくが車のボックスから地図などを出し入れしている間に、車の異変に気づき、目を覚ましたようだった。

“インゲルートだって。地図に載っていない町のことさ”と、ぼくは答えた。

“地図に載っていないって、そんな町があるの？”と、彼女は、まだ夢うつつな様子で、自分の言っている言葉の意味がよく分かっているのか、狭い車の中で腕を伸ばし、あくびをしながら、そう言った。

“ところがあるんだよ”と、ぼくはかまわずに答えた。“ところで、どうする？ 行ってみないか？ たった50 Kmのところだってさ。行っても別に損はないと思うんだけど”

しかし、ぼくのこの控えめに切り出した提案は、リサが強く反対した。

また寄り道をするといいだすと、彼女は急に目が覚めたみたいになって、ぼくに反論を浴びせかけた。彼女の言い分は、次のようなものだった。

一口に50キロと言っても、このように曲がりくねった山道では、そう簡単には行けないこと。そんなことで道くさをくっていたら、夕方までにコアンベルに着くという当初の予定が狂う恐れが出てくること。さらに、仮にその町でまた一泊するつもりでいたとしても、記載漏れされるくらいの――彼女は、インゲルトという町が地図に載っていないのは、記載漏れのせいだと頭から決めつけたのだ――小さな村のことだから、今度は、ホテルがあるかどうかも怪しいこと、等々の理由からだった。

その言い分の中にはもっともなところもあり、今回はどうやら、彼女の言い分に従う他なさそうだった。ぼくは、心残りなところもあったが、あきらめて右側の道に向かって、車を走らせることにした。

車が再び軌道に乗り始めると、リサは再び元気が出て来た。ぼくのささやかな希望をにべもなく払いのけると、いよいよ待ちに待ったコアンベルがやって来るというわけで、彼女は、まるで子供のようにしゃぎ始めた。後ろのシートからゼリーの入った袋をつかんで来たり、コーラを飲んだり、ときにはぼくにも勧めて来たが、ぼくは断った。すると彼女は、わずかに開いた車窓から吹き込む風を頬に受けながら、歌を歌い始めた。彼女の声は、幾分押さえ気味の柔らかい声で、この小さな車の中に響き渡り、しっとりとしていたぼくの胸に、久し振りに旅行気分というものを吹き込んでくれた。しかし、ぼくは完全に彼女の意のままになっていたわけではなかった。表向きは彼女と歩調をともにしているようだったが、しかし、心の内側では、相変わらずあの町のことが気掛かりだった。

だが、一つの偶然が、ぼくたちの行手に待っていた。別れ道を去ってから深い茂みの山道を数分も走った頃、ぼくたちは、思いがけなくも、車の前方に大きな崖崩れの現場を発見した。車をすぐ近くまで近づけて降りてみると、崖崩れは、相当広範囲に渡っているらしく、道のすぐ脇まで迫っていた崖の土膚がごっそりと削り取られていて、恐ろしい口を空けているのが見えた。だが何よりもぼくたちの目を色めき立たせたのは、道路の上に高く堆積した土砂の山であった。ぼくたちが立っているところから眺めたところでは、土砂の山は余り高くて、その果てが見えなかったが、崖のめぐりぐわいから察すると、どうやら3～40メートル近くに渡って、この道を塞いでいるらしかった。この恐ろしい現場を目の当たりにして、まず落胆の溜息を漏らしたのは、リサだった。それまで陽気に歌を歌ったりして旅を楽しんでいた彼女にとって、こうして車が進めなくなったことが、よほど身にこたえたらしかった。

“これじゃ通れそうもないわね”と、彼女は、崖崩れの現場の前で茫然と立ち尽くしながら、ぼくに言った。

彼女のその姿と言えは気の毒なくらいだったが、ぼくはそれほどでもなかった。むしろ、これであの町に行けるかも知れないぞという、ひそかな喜びがちらつくのを感じたが、彼女の心底から落胆した様子を見ると、そう嬉しそうな顔をするわけにも行かなかった。

“だろうね。どうやら引っ返す他なさそうだとぼくは答えた。しかしそれでは余り気の毒なので、ぼくは、彼女を励ます意味をも込めて、次のように言った。“でも、この分じゃここ当分は、コアンベルだって雨に違いないし、そんなに早く着いたところで、すぐに泳ぐというわけにも行かないだろうよ。むしろ、崖崩れに会わなかっただけでも感謝しなくっちゃ”

こう言うと、彼女もやっと、納得してくれたようだった。

“そうね。もともと強行軍のつもりでやって来たんだから、きょう中に着くなんて無理だったのかも知れない”と、彼女はあきらめ顔で答えた。

“さっ、それじゃ車に乗ろう”と、ぼくは、彼女の気が変わらないうちに誘った。

ぼくたちが車に元通りに乗り込むと、やがて、ぼくは車をUターンさせ、崖崩れの現場を後にして、もと来た道を引っ返し始めた。

リサは、車に乗ってからしばらくの間は、行きしなとは打って変わって、疲れたように背中を後ろにもたれさせ、じっと前方の一点を見つめたまま、口もきかなかった。しばらくして、彼女はふと思い出したように、菓子包みを取り出して、無言のままクッキーを食べ始めたが、ぼくは、そのときを見計らって、それまで言いたかったことを、口にした。

“ところでどうする？ リサ、もしこのままあの村に引っ返すとしたら、また一時間ほど待たなくっちゃならないけど、それよりも、ほら、さっきのあの町、確かインゲルートとか言ったあの町へ行ってみないかい？ 時間にして、あの村に行くのとそれほど変わらないだろうし、それに...”

“それに？ 兄さんはきっと、土砂くずれに会ったことを、腹の底では喜んでいたんでしょ”と、リサは振り向いて、叫んだ。“これで、インゲルートとかいう町に行けると思って！”

“いや、それだけじゃないさ”とぼくは、冷静な顔をして答えた。“それにひょっとして、コアンベルへもその町を通って行けるかも知れないしね”

この最後の言葉には、リサの皮肉も及ばなかった。

“いいわ。兄さんの勝手になさい”と言うなり、彼女は、知らないと言わんばかりに、顔をそ向けた。

ぼくは、その言葉を文字通り受け取ったふりをすると、黙ったまま、車を走らせ続けた。

こうして、ぼくたちを乗せた車は、再びあの別れ道にやって来た。別れ道には、さっきと同じ真新しい標識が立ててあった。

インゲルートへ50キロメートル ようこそ、インゲルートへ

ぼくは、白塗りの、雨にぬれた、静かなその立札を見ると、急に体がぞくっとするのを覚えた。

“本当にいいんだろうね、この道を行って”とぼくは、もう一度念を押して言った。“もし仮にインゲルートという町がなかったとしてもだよ、それはぼくの責任じゃないからね”

ぼくは何も責任のがれから言ったつもりではなかったのだが、さっきの崖崩れで相当こたえたと見えたりサは、半分やけっぱちな口調で、また半分はぼくに対する当てこすりも含めて、こう言った、

“いいわよ、どんな町だって。幻の町でもなんでも来るがいいわ”

しかしそれは、ぼくにとっては愛きょうとしか思われなかった。ぼくは、ハンドルを右側に切り、胸を踊らせながら、しっとり雨にぬれた山の合間の、神秘的とすら感じられる静かなハイウェイに向かって、車を走らせた。

しばらく行くと、この道は、さっきの道とは違って随分とカーブが多く、山の間にはさまれて見える空が刻々とせばまって行く、一段と深い谷間に下りつつあることが分かって来た。溪谷のふもとのほうは霧に包まれて深閑としており、いかにも鬼気迫るといった感じをかもし出していた。しかも山全体が雨にぬれて、これが昼間だとはとても思えない陰鬱な光ぼうの中にずっしりと沈んでいる様子は、幻想的とすらいえる美しさをたたえていた。ぼくは、初めて目にするこの不思議な世界に、最初は心がすっかり奪われた感じだった。これらの静けさと憂鬱とをたたえた情景は、ぼくの目をみはらせ、なんとも言えない魅力でもって、ぼくの心に迫って来たのである。その瞬間、ぼくは、自分が車に乗っていることも、隣に妹が座っていることも忘れて、自分の肉体がすっかりこの世界に吸収されてしまったのを感じた。実際、そこから一つの神秘的直観が得られるのではないだろうかと期待し、またそのような気になったのだった。だが、一つの小さな事故が、この呪縛を破壊した。山のカーブは、つい最近まで雨が降っていたと見え、つるつるとすべり、危険きわまりないものであったが、ぼくのちょっとした不注意からカーブにハンドルをとられて、危く、目の前の底知れぬ谷間に転落しそうになった。ぼくはあわてて急ブレーキをかけ、車を止めたが、

“気をつけてよ、兄さん！”とリサは、ビックリして叫んだ。それから、ぼくの方に向き直ると、“どうしたっていうの！ もう少しで落ちるところだったじゃない。あたしはまだ、そんなに早く死にたくはないわ！”

リサは、本当に、心から驚いたようだったが、ぼくも助かって、本当にほっとしたのだった。

“ごめん、ごめん。ちょっと気をとられていたもんだから”とぼくは、自分の非を詫びた。それから、ぼくは、スピードを幾分ゆるめることにし、もっと慎重に運転することにした。

しばらくすると、山頂あたりに群がっていた雲が次第に山腹にまで降りて来て、周囲は次第に昼間の明るさを失って、まるで夕方のような薄暗さに変わって来た。ぼくは仕方なく、車のヘッドライトをつけなければならなかった。しかし、ヘッドライトの明かりは、道端に現れる葉陰を次から次へと照らし出し、それはぼくにまたもや幻想的な歓びを与えてくれたが、リサは逆に、とんだ冒険からこのような事態になって来たことを、むしろ心配するようになって来たらしかった。

“へんなところに来るからよ”とリサは、ぼくを責めた。

“どうしてさ”とぼくは答えた、“面白そうじゃないか”

すると彼女は怒ったように、顔を向う側の窓に向けて、言った。

“ふん。この道を行って、町なんかに出会わないかもしれなくてよ”

“でもともかく、道は続いているんだからね”とぼくは、落ち着いて答えた。“まさか道の果てで、悪魔が口をぽっかりと空けて、ぼくたちを待ち受けているというわけでもないだろうし”

しかし、この言葉は、リサをぞっとさせたようだった。彼女は急に体を引き締めたようになって、“もしそんなことにでもなれば大変だわ”と言った。

あたりは、ますます暗くなり出して来た。しかも悪いことには、ついに雨が降って来たことである。それは山特有の、雷を伴った激しい雨で、最初雨がパラついて来たかと思うや間もなく、激しい、シャワーのような雨がざあっと勢いよく降って来た。道はたちまち雨で埋まり、山を下って来た雨水も手伝って、まるで川のようにになった。フロントガラスには、横なぶりのきつい雨がたたきつけて来る。やがて、急激な気象の変化がもたらした強い風も出て来、渓谷全体の樹木を、まるで旗のようにざわざわとゆさぶり始めた。山は雨のためにすっかり霞み、遠くからはときどき、不気味な遠雷の鈍い音が耳に入って来る。突然、風にあおられた樹木の枝がニュッと目の前に現れてフロントガラスをなでた後、後ろへ去って行った。ぼくは、はっとして、急ブレーキをかけた。ぼくたちの体は、ガタンと前方にのめり込んだ。リサは、“キャッ！”と叫び声をあげたが、もし急に手を前に差し出すことがなかったなら、彼女は、顔をまともにフロントガラスにぶっつけるところだった。しかし幸い、二人にはけがはなかった。ぼくが再び車を走らせると、リサはさっそく、ぼくに言って来た。

“ねえ、どうするつもりなの？ このままじゃわたしたち、危険だわ”そう言った彼女は、今では本当に、死の危険を感じているようだった。

“うん分かっている。できるだけ気をつけるよ”とぼくは答えたが、しかし決して自信があったわけではなかった。このような自然の脅威を相手には、人間のつくった車などひとたまりもないことを、ぼくはよく知っていたのだ。ぼくはふと、村の主人らが崖崩れの危険を注意してくれたことを思い出して、もしまん悪く今通過しているこの崖が崩れ出しでもしたら？ と思うと、ぞっとした。

そのとき突然、山腹の森に一筋の閃光がひらめいたかと思うと、間髪を入れずに割れるような雷鳴が轟いた。リサは“キャッ！”と叫んで両耳を押さえると、子供のようにうづくまった。ぼくも、その余りにもすさまじい光景には、すっかり胆を冷やしてしまった。リサはやがて恐る恐る顔を上げると、不気味な周囲を見つめながら、次のように言った。

“わたしたち、このまま死んでしまうわ。崖くずれに会う前に、雷に打たれて殺されるわ。もしそんなことにでもなれば、みんな兄さんの責任よ”

彼女は今では恐怖を乗り越えて、こんな冒険を試みたぼくに対する非難をするようになって来たのだ。しかしこれに対しては、ぼくは返す言葉もなかった。もうあれからだいぶ深入りしてしまった今となつては、来た道を引返すわけにも行かなかつたし、ぼくとしては、ただなんとか早くして、この不気味な溪谷を脱出し、町なり村なりの避難場所が現れてくれることを願う以外にはなかつた。だが谷間の嵐は一向止む気配がなく、どこまで進んでも、雷が鳴り響き、溪谷全体が怒涛のように荒れ狂っていた。ただ間もなくすると、雨の向うに森の割れ目のようにかすんで見えるところへこの道は続いており、どうやらこの危険な溪谷からは脱出することができるようだった。車は予想通り、間もなく深い霧におおわれた溪谷を去って、両側が森に囲まれた、なだらかな傾斜地を走るようになった。道はもはや曲がりくねつてはいず、森の中をほとんど一直線にすつと延びており、ときどき稲妻がその上を照らし出した。空にはまだ一面に雨雲が張っていて、不気味な黒雲がまるで怪物のようにその前をうごめいていた。しかしともかくこれによって、ぼくたちは崖崩れの危険からは一応脱することができたのだ。ぼくは、急速に、それまでの張りつめた緊張感がほぐれて行くのを感じた。

“ぼくたちはそう簡単に死にやしないよ。神様がきっと、ぼくたちのことをお守りなんだからね”とぼくは、そうして心からほつとすると、得意満面の顔つきで、リサに声を掛けた。“そのうちきっと、インゲルートの町並が見えて来て、今晚はそこで一泊することになるかも知れない”

“いやよ、また一泊するなんて！”とリサは答えたが、彼女も今では、死の危険が遠ざかり、逆に休息の町が現実化しつつあることを信じているのは、明らかだった。

そして、そうした安堵感が禍いしたのか、道は真直ぐな一本道でもあり、早く目的地に着きたいという期待感も手伝って、ぼくは、再び車のスピードをあげた。だが、こうして自然をみくびるのは危険な試みでもあった。ぼくたちの行く手に、自然が仕掛けた危険なわなが待っていようとは、思いもよらなかつたのである。だが、こうかつな自然は、ひとつのわなを仕掛けてぼくたちを待っていた。それも、ぼくたちが心を張りつめ、最も注意深くなっているときを狙うのではなく、逆に最も狙い易いときを、すなわち、危機を脱したという安堵感がぼくたちの心を捕らえたまさにそのときを狙っていたのである。無論、このように自然が生きものであり、本当にそのようなときを狙ったのかどうかはぼくの知るところではないが、あの事故以後不思議な体験のことを思い合わせると、ぼくにはどうしても、自然そのものが生きものだったのか、あるいは少なくとも何か背後にあるものによってあやつられてそうなつたのだとしか、思われぬのだ。少なくとも、あれが単なる偶然だったという考えに承服することはできない――

瀕死の思いをしたあの事故は、ぼくがいい気になって車のスピードをあげてから間もなくして、起こつた。それまで遠くのものだとばかり思っていた稲妻が、突然、数十メートルほど前方の森で強烈な音を伴って光つたかと思うと、すぐに、森に茂っていた一本の大きな木が、メリメリという音をたてて、路上に倒れて来たのだ。ちょうどそのときは車もスピードに乗っていた真最中で、ぼくは急ブレーキをかけたが間に会わず、みるみるうちに路上をふさぐように倒れた大木が目にと迫ってきた。

恐らくぼくは、はっとして、ハンドルを左に切ったに違いない。左側のなだらかな斜面は、右側の斜面に比して、比較的木がまばらであることを、直観的に悟ったのだ。だがしかし、生まれて初めての恐ろしい光景を目の当たりにして、ぞっとするような恐怖感が背筋を走ったのも、束の間だけだった。ただリサの大きな悲鳴、草むらに突っ込んで行って、車が何かに強く突き当たる音を耳にしたのを覚えているだけで、それっきりぼくは気を失ってしまった...

気が付くと、ぼくはハンドルに顔を埋めて倒れていた。しばらくの間、頭がぼうっとしていて何が何んだか訳も分からず、額が妙にピリピリと痛むので、指でさわってみると、血で染められた指が戻って来た。ぼくはそれで初めて気がついた。あのときの凄まじい光景が急に思い出された。それと同時に、リサのあの大きな悲鳴も。ぼくは、はっとなって、リサのことを思った。彼女は？ 彼女はどうしているのだろうか？ すぐ助手席に彼女がいたことを思い出して振り向いてみると、彼女は、ぼくよりもひどく、助手席の前のすき間に、のめり込むようにして倒れていた。ぼくはすぐ、彼女の体を起こしにかかった。彼女のぐったりした体を起こすと、リサは呼吸をしていて、幸い命だけはとりとめていることが分かった。しかし、その顔はぼくと同じくけがをしており、安らかに目を閉じたせっかくの美しい顔のあちこちに、切り傷やあざをこしらえていた。ぼくはすぐ彼女に声を掛け、その体を揺さぶりにかかった。するとようやく彼女も、閉じていたまぶたを開け始めた。初め、彼女も訳が分からないと見え、寝ぼけ眼をこすっていたが、やがて、

“一体何があったの？”とつぶやいた。

“忘れたのかい。ぼくたちは、危うく死ぬところだったんだよ”ぼくがそう言ってやると、彼女もやっと思い出したようだった。

“あっそう、そうだったわ”と彼女は言った、“あの事故！ 大きな木が倒れて来て、確か車がスリップしたようだけど... それからどうなったの？”

“ちょっと黙って！”とぼくは言った。

彼女がそれほど気にしていないのが不思議なくらいだったが、目の上の額が切れて血がにじみ出ている様子があまりにも痛々しかったので、ぼくは手当をしてやることにしたのだ。ぼくがポケットからハンカチを取り出して、血を拭き取っている間、彼女は、黙って、されるままになった。しかし、ぼくが彼女の傷口にハンカチを当てても、彼女はいっこうに痛そうな顔をしなかった。そのことを尋ねてみると、彼女は、自分が怪我をしていることを疑った。

“本当？ そんなにひどいの？”と彼女は、まるで他人事のように言ってから、ぼくの顔を見て笑った、“それより、兄さんのその額、血のにじんでいるところが赤く腫れているわよ”

ぼくがハンカチで血を拭きとって見せてやっても、リサは信じられないといった顔をしたので、ぼくは鏡を勧めてみた。リサは、バックミラーを見て、初めて自分の傷の深さに気がついた。

“まあ、こんなにひどい！”と彼女は、驚いて叫んだ。

“きっとあまりひどく打ったんで、神経が麻痺してしまるたんだらうよ”とぼくは、彼女の鈍感さをせせら笑いながら、言った。

しかしすぐ、ぼくたちは、周囲の状況が気になった。あれから何時間が流れたのだろうか。

車は、正面の一本のモミの木にぶつかったままの姿で止まっていた。幸いそれほど強くぶつかったのではなさそうで、ボンネットの痛みも少なそうで、前ガラスも割れてはいなかった。辺りはひっそりと静まり返り、事故に会ったときよりは随分と明るく感じられた。雨はすでに止んでいた。その代わり、小鳥の鳴き声がどこからともなく耳に入って来た。ぼくはすぐ車の時計を見たが、ぶつかったときのショックのせいか、針は午後0時31分、すなわち、ぼくたちが事故に会ったちょうどその時刻で止まっていた。リサに尋ねてみると、彼女がはめていた女性用のきゃしゃな腕時計も同じことだった。

“チェック全部止まっている！”と、ぼくは言った。

だが、周囲の状況から察すると、それほど経過していないのだろう。恐らく、午後三時か、遅くとも午後四時、そんな気配が感じられた。さっきまであれほど陰うつだった空も、今はようやく晴れ間が広がり、雲のすき間から洩れ出ている日光の滝が、ぼくの目を突いた。それは、なんとも言えぬ感動の光、ぼくたちの危難もこれでようやく去ったのだという啓示の光のように、ぼくには思われた。ぼくは再び、村を出発した頃の新鮮な好奇心を取り戻し、ぐずぐずしてはいられないと考えた。ぼくは、車をバックさせるためにアクセルを踏んだ。幸い、機械は痛んでいなかったらしく、エンジンがかかって、車は大きな音をたててうなり出したが、後車輪がから回りをし始めた。ぼくはすぐ車を降りて、から回りの原因を調べに行った。後ろに廻ってみると、車がどのようにして舗装道路からはずれて林の斜面を降りて来たかという跡がよく分かった。車が停止しているところは、舗装道路からほんの二十メートルほど離れたところに過ぎなかったが、草むらにはくっきりと車の通った跡が残り、その道筋に立っている樹木には、ところどころ傷がついていた。ぼくはそれを目にして、再び、あのゾッとするような一瞬の事故のことを思い出した。それから、目を移して、後車輪のところを見ると、車輪は当時大変なぬかるみだったと思われる深い穴ぼこの中にはまっていて、ほとんど空転していることが分かった。しかし今は、そのぬかるみもだいぶ乾いていて、土を少し盛ってやれば簡単に元どおりにすることができることが分かった。リサは、車の中で化粧を始めていたので、この作業は、自分ひとりでやることにした。土を盛り終えた頃、ぼくは車の前部も見に行ったが、ボンネットのへこみはそれ程大したことはなかった。結局、ぼくたちは事故に会ったが、大事に至らずに済んだのだ。

ぼくたちを乗せた車は再び舗装道路に出た。あのとき、ぼくたちの前に突然崩れて来た大木は、今もそのままの姿で路上に横倒しになっており、あれ以来、車が一台も通過していないことが分かった。

“不思議ね、車が一台も通らないなんて”と、リサはそれを見て言った。

実際、ぼくも、不思議な気がしていないでもなかった。あれから何時間経ったか分からないが、そのあいだに、車がたったの一台も通らないということがあろうか？ さらに、あの崖崩れの現場といい、その後に雷雨に会わなければならなかったことといい、突然大木が倒れて来たことといい、それらは自然現象には違いなかったが、全くの偶然とは言い切れず、何かしら造られたことのように感じられなくもなかった。

実際今でもぼくは、あれが全くの偶然によるものか、それとも、あの不思議な町自身が、ぼくたちのために用意したものなのか、そのいずれとも断言することができない。しかし、そのときは、むしろ遥かにぼくたちは現実的だった。急にリサが、

“あーあーおなかが空いちゃった”と言った。

そう、ぼくたちは昼飯もとらずに、何時間も過ごしてしまったのだ。それに、事故に会ったときのショックも手伝って、すっかり体がまいってしまっていた。ぼくたちは一刻も早く、インゲルトでもなんでもいいから、人の住む町に着く必要があった。今ではもう、コアンベルにこの日中に着くという当初の予定は、すっかり後退してしまっていた。

あたりはすっかり晴れ上がり、まる一日ぶりに気持のよいドライブを迎えて、ぼくたちを乗せた車は、なんとも言えぬ美しい山並の舗装道路を走って行った。間もなくすると、車は急に、開けた盆地が見える高台にさしかかった。それは素晴らしい大地だった。車を止めて、ぼくたちがそれを初めて見たときの印象は、今も忘れることができない。それは果てしなく広く、遥か彼方に見える山脈は、ここからは、青くかすんで見えるだけだった。日光は、その山の方から、明るい緑野全体を照らしていた。緑野の中央には、川が流れ、森が見え、放牧用の草原がどこともなく広がっていた。遥か眼下に見下ろす中心部には、川に沿って小さな集落があり、町らしい家々が散在していた。ぼくたちの車が今止まっているこのアスファルトの道が、その町のあいだをまっすぐに延びているあの小さな舗装道路へと通じていることは、もう間違いなかった。その輝くような美しさで、ぼくたちの目を奪い、心を魅了したこの楽天地が、ぼくたちが初めて目にしたインゲルトであった。明るい晴れ渡った集落の上では、数羽のカラスたちが、まるでぼくたちを歓迎するかのように、楽しそうに旋回していた。ぼくはすっかり嬉しくなって、というより、ここまでやって来たことの勝利感に酔いしれて、リサに言った。

“どうだいリサ、あの景色といい素晴らしい眺めじゃないか。あの崖崩れがなけりゃめぐり会わなかったかも知れないんだ...”

“ええ、本当に”とリサは答えた。しかし、助手席に座っている彼女は、何か気のない返事だった。それで疑問に思って尋ねてみると、気分が悪いということだった。軽い脳震とうを起こしたのだろうが、少し気にもなるので医者に見せたほうがいいとも思った。リサは、大したことはないと言ったが、さすがに疲れたのかホテルに泊まりたいと言いだした。

ぼくは再び車を走らせた。リサが気分が悪いと言い出したので、できるだけ急ぐことにした。車を走らせると、開けた窓から涼しい風が吹き込み、なんとも言えぬいい気分になった。しかし、横でぐったりなっているリサのことを思うと、楽しい気持になるわけにも行かなかった。

日なたの傾斜地に沿った舗装道路を降りて行くと、やがてふもとの町が見えて来た。それは静かな、小さな町だった。ほんの100メートルほどのあいだ、通りの左右に看板をかかげている店が並んでいるだけで、それから先は再び、道だけとなっていた。ただ目抜き通りの裏を流れている川の近くには、民家や、教会の尖塔や家畜小屋などが見えておりそれなりの賑わいを見せていた。しかしそれでも、町の人を全部合わせても、数百人にしかならないだろう。それは、思いの外、小さな町だった。ぼくはとりあえず、ホテルを捜すために車を走らせた。商店が居並ぶ目抜き通りは不思議なほど落ち着きを見せ、人の気配さえ感じられなかったが、急に店から出て来た男の人などは、不審そうな目で、ぼくたちの車と、乗っているぼくたちを見つめた。ホテルは、街を少しはずれたところによく見つかった。

いかにも田舎のホテルといった、木造の小さな建物で、白いモルタルの壁や、大胆にカットした窓ガラス、こぎれいな庭の植え込みなどが、夕方の西陽を受けて明るく輝いていた。一階はレストランになっているらしく、よく見えない建物の奥からはジュークボックスの賑やかな音楽などが、外のぼくたちの耳にまで流れて来ていた。裏側の砂利を敷き詰めた駐車場に来ると、そこにはしゃれたスポーツカーと、もう一台、子供のぬいぐるみなどが置いてある車とが既に止まっており、だいたいどういう人がここにいるか、ということは想像がついた。可愛い白い花が咲いている花壇のそばに車を止めると、ぼくは車から降りて、暖かな日ざしを浴びた、さわやかな、この村の香りを胸に吸い込んだ。どこか浮き浮きするような、とてもいい気持だった。乾いた風が、この駐車場あたりに吹き寄せていた――

しかし、ぼくはすぐリサのことが気になった。彼女は、助手席に坐ったまま、窓に顔を当てて、憂かぬ表情をしていた。その表情から、彼女の気分がすぐれていないことはすぐ分かった。ぼくは、彼女のいるドアのところに回って、声を掛けた。

“気分はどうだい？　ひとりで歩けそうかい？　なんなら、手を貸してあげようか”

“ううん、大丈夫よ”と、リサは答えた。しかし、その顔はさっきよりもずっと青ざめており、車から、ぼくの手を借りずに降りたときには、急に目まいを起こしたらしく、クラクラとなって、まぶたに手を当てた。

“本当に大丈夫なのかい？”と、ぼくは心配になって、言った。“なんなら、レストランに行くのはやめにして、さっそくホテルの部屋をとることにしようか？　食事は、そこへもって来てもらうようにすればいい。ねっ、それならいいだろう？”

しかし、リサはすぐ体をしゃんとさせると、

“ううん、いいのよ。そんなに気づかってくれなくとも”と答えた。“レストランで食事をするこどくらい、できます。それより、ねっ、わたしの額の傷、目立たない？”

ぼくは、そんなリサが心配だったが、彼女の言うままに、額を見た。リサは、ここに着く少し前に、うまく傷口をごまかすために化粧をしていたが、それでも、彼女の痛々しい傷口は、くっきりとまだ残っていた。

“大丈夫さ、誰も見やしないから”と、ぼくは答えた。それから、レストランに行く前に手をさし伸べたが、リサは、病人扱いされるのを嫌ってか、わざとぼくの手を避けた。

“でも、念のために医者に見てもらったほうがいいな”と、ぼくは言った。

リサは、それに対しては、何も答えなかった。

一応話がついて、ぼくたちがレストランに行こうとすると、突然、レストランではないホテルのドアがあいて、中からひとりの男が現れた。男は、そのまま、ずかずかとぼくたちの方に向かって来た。四十がらみのたくましそうな男で、顎や頬のまわりにいっぱい不精髭をはやし、コックらしい仕事着を身につけていた。しかし、その目は敵意に満ちていて、まるで、ぼくたちを追っ払うためにやって来たみたいだった。だが実際はそれどころではなかったのだ。男は、ぼくたちのすぐ前までやって来ると、ぼくとリサとをかわるがわる眺めた後、荒々しく言った。

“君たちは、ここへ一体、何をしにやって来たのだね？”

ぼくは、すっかり面くらってしまった。こんなことを、いきなり質問されるなんて、思いもよらなかったからだ。

“何をしにって、旅の途中で立ち寄っただけです”と、ぼくは、当惑したように答えた。

“旅の途中だって？”と、男は、さも人をあなどったような口調で言った。“君たちは、一体どこから来たんだね？”

“あそこからです”と、ぼくは、つい今しがたやって来た山の方をさして言った。“確か、テルリアパンソという名の小さな村でした”

ぼくは、それで男が納得してくれるものと期待したが、男からはね返って来た言葉は、とんでもないものだった。

“なに？ テルリアパンソだって？”と男は、例の人をくったような口調で、叫んだ。“バカ言っちゃいけないよ。テルリアパンソはここだよ”

ぼくは、ドキッとした。同じ名の村が、こんな近くに二つも存在していたとは、思いもよらなかったからだ。

“じゃ、ここもテルリアパンソなんですか？”と、ぼくは言った。

ぼくは何気なく、男に質問したつもりだったが、男はこう答えた。

“ここもじゃないだろ。テルリアパンソなんて珍しい名の村は、ここしかないよ。君たち、嘘をついているね”

ぼくはすっかり驚いてしまった。初め、ぼくたちを、なにか怪しいもの扱いをしたかと思うと、今や、この男は、ぼくたちを嘘つき扱いにしているのだ。

“とんでもない！”と、ぼくは叫んだ。“あの村がテルリアパンソでなけりゃ、一体なんていう名の村だとおっしゃるんです。それともあなたは、ぼくたちが夢を見たとでもおっしゃるつもりなんですか？”

“そうは言っとらんよ”と、男は答えた。“君たちは、何か隠しているね”

なんという言い種だ！ この男は、ぼくの言うことに、いちいち逆らうのだ。ぼくは、きっとこの男は、初めての旅行者に対してこういう冗談をふっかけるのが好きな男なんだろうと考えて、もうこの男とはとり合わないことに決めた。それにリサは、すぐそばでこういう愚にもつかない対話を聞きながら、すっかり顔色を悪くさせ、早くレストランに行きたいような様子をしていたので、ぼくも早くそうすることにした。

“もう冗談はそれくらいにして下さい”と、ぼくは答えた。“ぼくたちは、今とても疲れているんです。見れば分かるでしょう。ここへ来る途中で、事故にまで会ったんですよ。それにとってもひどい大雨だったし”

そう言って、ぼくはリサの手をとって、レストランに行こうとした。だが、うるさい男は、それでも、ぼくたちを離しそうになかったのだ。

“待ちなさい”と言って、男は、グイッとぼくの手首を握った。ぼくが振り向くと、男は、前よりもいっそう表情をきびしくして、まるでぼくたちを叱りつけるみたいに、こう言った。“わたしの言ったことが冗談だって？ 大雨が降ったって？ 君たち、夢でも見ていたのかね。嘘を言っちゃいけないよ。正直に白状しなさい。君たちは一体、ここへ何しにやって来たんだね”

男はそう言って、ぼくの手首を強く握りしめたので、ちぎれるような痛みを感じた。

“だから言ったでしょ”と、ぼくは、うるさそうに言った。“ぼくたちは、旅の途中でここへ寄っただけなんです。それ以外には、別に他意はないんだ”

だが男は、ぼくのこの答えでは満足が行かないらしく、さらにきびしく、ぼくをにらみつけるようにして、ぼくを追求した。その恐ろしい目つきと言え、ぼくをゾッとさせるほどだった。なぜなら、少しでも歯向こうものなら、たちまち、そのごつい手の握りこぶしが、勢いよく、ぼくの顔に飛んで来るように思われたからである。

“本当かね”と男は、全くの不審顔で言った。“じゃあ、どうして、そんな嘘をつくんだ。テルリアパンソから来たとか、大雨が降っていたとか、だいたいこの天気を見れば、君の嘘は明らかだろう。これでも、雨の降った天気だと言えるかね”

“でも、降っていたんです”と、ぼくは言った。“ここは、雨じゃなかったんですか？でも、山の中じゃひどい雨でした。あんなすごい雨なんて、経験したことがない。風は吹きまくるし、雷は至るところに落ちるし、雷が路端の大木をなぎ倒したために、ぼくたちは、危うく死ぬところだったんですよ。そうだろ、リサ。あれが夢だなんて、誰も思わないだろうな”

そう言うと、リサも、男のしている前で、うなづいた。それどころか、変な男にからまれて、ひとり危険な目に会っているぼくを助けるために、リサは、次のように言ってくれた。

“嘘じゃありません。兄さんの言ったことを、どうか信じて下さい。わたしたち、本当に大雨に会ったんです。そのために事故に会ったのも嘘じゃありません。わたしたちの額についているこの傷が、なによりもその証拠です。それに、二つのテルリアパンソがあったって、いいじゃないですか。

わたしたちはもう一つのテルリアパンソからやって来たんです。すぐ目の前には、大きな湖がありました。わたしたちは、そこで一泊しました。ねっ、それで十分でしょ。どうか、わたしたちを、このまま黙って、見逃して下さい”

男は、リサがしゃべっている間は、黙って聞いていた。しかし、彼女が話し終わると、男は、まるで信じていないといった風に、落ち着いた口調で、こう言った。

“なるほど、君たちは、兄妹してぐるというわけなんだな”

今や、リサまでも訳の分からない共犯者扱いにされてしまい、リサは、さっと顔を青ざめた。ぼくは、しかし、もうじっとしてはいられなかった。変な言いがかりをつけられて、このまま引き下がっているわけには行かなかったのだ。

“ぼくたちがぐるですって！”と、ぼくは言った。“一体、なんのためのぐるなんです？ それよりも早く言って下さい。一体、何が目当てなんです？ お金なんです？ あんまりしつこくからむと、警察を呼びますからね”

そう言うと、“警察！”と男は言って、急に笑い出した。“警察だって。こりゃ面白い。そんなところへ言って困るのは、君の方じゃないのかね。警察なら、喜んで行こうじゃないか”

ぼくは、もう訳が分からなくなって来た。その真実味を帯びた口ぶりからみると、どう考えても、この男がぼくたちからんでいるとは思えなかったからだ。それどころか、ほんのちらっと、この男が警察へ行こうと言い出したときに、ぼくは逆に恐怖を感じたのだった。ぼくの前歴は全くの無実だったし、警察へ行くことをためらう理由は何もない。ぼくはそれを知っていたが、それなのにどうしてか、ぼくは、ある種の不安を感じたのだ。それはあるいは、この男の口調があまりにも真実味を帯びていたから、なにかしら、逆に自分が罰せられることになるのではないかという恐怖を覚えたからかも知れなかったし、あるいは、この町は、このような男だけが住んでいる無法者の町で、警察にいる人間も同じように無法者ではないかと心配を覚えたからかも知れなかった。

そういう考えが、一瞬、ぼくの頭をかすめて、ぼくは、なんとも言えぬゾツとするような恐怖を感じた。

“ちょっと待って下さい”と、ぼくは、ぼくを無理にでも引っ張って行こうとする男の手に逆らって、言った。“じゃあ、あなたは、ぼくたちをゆるそうとしているんじゃないんですね”

“もちろんだ”と、男は振り向いて言った。“わたしがそんな男に見えるかね”

見えないこともなかったが、しかし、その言葉は、しっかりしたものだった。ぼくは一応、この男を、悪人扱いすることは、よすことにした。しかしまだつじつまの合わないことがたくさん残っていた。

“それじゃ聞きますけど”と、ぼくは言った、“どうして、あんな変な言いがかりをつけようとなさるんです？ テルリアパンソがここだとか、雨が降ってなかったとか、無論今は雨は降ってはいませんが、午前中のあの激しい雨のことぐらい、あなたもお気づきでしょう？”

“冗談じゃない！”と、男は、ぼくの言葉を一蹴するように、吐き叫んだ、“君の頭は狂っているのかね。わたしの言ったことが本当であることぐらい、村の者なら誰もが知っているよ。それにだいたい、君はラジオを聞かなかったのかね。ここ一週間ばかり、この地方は日でも雨で続きで農家の人々が困っているということを。山の方で雨が降ってくれば結構な話なんだがね”

“日照りだって！”と、ぼくは驚いて言った。ますます話は奇妙になって行くばかりだ。ぼくのみならず、リサまでも、傍らに立って、ちんぷんかんぷんな顔をしていた。彼女は、目を大きく開き、舌をちょっと出して、ぼくに合図を送った。

“そうだよ、日照りだよ、おかしいかね”と、男は冷静に言った。“それに君は確か、山の方を指して、テルリアパンソから来たって言ったね。正気かね。あの方面には、人の住む村なんてひとつもないんだよ。人跡未踏の険しい山がたくさんあるというぐらいだから。どうして、君たちがそこから来ることができる？ だいたい、君たちの言うことは、つじつまの合わないことばかりだ。さあ、警察へ行くなら早く行こう。そこで、すべてを正直に白状するんだね”

男は、そう言って、ぼくの手をつかみ、ぼくを引っ張って行こうとした。

しかし、ぼくはすぐ叫んだ。

“じゃあ、インゲルートって、どこなんです！”

そう言うなり、男の態度は急変した。

“なに？ インゲルートだって！”と、男は、たちまち表情をこわばらせて叫んだ。それは、恐ろしいほどの顔だった。“どうして君たちは、その町の名を知っている？”と男は、ぼくに詰問した。

ただインゲルートと口にただけで、再び、訳の分からないまま、ぼくはにらまれたのだ。

“どうしてって”と、ぼくは、当惑したように答えた、“ぼくたちは、その町の名の看板を見たからここにやって来たんです。それには、インゲルートまで五十キロメートルと書かれてありました。だから、てっきり、この町がそうだと思って。本当に、この町がインゲルートじゃないんですか？”

だが、男は、それには答えなかった。ただインゲルートと言っただけで、男は急に態度をひるがえして、こう言った。

“君たち、帰りなさい。ともかく、どこでもいいから、来た道を引返して帰りなさい。早く、そうしなさい”

全くの頭ごなしだった。ぼくたちは、きつねにつままれたような思いがした。さっきまで、あれほど強圧的な態度に出ていた男が、インゲルートという呪文を唱えるなり、まるで猫のようにおとなしくなり、それどころか、何かに脅えているような様子すらうかがえる。ぼくは、この男の奇妙なふるまいが、ますます分からなくなった。

この男は、演技をしているのだろうか？ それとも、真実を言っているのだろうか？ だが真実だとしたら、彼の言ったことはどうなるのか？

しかしともかくぼくたちは、彼の勧めに素直に従うわけには行かなかった。すでにぼくたちの体は、この男のために長いあいだ立たされて、くたくただったし、腹もすっかり減っていた。今さら、もう二度と見たくないようなあの恐ろしい溪谷を通過して帰るといような気分にはとてもなれなかったのだ。そうでなくとも、ぼくたちは、食事と休息とにすっかり飢えていた。ぼくたちはなにはともあれ、一刻も早く、昼食を済まし、ホテルの一室で横になりたいとそればかり思っていた。それに、リサの医者のこともあった。どんなことがあっても、ぼくたちは、この男の言葉に従えない状況が存在していたのだ。

“どうして、ぼくたちは来た道を引返さなくちゃならないんです？ たった今着いたばかりだというのに。ともかく、ぼくたちは、今くたくたなんです。とっても疲れているんですよ。お金なら、いくらでも払います。だからどうか、ぼくたちを解放して、そこのレストランに行って、ひと息つけられるようにさせて下さい”

本当に全身が疲れていて、ぼくはもう嘆願したいような気持だった。

だが、男は、つれなく頭を横に振ると、同じことを繰り返した。

“だめだ。ともかく、わたしの言うことを聞いて、大人しくここを立ち去りなさい。悪いことは言わないよ。だから、さっ、早くその車に乗って、帰りなさい”

しかし、男がそんなにしつこく言うのなら、ぼくにも、ぼくなり言い分というものがあった。なんでもいいから、もうこれ以上、この男とかかざらうのは、御免だと思ったのだ。

“いやです！”と、ぼくはきっぱりと言った。“どんな理由から、そんな忠告をなさるのかわかりませんが、ともかく、正当な理由がない限り、ぼくたちは、ここを立ち去りません。だいたいここは、あなたの土地なんですか？ あたかも自分の土地であるかのような言い方は、よして下さい。誰がどこへ来て、どこを通ろうと、そんなことは、人の勝手じゃないですか。あなたみたいに、名も知らない他人に変な言いがかりをつけてくるような人は、初めて見ましたよ”

ぼくが、とうとう堪忍袋の尾を切って、激しく言うと、男の方も、幾分穏やかになった。

“分かった”と、男は、冷静に答えた。“じゃ、君たちを一晩だけ泊めてあげよう。ただし、ひと晩だけだよ。明日になったら、ここを立ち去ってもらうからね”

“ええ、分かりました”と、ぼくは答えた。ともかくこれで、このいざこざも一応決着がついて、ほっとした感じだった。もともとそのつもりだったんだと心に思いながら、男の顔を避けるようにして、

“さっ、リサ、行こう”と、ぼくは言った。

しかし、そのときになって初めて気がついたのだが、随分と長い間、疲れ切った体の上に、立たされたせいか、リサが、すっかり顔を青ざめさせていて、額に汗していることが分かった。明らかに、この男の責任なのだ。

“大丈夫かい？ リサ”と、ぼくは、彼女のそばに歩み寄り、心配そうに声を掛けた。

“ううん、大丈夫よ。ただ頭がぼうっとして来ただけ”と、リサは答えた。しかし、彼女が、さっきよりもだいぶ苦しそうにしていることは、一目で分かった。それもみんなこの男のせいだと思うと、急に、憎しみがむらむらと沸き上がるのを感じた。ぼくは、この男に憎しみを込めて、妹がこんなになったのもみんなあなたのせいだということをはっきり見せつけるようにして、リサの手をとると、そっと、その場から去って行った。

男から去って十歩も歩くと、リサはさっそくこっそりとぼくに言って来た。

“一体どういうわけなの？ あの人”

“さあ、ぼくにもさっぱり分からないよ”と、ぼくは答えた。しかし、ちょっと考えてみて、ぼくは、納得の行く解答を引き出してみた。“きっと、なにかがひどく気に入らなかったんだらうね... きっと、ここへ来る前に何かいやなことでもあって、それを、なんの関係もないぼくたちに当てつけたんだ。ああいうタイプの間人も、なきにしもあらずさ”

確かに、そのときふっと思いついたこの考えは、的を射ているように思われた。ぼくがそう答えると、リサも、納得したようにうなづいた。

“でも、それにしてもおかしい人ね”と、リサは言った。“ここ一週間も日照りが続いているとか、ここがテルリアパンソだとか、あの人の言ったこと、本当なのかしら？”

“さあ、それもどうか”と、ぼくは答えた。“ともかく、何を聞くにしても、あの人には聞かないことだ”

“そうね”と、リサもうなづいた。

ぼくたちは、互いに、疲れた体を支え合いながら、レストランに向かって行った。その無残な姿といえば、初めて見る人なら、きっとぼくたちのことを浮浪者か何かと見間違えたに違いない。だが、レストランに着くと、中はひどく静かだった。レストランの片隅にあったジュークボックスは、今は鳴ってはいず、さっきまで大きな板ガラスを通して、ちらちらとその姿が見えていた若者たちも、いつの間にかどこかへ行ってしまったようだった。レストランの内部は、反対側の窓から入って来る爽やかな風に吹きさらされたまま、テーブルもカウンターも装飾用の観葉植物も、ひっそりとしていた。しかしともかくぼくたちは、日当たりのよい窓際のテーブルをとって腰を降ろすと、メニューを手にとって、店の人が現れるのを待った。こんな小さなレストランのことなのだから、それほど多くのメニューがあるとは思えなかったのだが、なかなかどうして、中には、目を見張るような奇怪な料理も含まれていた。カラスのグリル、ミミズのくんせい、松ぼっくりのフレゼ、白ありのクルトン入りのスープ、さらにシーズンものとしては、あげは蝶のからあげ、ひなげしの花とスイカの種の煮込み、等々で、メニューをみているうちに、胸がむかついてくる思いがするほどだった。こんなものがおいしいのかどうかは分からないが、ぼくだけは、まっぴらだと思った。ただ、メニューの下の方にまともなものがあり、肉やジャガイモや野菜などの盛りつけ料理を注文することにした。だが、どうしたわけか、中からは、ひとりの給仕すら現れては来ない。

ぼくたちは、腹を減らせているどころか、のどもからからだだったが、水ひとつ運んで来てくれる者は、いなかった。

“どうしたの？ 一体”と、リサは、しびれを切らせて言った。

“きっと、こんなへんぴな田舎町なんだから、何事もずさんなんだろうよ”と、ぼくは答えたが、しかしもう待ち切れなくなってとうとうとりあえず、水だけでも、自分勝手にとってくることにした。カウンターに来て、誰もいない。ぼくは、勝手にカウンターに乗り込んで行って、コップを捜した。そのとき、突然、男の声がした。

“だめじゃないか、君。そんなところに勝手に入られちゃ困るね”

見ると、さっきのあの男だった。彼は、堂々と入口から入って来たのだ。しかし、あまり上等とは言えないが、給仕のような仕事着を着ているのを見ると、ぼくは初めて、この男が、この主人であることに気がついた。

“でも”と、ぼくは一寸うろたえて答えた。“ここに、店の人が誰かいはいないんですか？”

“わたしがそうだよ”と、男が答えた。“で、注文は？”

ぼくは、仕方なしに、持ちかけていたコップをカウンターに置くと、テーブルに戻った。そこではリサが、再び心配そうな顔つきで、ぼくを待っていた。ぼくが腰掛けると、男はすぐ、コップに水を入れて、ぼくたちのところにやって来た。

“それで、何に致しましょう？ お若いお二人さん。当店には、当店自慢の即興料理、とりたてのカラスのなべ焼き、グリル、ロチなどの他、あっさりしたところでは、ひなげしの花とスイカの種などの煮込みや、その他には、変わったところでは、あげは蝶のからあげ、栄養満点の白ありのクルトン入りのスープ、もしそれがお気に召さなければ、これなどはいかがでしょうか、新鮮ななまずと赤貝とのブイヤベース。これなどは、お客様方に、なかなかの御好評を得ております”

男は、以前とはすっかり態度を変えて、まるで、初めての食客に接したときのように、以上のことを、とうとうとまくしたてた。しかしぼくは、きっと、この男は、ぼくたちをからかっているのだと思った。どうせ、こんな辺ぴな片田舎で、娯楽物といっても他に大したものはないのだから、こうして、初めてのお客にちょっかいを出したりしてからむのが好きなのだ。それは、この男にとっては一つの気晴らしなのかも知れないが、しかし、質の悪い冗談であることには変わりがなかった。ぼくは、男のその手には乗らずに、最初から決心していた料理を頼むことにした。すると、男は、今度は全く素直に、

“はい、かしこまりました”と言って、そのまま立ち去って行こうとした。

それは、全く気味悪いほどの変わりようだった。しかし、ともかくあの悪いくせを引っ込めてくれたことは確かで、ぼくは急に、この男に対する親しみを取り戻した。それで、もう二度とあの男とは口を聞くまいと一度は決心をしたぼくだったか、彼に医者のことについて、尋ねてみる気になった。

“あの済みませんが”と、ぼくは男に言った。

男はすぐ振り向いたが、さっきとは違って、それは安心すべき顔だった。ぼくは、続けて言った。

“この近くに医者はいないでしょうか？”

“何？ 医者？”と、男は顔色を変えて、逆に質問し返した。“どこか、体でも悪いのかね”

リサは、陰で、さっきの約束を破り、この男に話しかけたぼくを非難しているようだったが、ぼくは、かまわずに続けた。

“ええ、事故に会ったとき、妹の方が打ちどころが悪かったらしく、どうも様子がおかしいんです。それで、医者に見てもらえればいいと思って”

ぼくがそう言うと、男は、カウンターへ行きかけていたきびすを返すと、すぐこちらへ引っ返して来た。リサは、男がやってくるのを見たときには、急におののいたように、顔を青ざめさせた。男は、しかし、リサが怖がっているのもかまわずに、彼女のところまでやって来た。

“どこか気分でも悪いのかね？”と、男は、リサに尋ねた。

リサは、急にうろたえたようになって、男を見上げた。しかし、とうとう覚悟を決めたと見え、恐る恐る男に答えた。

“ええ、なんだか胸がむかつくようで、少し熱がありそうな気がするの”

“なに、胸？”と、男は言った。“それはいけないな。どれ、額をかきなさい”

男は医者でもないのに、凶々しくも、リサにそんなことを言った。リサは、すっかりぎこちなくなってしまうが、しかし、言われるままに、顔を上げた。男は、その額に、黒々とした毛の生えたごつい手を当てた。しばらくしてから、男はその手を離し、

“なるほど、熱がある”と言った。

そして、ぼくたち二人の方に向き直ると、

“ともかく、今晚は、ここで泊りなさい”と、男は言った。

“でも、医者はいらっしゃいますか？”と、ぼくはすかさず尋ねた。

“うん、いるにはいるが... この町じゃないんだ。隣の町まで行かなくっちゃね。あそこには、病院までもちゃんとある。だが、いずれにしても、今日はだめだ。遠いし、それに、今日は日曜日だからね”

“日曜日だって！”と、ぼくはそれを聞くなり、驚いて叫んだ。というのも、ぼくたちがあの村をけさ立ったのは、木曜日だと記憶していたからだ。いくらなんでも、あれから、三日も経っているとは、とても考えられない。ぼくは、直ぐ男に質問した。“じゃ、きょう何日なんですか？

いや、何年の何月何日か、正確に言って下さい”

“君たちは、それまでも忘れてしまったのかい”と、男は言った。“きょうは、1979年の7月7日、日曜日だよ。そこに掛かっているカレンダーを見れば分かるだろう”

男にそう言われて、ぼくたちは、初めて壁にカレンダーが掛かっていることに、気がついた。男の言ったことは、間違いではなかった。それは、日めくりカレンダーで、1979年7月7日（日曜日）のところが、めくられてあった。だがもし、それが本当だとしたらぼくたちは、あの事故に会ってから、まる三日も倒れていたことになる。

それだけではない、路上に倒れふさがっていたあの木も払いのけられなかったところを見ると、三日の間、ぼくたち以外には誰もあの道を通らなかったことになる。そんなことが、あり得るだろうか？

“本当に、それに間違いはないんですね”と、ぼくは、男に念を押して言った。

“間違いなもんか”と男は言った。“それとも君は、きょうはいつだと思っていたんだね”

“いえ、別に”と、ぼくは、わざとそれには答えなかった。

“ともかく、何をやるにせよ、すべてはあしただ”と、男は言った。“あしたになれば、どこへでもいいから、ここを出て行ってもらうからね。ここから出るとは、このホテルから出るという意味じゃないんだよ。この村、この町全体から出るという意味だよ。いいかね、約束したよ。それから、いったん出たら、もう二度と、この村に舞い戻って来ちゃだめだよ。そんなことをすれば、今度こそ、ただでは済まさないからね”

ふん、なにを手前勝手なことを言っているんだと、心に思いながら、それでも、ぼくは当たりさわりのないように、

“分かりました”と、返事をした。

“よし、それじゃ、特別サービスだ”と、男は急に調子を変えて言った。“お金はいらないからね、シャンペンをサービスしてあげよう。君たちの出発のための前夜祭だ。あっ、それから、料理もホテルも、君たちには、無料だよ。たった一晩だけなんだからね。それくらいのことは、サービスしてあげなくっちゃ”

“でも、それじゃ”と、ぼくは言った。“あんまり、話が良すぎやしませんか。なにか裏に隠しているんじゃないありませんか？”

“話が良過ぎる？”と、男は言った。“そんなことはないよ。君たちのような、あまり裕福でなさそうな若者が来たときには、ときどきこのようなサービスをしてあげるんだからね”

“ところがぼくたちは、案外と金持なんです”と、ぼくは答えた。

“金持？”と、男は言った。“金なんて、この世じゃなんの役にも立たんよ。すべては、あいきょうだね。ともかく、わたしは、君たちのあいきょうが気に入った。さて、それじゃ、君たちにさっそく、特別料理をサービスしてあげよう”

“ああ、ぼくたちが注文した料理ですよ。くれぐれもお間違いなく”と、ぼくは、特別料理なんて聞かされてヒヤッとしたのであわてて、声を掛けた。

“そうだったね”本当に分かっているのかどうか、男は、そういう加減な返事をする、そのまま調理室へ消えて行った。

男が立ち去ると、リサは、こっそりとぼくに話しかけて来た。

“あの人が変わっているわね。大切なのは、お金じゃなく、あいきょうだなんて”

“ああ、すべてをタダにしてもらうなんて、生まれて初めてだ”と、ぼくは答えた。

その夜、ぼくたちは、男が案内してくれた部屋に泊まることになった。部屋は、どこでもよく見かける普通のホテルの部屋で、洋服筆筒があり、ベッドがあり、バスルームがあり、窓際に、見晴らし用の二つのアームチェアまでもが置かれてあった。ぼくたちを案内してくれた男が去って、部屋に入るなり、それまでの疲れがどっと押し寄せ、リサは、

“あーあー疲れちゃった”と、ため息をもらした。

“でも、本当に大丈夫なのかい？ 体の方は”と、ぼくはリサに尋ねた。

“ええ、大丈夫よ。兄さんが思っているほど、そんなにひどくはないんだから”

ぼくは、リサの言葉を聞いて、一応安心すると、着替えもせず、そのままベッドの上にとっと倒れ込んだ。あお向けになって、枕の代わりに腕組みをして、目を閉じると、とてもいい気持ちでした。リサは、その間に、こっそりと、バスルームに行ったらしい。

“兄さん、先に入るわよ！”という彼女の声が、その方からして来た。

“ああ、どうぞ”と、ぼくは答えた。

すると、ドアがボタンと閉まり、浴槽にお湯を入れる音が聞こえて来た。ぼくは、さっと飛び起きて、窓際に寄った。窓の向うの空は、うっすらと西日が射し、山脈の方には、夕焼けがかかっていた。ぼくたちが泊まった部屋は、二階の部屋で、通りの向うの屋根ごしに、この盆地の様子がよく見渡せた。盆地の手前側は、よく開墾された麦畑が広がっており、それから向うは、森と、なだらかな傾斜の放牧用の丘とに変わっていた。カラスが相変わらず、暮れゆく空に、孤独な叫びをたてて、舞っていた。ここのモテルの主人に、ロチやグリルにされるとも知らないで。それにしても、つじつまの合わないあの主人の言葉の数々が、まだぼくの脳裏に残っていた。ともかく、他の人とは誰とも会わなかったのが、なんとも言えなかったが、ぼくたちがあの事故に会ってから、三日もたっているとは、本当なのだろうか？ だが、三日間も飲まず食わずのまま放置しておかれれば、いくら腹が減り、のどが乾いたからといって、これだけの程度で済まされるはずはないのだ。だがそれはそれとしても、ぼくがインゲルトを口にするなり、急に脅えたようになったあの男の態度を、いかに説明すべきだろうか？ 演技をしているとするには、余りにも迫真に満ちたものであった。彼が嘘を言っていないとすれば、そしてまた、ここが本当にテルリアパンソであって、インゲルトではないとするなら、インゲルトには、一体何があるのだろうか？ 男は、ぼくがインゲルトを口にするなり、帰りなさいと言った。もと来た道を引返しなさいと。だが、二度目のときは、もはやそうは言わなかった。まるで、厄払いをするみたいに、ここから出て行くならどこでもいいという口ぶりだった。そこまで考えたとき、ぼくは、ふと、インゲルトとぼくたちが一刻も早くここから出て行かねばならない理由との間に、何か関連があることに気がついた。それが何かは分からなかったが、ともかく、インゲルトはぼくたちを呼んでいるというふうに、ぼくには思われたのだ。インゲルトは遠い町であって、何か神秘的で、未知な町のようにぼくには思われた。ぼくたちは、確かに、インゲルトまで50キロメートルという看板を見たはずだった。

そして、そのために、ぼくたちはここまでやって来たのだった。だが、本当にインゲルートがここでないとするば？ ぼくは急に、なぜかゾクゾクしたのを感じた。

そのとき、バタンと、バスルームのドアがあいて、中からリサが姿を現した。彼女は、頬を赤く染め、ネグリジェを身につけて、すっかり美しくなっていた。

“ああ、とっても気持ちいい”と体を伸ばしてから、“そんなところで何を考えていたの？”と、リサはぼくを見て、尋ねた。

“いやなに、あの主人が言ったことさ”とぼくが答えると、リサは、もうすっかりあのときのことを忘れてしまっていたと見え、

“まだそんなこと気にしているの”と、言った。“あの人の言ったことなんか、みんなデタラメよ。だってそうでしょ。きょうが七月七日だなんて、全くバカにしているわ。それも、なに食わぬ顔で、澄まして言うんだから、全くあきれちゃう”

“そうだといいいんだが”と、ぼくは、しかし半信半疑な気持ちで答えた。

すると、リサは、ぼくのその言葉をあきれたように、言った。

“兄さんまでもが、まんまと、あの男の言葉にだまされてしまったのね。でも、全部デタラメよ。嘘っぱちに決まっているわ。それよりもねえ、もうそんな心配ごとはしないで、休むことにしましょ。もう、わたし、クタクタに疲れちゃった”

“ああ、ぼくも、風呂に入ってから、そうする”と、ぼくは答えた。

ぼくがそう答えて、バスルームに行きかけると、ベッドの上に腰掛けたリサが、何気なく、ぼくに尋ねた。

“でも、コアンベルへは、あしたのうちに行けるのかしら？”

コアンベル！ ぼくがすっかり忘れていた町の名だった。彼の言ったことが本当か嘘かは分からないが、すっかり、あの男の奇妙な態度に心を奪われていたぼくには、インゲルートのことしか頭になかったのだ。しかし、もとはと言えば、彼女が待ち望んでいたコアンベルへ行くために出発したのであって、今夜、こんな辺りな田舎のホテルに泊まることになるうとは、思ってもいなかったことだった。ぼくには、リサが、そんなことを言いたくなかった気持ちがよく分かった。彼女にとっては、ぼくのインゲルートのことなんか、なんの関心もないのだ。

“そうだった、すっかり忘れていた”と、ぼくが答えると、

リサは、ぼくのことを非難するように、言った。

“いやねえ、兄さんったら。自分のことばかり考えちゃって。ときには、わたしのことも考えてよ。本当なら、わたしたち、きょう中にコアンベルに着く予定だったのよ。それなのに、名も知れないこんな村に泊まることになったりして。それどころじゃない、あしたどこへ行くのか、それすらも分かっちゃいないんだから。ねっ、どうするつもりなの？ 言って。あしたになったら、引返すつもりなの。それとも先に進むつもりなの？”

急にそんなことを言われて、ぼくは、すっかり困ってしまった。今さら、なんだか地獄のようにすら思われるあんな溪谷へ戻りたくはなかったし、だからといって、先に進めば、コアンベル

に近づくことになるのか、遠ざかることになるのか、それすらも歴然とはしなかった。

ともかく、なにかしら奇妙なのだ。リサは、それほどまで考えてはいないらしかったが、

“あしたになれば、主人に尋ねてみるよ”と、ぼくはそれとなく答えた。

“あの主人なら、頼りにならないわ”と、リサは、いまいましてに言った。

“だとすれば、他の人か誰か。ともかくどっちにしても、ぼくたちは、あの道を先に進むことになるだろうな。だって、またあんな溪谷に帰ることになるなんて、お前もいやだろう？”

“ゾッとするわ”と、リサは、もう二度と思い出したくないかのように、体をすくめて言った。

“だろうな。じゃ決まった”と、ぼくは言った。そして、彼女を励ますように、“心配はいらないさ、リサ。コアンベルだって、そんなに遠くにあるわけじゃないんだし。とにかくどんな道を行ってもどっちみち着くことは着くんだからね。あしたになったら、まず、お医者さんに診てもらうことにしよう。コアンベルのことは、それからだ”

ぼくは、そう言って、バスルームに向かった。リサは、もう何も言わなかった。浴槽につかってから、ぼくは、自分の言ったことを考えた。とにかくどんな道を行っても、どっちみち、着くことは着くんだからね。本当だろうか？ 道は、陸続きである限り、必ず、他の都市へ行くことが出来るようになっている。回り道をして、近道を通っても、時間の差異があるだけで、目的地へ行くことが出来ることには変わりがない。ところが、ぼくは、そのときに、こんな単純な事柄に対しても、ふと疑問に思ったのだった。ぼくは、風呂から上がったら、念のために、さっそく地図を調べてみようという気になった。しばらくして、ぼくが風呂から上がって来ると、リサはすでに、ベッドの上でスヤスヤと眠っていた。ぼくは、彼女の邪魔をしたくはなかったので、枕元のスタンドだけをつけると、さっそく地図を開けて、調べてみた。テルリアパンソという、けさ出発したあの村のことは、車の中で見たときと同じように、ちゃんと印されていた。だが、もうひとつのテルリアパンソは？ ぼくは、そう思って、地図のあちこちを調べてみたが、それらしい村は見当たらなかった。それどころではなかった。ぼくたちが通って来たあの恐ろしい溪谷はもとより、ぼくたちが現にそこで住み、ちゃんと窓の向うに見えるこの広大な盆地も、ぼくの持っているこの地図には印されてはいなかった。それらしいところと思われる箇所には、ただ、険しい山々の印が至るところに書かれてあった。だが、こんなにも広い、こんな盆地が、この地図には少しも書かれてはいないのだ！ ぼくは、ゾッとする思いがした。まるで、悪魔の笑いが耳に聞こえたような気がした。

その夜、ぼくは眠ろうとしたが、なかなか眠れなかった。ただ一つの疑問がぼくの頭にとりついて離れず、ぼくを苦しめたのだ。地図に書かれていないこの盆地や、あの舗装道路や溪谷のことを、どう説明すればいいのだろうか？ これは、ぼくがこの日知った奇妙な経験の中で、唯一の疑いのない事実だった。しかし、それは、理解に苦しむ事柄だった。

ベッドに入って横になり、消燈してからも、様々な考えがぼくの頭をかすめていた。あの地図が間違っているはずがない。だとすると、ぼくたちが現にいるこの盆地は、一体どこに存在しているのか？ ぼくたちは、いつの間にか、誰かの手によって、どこか遠い、未知な、別世界へ連れ去られて来たのだろうか？ ぼくがふと思いついたこの考えは、それほどあり得ないことではなかった。ぼくたちが気を失っていたあの間なら、それも不可能ではない。つまり、ぼくたちが事故に会った場所とよく似た場所を選んでおいて、あのときと全く同じように万事を仕組んでおけば、ぼくたちが気がついたときも、その違いに気がつかないわけだ。なぜなら、初めて通る道のことなど人々はそれほど詳しく覚えているわけではないし、しかもそのうえ、ぼくたちが事故にあったときは、大雨という悪条件が重なっていた。目が覚めたとき、大きな違いならともかく、微妙な違いが存在していたとしても、どうしてぼくたちがそれに気がつくことができただろう？ この考えは、初め、ぼくを納得させたかに見えた。なぜなら、もしそれが本当であれば、あの男が、日付を三日も先取りしていたことや、この盆地が地図に載っていないことも、その他あの男の話から得た奇妙な事柄も、すべてが説明がつくように思われたからである。しかし、だとすれば、一体誰が、なんのために、そんなことを仕組んだのだろうか？ 一体、誰がなんのために？ ぼくは、しばらくの間、得体の知れないこの画策者を相手に、様々な考えを凝らした。相手の人数を知ろうとし、その理由をさぐろうとした。だが、それらしい理由を見つけることには、ことごとく失敗しなければならなかった。それどころか、そのように考えると、ますます不可解なことが増えてくるばかりだった。ぼくは、これを単なる誘拐だとみなすわけには行かなかった。なぜなら、ぼくたちはなんの危害も加えられてはいなかったし、しかも、別世界へ連れて来ていながら、あのよう複雑な手を使ったその理由の説明がつかないからだ。そもそも、なんのために、あんな手を使わねばならなかったのか？ そのこと自体が不可解だった。仮に、なんらかの理由で、ぼくたちが自分の意志でこの盆地へやって来ることを、彼らが望んでいたとしても、彼らの思い通りにぼくたちの意志が動く、どうして期待することができたのだろうか？ ぼくたちは、ひょっとして、元来た道を引返す気になったかも知れず、そうなれば、ぼくたちがやがて一切に気づくことになることは必至だったからである。結局、ぼくは、振り出しに戻ったことに気がついた。そしてすべては、明日にもち越す他なさそうに思われた。これだけ考えても、結局何ひとつ収穫はなかったのだ。そのとき、ぼくはふとりサのことを考えた。彼女は、すぐ近くのベッドでスヤスヤと眠っていたが、あるいは、何も考えずに眠ることのできた彼女の方が賢明だったのかも知れない。だが、明日になれば、きっと何かが分かるだろう。ぼくは、もう眠ることにした。ぼくが睡眠に陥ったのは、それから間もなくしてからだった。

ぼくたちは、よほど疲れていたに違いない。熟睡した後に、気がついたときには、太陽はすでにだいぶ高く昇っていた。寝覚めは、大変すがすがしかった。しばらくの間は何も考えず、ただうっとりとして、ベッドの上に横たわっていた。しばらくしてから、ぼくはふと、ここがあの盆地のホテルであることを思い出した。

だが昨夜はあれほど不思議に思われた疑問も一晩明けると、なにほどのこともないように思われた。隣のベッドでは、リサがまだ眠っていた。随分よく眠る奴だなとぼくはあきれたが、窓から見える盆地にはなんの変化もないし、彼女は相変わらずそこにいるし、太陽は昨日と同じ円周運動をくり返している。結局、なんら驚くべきことはなかったのだ。ぼくは、もう起きることにした。ぼくが洗面所で顔を洗っていると、やがてリサも起きて来た。あんなによく熟睡したはずなのに、ベッドの上にあぐらをかいたまま、両手を天井に向けて背伸びをし、大きなあくびをしている。

“どう？ もう疲れは取れたかい？”と、顔を拭き終えてから、ぼくは彼女に声を掛けた。

“ええ、もうすっかりいい気分になってしまって”と、リサは答えた。

“でも、病院へは行ってみるよ。念のためにね”

ぼくがそう言うと、リサは、ガクンと肩を落とした。そして、まだ寝ぼけているのか、寝ぼけ眼で何か考え込むようにして、ベッドの上の一点をじっと見つめた。それから、やおら頭を起こすと、彼女は、いらいらした口調で、次のように言った。

“そうだったわね。でも、わたし本当になんでもないのよ。兄さんが思っているほどには。けさなんか、こんなに元気がいいのに。ああ、病院なんて、全くいやになっちゃうわ”

だが、ぼくの言ったことには歯向かえないと見え、彼女は、あきらめたように、ベッドから降りると、そのまま、バスルームに向かった。

一時間ほどして、すっかり旅支度を終えると、ぼくたちは、朝食をとるためにレストランへ向かった。レストランは、昨日とは違って、幾人かのお客がいた。その間を、昨日は見かけなかった一人の若いウェイトレスが、忙しそうに、立ち働いている。

“ほいよ、ハンバーガーひとさら”という、威勢のよい男の声が聞こえる。

昨日の主人だ。主人は、カウンターの中で、料理をつくり、それを、若いウェイトレスに渡していた。

ぼくたちが、ドアをあけると、主人は、ちらっと一瞥しただけで、昨日のようには、もう声を掛けては来なかった。ぼくたちは、中央のテーブルに席をとった。

“何に致しましょう”とすぐエプロンの前にお皿を持った若いウェイトレスが、ぼくに声を掛けた。

ぼくはメニューをとり、リサに尋ねた。ぼくたちは、同じ食事を、ウェイトレスに注文した。

“ところで、兄さん、聞かないの？ コアンベルのこと”と、ウェイトレスが去るとさっそく、リサは、ぼくに尋ねた。

“今に聞いてみるよ”と、ぼくは、ややあいまいな返事をした。

“でも、あの男の人はいやよ”と、リサは、不精髭を伸ばした主人を、ちらっと一瞥した後、言った。

“何を言い出すんだか分かりやしないんだから。誰か他の人に聞いて”

“分かったよ。じゃ、あのウェイトレスに聞いてみる”と、ぼくは言った。“それなら、文句はないだろう？”

リサは、その言葉を聞くと、安心したように一息つくと、椅子にもたれた。

しばらくして、ウェイトレスが注文の食事を運んで来たとき、ぼくは、それとなく、彼女に話しかけた。

“ちょっとお伺いしたいことがあるんですが、よろしいですか？”

“为什么呢？”と、ウェイトレスは、料理の盛った皿を、テーブルの上に置きながら言った。

“実は、ぼくたち、これからコアンベルへ行こうと思っているんだけど、コアンベルへは、その道をまっすぐに行けばいいんですか？、

“コアンベルですって？”と、ウェイトレスは、お皿を並べ終わると、ひと息ついて言った。“それは、ここから遠いんですの？”

ぼくたちは、彼女からそんな答えが返って来るとは思ってもいなかったもので、当惑したような顔をした。すると、親切なウェイトレスはぼくたちの顔を見るなり殊勝にも、ぼくに、こう言ってくれた。

“じゃ、いいです。マスターに聞いてまいりますから。しばらくお待ち下さいね”

そう言うなり、ぼくが止める暇もなく、彼女はさっと、カウンターにいる主人のところへ行った。

“なんだ、知らないのよ、あの人”と、リサは、こっそりと言った。そして、うんざりしたように、“結局、またあの人なのね”

ウェイトレスが主人のところへ行き、耳うちすると、それまでなんでもなかった主人は、いきなりギョロリとした恐ろしい目を、まっすぐにぼくたちの方へ向けた。それから、有無を言わせぬ素早さで、すぐぼくたちの方へやって来た。

“あの子から聞いたが”と、男はやって来るなり、ぼくに向かって言った。“君たちは、コアンベルへ行きたいそうなんだね”

ぼくは、この男からまた何が飛び出すか知れたものではなかったので、用心しながら、恐る恐るうなづいた。それを見ると、男は続けた。

“あの子はね、この土地の生まれで、まだ一度も他の土地へ行ったことがないんだよ。でも、何も心配はいらない。コアンベルという町は確かにある。君の言う通り、この道をまっすぐ行けばそこへ行くことができる。でも、だいぶ遠いよ”

“ええ、それは知っています”と、ぼくは言った。初めて、この男と話が通じ合ったのだ。

“今日中に着くか、どうか。ともかく、遠いからね”と、男の方も、随分と態度を和らげて言った。“で、行くのは、本当にそこだけかい？”

“ええ、でも、次の町で病院へ寄ろうと思って。あるんでしょ？ 病院が”

“うん、あるにはあるが...”と、男は考え込むようにして、言った。“でも、あの病院は、あまり感心しないな。だいたい、病院というところは、陰気でいかんよ。あれは一種の閉鎖社会だ。外部の者には、何ももらさん。それでもいいというのなら、別だが...”

ぼくとリサは、男の話を耳にして、互いに目を見合わせた。病院をけなすにしても、こんなけなし方は初めてだとぼくは思った。

“ほんのちょっと寄るだけでいいんです”と、ぼくは言った。“妹の体に異常があるかどうか見てもらうだけでいいんですから”

男は、しばらく、ぼくたちをじっと見つめた。しかしすぐ気が変わったとみえ、

“まあ、好きにきなさい”と、言った。“ともかく、君たちは、この村から出て行ってくれるんだね。それなら、わたしとしては、何も文句はないわけだ。じゃ、ひとつ、いいことを教えてあげよう。君たちはどうやら、この辺の地理には余り詳しくないらしいから、コアンベルへの道順を教えてあげよう”

“ええ、是非お願いします”と、ぼくは答えた。

リサも、男が急に親切になったので、初めて、乗り気になって来たようだった。

男は、テーブルの上に置いてあった領収書を裏返すと、手持ちの鉛筆で何やら道らしい線を引きながら、次のように言った。

“いいかね、君たち。ここがわたしたちのいるテルリアパンソだ。隣のルシアンダまでは、君たちの車なら、約一時間で行ける。ほら、ここがそうだ。さて、そこで、君たちは、病院へ行きたいと言っていたね。でも恐らく、初めての人には、その所在が分からないだろう。町はずれの、随分と目立たないところにあるからね。だが、その前に、駅を教えてあげよう。あの町は、単線だが、鉄道が通っているからね。君たちは、そこで車を売って、汽車に乗るがいい。君たちの車は、ちょっと傷がついているようだが、まだまだかなりの値段で売れそうだからね。ついでに、車の売買をやっている店を紹介すれば...”

“でも、どうして車を売らなくっちゃならないのですの？”と、そのとき、初めてリサが男に尋ねた。

“ああ、そうそう。君たちは、地理に不案内だったんだね”と、男は言った。“つまりだね、君たちの言うコアンベルへは、鉄道でしか行けないからだよ”

“へえ、随分と不便なんですね”と、ぼくは言った。“でも、汽車はすぐ来るんですか？”

“ああ、それぞれ”と、男は言った。“実を言うと、わたしもあの鉄道には乗ったことがないんだが、確か、一時間に一本とか聞いたことはある。でも、詳しいことは、向うで駅員さんに聞きなさい”

ぼくたちは、しぶしぶうなづいた。すると、男は、さらに続けた。

“そこでだ、車の売買をやっている店は、駅前通りのここんところにある。ここもあまり目立たない店だから、看板をよく見て通りなさい。すぐ見つかるよ。それからだ、君たちの言っていた病院は、この本通りからはずれて、右へ曲がり、左へ曲がり、こう行って、こう行き、それから

こう行き、さらにこう向かって、それから左に曲がって、この小さな路地を行けば、ほら、ここにある”

“へえー、随分と辺ぴなところにあるんですね”と、ぼくは、小さな領収書からはみ出さんばかりの地点に書かれた病院を見て、感嘆したように言った。

“無論、そうだ”と、男は答えた。“だいたい病院なんてところは、そんなところと相場が決まっているんだから”

いくら病院を軽蔑するにしても、随分と妙な軽蔑の仕方だった。病院が暴利をむさぼっているとか、医者なんてみんないかさま師だとかいうのなら、ぼくたちの常識でも納得することができる。それなのに、病院が要所にあるのではなく、辺ぴなところにあるのが当然だなんて。ぼくには、さっぱり分からない。だが、ぼくは、あえてそのことについて質問はしなかった。すると、男は、これで話がついたと勝手に決め込んだらしく、こう言った。

“じゃ、いい旅をするんだね。わたしはもうこれで君たちとさよならをするからね。ああ、それから、この領収書は、持って行きなさい。支払いはいいいからね”

“でもそれじゃ”と、ぼくは言った。“虫が良すぎますよ”

だが、もう男は、ぼくたちとはとりあおうとはしなかった。

“そのことは、もうきのう十分言っておいただろう”と言って、男は、カウンターへ引き上げて行った。

食事を済ませると、ぼくたちは、すぐレストランから出て行った。領収書をポケットに突っ込んで、支払いもせず、黙って出て来たのだから、周囲にいた客に対して、なんだか食い逃げをしているみたいで、きまりの悪い気がしないでもなかった。でも、主人もウェイトレスも、そのことについては一言も注意をしなかったのだから、むしろ堂々としたものだった。ただ、リサは、そのことがやはりいやだったとみえ、レストランを出るなり、さっそく、そのことを言って来た。

“兄さん、気がついてた？ 周りにいた人ったら、みんな、あたしたちをじろじろ見てたのよ。まるで何か悪いことをしたみたい”

“そうかい。でも、何も悪いことをしていないんだからな”と、ぼくは答えた。

駐車場に来ると、ぼくたちの車はそのままになっていたが、もう昨日のスポーツカーも、子供の人形のあった乗用車も、そこにはなかった。旅行カバンを荷物入れに入れた後、ぼくたちは、ドアを開いてさっそく中へ乗り込んだ。ぼくは、ハンドルに手をやると、リサを見た。

“用意はいいかい？”と、ぼくは言った。“出発するよ”

“ええ、いつでもどうぞ”と、リサは、張り切って答えた。

テルリアパンソの村を出ると間もなくして、車は、柵に囲まれた人気のない牧草地を縫って延びる美しい舗装道路を走るようになった。辺り一面は緑の草におおわれていて、小高い丘のところどころに、美事な形をした樹木がおい茂っていた。

この辺は風が強いと見え、牧草地では、もうもうと枯草やほこりを吹き上げ、その一部は、あけ放してあった車の窓の中にも入って来た。それはすごい、ほこりの襲来だった。リサは、内側に入り込んで来たほこりにたまりかねて、とうとう叫び声をあげた。

“ああ、いや！”と彼女は言った。その一部は、彼女の口の中にも入ったらしかった。彼女は、何度も口をぬぐいながら、窓を閉めにかかった。ぼくもすぐ閉めにかかったが、するとすぐ、ほこりはフロントやサイドドアのガラスをおおい始めた。しかしワイパーで、ほこりを払うことにし、それでなんとか切り抜けることができそうだった。ともかく、そうして、あのうなる風の音を遮断し、車の中が静かになると、リサは、ほっと一息ついて、独言のようにつぶやいた。

“すごい風ね。ここは風の吹きだまりなのかしら？”

“そうかも知れないな。ともかく向かい風だから、車を走らせるのが一苦労だ。この分じゃ、ガソリンの消費も相当食らうことになるだろうな”と、ぼくは答えた。

“でも、空は晴れているし、とってもいいところじゃないの”とリサが、くり広げる景色に魅せられたように言った。

それは確かに彼女の言う通りだった。いつまで走らせても、牧草地、また牧草地で、ところどころには黒々とした森が見えていて、その対照が実に鮮やかだった。肝心の牛や羊の群にこそ出会わなかったが、そののどかな農村の風景は、随分とぼくたちの目を楽しませてくれた。おかげで、前日にあったいまましい出来事もすっかりぼくたちの心から洗い流されてしまったのだった。ぼくたちは再び、あの楽しげで、すべてを忘れさせてくれる、旅行気分というものを回復し始めた。

かれこれ一時間ほど走った頃だろうか、その間、例によって、一台の車も一人の人間にも出会わなかったが、道がだだっ広い草原地帯をさしかかった頃、ようやく行手にとぼとぼと歩いて行く一人の人影を見つけることができた。車が近付いて行くと、その人影は振り向き、どうやらヒッチハイクを楽しんでいる若者のように見受けられた。若者は、やがて両手を上げて車を止めるそぶりを見せ、ぼくも、重そうな荷物を二つもかかえている彼を助けてやろうと考えた。車が近付くにつれ彼の姿が明らかとなって来たが、彼は、がっしりした体つきの、頬にはひげをはやした、なかなかの好青年だった。ぼくが、彼のすぐ前で車を止めると、男は窓ごしに車の中にいるぼくたちを覗き込むようにして、ぼくに声を掛けた。

“ああ、これは、お邪魔じゃなかったのかい？”

“いや別に”とぼくは答えた。“さあどうぞ。後ろの席が空いていますから、荷物と一緒に乗って下さい”

若者は一一といっても、ぼくよりは、二つ三つ年上に見受けられたが一一愛想のよいまなざしをたたえながら、ぼくがあけてやった後ろのドアから、まず荷物を中にほおり込むと、それからすぐ後ろのシートに乗り込んで来た。彼がドアをボタンと閉めると、ぼくは再び車を走らせた。

“ええーと、どこへ行かれるんです？”と、ぼくは、すぐ後ろの男に声を掛けた。

“ルシアンダまでだよ”と男は、低い男性的な声で答えた。それから一息つくと、“ともかく、これで助かったよ。一時はどうなるものかと心配していたんだが...”

男が独言のようにつぶやくとしばらくの間、沈黙が流れたが、やがて男がぼくに声を掛けた。

“君たちは、新婚なのかい？”

ぼくは、とんだ見当違いに、思わず吹き出しそうになった。リサも、驚いて振り向き、冗談にも程があるといった風に、男を見つめた。

“そのように見えますか？”と、ぼくは答えた。

“じゃないのかい？”と、男は、さも気安げに言った。

“新婚ならいいんだけど、あいにくぼくたちは兄妹でしてね”と、ぼくは、行く手から目を離さずに、答えた。

すると男は、くつろいだようになって、

“どうりで、よく似ていると思った”と、答えた。“じゃあ、兄妹水いらずで、全国旅行——というところなんだね”

“ええ、まあ、そういうところですよ”と、ぼくは言った。

すると、男は、急に語調を変えて、

“いいねえ、兄妹がいるというのは”と言った。“おれなんか一人もんだから、旅をするのもいつも一人さ”

一瞬、沈黙が流れた。しかし、ぼくにはすぐ、この男が旅をしていると聞いて、ピンと来るものがあつた。ぼくは、振り向かず、今度は、男に聞き返した。

“じゃ、あちこちと旅をしたんですか？”

“ああ、いろいろとな”と男は言って、それから何かを思い出すかのように、しばらく間をとった。やがて男は沈黙を破って、こう言った。“そうだ、二つ三ついいところを教えてあげよう。その一つはカバラという谷間だが、それは口では言い表せないほど広大で、一度踏み迷えばもう二度と引返すことができないと、村人から恐れられているところなんだ。君たちは恐らくその谷間の名に聞き覚えはないだろう。おれもね、旅の途中で偶然耳にはさむことになっただけなんだから、世の中の人々が知らないとしても不思議ではない。おれだって、あの村に行くまでは、そんな谷間があつたなんて、全然知らなかったんだからな。しかしだ、その谷間には恐ろしい事実が隠されていることにやがて気がついたんだ。ところで君たち、悪魔というものの存在を信じるかい？”

“悪魔ですって？”不意にそんなことを聞かれたので、ぼくもリサもビックリして答えた。“そんなのは、昔の人々の迷信でしょ。今の世の中に、そんなものがあるなんて、誰れも信じませんよ”ぼくは、そう言って、変なことを言い出した男の顔がバックミラーに映っているのを、ちらりと眺めやった。

若い男は、まじろぎもせず、じっと行く手を見つめながらソファーに腰かけていた。しかし、その表情には、独特の確執といったものが伺われた。

“そうかい、君たちも、昔のオレとっしょなんだねえ。悪魔の存在をかたくなに拒んでいるところなんか”

“じゃ、あなたは、悪魔が存在すると思っておいでなんですか？”とぼくは、男があまり自信ありげに言うので少し薄気味悪くなって尋ねた。

だが、男は、もうそれに答えようとはしなかった。その代わりに、満足げな薄気味悪い微笑をかすかに浮かべるのが、バックミラーを通して、眺められた。それは、あたかも、いずれ君らにも分かるさと言っているかのごとくだった。

間もなくして、男は、自分が提供した話題がまずくなったのに気づいたためか、気分転換をはかるため、陽気な話題に戻った。放浪者らしく、様々のぼくの知らない地名のことを引き合いに出しては、どこの料理がおいしいだの、どこそこの酒は、格別の味があるだのと語り始めた。

そうしてかれこれ半時間ほど走った頃、男は、間もなくルシアンダだが、ここで降りしてくれないか、とぼくに要求した。でもどうしてですか？ とぼくが尋ねると、“ちょっとやましいことがあってな”と苦笑いをした。ぼくはさっそく車を止め、男を降ろすことにした。車から降り立った若い男は、空を見上げ、すがすがしそうに、両手を下げて胸を張った。それからすぐ、くるりと振り向くと、シートに残した荷物を取り出し始めた。

“本当にすまないね”と男は、愛想よくぼくらに礼を言った。

リサが女らしく機転をきかせて、大きな荷物を取り出すのを手伝ってあげたこともあって、ようやく荷物を取り出すと男は、それを車の外の地面に置き、最後に、リサに握手を求めた。ぼくは、運転席に坐ったまま、そんな二人を眺めていたのだが、二人がどんなふうに分れをかわし合ったのか残念ながら、握手をする腕を見ることができただけで、その表情を見ることはできなかった。

間もなくして、リサが助手席に入り込んで来て、ドアをしめると、男は窓の外から覗き込むように体を低くして、手を振った。

“今度は、また別の場所で”というのが、ぼくと男とがかわした最後の言葉だった。男が、みるみるうちに、道の上に残されたまま小さくなり、ついにその姿も見えなくなった頃、ぼくは、リサから意外な言葉を耳にした。

“あの人って変よ”と、リサは言った。“悪魔の存在を信じるかと言ったり、それに、兄さんは見なかったかしら。別れの握手をかわしたとき、あの方は、痛いほどあたしの手をギュッと握り締めて、恐ろしい目つきで、あたしを見つめるのよ。本当に、一瞬、ドキッとさせられたわ”

しかし、ぼくは、リサの言った言葉を、それほど問題視はしなかった。それに、偶然乗り合わせることになった男について考えるまでもなく、男が言ったように、すぐぼくたちの車はルシアンダの町にさしかかり、男のことなどはすぐ忘れてしまったからでもあった。

ルシアンダは、小さな田舎町といった感じの町だった。それでもメインストリートがあり、その両側にはひと通りの店がそろっていた。ただ町は、全体として静かで、往来を行く人の顔もちらほらと見られるばかりだった。

車もまれにしか走っていき、ぼくたちは、たちまちのうちにメインストリートの果ての駅前広場に着いてしまった。ルシアンダと書かれた駅は、木造りの古びた駅で、その前の小さな広場には円形の花壇があって、その中央に、一人の立像がわびしく飾られていた。もう何年も前に駅をやめてしまったとも思える駅のそばに車をつけて、ぼくたちは、吐息混じりに、車から降り立った。果たして駅員がいるのかそれすらも疑わしい気がしながら、この余りにも期待はずれな町や、駅を眺めやった。

“まるで田舎なのねえ、この駅は”と、リサも、感嘆の声をもらした。

周囲はひっそりとしていて、実際無人の駅かとも思われたが、しかしすぐそれが思いすごしだということに気がついた。改札口の向うから、どうやら駅員らしい人の水をまく音が聞こえて来たからだ。ぼくらは、ほっとして、すぐその音のする改札口の方に向かった。やがて姿を現した水まきの駅員は、小太りの中年の、人の良さそうなおじさんで、駅長かとも思われた。ぼくたちは、すぐ、その男に近付いて声を掛けた。

“あの、すみませんが、コアンベルまで行きたいんですが、次発は何時になりますか？”

すると駅長らしき男は、振り向き、とろんとした目でぼくたちを見つめると、ぶっきらぼうにこう答えたのだった。

“始発のは、つい今しがた発ったところだから、次のは、夕方の六時のになるね”

“そんなに遅いんですか？”ぼくもリサも驚いて言った。

すると、駅長らしき男は、急にまゆをひそめ、

“何か不服でもあるのかね”と、語気を強くして言った。

一見人の良さそうに見えた人の豹変ぶりに、もうこれ以上取り合わない方が賢明だと思われた。それに夕方の六時までと言え、まだ半日は裕にあり、その間に病院に立ち寄りたり、例のおじさんに言われた通り、車を処分したりすることができるだろう。ぼくたちが振り返って、その場から立ち去ろうとしたとき、駅の近くの広場の隅のところに、古びたレストランが一軒店を構えているのに気が付いた。それは、茶色の板壁に白塗の、この町にしては、さもきゃしゃなたたずまいで、気を惹いたので、もし時間が余れば、帰りに立ち寄りここで出発の時刻まで待ってしようと考えた。

ぼくたちは再び車に乗り、例のおじさんがくれた地図を手にとって広げてみた。おじさんが書いた地図に誤りはなく、行き先の医院は、だいたい見当がついた。ぼくは、車を少しばかりバックさせると、再び車を走らせた。静かなメインストリートをしばらく走った後、右に折れ、それから左に折れた。もうその頃になると、道幅もぐっと狭くなって両側に古びたアパートの群が建っていて、居住区を思わせた。道は明らかに坂道で、丘の上の方に上がっていた。よく似た曲がり道がいくつもあって、どれがこの地図に書いてある曲がり道なのか分からず、途中で何度も止

まりながら、やっと求めていた道が分かるといったやり方で、やがてますます迷路のような路地に入り込んで行った。

そうしてかれこれ三十分ほど試行錯誤をくり返した頃だろうか、ぼくたちはやっと、目的の医院に出会うことができた。それにしても、へんぴなところに居を構えたアパートのようなただずまいだった。いや、というより、アパートの一室を借り切って看板を出しているといったほうが的を得ているような医院だった。ともかくそれが、地図に書かれてある医院に間違いはなく、ぼくは、隅に車を止めると、車から降りて、看板の掲げてある医院に向かって行った。

ドアをあけると、中は不衛生で薄暗く、ソファが無造作に置いてある廊下の壁土が大きくはがれているところが待合室になっているらしかった。受付の窓口は、手前にあったのですぐ分かった。中から医者話し声が聞こえていたが、待合客はひとりもいなかった。ぼくはすぐ、受付に行くと、窓口で腰掛けながらつめを磨いていた中年の看護婦に声をかけた。

“すみませんが、妹が頭を打ったらしくて、診てもらいたいんですが...”

看護婦は、その言葉で初めて、無愛想に目を向けた。

“初診者ですか？”

“ええ、そうですが”

“じゃ、ここにお名前を書いて、しばらくお待ち下さい”

ぼくは受け取った紙にさっとサインをすると、それを受付の看護婦に渡し、廊下で不安気に待っているリサのところに戻った。

“本当に兄さん、あたしなんでもないのよ”と彼女は目が合うなり言ったが、念のためにと行って、ぼくは相手にしなかった。待つ間、ぼくらは並んでソファに坐り、しばらく沈黙が流れた。ドアの向うでは、何が行われているのか、ともかく医師と患者の話し声には違いなかったが、はっきりしたことは聞きとれなかった。廊下の奥には階段があり、それは二階の部屋へと続いていた。二階は、この医師のものなのか、それとも、他の人々が住んでいるのかどちらともとれるようなものだった。ともかく、田舎医者らしく、随分と小さくて、へんぴなところにあるのだなという意識は避けられなかった。

間もなくして、二人の話し声は止んだが、てっきり患者が中に居るものと思い込んでいたのに、ドアから患者が出て来る気配はなかった。そのまま、窓口から、例の看護婦の声で、ぼくらを呼ぶ声がした。

“ホールバラさん、お入り下さい”

“どうする？ ぼくも一緒に中に入ろうか？”と、ぼくは、さっきから口をつぐんだままのリサに、心配をして、声を掛けた。

“うーん、いいわよ”と、彼女は答えた。“もう子供じゃないんだから、ひとりで行くわ”

そう言ったものの、ぼくも、様子を見るために、中に入ることに決めた。ドアを開けると、書類に記入している白衣の医師の姿が目に入った。年は、中年の盛りを越した頃で、やや太りぎみの、インテリらしく眼鏡をかけていた。

医師は、最初、ぼくらに背を向けたままの姿で、机に向かい書類に記入していたが、ぼくらの物音に気づくと、“そこに坐りなさい”と言って、椅子を指定した。内部は、普通の開業医のものと変わりなく、奥には手術用のベッドも備えつけてあって、その上にひとりの男が横になっているのがカーテン越しに見られた。棚には、様々の薬用ビンが所狭しと置かれてあった。恐らく、さっき話し合っていた男は、その男で、今は、麻酔にでもかけられているのだろう。身動きひとつせず、死んだようになっていた。その他、変わったものは何ひとつなかったが、ただひとつだけ、壁に置かれた一見三日月を思わせる大きな飾りものが、やけに仰々しく思われて、気を惹いた。しかし、とりたてて言うほどのものでもなく、むしろ、普通の医院と大差がないことに、一応の安心を感じた。

“ホールバラさんだね”と、やがて、さっきぼくが書いたばかりの問診票を手にとって、医師は声を掛け、振り向いた。

ぼくは、椅子に腰掛けているリサの後ろに立って、リサの代わりに答えた。あの事故のことをもう一度思い出しながら、それを手際よくまとめ、いきさつを説明して、ひょっとしたら腫ようでもできているのではないかと心配で、できれば、レントゲンも撮ってもらいたいと申し立てた。

医師はその間、リサをじっと眺め、冷静に耳を傾けていたが、説明が終わると、

“どれ、目を見せてごらん”と言って、彼女の両こめかみに手を当てた。彼女は、医師に言われるまま、目を医師の方に向け、まぶたを指でいじくられるままになった。医師は、しばらく彼女にいろいろと質問をし彼女のまぶたをいじくった後、手を休め、“どうも異常はないようだが”と言った。

“でも、レントゲンは撮ってもらえますか？”と、ぼくは、すかさず言った。

医師は、すっと立ち上がり、念のため撮ってみようと答えてくれた。医師の指示に従い、リサが撮影に向かうとき、彼女は振り向いて、反抗的な目をぼくに向けたが、ぼくは笑って答えただけだった。撮影は、ものの十分とたたないうちに終わった。

“じゃ、しばらく、外で待っていてくれたまえ”と、医師は、冷静に言った。

ぼくらは外に出て、結果が出るのを待つことにした。ドアから出るなり、リサは、小声でぼくを非難した。

“兄さんったら、ひどいわ。なんでもないって言っているのに、すっかりあたしを患者にしてみうんだから。あのお医者さんもきっと、心の底では、なんと心配症な兄だろうと思っているに違いないわ”

“でも、万一ということもあるからさ”と、ぼくは答えた。“こういうけがは、早期発見に限るんだよ”

そう言って、やりあっているうちに、再び、“お持たせしました。お入り下さい”という例の看護婦の声が中からした。ぼくらは再び、揃って中に入ることにした。

ドアをあけると、今度は、医師は立ったまま、CT撮影の大きなネガを手にしてそれに見入っ

ていた。そこに映っている頭蓋骨が、リサのものだとなると、滑稽な気がしないでもなかった。彼女も、一皮むけば、こんな姿になるのだ...、と思うと...

“どうも異常は認められないようだね”と、医師は、ぼくが入ると、落ち着いた声で、確信をもって答えた。

ぼくは、それを聞いて、ほっとするのを感じた。もともとそうだと思っていたが、これで一応納得がいったのだった。リサが大丈夫と分かると、後にはもう帰ることしか待つてはいなかった。

“どうも、ありがとうございました”と、ぼくは、医師に礼を言った。それから、ぼくは、ポケットから財布を取り出した。“あの、診察料はいくらになりますか？”

すると、看護婦が、向うから請求書を目にしながらかやって来た。

“ええーと。初診料も含めまして、全部で、85パルになります”

この最後の言葉が、突然ぼくの胸を突き刺した。パルだって！ 聞いたこともない単位だった。

“なんですって！ もう一度おっしゃって下さい”と、ぼくは、びっくりして聞き返した。

しかし、看護婦は冷静に、むしろ、きょとんとした顔つきでこう答えた。

“85パルですが...”

ぼくは、ぼくと同じように驚いているリサと互いに、顔を見合わせた。一体ここはどこなのだという恐怖が、つい昨日、“テルリアパンソはここだよ”と言われたときと同じような恐怖が一瞬背筋を走るのを感じた。もうじっとしてはいられなかった。パルなどという単位で請求されても、そんな初めて聞く金の持ち合わせはなかった。すべてが分からぬまま明らかであり、ぼくは、すっかり返答に窮してしまった。一旦は、支払おうと取り出しかけていた財布も再びポケットにしまって、言葉もなくその場に立ち尽くした。

“どうかしましたか？”と看護婦は尋ねた。

ぼくは、ついに覚悟を決め、いちかばちか謝ることにした。

“あの、今、ふと思いついたんですが、それだけの金の持ち合わせはないんです”

するとすぐ、

“なんだって！ 高いとでも言いがかりをつけるのかね”と、さっきまで冷静だった医師が、突然鋭い語気を含んだ声で怒鳴った。“たった85パルだよ。その金が支払えないというのかね、君たちは”

無力にうなだれているぼくの姿に思い余ってか、すぐリサが助けに乗り出そうとした。

“そうじゃないんです。85パルというそんなお金は...”

しかし、リサがそこまで言ったとき、本当のことを打ち明けるのはこの際まずいことだと直感したぼくは、すぐその言葉をさえ切って叫んだ。

“リサ、そのことはいいんだ！”それから再び注意をぼくの方に向けると、ぼくは、すぐとっさに考えついたでっち上げをたらたらとまくしたてた。お金を持って来たつもりが、どうもホテルに置き忘れて来てしまったらしいこと、出るときは気がつかなかったが、今、財布を取り出そうとしたときにふと思いついた、などについて。

しかし、無論、相手の医師はとり合おうとしなかった。それどころか、ぼくらを、放浪者のぐうたらものと決めつけてしまったのだった。

“嘘はもういいかげんにしないか”と医師は怒鳴った。“君たちはなんだな、この頃はやりの例の無銭飲食のあの連中の一味なんだな。そんないいかげんな言い訳で、この私がすんなりと信じるとでも思っているのかね。それより、さっ、どういうつもりなんだね。金は払ってくれるのか、払ってくれないのか”

“でも、持ち合わせはないんです”と、ぼくも、開き直った反抗的な態度で答えた。

“よし、それなら、こっちも考えがある”と、医師はすっかり、気分を害したように言った。それから、廊下の戸口に向かって、“おまわりさん、この二人をどうしましょ”と叫んだ。

すると、いつのまに居たのか、戸口のところに、体のおおきな背広姿の一人の男が立っていた。男は、いかにも威嚇的な態度で入って来ると、“金をもっとらんというんだな”と太い、大きな声で言った。そして、せっかちに、“じゃ、逮捕だ”と言うなり、有無を言わせず、リサの手首をギュッと握った。

リサは、その荒々しさに驚いて、“やめて！”と叫ぶなり、すぐその男の手を振り払った。ぼくも、今となっては、大人しくかまえているわけにはいかなかった。

“ちょっと待って下さいよ”と、ぼくも、声を高めて、叫んだ。“お金をもっていないことは、確かに謝ります。でも、逮捕なんてあんまりじゃありませんか。それに、ぼくは、何も払わないと言ったわけじゃないんですから”

“それじゃ、支払うというんだね”と、医師はすかさず、ぼくらの顔を食い入るようにして、言った。

しかし、ぼくは、そう突っ込まれて、強気に出たものの、言葉につまづいてしまった。ぼくは、ついさきほどまで、金持だと思っていたのに、どうやら、その金がここでは通用しないらしいのだ。それならば、車に残して来た札束は、今では、単なる紙切れにすぎないということだった。そうした事態の変化の恐ろしさにゾッとさせられるようなものがあつたが、今は、泣き言を並べているわけには行かなかった。ともかく、事態の打開をはからねばならず、すぐに、唯一の解決は、車を買ってもらふことだということに思い至った。

“どうもすみません”と、ぼくは大人しく、急に態度をひるがえして言った。そして、素直に本当のことを言うことにした。“どうも、ぼくらは、ある理由により、すっかり文無しになってしまったらしいんです。でも、払えないわけじゃ、ありません。ちょうど、表に車を一台置いて来ましたが、あれをもともと処分するつもりでいたんです。だから、その中から払うことにしましょう。それで、いいでしょ？”

“冗談じゃない！”と、医師は怒鳴った。“車を売ると君は言うが、こちらとしては、そんなに長く待っていられると思っているのかね。車を売るといって、そのまま逃げてしまうかも知れないし、全然、話にならないね。それより、この際、こちらから提案しよう。

ちょうど、こちらとしては、看護婦が一人欠如していたところなんだ。だから、その子を、わたしに預ける気はないかね。そうすりゃ、85パルの免除は無論、君も金に困っているらしい様子だし、いろいろと便宜をはかってやることもしてあげよう。いいんでしょ？ おまわりさん、こういった取引は？”

ぼくは、冗談じゃないと心の底で思い、警察の人がそんなことを許すはずがないと期待をかけたもしたが、それが間違いであることは、すぐに分かった。

おまわりと呼ばれた男は、医師にそう言われると、自分にはかかわりがないという風に手を上げると、“あんたのお好きなように”とひと言言って、出口に向かって行った。

“でも、おまわりさん！”とぼくは、あわてて叫んだ、“そんなことはできないはずですよ。妹をまるで売するようなことは。ねえ、おまわりさん、助けて下さい。ぼくの言ったことを聞き入れてくれるよう、このお医者さんに説得して下さい”

しかし、男は、ぼくの叫びには耳を貸さず、廊下に出てしまった。

再び、ぼくらと医師が、そこに残された。しかし、もうぼくの心は決まっていた。スキを伺って逃げることなのだ。そして、車を処分し、金をつくりさえすれば、もう勝ちだった。

“さあ、君たち、お若いの。おまわりさんも認めていることだし...”と、医師が話しかけたとき、ぼくはすぐ、“リサ、逃げるんだ！”と叫んだ。そして、彼女の手を取るなり、一目散に、その場から駆け出した。

“こら、待て！”と医師は叫んだが、ぼくらの方が一足速かった。ぼくは、リサの手首をしっかりと握ったまま、廊下へ通じるドアを通り抜け、そのまま、玄関に向かって走った。さっきのおまわりの姿は、もうどこにもなかった。玄関のドアをあけると、そこはもう外だった。ぼくのなつかしい車が、帰る方向に頭を向けて、道端に駐車してあった。ぼくらが、車に乗り込んだ頃、医師が玄関から出て来たが、車に追いつく前に、危機一発のところで、ぼくは車を走らせることができた。

しばらくの間は、恐怖と疲労とで、胸が苦しく、ものも言えなかったが、ようやく逃げ切ったという安堵感が戻って来た頃、ぼくらは、今体験したばかりのことについて語り合った。

“一体、これは、どういうことなの？ 兄さん。パルなんて”

“さあ、ぼくにも、さっぱり分からない。それに、あんなでたらめな医師に会うのは初めてだ。お前を買い取ろうとしたんだ。まるで、奴隷みたいに”

“そうよ、本当にびっくりしたわ。あきれてしまうわ、全く！ でも、助かってよかった”

“そうでもないさ。一難去ってまた一難さ。どうやら、ここでは、ぼくらの金が通用しないらしいからね。とにかく、まずこの車を売って、金をつくる必要がある。コアンベルへ行くのは、それからのことさ。後のことは、じっくりと、駅前のレストランでも、考えることにしよう...”

ぼくらを乗せた車は、細い坂道を下って行き、見覚えのある曲がり角にさしかかった。ここまでくれば、メインストリートまでは、もう一歩だった。

やがて、昼間に通った例の静かなメインストリートを通った後、ぼくらは、食事をここにしようと思っていた駅前にある例のレストランにやって来た。しかし、その前に、車を売却する必要があった。幸いすぐ近くに自動車修理業者があるのが分かったので、さっそくそこへ行って、買ってくれないかと、店の主人に尋ねた。店に並べてある車がどれも旧式なものばかりのせい、主人は、この新しい車が気に入ったとみえ、交渉の末かなりはずんでくれたらしい金額が返って来た。それにしても、手にしたほんの数十枚の見知らぬ紙幣と硬貨が現在の全財産だと思えば、心細い気がしないでもなかった。それまであり余る金にものを言わせて旅を楽しんで来たぼくらだったが、このとき以後、その金がものを言わなくなったのだった...

レストランのドアをあけたとき、清楚な内側にほとんど人はいなかった。白いテーブルクロスをかけた丸テーブルが数十ある割と広い内部だったが、不思議なことに、ほとんど人気はなかった。だから、ぼくらは、お気に入りの、例の古びた駅とその前の広場が一番よく見える窓ぎわの席をとることができた。椅子に腰掛けるとすぐに、若いウェイトレスがやって来た。

“何にいたしましょう？”

ぼくは、メニューをとって眺めた。リサと相談した後、サラダやスープやパスタなどを注文した。

ウェイトレスが去った後、リサがぼくに尋ねた。

“で、次の発車時刻は何時なの？”

“六時だってさ。駅の人がそう言っていたよ”

“でも、本当に、その汽車で、コアンベルに行けるのかしら？”

“心配かい？ でも大丈夫だよ。さっき聞いたところでは、駅の人がコアンベルには、翌朝の七時頃に着くって言っていたから”

“朝の七時ですって！”とリサは、いかにもその時刻が不満そうに言った。それから、急に黙りこくって、彼女は、窓の外を見やった。

ぼくも、彼女につられて、窓の外を見た。空は、いつかの空のように曇っていて憂うつだった。この古びた、そして、ちょっとした騒動のもち上がった町とも、この日で最後になると思うと、それまでとりたてて気にも止めなかった、この町の様子が急に名残惜しいもののように思われて来た。駅があり、メインストリートがあり、その周りに、ただ雑然と建物が並べられたような、新しくも古くもない町――それが目的もなく、丘の方にまで延びている。そして、今、目の前にしているあの木造の古びた建物――それが駅であり、しかも終着駅であり、大きな時計が掛かっていた。時計の針は、4時少し前をさしていた。さっきから見ていたところ、改札口に入っていた人はひとりもなく、また、汽車がプラットホームに入って来る気配もなかった。まるで死んだようにひっそりとした駅。

そして、その前に、見る人もなく、ひっそりとたたずむ人間の銅像――それは、この町を開拓した人をあらわしているのだろうか？　ともかく、ぼくは、しばらく、このうらぶれた駅前の風景にうっとりとなった。空は、どんより曇っていて、太陽はどこにあるのか、あるいはもう沈んでいるのか、それすら分からない。

“ねえ”と、窓の外に目をやっていたリサが、突然ぼくに声をかけた。“とっても静かな町ねえ。一体、どうしてこんな町があるのか、信じられないくらい”

“そう思うかい？　実は、ぼくもそう思っていたところなんだ”と、ぼくは、さりげなく答えた。間もなくして、料理が運ばれて来たので、ぼくらは、食事をすることにした。

食べているうちにもうすっかり、窓の外は薄暗くなってしまった。ただ、死んだと思われていた駅にも明かりが灯り出し、待合室らしい場所の窓からの明かりは、特に、この暗い夕方に明るく輝いていた。

恐らくかの幻想画家ポール・デルポーなら、こういった光景にたちまちヒントを得て、例の停車場を絵にしたらどうだろう――そんなことを、いつか目にした彼の幻想的な絵のことをイメージに浮かべながら、考えているうちに、どうやら時間が来たらしかった。テーブルの上には、さっきまで盛りだくさんだった食事も引き払われて、水の入ったガラスのコップしか残ってはいなかった。リサは、その向う側で、ぼくと同じように、窓の向うの暗い駅の周辺を見入っている。

“そろそろ時間だな”と、ぼくは言った。

リサは、反射的に、自分の愛らしい腕時計に見入った。時刻はもう5時45分だった。

レストランから出ると寒いほどの風がさっとぼくらに吹きつけて来た。これが真夏だとはとても思えないほどの冷たさで、思わず顔を上げると、空には星々が輝き、満月が昇っていた。その光景に思わず感動して、ぼくは、リサに声を掛けた。

“ねえ、リサ、この光景。いつか、ぼくが感心していた、デルポーの絵にどこか似ていないか。あの月といい、この枯れた景色といい、たそがれの時刻といい、あの灰色のデルポーを思わせるじゃないか”

しかし、リサは、デルポーという聞き慣れない画家に興味はないらしく、ただそっけなく、“ああ、あの素裸の女の人を好んで画く画家のこと？”と答えただけだった。

ぼくは、そのそっけない返答に反発し、いっそのことこの世界全体が、デルポーが描いたような世界に変化し、何も知らないリサの鼻をあかしてやればいいんだと一瞬思ったりした。実際、ぼくは、その恐ろしい考えに、我れながら気に入ったのだった。

駅に着いたとき、薄明かりのともったプラットフォームは深閑としていた。待合室には、数人の年寄りがベンチに腰掛けていて何をしゃべるのでもなく、ただじっと暑さをしのいでいた。待合室の通気は余りよくなく、中に入るとむっとしたので、リサもやがてハンカチを取り出し、それで、首すじなどをあおぎ始めた。

列車は、間もなくして、遠くから汽笛をたてて入って来た。今の世の中ではめったに見られない蒸気機関車で驚かされもしたが、客車のほうはなかなかしっかりしたものだ。ぼくらは、5両連結の客車のうち、後ろから2番目の寝台車に乗り込んだ。

中は、小さな個室になっていて、寝台が上下の2段ついていた。その他、鏡と洗面台が部屋の片隅についていた。ぼくは、荷物を置くなり、ほっとため息をついて、リサに語りかけた。

“これで今晚は安泰というもんだ。あしたの朝になれば、目的のコアンベルに着くだろう”

“コアンベルには何時に着くの？”とリサが尋ねた。

“駅の話によると、明日の朝7時半ということだ。着けば早速、ホテルを捜すことにしよう”

“ええ、それがいいわ”とリサも安心したように答えた。

とすぐ列車がゆっくりと動き出し、ぼくもリサも二人して、窓ガラスに顔を当てるようにして、民家の灯と星空を除いてはほとんど真暗と言っていいような、流れ行く町を眺めやった。

“中は暑いわ。窓をあけましょうよ”とリサが言ったので、ぼくが手伝って、窓をあけると、気持ちのいい風がさっと部屋の内部にまで吹きつけて来た。リサは、風がまともに吹きつけるので目を細めながら、列車の進行方向に身を乗り出して、眺めやった。今や、列車は、時速70キロほどのスピードで走っていた。ぼくもリサにつられて身を乗り出すと、あの町も今となっては、はるか背後にかすかな点灯の群れとなって見えるばかりだった。周囲には光もなく、ただ荒涼とした野が広がっているばかりだった。そして、行手には、この汽車を待ちかまえているかのように、黒々とした山並が立ちはだかっていた。それにしても、空はなんと美しいのだろう。雲ひとつなく、満天に星が散らばっているようだった。5両の客車をつないだ汽車は、そうした中を力強い響を立てて走っていた。――やがて寒気すらして来たので、ぼくらは身を乗り出すのをやめて、部屋の中に戻った。ぼくらは、下側のベッドに腰をおろすと、なんでもいから、この寂しいふんいきを紛らせるために楽しいことがしたくなった。ちょうど部屋の隅にラジオ用のスイッチがあるのに気がついたのでひねってみると、力強い実に気持ちのいい交響曲が聞こえて来た。その曲は、偶然とはいえ、この汽車の旅にピッタリした内容のものであった。後になって分かったのだが、それは、カリンコフとかいう人のシンフォニーであった。しかし、聞いている最中には、様々な想像や連想をぼくらの魂に呼び起こし、実に楽しい効果をつくりあげてくれたのだ。いかにも広大なシベリア平原を思わせるこの曲は、ぼくらに、その中を走っているという錯覚を与えてくれた。それは、まさに、シベリアの大地の曲そのものであった。

“ね、シベリアの夜というものも、きっとこんなでしょうね”と、リサが暗い窓の外を見やっていた。

“うん、しかし、シベリアは、もっと広大で、はるかに奥深いものだろうよ”と、ぼくは答えた。

“あっ、あそこに白いトナカイが走っている！”と突然、興奮したように指をさして叫んだので、ぼくもその方角を見たが、それらしきものは何も見えなかった。するとすぐ、リサはいたずらっぽく笑って、“今のは冗談よ、こんなところにシベリアのトナカイがいるわけじゃない”と言った。しかし、それもひとえに冗談というわけには行かず、あのはるか地平線に、月の光に照り映えた白いトナカイの群れが見えるような期待をぼくらの胸に抱かせたのも事実だった。

“ね、食堂車へ行ってみないかい？”と、間もなくして、ぼくはリサを誘ってみた。あそこなら、ここよりは少しは賑やかだろうと思えたからだったが、リサは無論OKをした。しかし、予想に反して、食堂車は静かだった。カウンターの奥では、少し小太りのバーテンが人に気も止めない様子で、背を向け、ガラスの食器などを洗っていた。窓のそばのテーブルにほとんど人影はなく、ただ奥のテーブルに、みすぼらしい姿をした老人と老女が向かいあって、何かひそひそと話をしているばかりだった。ぼくが若いリサを窓際の一つのテーブルに案内し、腰を降ろした。さっそく、脇に置かれていたメニューを手に取り、書かれた文字を目で追った...

大きなガラス窓の向うはほとんど真暗で、列車は、相変わらずの音をたて、ガタガタと揺れていた。時折、暗いはずの遠景のところどころに、パッと薄明かりが射すことがあり、それが一体何なのかは分からなかったが、暗い空にチカチカと輝いている星と共に、なんとも言えない美しさを感じさせるのだった。ぼくとリサとは、やがて運ばれて来たウィスキーをすすりながら、ほとんど物も言わず、そうしたロマンチックな時間を感じ取っていた。

“怖くはないかい？”と、ぼくはふと彼女に言った。

“ううん、ちっとも”と、彼女は、にっこりして言った。“でも、どうして？”

“いや、なんだか、あの外の光景といい、この汽車といい、寂しい気がするからさ”と、ぼくは、リサの質問に答えた。

“同感よ”と、リサは答えた。“でも、別に寂しいとは思わないわ。兄さんがいるもの”

“そうかい”と言って、ぼくは微笑んだ。

しかし、そうは言うものの、一抹の不安が、心の隅から去ったわけではなかった。この汽車は、本当に、コアンベルへ、このぼくたちを運んで行ってくれるのだろうか？パンフレットで見たあの賑やかなコアンベルへ...しかし、汽車は、賑やかどころか、一層寂しい奥地へと、ぼくたちを運んでいるようにも思われたのだ。同乗者たちは、華やかなコアンベルへ行くというには、余りにもみすぼらしい服装をしており、まるで、これから田舎の家へ帰るかのようだった。とするなら、一体都市は、どこにあるのだろうか？“いやいや”と、ぼくは思った。“そんなことを考えるのはよそう。取り越し苦労だ。明日、夜が明ければすべてが明らかとなるだろう。

そして、目の前には、きっと見違えるような青い海、そして、キラキラの太陽が見えるに違いない。浜辺には、白亜のホテルが立ち並び、目もくらむような緑の森が繁っている。例のパンフレットで見た光景なのだが、それがコアンベルなのだ”

“何を考えているの？”と、突然リサが尋ねた。彼女は、急にぼくが黙ってしまったことが気にかかったのだ。

“いや、なんでもないさ、ちょっと眠くなっただけ”と、ぼくは答えた。

“あたしも”と、彼女も言った。“もう眠いわ。体がすっかり疲れてしまった。だって昼は、余計なことに体を使ってしまったものね”

“そうだね。不思議な医者さ。本当にどうかしている”と、ぼくも相づちを打った。

“じゃ、そろそろ引き上げようか”ぼくは、ほろ酔い加減のいい気分になりながら、最後の一杯を引っかけると、グラスをテーブルに置き、リサの手を取って、食堂車を後にした。自分たちの寝台車に戻って来たときは、もう夜中の12時を回っていた。窓の外は真暗で、リサが下のベッドを、ぼくが二階のベッドをとり、それぞれ横たえた。すると、一日の疲れがどっと出て、睡魔が、ぼくの意識を襲った。ぼくは、しばらくは、この日一日の出来事のことを考えていたのかも知れない。しかし、何も記憶しないまま、ぼくは、全き眠りの中に陥ってしまったのだった...

列車のゴトゴトと言う音で、ぼくは、目が覚めた。最初、ぼくは、自分の部屋にいるような錯覚に捕らわれたが、すぐ、汽車に横たえているのだということに気がついた。枕元には、既に朝方の薄明かりが射しており、ぼくはふと気になって窓の外の景色を眺めた。すると、驚くべきことに、そこには、街の姿はなく、相変わらず殺風景な、しかも、寒々とした光景が展開されるばかりだった。そればかりか、これが初夏の景色とはとても思えないような、ところどころ葉を散らした裸の樹木が見える、深閑とした広大な自然の風景がくり広げられるのだった。ぼくは枕元に置いた腕時計を見たが、針はちょうど朝の七時を指していた。まだ目的地に着くにはいくらか時間があったが、それにしても、余りにも不思議な光景だった。それはともかく、ぼくは、リサを起こすことにした。

リサは、下のベッドで、うつ向きにぐっすり眠っており、その姿は、一瞬死んでいるのかと思わせたほどだった。ぼくはすぐ下に降り、眠っている彼女の肩に手を触れると、リサははっとなって、目を覚ました。

“ここはどこ？”と、彼女は、寝ぼけて、うわ言を言った。

“ばか、ここは汽車の中だよ”と、ぼくは答えて言った。“もうすぐ駅に着くから準備しな”

やがて、到着まで後10分という頃、ぼくとリサとは、心配そうな面持で、互いに窓の外の、一向景色の変わらない寂しい風景を眺めていた。というのも、ぼくらが期待していたような、紺碧の海岸も、白亜のホテルも、一向、姿を現すような風景には見えなかったからだった。ただ、だだっ広い荒野と森のあるなだらかな光景が、飽きることなく続くだけだった。ぼくらは、互いにかわす言葉もなく、そんな風景を、見続けた。

そうして、ついに！ぼくらは、目指す街、コアンベルに着いた。汽車は、ホームに向かって、ゆっくりと進んで行った。だが、その駅は、ぼくらが信じていたものとは、似ても似つかない、全く異なったものだった。ぼくは、着いた駅が自分では信じられず、もう一度自分の目で、駅に掲げられた標識をしっかりと確かめた。しかし、それにははっきりと、“コアンベル”と書いてあった。

“何かの間違いでしょ、兄さん”と、リサは、ほとんど恐怖にゆがんで言った。

“ぼくも、そう思いたい。でも、ともかく、まずは外に出よう”ぼくはそう答え、自分の旅行鞆を手にとった。

みすばらしい、人気のない駅に降りる人は、他に、地元の人らしい、ショールを着けたおばさんら、数人だけだった。ぼくらは降りる前に、検札に来た係員に、“ここが間違いなくコアンベルか”そして、“コアンベルという名高い保養地は、ここ以外にないのか”を尋ねたが、係員はただあきれて、コアンベルという駅はここしかなく、保養地などとはとんでもない、と答えたので、すっかりどぎもを抜かれたような気持になってしまったのだった。

この汽車は、さらに一時間ほど走り続けるが、それは、聞いたこともない駅へと行ってしまったのだ。あんた方は降りるのか降りないのかと尋ねられ、やむなく、ぼくらは、不本意な駅、コアンベルで降りることにした。

降りて、この想像を絶するコアンベルの駅が、全くの田舎駅であることを知らされた。ぼくらは、たちまち、不安な気持ちに襲われた。そしてそのとき、手に持った華やかなパンフレットの街コアンベルとは全く異なった未知の街コアンベルに自分たちがいることを知って、がく然となったのだ。

“兄さん、一体どうすればいいの？”と、リサは、もう泣き叫ぶようにして、ぼくにすり寄って来た。

“ぼくだって、一体、何がどうなっているのか、さっぱり分からないさ。でもともかく、気持ちだけはしっかりしよう”ぼくも、心の中では泣きたいぐらいだったが、あえてリサを励ませた。

やがて、汽車は音をたてて去り、駅には、ぼくら二人だけがとり残された。

汽車が去って、ぼくは再び、駅の周りに目をやった。

空はどんよりと曇り、ここでは夜明けでも、陽が射し込まないかのごとくだった。そして、薄もやのかかった森の風景のところどころに、ひなびた藁ぶきの農家がぽつんとあるだけの、辺りな田舎であることが分かった。ぼくには、もちろん行く当てなどなかった。しかし、真実を知ることが必要だった。ともかく、どんなにひなびたところにも、一軒ぐらい茶店があるだろう。まだ時計の針は、朝の八時を指してもいかなかったが、ぼくらは旅行鞆を手にして、その小さな駅を後にした。

駅を出ると、すぐ並木道があり、どうもその向うが目抜き通りらしいことが分かった。それに思ったほど小さな田舎町ではないらしいことが分かった。通りの両脇には、一応商店が軒を並べ、有り難いことにレストランが一軒、店をあけていた。

外は、夏のはずなのにひんやりとして、薄着の身にはこたえたので、暖を求めるかのように、ぼくらは、その店に飛び込んだ。中は、それほど広くはなかったが、これから早朝の仕事に出掛けるらしい、たくましそうな男が三人、店主と何か語り合っていた。恐らく、近くに、大きな工場でもあるらしい。ぼくらが入ると、珍しいものが迷い込んだように、店主と男たちが振り向き、こちらを見やった。ぼくらは、できるだけ目立たないように、店の隅のテーブルに坐った。

“いらっしやいませ。何にいたしましょう”店主は、カウンターごしに、型通りの注文を聞いた。ぼくは、朝食を頼み、それから、すぐ新聞の置いてある場所を捜した。ともかく、ここがどこか、世界がどうなっているかを知る為には、まず第一に新聞を見ることなのだ。新聞はすぐ見つかった。ぼくは、そっと立って、カウンターの上に無造作に打ち捨てられていた新聞を手にとると、またすぐテーブルに戻って来た。

何か、大きな事件はないだろうか？ そして、ここは一体どこなのだろうか？ ぼくは、テーブルに戻ると、むさぼるように記事に目をやった。

ここが分かるような記事はないものかと目を通したが、聞き覚えのない競馬のレースの予想と、政治欄が全くないという以外、ありふれた地方版特有の内容しか書かれてはいず、大した手がかりは得られそうになかった。知らない地名が随分たくさん書かれてあったが、知らない街へやって来た以上それは、ごく普通のことであった。ただ凶入りの天気予報のところに来て、ぼくは、謎の一部をかい間見る思いがした。恐らくこの地方の天気を印してあるだろうその地図は、地名は愚か、今まで全く見たこともない地方を表していた。ぼくはそれを目にして、自分たちが、いつのまにか、全く未知の村に踏み迷ったらしいということに気がついた。新聞をじっと見入るぼくとリサの顔には、ますます不安の色が濃く現れて来た。

“君たち、ここの人間じゃないね”突然、朝食を持って来た店主が声をかけた。さっきの男たちは、つい今しがた出て行ったばかりだった。“君たち、旅行鞆なんかを持って、何しにここへ来たんだね？”

“旅の途中なんです”とぼくはできるだけ動揺の色を悟られまいと、店主に答えた。

“ほう、それで、ここへは何んの用で？”と、店主は物珍しそうに尋ねたが、ぼくは答えようとはしなかった。

ところがそのとき、レストランの奥に、ふと、見覚えのある奇妙なものが飾ってあるのが目に止まり、そう言えば、この奇妙な旅のところどころにあのようなものが飾られていたことをぼくは思い出したのだ。確か、初めてそれを目にしたのは、あの無法な医院が最初で、その待合室でも、ここと同じく、やけにぎょうぎょうしい三日月の飾り物が飾られていたのだった。それは確か、駅舎の中にも、ぼんやりとだが、見かけたような記憶があった。それで、これは、この地方の何かの流行に違いないと軽々しく思って、ぼくは何気なく、逆にそのことを店主に尋ねてみることにした。

“ちょっとお尋ねしますが”と、ぼくは何気なく、奥のその飾り物の方を見つめながら言った。“あの、三日月のような飾り物は一体何なんです？”

するとそのとたん、店主の顔は急に、それこそ恐ろしいまでに曇り始めたのだった。

“なんだって！”と店主は言った、“君たち、本当に知らないのかい？”

ぼくは何かまずいことを尋ねたのかと内心悔やみながらも、そのままうなずいた。

すると、店主は、体を半ば震わせながら、怒ったように、しかし、それでも説明だけはしてくれたのだった。しかし、その内容は、全く信じられないような、恐ろしい内容だった。

“君たちはどこから来たのかは知らないが...”と店主は言った。“ともかくあれについて知らないとは、全くあきれてしまうほどだな。およそここに住むすべての人は、あれを祭ってなければならぬはずのものだよ。――でも知らないというのなら、説明しよう。あれは、魔王を崇拝する為の祭壇だよ。これを持たない者は、魔王を冒瀆するに等しい。そういう人間は、いつも恐ろしい目に会うのだ。いいかね”

そう言って、主人は、まるで信じられないといった風に主人を見つめるぼくたちに向かって、とくとくと魔王について語りかけるのだった。

“魔王がどこに住んでいるか、そんなことは誰れも知らない。またどんな姿をしているのか、それも知らない。でも魔王は確かにいて、この地上に降りて来なさるのじゃ。そしてそのときは決まって人間の姿をしているので、誰れもそれが魔王だとは気がつかない。そしてこれが一番恐ろしいことだが、年に一度、村の娘をいけにえとして連れ去って行く日があるのだ。その日はもうかれこれ近づきつつあるので、村人たちはその儀式の準備に追われる頃なんじゃ。ああ恐ろしい日がやって来るというのに、それすら君たちは知らないというのかね”

“でもまさか...”と、ぼくは、ほとんどあっけにとられながら言うのだった。“この科学の発達した20世紀にですよ、魔王がいるだなんて、本当にあなたは信じているんですか？”

“信ずる？”と、恐ろしいとばかりに店主は言うのだった。“魔王の存在より確かなものは、この地上にないというのに。君たちはなんという冒涇、なんという恥知らずだ。そんな君たちをこの店に置いておくわけには行かない。魔王ににらまれたくはないからな。さあ君たち、早くここを出なさい。今すぐここから出て行ってくれ！”

ぼくたちは、食事もろくにとれないまま、ほとんど追い出されるように、その店を後にしたのだった。

ぼくたちは出るなりお互い顔を見合わせた。

“今の話し、信じられる？ 魔王だなんて”と、ぼくは、まだ信じられないといった風に言った。

“でも確かあのとき”と、リサは言うのだった。“ホラッ、ヒッチハイクのあの人。あの人も、悪魔の存在を信じるかって、尋ねて来たわ。変なことを言う人って思ったけど、今になって考えれば、別に変な質問でもなかったのよ。ここではみんな、悪魔について考えているんだわ”

“悪魔だなんて、よせやい。縁起でもあるまいし”と、ぼくは少し身震いをしながら言った。“それはそれとして、ここがコアンベルとするなら、おかしいことになったのは確かだ。どうやらぼくたち、不思議な世界に迷い込んだようだ。あの事故の日を境にしてね”

不思議な世界！ この言葉は、ぼくたちの背筋をゾッとさせた。

でも今となっては、もう後戻りの出来ない、現実の出来事となっていたのだった。

そうしているうちにも、街の広場近くに、幸いホテルを一軒見つけることができた。もうぼくたちは、うかつな質問は、よそ者と疑われるだけだと悟り、できるだけ同じ人種だと思わせるようにふるまうことにして、ホテルの中に入って行った。見ると、ホテルの壁のところにも、あの気味の悪い三日月の祭壇が飾ってあった。それに一瞥をくると、つかつかとぼくはフロントに向かった。

“すみません。ホテルの一室を借りたいんですが”と、ぼくは言った。

やがて、案内されたところは、広場を見下ろせる、こじんまりした、なかなかしゃれた部屋だった。

ボーイが出て行くと、ぼくは、深々とソファに腰を降ろした。

そして、どんよりと曇った窓の外と、窓際に立つリサの後ろ姿を見つめながら、それとなく語りかけた。

“ねえ、ぼくたち、とんでもないことになってしまったようだね。どこでどうなってしまったのだろう？　ともかく、最初に出会ったあのテルリアパンソの主人のように、早くここを出ることなんだ。でもどうやって出れるんだろう？　コアンベルへ行きたいって言っても、ここへ着くようじゃね。それにここじゃどうやらみんな、悪魔の存在を信じているようだしね。そんなものがあるのなら、お目にかかりたいものさ。そうは思わないかい？　リサ”

“とんでもないことよ”と、リサは振り向いて否定した。“だってさっきの人、言ってたじゃない。毎年、若い娘をいけにえにさらって行くって。もしそれがわたしだとしたらどうなるの？　悪魔なんて、ゾッとするわ”

ぼくはにっこりした。

“お前って、単純だなあ。そんなもの、いるわけないだろう”

“じゃ、あの奇妙な祭壇は？”とリサは言った。“このホテルにもあったわ”

“あれはさ”と、ぼくは言った。“例えば、キリストの十字架のようなものさ。ここではきっと、あれが信仰の対象なのさ。キリスト教にとって、神がいるかいないかは別として、と同じように。だって、悪魔がいるなんて、本当にお前は信じるのかい？”

“だって、あの店の人の言い方って、普通じゃなかったわ”とリサは言った。“異常なほどよ。本当にいるって、信じ切っているみたい”

“まあ一步譲って、この地上にお前の言う悪魔がいるとしよう”と、ぼくはくつろいだ姿勢になりながら言った。“しかしその悪魔と、ぼくたちと、何んの関係があるというのだい？　だからさあ、もうそんなつまらないことは忘れよう。そして、どうして、この村や町から脱出できるかを考えようじゃないか。本当に困っちゃうな、こんなところにやって来てしまっ。本当のコアンベルはどこへ行ってしまったんだろう。ともかく、じっくりと考えることさ。よく頭を働かせて...”

そうして、ぼくがソファに坐ったまま目を閉じようとしたとき、

“ホラッ、見て！”と、リサが、何やら窓の外を見つめながら、叫んだのだった。

ぼくはあわてて、リサのそばに駆け寄った。

すると、窓の下、広場では、人々が次々と広場の中央に何かを運ぼうとしていた。黙々と、しかも整然と作業を続けているその様は、何か一種不気味ささえ感じさせるのだった。そうしているうちにも、広場の中央には、何か大きな祭壇のようなものが形づくられつつあった。舞台をつくり、その上にやぐらを組み立て、やぐらの上にあの大きな悪魔のしるし、三日月がそなえつけられるに到って、ぼくたちは、あの店主が予言した、いけにえの儀式の日が実はこの日なのだ

認識して、がく然となった。

だが、魔王なんて、本当にいるのだろうか？

すべての機材が運ばれ、祭壇と舞台の組み立てが完了すると、広場からは再び人が姿を消し、し～んとした。人気のない広場の中央に組み立てられた祭壇の姿が、どこか背筋の凍るような不気味さを、ぼくに感じさせた。

それにしてもいつ、その儀式は始まるのだろうか？

夕方になって、広場の周辺が再び騒々しくなってきた。奇妙な楽隊の音楽が聞こえ始め、ざわざわとした雑踏と、それにかき消されるかのような歌声などが、遠くから、次第に広場へと近付いて来るかのようにだった。そうこうしているうちに、騒がしい音が急に大きくなったかと思うや、ついに、人々の姿が広場に現れた。めいめいが、まるでカーニバルの夜のように、思い思いの面をつけ、思い思いの衣装を身にまといながら、腕を組み、あるいは、楽しいステップを切りながら、それこそ何の秩序もないかのごとく、広場になだれ込んで来たのだった。どこにこれほどの人がいたのかと思われるほど、広場は、たちまちのうちに、人々の渦で埋め尽くされてしまったようになった。音楽と歌と、叫び声と、そして花火や、かんしゃく玉の音など、ありとあらゆる騒々しきで、まるで広場はお祭り騒ぎと化した。しかしそうしているうちにも、広場の中央に、たいまつをともしつつ行進する一行の姿が見られた。白い服を身にまとい、頭には例の三日月の冠をいただいている。それは、騒々しい祭りのさなかにあって、おごそかな宗教の儀式のようにも見受けられた。その一行が祭壇に近付くと、一步一步、両手に高々と松明をかがげながら、祭壇に登って行くのだった。すると、さっきまでのあの群衆のお祭り騒ぎは急にやみ、人々はまるで恐怖にかられたように、地べたにひれ伏し、何かの呪文を唱えるかのように、祈りの言葉をつぶやき始めるのだった。中央の祭壇の一段と高いところへ昇った一行は、彼らよりも一段と力強く、たいまつを高く揚げながら、祈りの言葉を唱え始めた。そして、それら祈りの言葉が絶頂に達した頃、ついに祭壇の一番上の三日月に、たいまつ炎が点火された。その瞬間、三日月は、まぶしいほどの光を放って、燃え始めたが、それと同時に、驚くべきことに、それまで聞いたこともないような、恐るべきうめき声が、まるで天を揺るがすかのように、あの雲の上から聞こえて来るのだった。

さすがにぼくも、その声にはゾットとなった。それが悪魔の声なのか、はたまた、狼の遠吠えなのか、ぼくにはいずれとも区別がつかかねたが、それがまるで天からのごとく、遙か彼方から聞こえて来たのだけは確かなことだった。

リサは、窓辺に立って、まるで釘づけのようにその一部始終を眺めていたが、さすがにその遠吠えのときだけは、両耳を手でふさいだ。

しかし、遠吠えばかりか、事態は急変するばかりだった。三日月の輝くばかりの炎が、メラメラと天井に立ち昇るうちに、それまで木の葉ひとつ揺らすことのなかった風が急に出て来て、まるで、嵐のように風は強くなって行くばかりだった。それは、ぼくたちの立っている窓の中にも否応なく入って来て、カーテンをひらひらと揺らし始めた。

“どうなっているの？ 怖いわ”と、リサは、顔をこわばらせながら、ぼくに言ったので、ぼくは、彼女を安心させてやるべく、その肩に手を当てた。

そして、ふと振り向いて、部屋の掛け時計を見たが、圧倒的なあまりの光景に時が経つのも忘れて見ていたせいか、もう時計の針が午後十一時を回っていることに気が付いた。

“大丈夫だよ、リサ。何も怖いものなんか、あるもんか”

そう言って、ぼくはリサを慰めた。

“さあ、もう見るのはよそう。こんな、見慣れないものを見るから怖く感じるんだ。だから、ちょっとベッドに戻って休もう...”

そう言って、ぼくは、リサをベッドへと運んだ。

ところが、そうしてリサをベッドで慰めているうちにも、窓の外はそれこそ本当に、稲光りと共に雷鳴がとどろき、嵐になって来たようだった。こんな天候の急変など、かつて経験したことのないものだった。

リサはまだ気分がすぐれないのか、ベッドの上でぐったりしたままだった。

それでぼくは、水を吞ませる為に、浴室へコップをとりに行った。そのときだった、まん悪く、停電して、部屋の中が真暗になってしまった。ぼくは、コップを手にしたものの、手さぐりで寝室へ向かわねばならなかった。窓明かりのせいで、かろうじて、部屋の中の様子が分かった。そして、目が段々と暗さに慣れて来て、ベッドの居場所が分かって来たときに、何か不思議な生物が、リサの横たわっているベッドにいるような気がして、ぼくはギョッとなった。それはベッドの向う側にいて、ハッキリと窓明かりを背景に、それが立っている姿が、ぼくの目に映って、ぼくは思わず、水の入ったコップを落としそうになった。だが、その次の瞬間だった、停電が回復して、部屋の中が急に明るくなった。すると、ベッドのそばに、なんと、あのヒッチハイクの青年が立っているではないか。

“君は...”と、ぼくは驚いて言った。

“御免。部屋のドアが開いていたもんでね”と、彼は、ぼくを見るなり、悪びれずに答えた。

しかし、ぼくの記憶では確か、部屋の鍵は閉めていたはずだったのだ。それなのに、どうして入って来れたのか、ぼくには分からなかった。そればかりではない、彼の姿が、暗闇の中で見たのとは余りにも違い過ぎて驚いたのだ。暗闇の中では、彼は、まるで人間ではなく、何か奇妙な、あちこちにトゲやツメがあり、耳の大きな未だ見たこともないような、それこそ驚くべき、恐怖を伴う生き物のように思われたのだ...

“偶然、君たちがここにいる、ということを知ったものでね”と、彼は、愛想よく、作り笑いをしながら、続けた。“でも、もう失礼するよ。どうやら彼女、具合が悪いらしいからね”

そう言うなり彼は、さっさと、部屋から出て行った。

あっけにとられながら、彼が出て行くのを見終えると、ぼくはさっそく、ベッドにいるリサのところに駆けつけた。そして、目を閉じているリサを揺すりながら、ぼくは叫んだ。

“今の見たかい？ あれは何んだい？ ぼくは真暗闇で見たんだよ。あいつの正体を。あいつは人間なんかじゃなかった。それこそ、恐ろしい魔物のようだった。お前は見なかったのかい？” “何をよ...” リサは、目をのんきにこすりながら、やっと開くのだった。 “兄さん、何か見たの？”

“見たどころじゃなかったんだよ。危なかったんだよ、お前が”と、ぼくは吐き捨てるように言った。“お前は狙われたんだ、あの男に。いや、あの悪魔に” “あの男って、誰？”と、リサは、気分がすぐれないまま尋ねた。 “誰って、あのヒッチハイカーさ”と、ぼくは恐ろしげに答えた。“だが、もう渡すものか。リサ、今晚はずっとそばについていてあげるからね。決してぼくから離れてはダメだよ。あれが悪魔だって、ぼくは気が付かなかったんだよ。確かにあの主人の言っていたことは当たっていた。悪魔は、人間の姿を借りて、地上に舞い降りるって。だから誰も、その男が悪魔だって分からないって。全くその通りだ。ぼくたちはコロッとだまされていたんだよ。あありサ、分かるかい。こんな恐ろしいことって、他にあるだろうか...” ともかくその日の晩は、ぼくは一睡もせずに、リサを見守った。夜明け頃になって、嵐もおさまり、うたた寝ぐらいはしたかも知れないが、おかげで、リサを守り抜くことはできたのだった。 一晩中吹き荒れた嵐も治まり、窓から日光が射し込んで、リサのベッドに横たわった姿を見たまま、晴れた青空を目にしたときほど嬉しいものは他にはなかった。ぼくは本当に、心の底から、このすがすがしい夜明けに感謝をしたのだった... 朝、すべての支度を終わると、ぼくはしかし、昨晚の出来事を、誰れかに訴えずにはいられなかった。しかし全く見ず知らずの村のこと、そんな人がいそうに思えなかったが、ただひとり言いたい人が見つかった。例のレストランの主人だった。あの人なら、ぼくたちのことを分かってもらえそうに思ったのだ。そして何らかの助言か、知恵を授けてくれるかも知れない。だって、ぼくたちが全くのよそ者だということを知っているのは、今のところあの人しかいなかったからだ。 それで、ぼくたちは、怒鳴られるのは覚悟の上で、あのレストランに向かった。 レストランは、まるで何もなかったように、昨日と同じように開いていた。 ぼくたちが中に入るや、愛想よく応対しようとしたつもりの主人の顔が急に曇った。

“まだ君たちはいたのか”と、彼は、他の客に気がねしながら、小さく言った。 しかし、ここで事を起こしては大変と感じたのか、彼は、わざと他の客からは遠ざかった席にぼくたちを案内した。案内するなり、主人は言った。 “君たち、お願いだから、今日で最後にしてくれ。今日はわしのおごりだ。それでかまわないだろう” “そんなつもりで来たのじゃありません”と、ぼくは言った。“そうじゃなくて、あなたの言っていたことが分かったことを報告しに来ただけなんです”

そう言うと、主人は急に優しい態度に変わった。

“ほう、それはどういうことなんだね”

“つまり、悪魔をぼくは見たんです”

そう言っても、主人は別に驚かなかった。

“ほう、それで、どんな姿をしていた？”と主人は尋ねた。

“それが、ヒッチハイカーの姿をしていました”と、ぼくは答えた。

“ヒッチハイカーね”と、今度は彼は、てんで取り合わないような顔つきで言うのだった。

“でも、嘘じゃないんですよ”と、ぼくは真剣な表情になって言った。“だって、暗がりの中で、彼が悪魔の姿をしていたのを、ちゃんとこの目で見たんだから...”

“ほう、それで、その悪魔の姿とやらは、どんな姿だった？”と、彼は尋ねた。

“それは、一口には言えません”と、ぼくは言った。“何かこう、あちこちにトゲのようなものがあるって、まるで化物のようでした”

“それで君はわしに何が言いたいんだね”

“つまり、その悪魔に、ぼくの妹が狙われたんです。幸い今もここにいますけど、また狙いに来るとは違いありません。そんなとき、どうすれば守れるかって、そのことが知りたくて、何かおじさんなら、いい知恵があるかも知れないと思って、それでやって来たんです...”

その真剣な、訴えるようなぼくの表情を見て、店主は、腰に手を当て、まじまじとぼくを見つめながら、何か考え込んでいるかのようだった。

“つまり、君たちに、悪魔の存在というものがやっと分かったんだね”

と、彼は落ち着いた表情で言った。“それが一つの進歩だとしてもだね、第二の点、つまり、悪魔に対する妙薬というものはないんだよ。わしらはただ、魔王の支配するままに生きるしかない。そうするしかないんだよ。ただね、悪魔に魅入られたのが、君の言うように本当だとするなら、できるだけその場所から遠くに逃げなさい。どんな方法でもいいから遠くに逃げなさい。わしの言えることはそれだけだよ。それが本当に解決になるかどうかは分からないけど、わしとしては、そう言うしか他にないんだ...”

その言葉で、ぼくは目頭がじ〜んと熱くなるのを覚えた。

“ありがとうございます、おじさん”と、ぼくは心から感謝をこめて言った。“そうします。さっそくそうさせてもらいます。本当に感謝します...”

そう言って、ぼくは、リサの手を引きつつ、レストランを後にした。

おじさんの言うことが本当だとするなら、できるだけ早く、この街から立ち去ることなのだ。あのヒッチハイカーに姿を借りた悪魔は、まだその辺をうろついていないとも限らなかつたからだった。

ぼくはリサの手を引っ張りながら、大急ぎでレストランから去って行った。目的もなく、ただ不安にかられながら、無我夢中に走った。ちょうどそのとき、向うから運送用のトラックが走っ

て来たので、ぼくは反射的に手を上げた。

トラックの運転手は、ぼくの横にいるリサに目が止まったせいか、ぼくたちの前で車を止めてくれた。

“何か用かね”と、運転手は、窓越しに尋ねた。

“この車は遠くへ旅するんですか？”と、ぼくは思い切って聞いた。

“うんと遠くだ”と、彼は答えた。“三日はっ走るからね”

“じゃ、乗せて下さい”と、ぼくは頼んだ。

“行く先も聞かずにかね”と、運転手は不思議そうな顔をして言った。“それでもかまわないっていうのなら、乗せてはあげるけれど...”

“行く先は別にかまわないんです。ここからできるだけ遠く離れた街へ行くのなら”

“じゃ、まあ乗りなさい”そう言って、運転手は、トラックの助手席を、ぼくたちに解放してくれた。

少し狭くはあったが、ぼくたちは並んで坐ることができた。

しばらくすると、運転手は、ときどきぼくやリサの方に一瞥くれながら、話しかけて来た。

“君たちって、おかしな子だね。行き先も聞かずに乗るなんて”と、彼は言った。“着いたときに後悔したって知らないよ”

“じゃ、念の為聞いておきます”と、ぼくは言った、“何んという街で、どんなところなんです？”

“なに、タンボラと言って、港町さ”と、運転手は得意気に言った。“君たちは知ってるかい？”

“いえ、知らないです”と、ぼくは神妙に答えた。

“見るところ君たちは”と、運転手は言った。“この村の人間でもないようだね。旅行者なのかい？”

“まあ、そういうところですよ”と、ぼくは答えた。

“どこから来たんだね”と、彼はっつけんどに尋ねた。

“ドシアンからです”と、ぼくは答えた。そして、運転手の顔色を伺いつつ、こっそりと尋ねてみた。“知ってますか？”

“いや、聞いたことのない街だな”と彼は、到って冷静に答えるのだった。

しかし彼が知らないからと言って、ぼくは別に驚きもしなかった。ぼくの知っている世界では、それは名前の知られた街だったが、ここでは全く別で、そういう地名が、ほとんど知られてはいないのだ。

“ところで”と、しばらくしてから彼は言った、“きのうのいけにえの儀式だけど、不思議なことに、ひとりも若い娘がさらわれはしなかったとかいう話しだな。君たちは聞いているかい？ こんなことは聞いたことがない。あくまでもうわさだがね、魔王の気に入りの娘がいなかったか、あるいは、気に入った娘をさらうのに失敗したとかいう話しだ。だがね、そんなことがあり得るだろうか。あの魔王たるべきものがだね、何んでも簡単にやってのけるのに、娘をさらうのをしくじるなんてことが。それで村人たちはみんな不思議がっているという話しだ。

それとも、その娘をさらうのを引き伸ばして、そのことを楽しもうとしているのかな。君たちは、何か別の噂なんかを聞いたことはないかね”

“いえ、今の話しも初めて聞きました”と、ぼくは半ば顔を青ざめながら言った。

今の話しはまさに、リサに当てはまるかも知れないと思ったからだった。リサだって、表情一つ変えず前方を見つめているが、内心はドキドキしているに違いない。

“でも、魔王は、その年はあきらめて帰る、というときもあるんでしょ？”と、ぼくは何気なく言った。

“いや、魔王は決してあきらめない”と、運転手は言った。“狙った獲物は必ず仕留めている。それが彼の流儀なんだ。今まで見たって、彼に狙われて、逃げおおせた娘なんて、ひとりもいなかったからね。――でも、今回はひとりもさらわれなかったところを見ると、魔王はよほど、何か考えるところがあるに違いない。オレはそう思うんだ。よっぽどいい娘を見つけたに違いない。それで、ゆっくりと料理をしようと考えているに違いないんだ...”

“まあ、それはそれとして、他に話題を変えませんか？”と、ぼくはわざと話題を変えた。背筋の寒くなるような話しなど、まっぴらごめんだからだ。

いろんなことを話題に登らせているうちに、トラックは静かな郊外の道を、疾風のように走り去って行った。

リサは眠くなったのか、やがて助手席の背に頭をもたれ、眠り込んでしまった。しかしぼくは、眠る気にはなれなかった。眠くはあったけど、彼女を見守る必要があったのだ。

郊外の道はのどかで、ところどころ小さな湖水があったりで、なかなか美しいところだった。広がる森と野原ばかりの光景で、人影をほとんど見ることはなかった。

やがて彼は、郊外の一軒家のガソリンスタンドに車を止め、給油のあいだ、休憩しに車から降りた。

リサは目を閉じたまま、まだ助手席で眠っていた。ぼくは、運転手からもらった毛布を、そなりサにくるんでやった。

そして、しばらく時が過ぎた。

ここはどこだろう？ 随分と寂しいところだった。しかしおかげで、もうここまで来ればあの魔王も、捜し出すのに随分と苦労するに違いない。ぼくは安堵の気持で胸をなで降ろしながら、ふと窓の外を見た。休憩だけにしては意外と時間のかかっているあの男、その男が、家の中で誰かと話している様子だった。しきりと何か、手まね、身ぶりを混じえて話していた。ぼくは目をこらして、その相手が誰なのかを見ようとした。すると、なんと、ギョツとしたことに、昨日の夜、確かに暗がりで見えた、トゲの生えた、耳の大きい、あの化物そっくりの姿をしている生き物だったのだ。しかも運転手は、その化物に向かって、ぼくたちの乗っているトラックの方を指さしているのだった。その瞬間、ぼくは悟られまいと、窓の陰に身を隠した。

やがて運転手は、何か取引でも成立した為か、得意気な顔をして、家の中から出て来た。嬉しそうに、体は踊っているようだった。

しかしぼくとしてはもう待てなかった。一刻も無駄にすることはできなかった。どうしてあの魔王にここが分かったのか、もうそんなことは今となってはどうでもよかった。ぼくの出来ることはただひとつ、車にかけっ放しにしてあったキーを回してエンジンをかけ、車ごとここから逃げ去ることだった。

ぼくは、彼が来るまでに運転席に移動し、エンジンを始動させようとした。

だが、どういうわけか動かない。

不安にかられて、窓の外を見た。すると、彼は、ぼくの様子に気が付いたようだ。血相を変えて走り出したのだ。彼はみるみる近付いて来る。ぼくは必死になってもう一度キーを回した。かからない。彼はもうドアのすぐそこだ。するとそのとき、かかったのだ。車は大きなエンジンの音をたてて動き出し、ドアにすがろうとする彼を振り払うかのように、勢いよく走り出したのだ。彼は悔しそうに地だんだを踏んだが、もう後の祭りだった。遠ざかって行く彼の姿が、バックミラーに小さく映っていた。

そのとき、眠りからリサが覚めたようだった。

“どうしたの？ 急に走り出したりして”と、リサは寝ぼけながら言った。

そして目をあけると、ぼくが運転しているのを見て、驚いたようだった。

“今、危なかったところなんだ”と、ぼくは必死でハンドルを握りながら、説明した。“あの魔王が、すぐ近くにいたんだよ。あいつ、ちくしょう、ぼくたちを売ろうとしやがった。きっとそうに違いないんだ。だからトラックをかつ払ってやったのさ。そういうこと。分かるかい？”

ぼくたちを乗せたトラックは、深い森の中をゆるやかなカーブを切りながらどこまでも続く道を、ひたすら走っていた。その行き着くところがどこになるかも知らず、ぼくは必死にアクセルを踏み、ハンドルを回し続けた。

リサも今や目をかっと見開き、前方にくり広げる光景を見つめながら、まじろぎもしなかった。

“ねえ、どこへ逃げるつもり？ だんだん不安になって来たわ”と、リサはそれとなくつぶやいた。

“ぼくにだって分かるものか”と、ぼくも半分やけっぱちになりながら言った、“ともかくできるだけあの化物から遠ざかることさ。それしか方法はない...”

森は、ときには不気味なほど暗く、そしてまた木陰のあいだからパッと光がさし込むこともあった。

そしてついに長い、深い森を脱出すると、無人の荒野を横切る道に出くわした。

真直ぐ行くべきか、右に行くべきか、左に行くべきか？

標識はあったものの、どれも知らない地名ばかりだった。

そうしてためらっているうちに、ぼくたちが抜けて来たばかりの森の道の方から一台の乗用車が走って来るのがバックミラーに認められた。

ぼくは、これはただならぬ車だと、不吉な予感がした。

そう思うや、一台ではなく、二台目が姿を現し、続いて三台目が姿を現した。それらが猛烈なスピードでこのトラックに近付きつつあった。

もうぼくには迷っている暇はなかった。

三台どころか続々と姿を現して来た乗用車の群れから逃げる為に、ためらわずにぼくはトラックを発進させ、左の道へとハンドルを切った。

そしてぼくは続いてこう叫んだ。

“リサッ！ 運転を代わってくれ。ぼくは、トラックの積荷を落とすから”

“でも、だって”と、リサは血相を変えて言うのだった、“わたし、運転したことがないわ”

“簡単なことだよ。アクセルを踏み、ハンドルを握り続ければいいことだ”とぼくは怒鳴った。

“いやよ、そんなの”と、リサは抵抗した。“そこまで言うのなら、わたしが積荷を落とすわ”

“でも出来るのかい？”と、ぼくは言った。“急カーブにさしかかるかもしれない。振り落とされないうような気を付けなければならないぞ”

“ともかくやってみる”

そう言って、リサは、助手席から車の外に身を乗り出した。

トラックは猛烈なスピードで走りつつあり、烈風が容赦なくリサに襲いかかった。しかしリサも観念したためか、そんな程度ではへこたれはしなかった。なにしろ自分の身を守る為だから、助手席からようやく出ると、荷台の方へと身を守りながら移動して行った。その様は痛々しさえあった。何が積んであったのか、ともかくリサは、後ろの扉をあけると、そこから力いっぱい物をほおり出し始めた。

それは確かに威力を発揮した。トラックに追いつきつつあった乗用車の群れが、地面にほおり出された積荷の妨害にあって、あるものは急ブレーキをかけ、あるものはそのまま積荷に突っ込んで、横転したり、横の草原に突っ込んだりで、散々な目に会ったのだった。それでもリサは力の限り、積荷を手当り次第、落とし始めた。積荷の影響で後続の乗用車との距離が次第に遠ざかって行くにつれ、リサは積荷を落とすのをやめた。そして、運転しているぼくのすぐ後ろまでやって来ると、リサは嬉しそうに言うのだった。

“やったわ！”

“そう、積荷は何んだった？”と、ぼくは尋ねた。

“それがかなり重い箱だと思って中を見たら、オレンジがいっぱい詰まった箱だったの。兄さん、ひとつ食べる？”

そう言って、リサは、髪の毛も服もくしゃくしゃにしながら、自分でむいてくれたオレンジの一つをぼくに差し出してくれた。

“この成功を祝して、ひとつもらおうとするか”

ぼくが運転しながら嬉しそうに言うと、リサはその一つを、そっとぼくの口に投げ入れてくれるのだった。

“ああよかったわ”と、リサは、安心したように、運転しているぼくに、後ろから抱きつくようにして言った。“これでともかく、追手を振り切ることが出来たのよ...”

“でも、予断は許さないよ”と、ぼくは言った。“奴らは必ず追い駆けて来るに違いない。相手は乗用車で、こちらはトラックだ。競走すればとうてい勝目はない。せいぜいぼくのできることと言えば、奴らをまいてしまうことだが、こんな道ではねえ...”

本当に情ないほど見通しのよく効く一本道だった。右も左も、ただ荒野が続くだけでさえぎるものがない。

ぼくは早く、どこかの街にでも迷い込むことを祈った。

しかしどこまで走っても、他の車とすれ違うこともない寂しい道と、野また野で、気が滅入って来そうだった。

そうしているうちにも段々と日が暗くなって来た。夕陽が、寂しい地平にゆっくりと沈んで行く様は、美しくさえあった。しかし、のんびりと夕陽を鑑賞している気にはなれなかった。再び、ガソリンのメーターが寂しくなって来たし、このままどこまで走ればいいのか、先が知れず不安だった。そして、ほとんど夕陽が沈み、夜の闇にすべてのものが閉ざされようという頃になって、ぼくはバックミラーに、かすかにヘッドライトの明かりを認めることができ、ドキッとなった。それも一台ではなく、おびただしい数のヘッドライトだ。ついに追手は、態勢を立て直して、このトラックに追いついて来たのだ。ぼくは再び、力いっぱいアクセルを踏み込んだ。

そのうち、真暗となり、おびただしい数のヘッドライトが、ぼくのトラックから一定の距離を保ちつつ襲いかかった。道の前方は真暗闇で、ヘッドライトの明かりだけが頼りだった。道の曲がり具合に従って、ぼくが左にハンドルを切れば、後ろから追いかけて来るおびただしいばかりのヘッドライトも、左に向きを変えてついて来る。ヘッドライトの他何も見えないその集団が、ぼくの背筋をゾッとさせるほどの恐怖をかり立てた。そして、ぼくはその恐怖から逃れる為に、必死になって車を走らせた。

そうして、どれだけの時間、その逃走劇を演じたことだろう——数十分か、一時間か、ようやく前方の暗闇の中に、街らしい明かりが見え始めて来たので、ぼくはほっとしたのだった。

この、爆音を鳴らしながら追いかけて来る暴走族の群れから、街に入れば逃れることが出来ると、ぼくはほっとしたのだった。

だが、街に近付いては来たが、一向人の気配が感じられないことに、ぼくはいらだった。だって、後ろからあんなに大勢の車が追いかけて来るというのに、前からは、ただの一台も走っては来ないのだ。だから、ヘッドライトの明かりは、常に後ろにしか、見ることはなかった。

そして、その状態のまま街に突入したとき、信じられないことだが、ここが無人の街であることが、ぼくには分かった。

いや、あるいは人がいるかも知れぬ。彼らは家の中において、息をこらしているだけかも知れない。それにしてもこの静けさは、どう表現すればいいのだろう。人がいるのなら、せめてその人の気配を感じさせるあの猫一匹すら、この街にはいそうにないのだった。なるほど、ところどころ車は止まっていた。だが、つい最近止められたようには見えないのだった。まるで何年も前からそこに置かれていたみたいに、その状態を感じさせるのだった。そして、その静まり返った街中を、ぼくたちを乗せたトラックは右に左に、猛スピードで走り抜けなければならなかった。しぶとい敵様は、それでも必死に付いて来ようとしていた。静かな街の通りに、けたたましく通り抜けるぼくのトラックの音と、追手の乗用車の集団の爆音とが、夜の静けさを突き破るかのように轟いた。ぼくは、袋小路には入り込むまいと注意深く道を選びながら、ハンドルを切った。人っ子ひとりいないと思われるこの街なのに、ただ明かりだけがともっているのが不思議だった。メインストリートを中心に、街中を突っ走ると、立体に交差した道へと突き進み、右へ左へと、ヘッドライトの集団を振り払うのに必死だった。そうしているうちにも、もうこの街では助からないとぼくは観念した。再び郊外へと逃げよう。これは恐ろしい人間狩りのゲームのようなものなのだ。どう猛な敵は、ぼくたちを捕らえ、とりわけ可愛らしいリサを捕らえるのに、今や遅しとよだれを垂らしているに違いない。こうなったからには郊外に逃れ、そこでトラックを乗り捨てて逃げるまでなのだ。いかんせん、ガソリンのメーターも、もう残り少なくなっていた。もう一刻の猶予もならなかったのだ。

ぼくは、街からの脱出の道を捜して、ひたすら走った。さっきはあんなに街の明るさを待望したというのに、もうこうなれば、できるだけ暗くなればなるほどいいのだ。真暗闇の中で逃げれば、彼等に追いつかれる心配もないだろう...

そしてついに、真暗闇へと延びている道を見つけ出したとき、ぼくはしばらく走った後、リサに、

“飛び降りるのだ！”と叫んだ後、わざとトラックを道路に横づけにして、ぼくたちは互いに手を取り合うようにして、道の向う側へと、トラックから脱出した。そしてそのまま、力の限り、暗闇の中を走り出した。やがて、ぼくたちの後ろで、車同士がぶつかり合うような、大きな音が聞こえて来た。続いて、人の悲鳴や叫び声。ぼくたちは、それらの物音から出来るだけ遠ざかるべく、必死に走った。どこをどう走っているのか、あるいは迷い込んだのか、何しろ真暗闇のことなので、やたらと木が多いことは分かったが、どんなところを走っているのか、ぼくたちには知るよしもなかった。小高い山を走っているらしく、斜面を登ったり、駆け降りたりで、途中何度もころびそうになりながら、随分走り、息切れもして来た。そしてもう追手も、ここまでは追っては来られないだろうと思われた。事実、もう人の声ひとつしなくなり、聞こえて来るのはふくろうの鳴き声と、羽虫の音だけだった。

リサも随分と疲れた様子で、もう歩けないと言った。無理もない、この日の半分以上を、逃亡劇にささげて来たのだし、もうその逃亡劇に疲れたのだ。疲れ果てたのだった。

ここがどんなところかは分からなかったが、ここまで来れば、もう追手には分からないだろうし、ぼくたちは疲れ果てて、ここで休むことにした。幸い、岩陰がありそうで、そこを今夜の寝床とすることに決めたのだ。

明日、どんな夜明けを迎えることになるか分からなかったが、それがいい夜明けとなるよう祈りながら、ぼくたちは、互いに身を寄せ合うようにしながら、眠ることにした。

...ぼくは何か快い夢を見ていたに違いない。まだ子供の頃のことを、幸福な気分のまま夢見られていたのだ。家の前の道を通り、帰って行くところだった。家の周りには花が咲き、家の前には小川が流れていた。そう、そんな時代にどうして帰って行く夢を見たのかは知らない。何か目の前が急に明るくなったかのように思えて、ハッとしてぼくは目が覚めた。

気が付くと、ぼくは、樹木におおわれた岩場に横たわっていた。まだ朝は明けたばかりで、空気がヒンヤリとしていた。東の空がもうすっかり明けて、薄化粧をしたような雲が空を包んでいたが、まだ朝の太陽は姿を現してはいなかった。森のどこからか、まだ目が覚めたばかりの小鳥の鳴き声が聞こえて来ていた。あの真暗闇でよく見つけたと感心せられるほどの、よく出来た岩陰でぼくたちは眠っていたのだ。ぼくはあわてて、リサの存在を確認すべく、横に目をやった。幸いなことに、リサは、ぼくから少し離れたところで、うずくまるように背をこちらに向けた状態で眠っていた。まるでその姿勢は死んでいるようにも思え、一瞬ぼくに不吉な考えを起こさせたが、よく目を凝らして見ると、かすかに彼女が呼吸しているのが認められた。それで、ぼくは安心して、背伸びをし、体を起こした。そしてしばらくのあいだ、ぼんやりと森の周囲を見つめていたが、やがてよく耳を澄ますと、水の流れるような音がややふもとの方から、かすかに聞こえてきた。それでぼくはようやく気が付いた。よく腹も減っていたが、喉もからからだったことを。

ぼくは、眠っているリサをその場に残したまま、注意深くふもとに降りて行った。

きれいな溪流の流れるふもとまで、そう遠くはなかった。森におおわれたその谷間を、幅の狭い清流が、幾筋もの小さな滝となって、下の方へと流れていた。ぼくはそのすぐそばまでやってくると、体を這いつくばせるようにして、顔を水に近づけ、その姿勢のまま、水をガブガブと飲んだ。あまりにも冷たくていい気持だったので、ぼくはそのまま、上半身を水の中に突っ込んだ。そして、思う存分、頭から背中にかけて、朝の冷たい水を浴びたのだ。

そうして、いい気になっているとき、ふと自分の後ろで、何か物音がしたように思えたので、ビックリして振り向いた。すると、そこに人が立っていたのでドキッとしたが、よく見ると、それはリサだった。

“そんなところで何しているの？”と、リサは、髪の毛を乱したまま、まだ眠そうな状態で、ぼくに尋ねた。

“おいしい水だよ。飲んでごらん”と、ぼくは、水に半分つかった恰好を、我れながらおかしく思いながら言った。

“そう言えばそうね。喉が乾いたわ”と、リサは言った。“だって、昨日の朝から飲まず食わずなんですもの”

リサはそう言って、ぼくの横にまでやって来ると、その場にしゃがみ、水で顔を洗い出すと同時に、手ですくって、水を何回か口にした。

冷たい朝の水で顔を洗い、その水を口に含んだときのリサの表情は、なんとも言えないほど幸せそうだった。

それから、ぼくたちは互いに手を取り合って、元の岩場へと戻って来た。

そこに何かがあるというわけでもなかったのだが、そこに来ると、これから先のことを考えるのに、気持を落ち着かせてくれるのだった。

もう朝はすっかり明け切り、青い空が、ぼくたちの上におおいかぶさるような樹木の上に、顔をのぞかせていた。

さて、どうしよう？　きのうの出来事がまるで嘘のようにも思え、さりとして、ここにいることを思い合わせると、本当だと思えばはなかった。しかし何しろ、あの真暗闇の中を逃げて来たので、こうして夜が明けてみても、どこをどのようにして逃げて来たのか、全く方角が、見当もつかなかった。しかしもはや、あの街の方にも行くわけには行かなかった。

“でも、とにかく前進するしかない”とぼくは言った。“いつまでも、ここで、このままの状態にいるわけには行かないからね”

“いいわ。兄さんの後について行くわ”と、リサは、きのうからの疲れの様子がありありとその表情に認められたのにもかかわらず、きっぱりした口調で言った。

実際そうするしか、ぼくたちにはないのだった。唯一の救いは、きのうの追手の気配が、周囲には全く感じられないことだった。ぼくたちはやっと、彼らをまくことができたのだった。

ぼくたちは手を取り合い、急な斜面では何度も滑りそうになりながら、それでもめげることなく前進を続けた。そのように何時間も行進を続けているうちに、ぼくたちはだんだんと、疲労の極に達して来た。そして、だんだんと不安になって来たのだ。このまま山を歩き続けて、ぼくたちは本当に、人のいるところにたどり着けるのだろうか？　山の中に踏み迷って、ぼくたちは、とんでもないところに向かっているのではないだろうか？　しかし、地図もなく、方向さえも分からないのでは、どうすることもできなかった。とにかくぼくたちは、少しでも人のいそうな方向へと、前進するしかなかった。ぼくたちのズボンやスカートも泥や、草にまみれ、髪の毛も乱れっ放して、ぼくたちが大変な運命を背負わされていることは、一見して明らかだった。　そうして、もうかれこれ五時間は歩いたろうか、その間、口にしたものと言えば木の実ぐらいなもので、空腹の極にあったが、突然、細い樹木のあいだに、大きな建物が見えたのにはすっかり驚いてしまった。驚いたと同時に、助かったと、ほっとしたのも事実だった。

それにしても何んの建物だろう。ぼくたちは、建物のあるふもとの方に向かって、樹木をよけながら、駆け足で降りて行った。

まだここが、人里離れた山深いところには違いなかった。そんな山奥に、れんが造りの、重厚で、大きな建物が、樹木に囲まれて、ひっそりと建っていたのだった。個人の建物にしては少し大き過ぎるし、どこかの会社の研究所か何かに違いなかった。

実際ぼくたちが表に廻って門のところにやって来ると、ウィロビー研究所と書かれてあり、一台のワーゲンがひっそりと門の横に止まっていた。

ありがたい、これで人がいることは確実となったのだ、とぼくは内心ほっとして思った。

それにしても、静か過ぎるこの建物の中はどうなっているのだろう。ぼくはそのことが気になった。いずれにせよ、ここの人に助けをもらう他はないので、ぼくたちは思い切って中に入ることにした。

ぼくたちが入口のドアに手をやると、ドアは簡単に開いた。そうして中に入っていくと内部は、なかなかきれいに整っていた。れんがの壁にはさまれた通路がずっと奥まで延びていて、天井には整然と、埋め込みの蛍光灯が、明るい光を放ち、廊下に沿って、いくつもの部屋に分かれているようだった。しかし、よく耳を澄ますと、奥の方の部屋から、何か機械がうなるような、ゴーッという音が聞こえて来ていた。きっとそこで、何かの実験をしているに違いない。

ぼくたちは興味にかられながら、ゆっくりと進んだ。そして、それらしい部屋に来るとぼくはゆっくりとドアのノブを廻し、ドアをあけた。

見ると、そこは真白な壁に囲まれた、大きな部屋だった。テーブルや、棚には、所狭しと、ぎっしりと試薬の瓶や、試験管や、フラスコなどの実験器具が置かれ、乱雑に散らかした本棚のある壁の前には、見たこともないような奇怪で、大仕掛けな機械が、コンピューターと思われる機械に接続されて、色んな警告のランプを点滅させながら、うなりをあげているのだった。明らかに何んらかの実験が行われているはずなのだが、不思議なことに、その実験室の中に、人影は全く見られなかった。ぼくたちは、その巨大な装置や複雑さに、ただあっけにとられて見つめるばかりだった。実験装置は、時々、キューンと言うような、耳を突んざくような音をたてるので、ぼくたちは、その音のすごさに、思わず両耳を手でふさいだ。ところが、そうして、ぼうぜんとして立っているとき、突然、ぼくたちが入って来たドアが開いたので、ぼくたちは驚いて振り向いた。

すると、そこには、白い実験服に身を包んだ、背の高い、色白の、めがねをかけた、年の頃、四十ほどと思われる、神経質そうな男が立っていたのだった。彼は、めがねの奥のその冷たそうな目で、中にいるぼくたちをにらみつけた。

“君たちは誰だ？ どうして中に入った？”と、彼は、すかさずぼくに言った。

“あの、道に迷っただけなんです”と、ぼくは申し訳なさそうに弁解した。

“なんでもいい。ともかくこの部屋から出なさい。入口のところに、「入室禁止」という文字が貼ってあったろう。見えなかったのかね”と、彼は、怒ったように言い、ぼくたちに出るように、身ぶりで催促をした。

ぼくたちは言われるまま、その部屋から出た。

彼は、ぼくたちを廊下に出すと、実験室のドアを閉め、まだ中では実験が行われているにもかかわらず、ドアの鍵を厳重に締めるのだった。

“じゃ、さっそくそのわけを聞こう。来なさい”

そう言って彼は、別の部屋へぼくたちを案内しようとしたが、彼が動き出すや、彼の動きが、まるで年寄りのように鈍いものであることが、ぼくたちには分かった。さっきの口ぶりからは想像もできないほど、歩くのもゆっくりで、手の動作も鈍かった。

ともかくぼくたちは、彼に付いて行くしかなかった。

やがて彼に案内された部屋は、さっきの実験室とは打って変わったような、落ち着いた、なかなかきれいな部屋だった。ガラスブロックでおおわれた壁がなかなか美事で、そのせいか、室内はとても明るく、そのそばに置かれた観葉樹の鉢植えや、机に置かれた珍しい置物や、鉢植えのゼラニウムなどとあいまって、とてもいい気持ちにさせてくれた。丸いテーブルが部屋の中央に置かれてあって、彼は中に入るなり、そこに腰掛けるよう、ぼくたちに指示をした。

ぼくたちが椅子に腰を降ろし、室内の美しさや、窓の外の樹木の美しさなどに目を凝らしているのを見つめながら、彼は、さっきとは違った、幾分押さえた口調で話しかけて来た。

“見たところ、君たちは非常に疲れているように見受けられるね”と、彼は言った。

“ええ、さっきも言いましたように、山に踏み迷ったんです。この丸一日というもの、ほとんど何も食べていません”と、ぼくは正直に答えた。

“そう、その服の汚れからして、そんな様子だね”と、彼は言った。“じゃまず、食事を作ってあげよう。ちょうど、さっき食べようと用意していたパンと、ハムエッグがあるんだ。そんなに食べていないと言うのなら、きっと腹ぺこだろう”

“ええ、済みませんけど、お願いします”と、ぼくは言った。

そうすると、彼は、そちらにキッチンがあるらしく、部屋の奥に姿を消した。

ぼくとリサは、テーブルに並んで腰掛けながら、互いに顔を見合わせた。

やっと食事にありつけるといふ安堵感と、ここの研究所の独特な雰囲気とからだった。

“あの人、ここに一人でいるんだらうかね”と、ぼくは言った。“だって、他に人は、誰も見なかったらう”

“でも、きょうは休みかも知れないわ”と、リサは答えた。“あの方は、非番で来ているだけかも知れないわよ”

“そうか、そうかも知れないな”と、ぼくは言った。“それにしても何か、気味悪い感じの人だな。本当に研究者タイプっていう感じで、人間味が感じられないよ”

“でも、やっと人に会えたんだから、いいじゃないの”と、リサは言った。

“それにしても、ここはどこだらう？”と、ぼくは周りを見渡しながら言った。“随分歩いて来たはずなんだけど、ここから、人のいる街までは近いんだらうか。その辺のところを聞いてみたいいな。あっ、やって来た”

彼は、お盆に食事を乗せて、運んで来た。トーストやハムエッグの他に、有り難いことに、牛乳まで一緒だった。

テーブルに置かれるとすぐ、うまそうに、ぼくたちはそれに飛びついた。

彼は、ぼくたちがガツガツと食べるのを、楽しそうに眺めていた。

“なんなら、お代わりをするかい？”と、彼は、ぼくたちの食欲の旺盛さにあっけにとられながら言った。

“ええ、お願いします”と、ぼくは頼まざるを得なかった。

本当に、遠慮など言ってもらえないほど、ぼくたちはお腹が減っていたのだ。

彼はもうひと切れ、トーストを持って来てくれた。今度は、うまそうなジャムが付いていた。

その味は、空腹のぼくたちにはたまらないほど、うまいものだった。

そのように、ぼくたちが食べている最中に、彼は、それとなく話しかけて来た。

“ところで君たちは、どこから来たのだね？”

“直接には、ぼくたちのよく知らない街の郊外からです”と、ぼくは答えた。

そして、追手に追われたことは伏せることにして、車が故障した為に、山の中で道に迷ってしまったという風に説明をした。

“だから、あの街のことは、ただ通っただけで、よくは分からないんです”と、ぼくは最後に締め括った。

“でも、そのもっと前は、コアンベルからです。そこから、ぼくたちはやって来ました”

“コアンベル？”と、彼は、考え込むような顔をして言った。“知らないな。いずれにせよ、君たちは、この研究所を目当てでやって来たのでないことは、確かなようだ”

この研究者は、よその街のことなど、まるで関心がないかのようだった。でも、ぼくたちに対する誤解の一つが解けたことは幸いだった。

“そうです。ぼくたちは、ここに研究所があるなんて、知りもしませんでした”と、ぼくは答えた。“でも、何んの研究をしているんです？”

そう言うと、彼の顔つきは、急に険しくなった。

“君たちには関係のないことだ”と、彼はきっぱりと言った。“それより、これからどうするかだ”

“そうです。どこでもいいですから、ここから一番近い街に行くことができれば幸いです”と、ぼくは言った。“御覧の通り妹が、かなり疲労しているみたいで、できれば入院させたいんです”

“そうだな。まあ、安心しなさい”と、彼は言った。“そのことは考えてみよう。――でも今しばらく、ここにいなさい。わたしにはすることがあるんでね”

“ええ、いいですよ”と、ぼくは、ほっと安堵の気持から、何気なくそう答えた。

“じゃ、ここで待っていてくれるね。三十分ほどしたら戻ってくる”

そう言い残して、彼は、この部屋から出て行った。

ぼくたちはほっとして、互いに顔を見合わせた。

“あの人、行ってしまったよ”と、ぼくは言った。“思っていたよりは、親切そうな人だ。ねっ、食事も終わったことだし、外に出てみないかい？ なかなかよさそうなところだよ”

“ええ、いいわ”と、リサは答えた。“でも、こんなヒドい恰好見られて、恥ずかしかったわ。あの人ったら、何度もジロジロ、わたしの方を見るのよ”

“それは、お前が美人だからさ”と、ぼくは答えた。“仕方がないさ、ヒドい恰好は。なにしろあの山から、ぼくたちはやって来たんだからね”

そう言って、ぼくはテラスへの出口のところまでやって来ると、そこからガラス越しに、窓の外の良い山の景色を眺めた。

“おいでよ、リサ。なかなかいい眺めだよ”

そう言って、ぼくは、ガラス戸をあげ、テラスに出た。

テラスに出ると、さっき、この研究所に訪れたときとは打って代わったように、そこは明るかった。石のブロックで出来た手すりの向う側には、ただおおうばかりの樹木と、なだらかな山とが見渡せた。いかめしい研究所にしては、ここは憩いの一角のようにも思われた。軒がグンと突き出ている、その下に日陰を作り、鑑賞用に長椅子が置かれてあった。ぼくたちはそこに坐って、しばし、良い山の景色を眺めた。

“それにしてもさ”と、やがてぼくは言った。“あれは何んの研究をやっているんだろう？ やけにギョウギョウしい機械だったように見受けられたけど”

“それは、企業秘密なんですよ”と、リサは言った。“わたしたち、スパイに見間違えられたのよ”

“だって、そんな秘密があるなんて、知らなかったんだから”と、ぼくは言った。“いずれにせよ、彼の言う通り、ぼくたちには関係のないことさ。とはいうものの、少しは気になるな”

“でも、わたしたちが見たって、分からないですよ”と、リサは言った。

“でも、ぼくたちの見たものは、はっきりと目に焼きついているよ”と、ぼくは言った。“もしあれが本当に企業秘密だとしたなら、ぼくたちが見たということは、ヤバいんじゃない？”

“そうかも知れないけれど、だからどうだっていうの？”と、リサは逆に質問し返した。

“どうってことはないだろうけれど...”と、ぼくは答えに詰まりながら、考え込んだ。

まさか、あの研究員を信頼しないわけではないのだ。仮に信頼しないとしても、もうぼくたちは、丸一日以上逃げ回って、くたくただった。だから、あとは運命に任せることにして、どうとでもなれといった心境だった。今さら、じたばたしても始まらない。ぼくたちはこんなところに迷い込んでしまったのだから、後は少しでもここよりはましな所へ行けると期待するより他、なかったのだった。

そんな状態のまま時が流れた。

ぼくたちが、自然の静けさの中で、山の方に目を向けているとき、ふと、後ろの室内で物音がしたので、同時に振り向いた。

すると、テラスとの仕切り戸のところに、例のあの研究員が立って、ぼくたちの方を見つめていた。彼は、今回もひとりだけだった。

本当に、この研究所には、彼ひとりしかいないのだろうか。

そして、そのことは、ある種の不安を打ち消すことになり、胸の中で、不安だったことがスーッと消えて行くのが感じられた。不安だったこと――それは、彼が、この時間を利用して、あの悪い仲間に連絡をとろうとしていたのではないか、つまり、彼も、あの仲間のひとりではないか、ということだった。そんなことが、ふとぼくの頭に立ち昇ったのだったが、今、こうして見ると、彼は本当に、自分の大事な仕事を済まして来たらしい風に見受けられた。

“ここで山の景色を見ているのかい？”と、彼は、ぼくたちと視線が合うなり、言った。“ここから眺める景色は、なかなかのものだろう。わたしも、研究に疲れたときには、いつもここに来て、ここでぼうっとしているものさ。何も考えずにね。それが、頭のリフレッシュに、随分と役立つものなんだ。でも、あんまり長いこといれば風邪を引くよ。ここは冷えるもんでね...”

そう言いながら、彼は親しげに、ぼくたちに近づいて来た。

“もう、準備はできたんですか？”と、ぼくは真先に、そのことを尋ねた。

“ああ、もう少しだ”と、彼は答えた。“なに、心配はいらない。表には、わたしの愛車のワーゲンが置いてあるからね。それより君”そう言って、彼は、リサを見た。“その恰好は、ちょっといただけないな。せめてもう少し、身だしなみを整えたら？”

リサは、その言葉で、はっと、我に返ったみたいだった。

“奥に浴室があるから”と、彼は、そんなリサを見つめながら、続けた。“ちょっと髪でも洗ってみるかね。なんなら、わたしがそこまで案内してあげよう...”

“ええ、お願いしますわ”と、リサは反射的に答えた。

ぼくもそうだったが、リサも、シャワーがあると聞けば、すぐにでも浴びたい気持だった。

“じゃ、わたし、ちょっと行ってくるわ”と、リサは言った。“兄さんはそこで待ってて”

リサはそう言って、ゆっくりした動作の彼に連れられるようにして、室内に消えて行った。

ぼくはその場に残り、うっとりしたような気分になって、明るい日射しを浴びている樹木や、木の葉の輝きを見つめた。

何もかもうまく行きそうだ、とぼくは思った。やっと、この仕打ちから解放されるのだ。

間もなくリサがシャワーを浴びて戻ってくれば、ぼくも代わりにシャワーを浴びに行こう。そして、身も心もリフレッシュして、街に向かおう。それは、希望の街となるはずのものなのだ。ぼくは、幸せな気分になって、もう一度、曲がりくねって伸びる樹木や、その葉の輝き、そして、樹木の上に広がる、ゆったりした、青い空を眺めるのだった...

それから時が流れ、建物の中から一向、リサが姿を現さないのを、ぼくは不思議に思った。リサどころか、あの男すら、姿を現しはしない。いくらなんでも、もうそろそろ、リサが姿を現してもいいはずの時間だ。

そして、そのときになって、急に不吉な思いがして、ぼくは、もしやと思って、テラスから、部屋の中にすっとんだのだ。

そしてその瞬間、ハッと息を呑むと共に、すべてを悟ったのだった。

部屋の中は、あれほど美しいと感じていたのに、テーブルも椅子も机もほとんど朽ち果て、全く信じられないことだが、天井にはくもの巣が張っていた。それどころか、さっきは美事に部屋を飾っていたあの観葉植物もすっかり枯れ果て、テーブルの上を飾っていたゼラニウムの花も、全部枯れていたのだった。そして床にはどこから舞い込んだのか、朽ち果てた落葉がおびただしく散らかっていた。

ぼくはあわてて、

“リサ！”と叫ぶなり、さらに奥へと駆けて行った。

あちこちの部屋を捜してみたが、彼が言っていたシャワールームなど、どこにも見あたらなかった。

しかし、あの実験室がある。ぼくはそう思って、廊下を走り、駆けて行った。

ドアは、あの男が閉めたままに、鍵が掛けられていたので、ぼくは思い切って体当たりをした。初め、ビクともしないように思われたが、二度、三度とぶつかっているうちに、ようやくドアは壊れ始めた。そしてついにドアをぶち破って、実験室に突入した。すると中は、ヒドイ、ほこりだらけの部屋と化していた。あの装置も、コンピュータも、試験管もフラスコも試薬瓶も、すべてあのときの、あのままの状態で置かれていたが、それらはすべて、真白なほこりにおおわれていて、まるで、あのときから何年も経過したような感があった。

しかし、そんなはずはない。ついさっきまで、この機械は動き、その姿を、ぼくもリサも見たのだった。

だが、これらの事態は、何がどうなったのだろうか？

いずれにせよ、リサは連れ去られたのだった。

しまったと思っても、もう後の祭りだった。

そしてその瞬間、ほこりをかぶった機械が再び激しく動き始めたのだった。

ぼくは驚いて光の点滅する機械を見、それが、轟音と共に、ブルブルと震え始めるのを息を詰めて見守った。

そのときだった、まるで天を突ん裂くような、激しく、大きな、悪魔の高笑いが、部屋の外から聞こえたのは。

それは、研究室の外のあの大空の彼方から、ただ一度だけ聞こえて、消えて行った。

それは何よりも、リサが連れ去られたことを証していた。

ぼくは恐ろしくなって、無気味に機械のうなる実験室から、そして研究所そのものから、ころ

げるようにして、飛び出した。

しばらく走って振り向くと、研究所は、樹木におおわれて、石作りの二つの丸い顔が無気味にこちらへ向けていた。それは無言の顔の中に、悪魔の冷酷さが、そして、勝ち誇ったいかめしさが、刻み込められているように思われた。

ぼくは両手で目をおおうようにしながら、必死に逃げた。いや、樹木をよけながら逃げまどったと言った方がいい。

リサはとうとう連れ去られたのだという、悲しみと後悔の入り混じった絶望の念にかられながら...

第2章

...何か、快いような、息苦しいような、複雑な気持で目が覚めた。すると、窓の方から、朝方の光がさっと目に飛び込んで来た。ぼくは窓の外の、木の茂みや葉が、光にきらめいている様子や、その彼方に広がる真青な空、斑模様、切れ切れとなった真白な雲の様子などを、うっとり見つめた。しばらくそれらを眺めていたが、そこから目を転じて室内を見ると、ぼくは、花が一輪花瓶にさしてあるだけの、飾り気のない、小さな部屋のベッドでただひとり眠っていたのだ。

ここはどこだろう？　ぼくはどうしたのだろう？

最初、何が何んだか、訳が分からず、思い出すのにも手間どった。

そうだ。あの恐怖。あの化物屋敷で、リサを見失い、ぼくはただひとり、命からがら脱出して来たのだ。そこまではハッキリと、まるで昨日のこのように覚えていた。しかし、それからどうなったのだろう？

そのときだった、急にドアがバタンと開いて、看護婦が、何か食事のようなものを持って、室内に入って来た。まだ年のそれほどいない、なかなかきれいな看護婦だった。

“もうお目覚めですか？”と、彼女は、親しげに声を掛けてくれた。“ドクターも、もう大丈夫だと言っていましたわ。何しろ、三日間も、何かにうなされていたんですものね。でも、やっとお目覚めになったようね。念の為に体温を計らせていただきますから、これを口に入れて”

そう言って、彼女は、体温計を、ぼくの口に突っ込もうとした。

ぼくは、有無を言わず、ベッドに横たえたまま、されるままになった。

“三日間も”と、ぼくは口ごもりながら言った。“――でも、その前はどんな状態だったんです？”

“あら、知らなかったんですか？”と、看護婦は言った。“お願いですから、体温を計っている間は、口を動かさないで。あなたは、崖の下で、高い熱を出しながら、倒れていたんですよ。どうも、脱水症状と日射病にやられたようね。それを、通りがかったハイキングの人が見つけてね。それこそ、村では、大騒ぎだったそうですよ。でも、どうして、あんな無茶なことをされたんです？　あっ、今は答えないで...”

崖の下で倒れていた？　そのときのことは覚えてはいなかった。ともかく、記憶にあるのは、化物屋敷を逃れてから、必死で森の中を逃げ回ったことだけだ。そのうち、ぼくは疲れ果て、きっと崖から足を踏みはずしたのだろう。

“さっ、もうよろしいです”そう言って、看護婦は、ぼくの口から体温計を取り上げた。

それをじっと見つめてから、彼女は言った。

“もう、平熱に戻ったようね。でも、念の為、これはお薬です。食事の後に一服お飲みなさい。それじゃもう、食事をなさって結構ですわ”

見ると、うまそうな、トーストやベーコンエッグやジュースなどが置かれてあった。

ぼくは腹が減っていたのに気づき、体を起こすと、さっそく食べることにした。

そのあいだ、看護婦は、部屋から去ろうとはしなかった。

しばらくしてから、椅子に腰掛けていた彼女が話しかけた。

“どうしてあんな無理をなさったんです？ あの山は、特に迷い易く、危険だと言われていたのに。お見かけのところ、あなたは、この近くの人じゃなさそうですね”

“そう言われても”と、ぼくは、彼女を見つめて言った。“それよりも、ここはどこなんです。ぼくは、この辺の地理について、ほとんど何も知らないんです”

そう言うと、とたんに、看護婦は笑い出した。

“いやね、ここは、ウィロビーの町立病院ですよ。ご存知ないですか？”

ウィロビー？ ぼくは知らなかった。どこをどう走ったのか、ぼくは、とんでもないところにやって来たに違いなかった。

“あの...”と、ぼくはかすかな期待をつないで、念の為に尋ねてみた。“ぼくの他にもうひとり、若い娘がこの病院に運び込まれた、ということはないですか？”

“まだ他に、もうひとりいたんですか？”

とたんに、彼女は顔色を変えて言った。

“ええ、そうなんです”と、ぼくは、ガッカリしたように言った。“実は、ぼくの妹なんです...”

“あなたの妹さんなんですか？”と、彼女は言った。“でも、そういう方が、山で見つかったという話しは聞いたことがありませんよ。じゃ、まだ、山にいるのかしら？”

“そうですか...”と、ぼくは、しょんぼりと考え込みながら言った。“じゃ、多分、もう山にはいないでしょ。ある人に、連れて行かれたんですから...”

“何か、あなたの話し、ミステリーじみえていますわね”と、看護婦は言った。“一体、あなたの身に、どういうことが起こったんです。そこのところを、話して下さいませんか？”

ぼくは、一寸考え込んだが、思い切って話すことにした。どうせこの町でも、魔王のことは知られているに違いないし、それに対する反応を、確かめたい気持もあったからだった。

ぼくは、自分の身に起こった一部始終を、彼女に語って聞かせた。

彼女は、ぼくの語って聞かせる話しに、じっと耳を傾けていたが、話し終わると、しばらく考え込んだ様子をした後、言うのだった。

“不思議ですわね。あなたはまるでこの国へ踏み迷ったようなことをおっしゃいますけど、この国以外の国ってあるのかしら？ わたしどもは、この国以外の国があるなんて、考えたこともありませんわ。生まれたのも、育ったのも、ずっとこの国ですわ。もちろん、わたしの田舎はここじゃございませんけど、それでも、この国の別のところで、わたしは育ったんですよ。ちゃんとした教育も受けました。みんな、この国の住人であることに一応の満足を見出ししていますわ。——それなのにあなたは、何か不満を持っているみたいですよ”

“不満？”とぼくは言った。“魔王に妹を取られて、不満を抱かずにいられますか？ 不満どころか、ぼくは憎んでいるんですよ”

“でも魔王は”と、看護婦は言った。“この国で許された唯一の横暴です。それだけは事故に会ったと、あきらめる他ないですわ”

“でも、教えて欲しいんです”と、ぼくは必死になって、すがりつきたいような気持になりながら、彼女に尋ねた。“妹を取り戻す方法は、どうしてもないんですか？ 仮にないとしても、魔王について、何んでも知っていることがあれば教えて欲しいんです。ぼくは、今言った通り、この国のことについては、ほとんど何も知らないんです”

“多分、ないでしょう”と、彼女は冷たく言い放った。“もしあなたの言ったことが本当で、魔王に連れ去られたのが事実だとしたら、妹さんはもう帰って来ることはないですわ”

“じゃ妹は、どんな目に会うんです？”ぼくは、いきり立って言った。

すると看護婦は、ぼくの表情とは逆に、にっこりした。

“だって、連れ去られて帰って来た人は誰れもないんですから、どんな目に会っているのか、わたしに分かるはず、ないでしょ”と、看護婦は、微笑みながら言うのだった。“でも多分——これはわたしの想像ですが、ヒドイ目に会ってはいないと思いますわ。妹さんは多分、魔王の国で、生きておいででしょ”

“でも、生きていても会えないのじゃ、もう死んだも同然だ”と、ぼくは泣きたいような気持になって言った。“お願いですから、魔王について教えて下さい。今、魔王の国っておっしゃったけど、それはどこにあるんです？”

“行くおつもりなんですか？”と、看護婦は、驚いたように言うのだった。

“ええ、できれば”と、ぼくは、真剣な表情をして答えた。

すると、看護婦は再びまじめな顔つきに戻ると、ひと息、呼吸をしてから言うのだった。

“みんな、魔王の国のことを、インゲルートと呼んでいますわ。そこは、それはそれは広大な敷地に囲まれていて、その中央に大きな宮殿があって、魔王はそこで、連れて来た娘たちに囲まれて暮らしている、という噂ですけど、さっきも申しましたように、本当のところは誰も知らないんです。そこがどこにあるのか、天上なのか、この地上にあるのか誰も知りません。それどころか、誰も、知ろうとしないどころか、話題にのせようとさえ、しませんわ。というのも、魔王がわたしどもと関係があるのは、一年を通じてあのいけにえの儀式のとき、ただ一度だけですから。それ以外のときは、魔王は、わたしどもの生活に、なんらかかわっては来ませんもの。あの、お名前を伺っていませんでしたわね”

“シレール。シレール・ホールバラです”と、ぼくはしんみりと答えた。“じゃ、あなたは？”

“クレア・シンクレールです。よろしく”そう言って、彼女は、にっこりと微笑んだ。

“じゃ、クレアさん”とぼくは言った。“たとえ、年に一度ぼつきりだとしても、若い娘を誘拐するなんてそんな恐ろしい事態を、みんな何も言わないで、放置しておくんですか。

何も、文句のひとつ出て来ないとあなたは言うんですか。確かに、他人事である限りは、それでもかまわないでしょう。――でも、身内にそんな事態が起これば、それを放置できるでしょうか。そしてぼくは、ぼくの妹は、連れ去られたんです。このまま黙って、引き下がるわけには行きません。ぼくは是非、その魔王が住む、インゲルートとかいう国に行ってみたいんです。クレアさん、お願いします。その方法について教えてください”

“でも困りますわ”と、クレアは言った。“そう言われても、本当に知らないんですから。――でも、あなたのように、不幸な目に会った人がいるのも事実です。そして、そんな人が、あなたのように、魔王捜しに、骨身を削っているという噂を聞いたこともありますわ。そしてもしあなたが本当に妹さん捜しをなさりたいのなら――多分無駄な努力に終わると思いますけど、ちょうど適任者を紹介することはできると思いますわ。魔王については、かなり詳しい人がいるんです。なんなら、その人を紹介しましょうか”

“ええ、是非お願いします”と、ぼくは、すがりつくように言った。

“ええ、でも待って下さい”と、クレアは言った。“その前に、この件について、ドクターと相談してみないと。すぐ戻って来ますわ”

そう言って、彼女は、あわてるように、部屋から出て行った。

ぼくは再び病室でひとりになった。

自分が今どこにいるのか、そしてこれから何が起ころうとしているのか、何も分からなかった。

ただ、心臓の高鳴るような緊張感と、予測のつかない不安とが、ぼくの精神の大部分を占めていた。

こんな、精神の分裂を起こしそうな気持ちになったのは、珍しいことだった。

そして、何も成すことのないまま、時だけが過ぎて行った...

そのとき、病室のドアがギイッと開いて、あの看護婦が姿を現した。

そして、続いて姿を現した、ドクターであるべきはずの白衣を着た男は、驚いたことにあの研究所で見掛けた男、それ自身だった。

ぼくは、ショックのあまり、ベッドの上で思わず、後ろへ引き下がった。

“どうしたんです？ その顔は”と、ドクターは、驚いたようにぼくに近付いて来た。

“どうしたもこうしたもあるもんか！”と、ぼくは叫んだ。“お前だろ。ぼくの妹を返せ！ 一体、どういうつもりで、ここへやって来たんだ。一体、何が目当てなんだ！ 近付くな。近付くと、ぼくは、そう簡単には参らないからな！”

ぼくは怖かった。男が、また何をするのか、分からなかったからだ。

が、その男は、ぼくの錯乱の様子に、キョトンとした表情で立ち止まった。

“どうやら何か、勘違いをなさっているようですね”と、彼は、ぼくに手を触れないよ、と安心させる身振りをしながら言った。“わたしとそっくりな人を、どこかで見たんですか？”

“だってお前は”と、ぼくはまだ信じられずに言った。“あの研究所に、そう確か、ウィロビーとか書いてあった研究所に、いたじゃないか。そして、ぼくの妹をさらったんだ”

しかし彼は、その場に立ったまま、冷静に対応をした。

“君のことは、このクレアさんから伺いました”と、彼は言った。“今、ウィロビー研究所と言いましたね。そしてそこで、わたしとそっくりの男を見掛けたと。——でも、その男はわたしじゃありません。わたしであるはずがありません。あの研究所は、もう十年か、それ以上も前に、閉鎖となったんですから”

ぼくはその言葉で、背筋がゾクッとするのを覚えた。

“じゃここで見かけたあなたそっくりの男は？”と、ぼくは言った。

“多分、それが魔王なんでしょう”と、ドクターは答えた。“彼は、色んな男に化けるとかいう噂です。そして悲しいかな、今回は、多分、わたしそっくりに化けたんです。今頃は、自分の宮殿で、ほくそえんでいることでしょうか...”

それにしても、そこに立っているドクターは、見れば見るほど、あの男そっくりだった。ただ一つの違いと言えれば確かに、動作が、このドクターの方が、はるかに機敏だった。魔王が化けたドクターが、どうして動きが鈍かったのか、その理由は、ぼくにも分からなかった。

“じゃ、信じていいんですね”と、ぼくは、まだ半信半疑な気持で言った。“あなたがあそこで見掛けたあの男じゃないんだと”

“天地神明にかけて”と、ドクターは言った。“だってわたしは、ここ何年来と、あの研究所には行ったことがないんだよ。そのことは、この看護婦のクレアが証明してくれるよ”

そう言って、彼は、看護婦の方を見た。

クレアは、それに対してうなずいた。

“先生は、あの研究所に行けるはずがありません”と、彼女は言った。“だって、あそこへ行く道は、もう分からないほど、道でなくなってしまっているんですから”

“分かりました”と、ぼくは、少しは落ち着きを取り戻しながら言った。“でも嘘じゃないんです。あなたにそっくりな男でした。ぼくはその男を、あの研究所で見かけたんです。そして中は、初め、とってもきれいでした。まるで、まだ建って間もないぐらいに。——でも、妹が姿を消してからというもの、その様相は一変しました。本当に、建物そのものが朽ちて、壊れそうぐらいに。一体どちらが本当の姿なんです？”

“多分、後者の方だろう”と、ドクターは言った。“あれが出来たのは、もう50年も昔のことだ。わたしもその頃のことには知らない。——でも君の話しが本当だというのなら、魔王は多分君に、その建物が出来た当時の姿を見せてくれたのだろう...”

“でもそこで、どんな研究が行われていたんです？”と、ぼくは言った。“ぼくが見たところ、何か大仕掛けな装置があったみたいですが...”

“そう、そんな装置まで君は見たのか...”と、ドクターは、感慨深げに言うのだった。

“実はな、あれは、医学上の大革命を成そうとしていたのだよ。実は、魔王の秘密を知る為に...”
そう言いかけたとたん、ドクターは、左の胸を押さえて、急に苦しみ始めた。そして、口から泡を吐きながら、床の上に、くずおれたのだった。

ぼくも、看護婦も、驚いて、ドクターに駆け寄った。

しかし、どうしてよいか分からないぼくと違って、クリアの処置は、てきぱきしていた。

“魔王だわ”と、彼女は言った。“きっと魔王のしわざに違いありません。もうドクターはお終いです。ねっシレーンさん、早くここからお逃げなさい。そして、ここへ訪ねに行きなさい”

そう言って彼女はぼくの手一枚の紙切れを手渡した。

“さっ早く。何も言わずに早く”

彼女はぼくを病室から追い出そうとしたので、ぼくは彼女に言われるまま、着のみ着のまま、病室を出、さらに、病院を後にした。

出るなり、彼女のくれた紙切れを開けたが、それには、訪ねて行くべき地名と、人の名が彼女の字で書かれてあった。

ぼくは、方向も分からず、その場から駆け去った。

彼女を見たのは、後にも先にも、もうそれっきりだった...

ぼくの手元に残ったのは、彼女に手渡された紙切れ一枚だけだった。

完全にひとりになってから、ぼくはその紙切れを読み、目的地に向かった。

ウィロビーの街はずれにあるその老人の住むという村へはバスで行くのが便利だと聞き、ぼくはその通りにした。

バスの便は不便だったが、約一時間ほど待った後、ようやくバスに乗り込むことができた。バスの乗客は少なく、比較的広いウィロビーの街並を、バスは曲がりくねりながら走った後、ようやく静かで、さわやかな郊外に出た。森の多い、広々とした牧草地が、郊外に広がっていた。のんびりとした牧歌的な風景を目にして、ぼくはしばらく、我を忘れることができた。

そしてついに、紙切れにしるされていた停留所に着いた。そこから、魔王に詳しい老人の家までは、もうひと息だった。

老人の家は、谷間の、清流が泡を立てて流れる川のふもとの、森の迫る場所にひっそりと建っていた。老後を、まるで仙人のように暮らすのならちょうどよいと思えそうな場所だった。

バス停を降りて、ぼくがその家に近付くと、向うから、まきを割る音が聞こえて来た。

家の前の開けた場所に来ると、家の隅の方で、ちょうど老人が、ぼくには背を向けて、まきを割っている最中だった。体つきは頑丈そうで、もう白くなったひげを、相当たくわえていそうだった。

“あの、すみませんが...”と、ぼくは、老人に近付きながら、そっと声をかけた。

すると、老人はひょいと振り向いた。

“何か用かね？”と、手を休めて立ち上がる老人の姿を見て、この人なら頼れる、という安堵感にも似た気持ちに、ぼくはなった。

“実は、クリア・シンクレールさんの紹介でやって来たんですが...”と、ぼくは、例の紙切れを差し出しながら言った。

“またあのクリアか”と、老人は、息をつくように言った。“本当に物好きにもほどがある姪だわ”

“姪ですって？”と、ぼくは言った。“するとあの人は、あなたの姪に当たる人なんですか”

“わしの姉の末娘でな。なかなかきれいな娘だろ”と、老人は自慢気に行った。“ときどきこの家にも遊びに来よる。ただ好奇心の強いのがあれの欠点だ。とするとあなたは、また、あの「魔王」のことで来なされたのかい？”

“ええ、そういうことです”と、ぼくはうなづいた。

すると老人は、余り歓迎したような顔つきを見せなかった。

“そうか。事情はなんであれ、あの姪がよこしたのだから、相当のことがおありなんだろう”と老人は言った。“まあそれはともかく、遠いところから来なされたんだから、家に上がってお茶でもお飲みなさい”

そう言って、老人はぼくを家に案内してくれた。

家はがっしりした石造りで、中に入ると、見かけ以上に、内部は整頓されていた。

“今、婆さんは買出しに行っていて、留守なんだ。まあ、そこにお掛けになって、ゆっくりなさい”

そう言って老人は、台所兼用の部屋の椅子にぼくを腰掛けさせた。

ぼくは坐って、開け放された入口の外に見える樹木や、室内に飾られた花や、外の光が、入口を通過して、部屋の中に入り込む様子などを、うっとりしたまなざしで見つめた。

老人は、薄暗い奥の部屋に引っ込み、やがて、お茶を持って現れた。

“家で採れたハーブを混ぜた、我が家特製のお茶だ。うまいだろ”

ぼくは、老人に勧められるまま、お茶を飲んだ。ハーブの舌ざわりのいい、なかなかおいしいお茶だった。

ひと息つくと、老人は、ぼくに向かうように座った。

“それで、用件はどういうことですか？”と、老人は改まったように言った。

“実は...”と言い出してから、ぼくは、これまであったいきさつを、ありのまま、洩らさず老人に伝えた。

老人は、椅子に腰掛けながら、一つ一つうなづくように、熱心に耳を傾けていた。

“...そういうことです”という言葉で、ぼくは、自分に起こった出来事を締め括った。

すると老人は、しばらく物も言わず、考えを整理するような表情をしていたかと思うや、やがておもむろに口を開いた。

“君の話しには、重要な点が三点ほどある。一つは、全くの部外から、この国に迷い込んだ、という点。二つは、その迷い込むときが嵐で、気を失ってから三日も経過していた、という点。そして今ひとつは、君の妹が魔王に奪われたが、それがいわゆる「いけにえの儀式」の当日ではなく、その翌日の、もうすでに廃墟となっているウィロビーの研究所内であった、という点の三つだ。さらに付け加えるならば、君がその研究所で、悪魔の高笑いを聞いたということも重要な点だろう。それらは、なかなか興味のある話だ。わしが調べた限りでは、ここ数世紀のあいだに、そのような事例もいくつかあった。その人たちも決まって、嵐の日に、別のところから、この国に迷い込んだ、と主張したのだよ。そして、必死になって、恋人や、妹や、姉などを捜したが、結局見つからずじまいで、そのうち、本人の消息も跡絶えてしまった...”

“本人の消息が跡絶えてしまった、ですって！”と、ぼくは叫んだ。“じゃ、本人も魔王にさらわれたんですか？”

“まあ落ち着いて”と、老人は言った。“ともかく、わしの調べた限りでは分かんのだよ。ただ、魔王にさらわれたことだけはあり得ない。魔王は、若くて、きれいな娘しか手を出さないので、だからどうなったのか、それだけはわしにも謎なんだよ...”

“で、さらわれた娘の方は、その方はどんな運命をたどるんです？”と、ぼくは尋ねた。

しかし、それに対しても、老人の目は否定的だった。

“正確なところは誰にも分かん”と、老人はまず釘をさした。“しかし、真偽のほどは疑わしいのだが、そこから帰還したというまれな娘の事例が、過去2、3ある。その証言によればこういうことだ。魔王の住む宮殿は、人里から、遙か遠い、深い山々に囲まれたところにあって、それはあるいは、雲の上にあるのかも知れない。娘によれば、連れられて来るあいだはずっと気を失っていて、朝方、その広い宮殿の一室の、ベッドの上で目覚めるのだそうだ。室内は広くて、天井や壁面、それに家具に至るまで、目を奪われるほど、けんらん豪華で、空気も程良くヒンヤリしていて、それは幸せな目覚めだ、ということだ。しかしやがて、身に降りかかった恐ろしい出来事に気づく。あわてて部屋から出ると、そこはテラスになっていて、そこから見降ろす森の光景に、すっかり圧倒されてしまう、ということだ。眼下に広がる森は、樹海と言ってもいいほどで、遙か地平線の彼方まで、一面ずっと森の海なのだ。その瞬間、これは脱出不可能だと、娘は悟るのだ。そうして、何もかも驚異の出来事で驚いている最中に、ひとりの若者が室内に入って来るのだ。なかなかハンサムな青年で、彼は丁寧に彼女に挨拶をする。立ち居振舞も紳士的で、決して、娘に乱暴なこともしない。もうお分かりと思うが、それが姿を変えた魔王の姿なのだ。彼は、「さぞかし、お腹が空いたでしょう」などと言いながら、指で召使に合図を送ると、扉が開いて朝食が、それも、どれもこれも食欲をそそるような、おいしそうな朝食が運ばれて来るのだ。魔王はどうやら、初対面の娘には出来るだけおだやかに、気を落ち着かせるように接しているらしい。

そして娘もやがて、自分は恐ろしいところではなく、素晴らしいところに連れて来られたのだ、ということに気がつくらしい。というのも、その日から彼女は、庶民の娘としてではなく、まるで、王女のような暮らしをすることになるのだから...”

“じゃ、それじゃ”と、ぼくは言った。“その王女は毎年増えるんだから、宮殿にはたくさんの連れて来られた王女が住んでいることになるんですか？”

“さあ、その問題なんだが...”と老人は言った。“帰還した娘の証言によれば、魔王と召使以外には、それらしき人とは宮殿内では一度も会わなかったということだ。それで様々な憶測が飛んだのだ。一説によれば、その娘の命は、次のいけにえの日までの一年間に限られる、という説。また別の説によれば、その役目の日が終われば、何んらかの動物に変えてしまわれる、という説。というのも、宮殿内には、人の数が極端に少ないのに引き較べて、犬や猫やその他の動物がたくさん生活しているらしい、ということだからだ。その動物を世話している魔女らしい女がいる、という話しじゃ。そのいずれも悲観的な見方に属するが、それだけじゃない。もう一つのもっともな説がある。それによると、宮殿の数が一つだけではなく、まるで銀河がたくさん存在するように、魔王の王国にたくさん存在する、という説じゃ。そして、その宮殿の一つ一つに、さらって来た娘を住まわせているので、娘同士はお互い出会うことがない、というのだ。魔王にとって、そのようなことをするのは、たやすいことだろう。そして、その宮殿のあいだを、自由に魔王は行き来しているのだ...”

ぼくはじっと、老人の話しに耳を傾けていたが、その壮大な話しに圧倒されるばかりだった。

“まるで、雲をつかむような話しですね”と、ぼくは言った。

“魔王については、常識的な話しは当てはまらないのじゃよ”と、老人はしんみりと言った。“魔王について語られるのは、それは雲をつかむような話しばかりじゃ。本当に、わたしのこの村と陸続きのどこかに住んでいるのか、それすらも分からん。しかし、それゆえにか、人々は魔王を恐れもすると同時に、ひそかに、一定の距離を置きながらも、尊敬をしてもいるのだ。我々の力にはとても及ばない、それは強大な力を魔王は有しているのだからな。ただ、君のように、部外者だと称する者には、まだその本当の意味するところのものが分からんだろうけれども”

“ただちょっと伺いたいんですけれども”と、ぼくは言った。“その宮殿に連れて行かれた娘は、一生涯、その宮殿内だけで過ごすことになるんですか？”

“いいことを聞きなされた”と、老人は言った。“さあ、そのことなんだが、これもまた帰還した娘の話しなんだが、一口に宮殿と言っても、そのけんらんたる建物と、その敷地をも意味するらしい。そしてその敷地じゃが、これがとてつもなく広いのだ。周囲は森で覆われているばかりか、谷あり、川ありで、どこまで行っても果てしが無いようだ。そして、森の奥に、まるで隠者の生活ができるような小さなあづま家があって、そこの周囲は、まるでこの世の桃源郷のように美しいところだったようだ。

その娘は、寂しさを紛らせる為に、何度もそのあづま家を訪れた、ということだ。そこには、鹿やリスや猿がたくさんいて、孤独な娘を慰めてくれたということだ。いずれにせよ、娘は、人のいない寂しさを除けば、それはそれは、何不自由のない、幸せな生活を送ることができたと言証した。

それはもう、三百年も前の話しだがな...”

“三百年も！”と、ぼくは驚いて言った。

“そうだ。その記録が残っているのは、三百年前のことだ”と、老人は言った。“何分、そんな古い話のことだから、真偽の程は分からない。しかし、帰還した娘の話しとして、一番確からしいのは、その話しぐらいしか残ってはいないのだ。それ以外はまず連れ去られた以上、帰って来たためしはないのだ...”

“それにしても”とぼくは言った。“そのような習慣はいつから続いているんです？ 三百年よりももっと前からなんですか？”

“それは遙か昔からだ”と老人は言った。“一体、いつ、どのようにして始まったのかそれは誰にも分からない。でも、記録によれば、かなり古くから行われていた習慣であることは確かだ。それは、人類の歴史が始まって以来と言ってもいい。ある学者によれば、我々の魔王とは違った「神」が支配している世界もあるという話しだが、我々の世界では、「魔王」がこの世界を支配しているのだ。別の世界では、人々が「神」を敬うように、我々の世界では、「魔王」を敬う以外にはないのだ。娘たちのいけにえは、我々が魔王を敬うその証だが、いけにえにされた娘たちが幸福だとあれば、これほど喜ばしいことはないのだ。そして、このような我々の歴史は、何千年、いや何万年と続いて来たに相違ないのだ。我々はその事実を、伝承や、歴史の断片によってしか知る他はない...”

“じゃあ、ぼくの妹のリサも、今頃はその宮殿で暮らしているんですね”と、ぼくはしんみりなつて言った。

“さあ、それは分からん”と老人は言った。“わたしの言った話しは、あくまでも憶測の話しだからね。実際は、それとは全く違ったことなのかも知れない。それだけは恐らく、連れて行かれた娘の他には、誰にも分からん話しだよ...”

“おじいさんの話し、よく分かりました”とぼくは言った。“でもだからと言って、ぼくは、妹をあきらめるわけには行かないんです。せめて、一度でもいいですから、妹と会える為のいい知恵はないでしょうか？”

“正直言ってないな”と、老人は一言の下に言った。

“じゃ、本当にダメなんですか？”と、ぼくは、最後の希望の綱を失ったように、ガッカリした表情で言った。

老人は、しばらくそんなぼくの様子を見つめていたが、やがておもむろに言った。

“だがな、希望を持つことだ。じゃ、今度は、愛する人をいけにえにささげなければならなかったその片割れの方の人の話しをすることにしよう。こちらならいくらでも、事例は豊富にあるん

だからね。確か、八十数年前に、君とよく似た境遇で部外者だと称する若者が、たまたまこの世界に迷い込んで、君とは違って恋人を「魔王」にとられたことがあった。

彼も大変落ち込んで、それでも、恋人捜しにやっきとなったのだ。そして十数年、彼は、あちこちの村や町を、恋人を得る手がかりはないものかと捜し歩いた。それは涙ぐましい努力だった。そしてある日、出会ったのだ。別の恋人に。彼女は、最初の恋人によく似ていて、初めは、あの人ではないかと目を疑ったぐらいだということだ。でも、明らかに彼女は別人で、彼は、その彼女を契機に、最初の彼女のことをあきらめることにしたのだ。そして、彼女のいるその村で、一生涯、幸せに暮らしたということだ。まあ、これは一つの事例だがね”

“ぼくはそんな風にはしません”と、ぼくは、腹立たしく思いながら言った。“リサをあきらめるなんて、そんなことがどうして出来ますか。それよりももっと、何か、いい手がかりとなるような話を聞かせて下さい”

すると老人は、困ったような顔をした。

“そう言われても、わたしには何んの力もないじゃよ”と、老人は言った。

“だがな”と、しばらくしてから老人は言った。“一説によれば、魔王が娘をさらったにしても、すぐには自分の宮殿に連れて帰らず、わたしのこの国を通して連れて帰るということだ。そして、その途中で、必ずと言ってよいほど通って帰ると言われている町がある。ラヴィロウと言う名の町じゃ。ここからは遠いがな、そこへ行って聞きなさるがよい。運が良ければ、あなたの妹さんを目撃したと言う人にお目にかかるかも知れない。わたしの考えでは、魔王の住む宮殿は、ラヴィロウの町からさほど遠くないところに存在しているのではないかと思っているがね。ともかく、ラヴィロウへ行くことじゃ”

“ラヴィロウ！”と、ぼくは、その聞き慣れない町の名をくり返しながらか言った。

ぼくがその町への行き方を尋ねると、汽車で行くのがいいと老人は教えてくれた。

ぼくが、老人に感謝しながら出ようとする、

“旅費の方はあるのかね？”と、心配して言ってくれた。

“ええなんとか”と、ぼくは答えた。本当はすごく心細かったのだけれども。

すると老人は、それを察して、出しなに小さな包みをぼくに手渡した。

開いて見ると、中に幾莫かの金と、小さな金属で出来た太陽のようなものを型どったネックレスが出て来た。

“それは旅の幸運を祈るためのお守りじゃ”と、老人は言った。“それを首にかけていけば、魔王の邪魔が入ることはあるまい。きっと、何かの役に立つこともあろう。それとそのお金はとっておきなされ。大した金額じゃないがな。わたしにとってはもう役に立たない金じゃ。遠慮は要らないからね”

“有り難うございます...”と、ぼくは、感謝しながら受け取った。

そしてさっそく首飾りを首に掛けると、老人に何度も手を振りながら、その家から去って行った。

ラヴィロウは、汽車で二時間ほどの、町というよりは、村に近い町だった。

ウィロビーを発って、ずっと静かな田園の車窓風景を眺めているうちに、瞬く間に二時間は過ぎ去ってしまった。

静かな、落ち着いたたたずまいの古い町並で、古くからの温泉町として知られ、駅の近くの中心街には、それなりの活気もあった。

ぼくは、リサに会えるかも知れないとの期待をしながら、喜び勇んで駅から降り立った。

最初に寄ったところは、それらしい話しが聞けるかも知れないと期待した、居酒屋だった。

ドアをあけると、少し手狭な店の中に、若い人や、年寄りなどが二十人ほど、ある者はカウンターで、ある者はテーブルで、話しに、笑いに興じていて、入って来たぼくに注意を留める者はいなかった。

カウンターの奥の主人も、若い客を相手に話していたが、チラッとぼくに目をくれた。

ぼくはビールを注文し、隅の空いているテーブルに腰を降ろした。そこからなら、みんなの様子や、話題を、盗み聞きすることができた。彼らの話しはいずれも同じで、たわいない女の話しや、遊びの話しで、これといって注意をひく話題はなかった。だがその中でひとつ、引っ掛かるような話し声が奥のテーブルの方から聞こえて来た。

“そうだ、変わった二人連れだった”と、ひげを生やした老人が言った。“わしは最初、新婚さんなのかいと思ったがそうじゃないらしい。女の方は車の中にいてよくは見えなかったが、なかなかの美人だったみたいだ。男は、その女の用事で、わしの店に入って来たんだ。そして、とれたてのイチゴをどっさり買って行ったよ。——でもそのあいだ女が車から出て来ないところを見ると、わしはピ〜ンと来たね。あれは、駆け落ちじゃないかと。だから女は、顔を見られたくはなかったんだ。それでもわしはそっと見た。なかなか可愛い娘じゃったよ...”

イチゴと言えば、リサの好物だった。ぼくは居ても立ってもいられなくなって、そのテーブルに行った。

テーブルには、老人の他に、もう一人老人と、年配の男が二人、一緒になって、その老人の話しに耳を傾けていた。

ぼくが近付くと、彼らは、不審なまなざしでぼくを見た。

“あの...、今の話しですが...”

と、彼らがあっけにとられているのをいいことに、ぼくは彼らの中に割って入った。

“ぼくは、ある人を捜しにこの町までやって来たものです。それでさっそくですが、その少女というのは、こんな顔をしていませんか？”

そう言って、ぼくは、リサの、比較的写りの良い写真を胸ポケットから一枚とり出した。

“どれどれ”と、老人は、ぼくの話しを疑いもせず、眼鏡をとり出して、その写真をぼくから受け取ると、じっと見入った。

“確かにこんな顔をしていたようにも見えるが、なにしろ車の中だったんでな”

しばらくしてから老人は言った。“だが多分、この娘に間違いはないだろう。”

ブルネットの髪色をしていて、髪の色も確か、こんなだった。でも、どうしてその娘を知ってなさるのじゃ？”

“この写真に写っている娘は、ぼくの妹だからです”と、ぼくは答えた。“そしてぼくの妹は...”
と言って、一瞬、ぼくはためらった。ここで「魔王」という言葉を口にしているものかどうか、迷ったからだった。しかし、思い切って真実を言うことにした。“実は魔王に連れ去られたのです”
“なんだって！”一瞬、その場にどよめきが流れた。

そればかりか、酒場内の視線が一斉に、ぼくに向けられ、酒場内は息を殺したみたいに静かになった。

“じゃあ、あの若い男が魔王だって、君は言うのか？”

静けさを破って口をきいたのは、あの老人だった。

“多分、そうだと思います”と、ぼくは落ち着いて答えた。“それで、その行方を追って、ここまでやって来たんです。ですから、その車がどうなったか、知っている人はいませんか”

しかし、酒場内は、しらけきったみたいに、しんとしたままだった。明らかに、魔王と聞いて、誰も協力する勇気を持たなくなったのだ。

だがしばらくして、一人の男が、勇気を出して、話してくれた。

“その車なら知っているよ。この町一番のホテルに泊まって、それから先のことは、ホテルが知ってるのじゃないかね”

“ありがとうございました”と、ぼくは、感謝の気持ちを込めて、その男に言った。“さっそく行って聞いてみます。なんというホテルなんですか？”

“ホテル・ラヴィロウだ”と、男は答えてくれた。

一分後には、ぼくはもうその酒場を後にしていた。

ホテル・ラヴィロウは間もなくして見つかった。蔦におおわれたレンガ塀に囲まれた、白壁造りの、瀟洒な建物だった。町はずれの小川のほとりにそれはあり、まわりの自然にしっとりと溶け込んでいた。

タクシーから降りると、ホテル・ラヴィロウと書かれた庇の下をくぐって、フロントに入って行った。フロントには男が一人いて、ぼくはさっそく、例の写真を取り出して、用件を告げた。

フロント係は、写真をじっと見つめると、すぐ思い出してくれたようだった。

“この人なら知ってます。つい三日前に泊まったアベックでした。――でも、女のほうは緊張顔で、話しはすべて男の方がなさりました。食事のときも、周りの目を気にしているようで、ほとんど話しはなさってなかったようでした。ただ、女の方がお皿をお割りになり、それを換えに行ったのでよく覚えています。

「でも、済みませんともなにもおっしゃりませんので、なんと失礼な方だと記憶しています。二人は、部屋に閉じ籠もったきりでほとんど姿をお現しにならず、泊まったのは一晩だけで、翌朝には早くお立ちになりました」

「で、どこへ行くと言っていました？」と、ぼくは尋ねた。

「そうですね。宿帳には次の宿泊先を書くことになってますので、なんでしたら調べてみましょうか」

「ええ、是非お願いします」

しばらくして、フロント係は、宿帳を取り出して来た。

「ええーと、ウィロビーとなっておりますが...」

その言葉で、血の気を失った。また振り出しに戻ってしまったのだ。相手もさるもの、決して本当を書くはずはなかったのだ。

「そうですか...」と、ぼくは力なく言った。「それは多分、間違いだと思います。ウィロビーから、この町にやって来たのですから」

ぼくは、一切の手がかりを失い、どうしていいか分からない失望感に囚われた。そうして、力なくそこを去ろうとしたとき、ふとロビーの方から、女の声がした。

「もしあなた」と、女の声がするので振り向くと、年の頃六十は越えていそうに思われる老婦人だった。「今話しておられた方を捜していらっしゃるのね。でしたら、ウィロビーなんかじゃなく、サラトよ。わたし、夕食のときに少しばかりお話しさせてもらいましたの。あのお若い夫婦なのに、本当に無口な方でね、でも、サラトに行くと言っておいででした。あそこは、古い教会のある、なかなかいいところですよ。あしたにはもう行くと言っていましたから、よく覚えているんです。でも、ここに一日だけなんて、もったいないですわ。ここもいいところなのに。わたしなんかここに、もう一ヶ月近く泊まっているんですよ...」

「本当ですか」と、ぼくは、跳び上がりたような嬉しさを押さえながら言った。「本当に、そのアベックの片方は、この娘でしたか？」

そう言って、その婦人にも、ぼくはリサの写真を見せた。

「間違いなくこの方ですわ」と、婦人は、見るなり断言した。「この写真のように、なかなか可愛い方でしたもの。ブルネットで。でも、まるで夫に禁じられているみたいに、わたしには、造り笑いだけで、あまり話してくれませんでしたわ。何か、恐れているんでしょうかね。そんな風でした」

「ええ、有り難うございます」と、ぼくは感謝して言った。「実は、ぼくの妹で、誘拐されたんです。ぼくはどうしても、彼女を捜し出さなくっちゃならないんです」

そう言って行きかけると、老婦人は、ぼくを引き止めるようにして言った。

「ねえあなた、そんなに急がなくちゃならないんですか。少しぐらい、ここでゆっくりしてなされたら？」

「いいえ、有り難うございます」と、ぼくは、そのお誘いに対しては、はっきりと断った。

“ぼくは行かなくちゃなりませんので。本当に、有り難うございました”

そう言って、ぼくは、ホテル・ラヴィロウを去った。

サラトへ行くには、ラヴィロウの駅前から、一日たった一本のバスが出ていて、幸いにも、ぼくはそのバスに間に合うことができた。

駅に向かうあいだ、ぼくは今しがた乗用車とバイクの衝突事故を目にしたばかりだった。炎天下で、日ざしが強く、汗を拭き拭き、駅へ歩いて行った。駅前に来ると、道端の花壇の石垣のところに、一人の若い娘が、気ままな服装をして、ちょこんと小さなお尻をその上に乗せて、腰掛けていた。ぼくは急に疲れを感じ、そのそばに腰を降ろすと、何気なく声を掛けた。

“暑いね。きょうはなんという日なんだろう。君は、旅をしているのかい？”

すると、彼女はさっと振り向き、ぼくを見つめた。だが、少しも驚いた風もなく、いたって平気な顔をしていた。

“そうよ。あなたは？”と彼女は言った。

“実はぼくも旅をしているんだ”と、ぼくは答えた。

“でも、旅をしているって、恰好じゃないですわね”と、彼女は言った。

“事情があってね、こんな服装でも、旅をしなくちゃならなくなったんだ”と、ぼくは言った。“実は、サラトに行きたいと思っているんだ。君は？”

“あら、わたしもよ”と彼女はにこやかに答えた。“今、そのバスが来るのを待っているところなの”

“じゃ、同じバスだったのか”と、ぼくは、内心嬉しく思いながら言った。

そんなわけで、ぼくと彼女とは、旅は道連れで、同じバスで行くことになったのだった。

間もなくしてバスは来て、乗客としては、ぼくたちの他に、二人連れの女の子と、他にも4、5人の大人がいた。

ぼくと知り合った娘は、その二人連れともすぐ知り合いとなり、バスの中は彼女たちで結構賑やいだ。

バスが田舎を走るにつれ、さっきまであれほど晴れていた青空が崩れ出し、いつのまにか空には雲がおおうようになり、ついには、雨が降り出して来た。

そしてその雨は、いっこう降りやみそうになかった。空の雲は、灰色を過ぎて、ほとんど墨色に近かった。バスは、いよいよ寂しい田舎を走るようになった。

まだ夕方にもなっていないのに、雨にたたられて客の出足が悪いというか、ぼくたちが静かな教会街へさしかかった頃には、教会前に軒を連ねていたみやげ物店がそろそろ店じまいを始めていた。教会前広場は広く、周りにはうっそうと木が繁っていた。人影はどこにも見られなかった。バスから降りたばかりのぼくたち、少数の観光客以外には...

ぼくたちには傘もなく、降りるとすぐ、バスの待合所に走って行った。そこでしばらくは雨宿りとなるのだが、朗らかな彼女たちはまだぼくのそばにいた。

つい今まで、ぼくの目を楽しませてくれていた彼女たち。だが、間もなく別れるときが来ることを、ぼくは知っていた。彼女たちは、ここには滞在しないで、この有名な教会を見れば、またすぐ別のバスに乗り継いで去って行くと言っていたのだ。しかしぼくは、これから先どうなることか、さっぱり見当がつかなかった。いっそのこと、彼女たちの誘惑に負けて、彼女たちと一緒にの旅を楽しもうという気になりかけたこともあった。だが、そんなことがどうして許されよう。

ともかくぼくは、ほんの少しだけけれども、当初の目的を忘れて、しばし、この街の有名な教会の観光を、彼女たちと一緒にすることに同意した。

“ねえ、一緒に行きましょう”と、彼女たちはぼくの手を引いて、誘ってくれたのだ。

別に断る理由もなく、ぼくはそうすることにした。

雨はいっこう降り止みそうにもなかったので、ぼくたちは、待合所から教会までダッシュすることにした。

みんな、ハアハアと息を切らせながら、教会にたどり着いた。

門構えも立派なら、中も、厳かで、なかなかのものだった。美しく、厳粛なステンドグラス、パイプオルガンの響き、マリアの像やその他の聖人たち。みんな、目を輝かせて見つめ合った。

そのように、小一時間ほど見物した後、ぼくたちは、満足して教会を後にした。

まだ雨はしとしとと降っていた。彼女たちは、再びバスの待合所に向かった。

ぼくも別れるのが惜しくて、彼女たちの後に従った。待合所の外の曇りガラスには、しきりに、雨粒が筋を引いて落ちていた。

“じゃああなたは、今晚は、ここに泊まるのね”と、彼女は言った。

“君は行ってしまふんだね”と、ぼくは、ちょっぴり名残り惜しそうに言った。

“でも、また会えるかも知れなくてよ”と、彼女は言ってくれた。

そのときだった、待合所の入口でバスが来るのを見張っていた二人連れのうちの一人が叫んだ。

“みんな、バスが来たわよ”

“じゃあね。また会えればいいわね”と、彼女は、別れを惜しんで言ってくれた。“わたしの名は、ティルサ。あなたは？”

“シレール”と、ぼくは答えた。

“シレールさんね。さようなら...”

そう言うが早いか、他の女の子に混じって、彼女は勢いよく、ぼくの足下から駆けて行った。

ぼくは、一人、こんな寂しい町に残されるのが辛くて、彼女たちの後を追おうとした。が、足は動かなかった。間もなくして、駆けて行く彼女たちの姿は、雨の向こうに消え、バスの過ぎ去る音のみが、耳に聞こえて来た。

“彼女たちは行ってしまった。もう二度と会えないだろう...”

この索漠とした教会の待合所にただ一人、とり残されて、ぼくはそうつぶやいた...

雨の降る、誰もいなくなった待合所で、ぼくは寂しさのようなものを感じた。

これからどうすべきなのだろうか？ あの華やかな彼女たちに、ぼくの寂しさが分かるはずもない。ぼくは、この世界に迷い込んだ異邦人なのだ。このときほど、そのことを、身にしみて自覚したことはなかった。

ともかくあの婦人が言ったように、このサラトに来たのが事実なら、またホテルに当たってみればいい。あるいは今もなお、あの魔王とリサは、この地のホテルに投宿しているかも知れない。そんな希望さえ持てた今となっては、一刻も惜しんで、サラトのホテルに当たることにした。

幸い、待合所の観光案内で、ホテルの名を聞き出すことができた。ぼくは電話をし、最近、若い二人が泊まったと聞き出せた一軒のホテルに向かうことにした。

今回は、ホテルとは言えないような、うらぶれた木賃宿風の、みすぼらしい外観をしたホテルだったが、ぼくは、その前でタクシーを待たせて、中に入って行った。

“さきほど電話したのですが...”と、ぼくは、フロントに来るなり、年配の男に話しかけた。“さっき話したうちの、女性の方はこんな顔をしていませんでしたか”

そう言って、ぼくは、リサの写真を、その男に見せた。

男は、その写真をじっと見つめた。それから、しばらくして、おもむろに言った。

“いや、見たことはないですね。だいいち、女の方の髪の色は、こんなじゃなく、ブロンドでしたからね”

ぼくは、期待とうらはらの答が返って来て、目の前が真暗になったような気がした。

“よく見て下さいよ”ぼくは、それでもなお、あきらめきれずに言った。“その女性は、こんな顔をしていたはずですよ。髪の色は、あるいは染めたのかも知れませんが、人目を避ける為には、そういうこともしかねないからです。お願いします。もう一度、よく見直して下さい。そして、これがその女性だと言って下さいよ。この町に来て、泊まったとしたら、このホテルしかないんですから...”

そう嘆願するようにぼくが言っても、返って来る返事は、冷たいものばかりだった。

“そう言われましても”と、フロントマンは言った。“こう言っちゃなんですが、こんなきれいな顔立ちじゃなかったです。もっとふっくらとしていて、どう見ても、似ても似つかぬ顔立ちです。はっきりと断言できます。泊まれた客人は、この方とは別人です”

ぼくはがっくりと肩を落とした。やはり、あの婦人の聞いたことは、魔王の、口から出まかせだったのだろうか。ただその言葉を頼りに、はるばるとこの町までやって来たというのに...

ぼくは、何も言わずに、そのホテルから出て行った。

外は、雨がもう小降りとなっていたが、タクシーの運転手が、手もちぶさたそうに車の外に立って待っていた。

“次はどこへ行きましょう？”と彼は言った。

“いや、もういいんだよ”と、ぼくは、半ば気が抜けたように答えた。“もう乗らないで、歩いて行きます...”

そう言って、向こうへ歩いて行こうとしたとき、

“ちょっとあんた！”と怒鳴る声が後ろでした。

振り向くと、運転手が怒ったような顔をした。

“だったら精算をしてもらわなくっちゃ困ります”と、彼はプリプリして言った。

“ああ、そうでしたね”と、ぼくは、気が抜けたように答えた。“おいくらです？”

“53パルです”と、運転手は、機嫌をそこねた顔をして言った。

ぼくが支払うと、

“全く、最近の客というところなんだから腹が立つ”とかなんとか言いながら、タクシーのドアをボタンと閉めて、彼は去って行った。

しかし、ぼくの心は、もう抜け殻同然だった。手がかりを失った今となっては、どうして彼女を捜すことができるだろう。全く振り出しに戻ったような空しい気になって、小雨降る街角を、ぼくは当てもなく歩いた。

絶望と空しさにかられながら、30分ほど歩いたろうか、ぼくはいつのまにか、あの教会の前にやって来たことに気が付いた。さっき、彼女らと楽しい思いをさせてもらったあの教会だ。ほんの少し前の彼女らとの楽しいひとときのことを思い出しながら、悲しい思いをする前に、あんなひとときを持ててよかったな、とぼくは思った。すると、無性に、楽しかったあの教会の中に入ってみたいという気にかられた。もう彼女たちはいなくとも、その思い出に触れられるだけでもいいのだ。他に救いようのない今となっては、そんな気持だった。

中は薄暗くて、さっき入って行ったときと少しも変わってはいなかった。居並ぶ列柱に、アーチ状の天井。そこからは、細い鉄線で燭台が吊り下げられている。側廊と正面には美事なステンドグラスが二段に並び、薄暗い室内への唯一の採光の窓であった。さっきの彼女らと見学したときのことを思い出しながら、ぼくは、ゆっくりと祭壇の方へ向かった。側廊のところどころに、聖人たちの彫像が置かれている。見たところ、ぼくたちの見慣れている教会と、何んら変わることはない教会だった。ぼくは、祭壇の間近まで来ると、両手を合わせ、膝まずいて神にお祈りをした。リサが捜し出せることを祈ったのだ。

ところがそのときだった。ぼくに声を掛ける人がいたので、振り向いた。

そこに立っていたのは神父だった。

“さっきも来ておられましたね”と、彼は声を掛けた。“もう、先程の女性の方とは別れましたのですか？”

“ええ、行き先が違いましたのでね”と、ぼくは答えた。

“そうですか...”と、彼は、そのことには特別、関心がないかのように言った。

それからさらにこう言ったのだった。“最近はこの教会にも、若いアベックがよく訪れるようになったのですよ。つい最近もね、若い二人連れが来られて、どうも男の方が、女の方に教会の説明をしておいでのようにでした。そして最後に祭壇のところまで来て、是非とも神の絵を見せて欲しいとねだったのですよ。この教会では秘画でしてね、普通ではお見せしないことになっているのです。――でもどうしても見たいと言い張って、とりわけ、お連れの方に見せたいからと言いなさって、根負けしましたよ。――でも、その方はよく知っておいででしたよ、この教会に、神の秘画があることを。たいていの方は、そんなことはあまり気になさらずに行っておしまいになるんですのにね...”

“そうですか。そんな絵があったんですか”と、ぼくは少しばかり、関心を持って言った。せっかく来たんだから、見たいような気もしたのだった。それで、少しばかり頼み込んでみることにした。

“あの、済みませんが、そんな絵があるのなら、ぼくにも見せてもらうわけには行きませんかでしょうか...”

“よろしいですよ”と、神父は、あっさりと答えてくれたのだった。“あなたは信心がおありのようだし、特別のはからいで、見せて御覧にいれましょう。さあ、こちらへ来なさい”

そう言って神父はぼくを、祭壇の方へと案内した。そこには、壁面いっぱいの大作家らしい絵があるらしく、嚴重に木製の扉におおわれていた。その扉に向かって神父は手を差し伸べ、下にかかっていた鍵をはずした。長い眠りから覚めるかのごとく、神父の手によって、その大きな木の扉はやがて、おごそかに開けられて行ったのだった。

ぼくは、期待と感動にあふれながら、やがて現れるであろう神の絵を見守った。

絵は、スタンドグラスからさし込む淡い光の中で、その姿を徐々に見せ始めた。

そしてついに木の扉が開かれたとき、ぼくは、その中に驚くべきものを発見したのだった。

神父が神だと言ってぼくに見せたその絵に描かれていたものは、神とはおよそ似ても似つかぬ、耳が大きく、あごがとがり、目の鋭い、あの悪魔そのものだったことを。

ぼくは、ギョツとなって、その絵を見つめた。

“本当にこれが、あの神なのですか”と、ぼくは思わず叫んだ。

“そうですよ”と、神父は冷静に言うのだった。“実によく描けた絵です。このような素晴らしい神は他にはいません。全くこの絵は、この教会の宝です。満足いただけただけでしょうか...”

“ええ...”とぼくは、心臓を高鳴らせながら、そう答えざるを得なかった。

“あの二人連れもこれを見ましたが、女の方が、ちょうどあなたと同じような反応を示しました”と、神父は言った。“何かに驚かれたような、そんな驚くようなことが、この絵にはあるのですか？”

“いえ”とぼくは言いかけたが、今の言葉でピンと来るものがあった。“女の方が、ぼくと同じように驚いたって？　じゃ、あるいはその女は”

そう言ってぼくは胸ポケットに手をつっこみ、リサの写真を取り出した。

“その女は、こんな顔をしていませんでした？”

神父は言われるまま、写真を覗き込んだ。

“そうでした。でもどうして、彼女を御存知なので？”

ぼくはもう感謝の気持で飛び上がりたいぐらいだった。やはりリサは、悪魔と一緒にこの町にやって来ていたのだ。

“実は彼女はぼくの妹なんです。ぼくは妹の行方を捜しているんです”とぼくは手短かに説明した。そして、最後にこう言った。“彼らがどこに行ったか、分からないでしょうか”

“さあ、そこまでは...”と、神父は、頭を横に振った。“でも多分、インゲルートの方でしょう。この絵を見た方は、みなインゲルートへ行く、という言い伝えが昔からあります。だからあの方も、そして多分あなたも、インゲルートへ向かうことになるでしょう”

“インゲルート！”と、ぼくは驚いて言った。“あなたは今、インゲルートとおっしゃいましたね。一体その国はどこにあるんです？”

“北の方です”と、神父は、冷静に言った。“しかし、わたしには分かりません。行ったことがありませんから。でも、あなたも、あの方も、南の方からやって来られた。だから、これから行く先は北の方であるはずですよ。言い伝えでも、ちゃんとそういうことになっているのです”

“確かにぼくはそこへ行ってみたいんです”と、ぼくは言った。“せめてもう少し、どんな道を行けばいいのか、教えてもらえないでしょうか”

“この教会のそばには鉄道が走っています。だから鉄道に沿って北に行けばいいでしょう...”

神父はそう言い終えると、何か用事でも思い出したのか、あわただしくその場から立ち去って行った。

北！ ともかく北へ行けばいいのだ。ぼくの頭の中は、「北」という言葉でいっぱいだった。こうなれば一刻も早く教会を出たいと思った。

しかし、すぐ立ち去るには惜しいような、立派な教会だった。

ぼくはもう一度、祭壇を眺めた。そして、そのときにふと気が付いたのだ。一回目のときも、そして、さっきまで少しも気が付かなかったのだが、見事な聖人の姿をあしらったステンドグラス、燭台、説教壇、恐ろしく高い柱廊や、アーチ状の天井、モザイク模様の床など、普通の教会と少しも変わらないのだが、ただ一つだけ、あの十字架がどこにも見当たらないのだ。さっきまで、ぼくはそのことに全く気が付かなかったのだが、気が付いた今、ぼくは一種のショックのような状態になった。ここは本当に悪魔が支配しており、教会までもが、悪魔の専有物なのだ。そして、祭壇に向かって左手に当たる、北の袖廊の、ステンドグラスの窓の下の壁のところに鎮座したレリーフは、よく見ると、それは、聖人ではなく、悪魔の表情をしていることが分かって来るのだった。ぼくは恐ろしくなって、教会から駆け出した。

そして、外に出て、教会の尖塔を眺めてみたが、そこにも十字架はなく、代わりに、あの三日月が、尖塔の先っぽに、象徴のように、そびえていたのだった。ぼくはもう逃げ出したくなった。教会からよりも、この国そのものから...

やがてぼくは、田舎を真直ぐに延びて走る鉄道がそばに見える道にやって来た。寂しいばかりに、二本の鉄道が山の方に向かって走っている。そして、鉄道と平行に走っている人気のない、静かな道――空は雨が止んではいたが曇り空だった。どんよりした黒い雲が空をおおい、それが、この静かな、荒野の景色を、重々しいものにしていて。しかし、そんな寂しい鉄道のところにやって来て、ぼくはふと、何か心に思い当たるものがあった。 そうだ、ぼくの子供の頃、――この風景は、確か、いつか、子供の頃に出会った風景に似ていた。

そして思い出したのだ。ぼくにかつて、そんな子供時代があったことを。まだママがいて、ママと二人だけの生活だけで、結構楽しかった。世間の人たちに、ぼくたちの生活がどんなだったかが、たとえ分からなかったとしても、そんなことはどうでもよかった。ぼくたちは、寂しい人生を歩んでいたけれど、世間の目など、そんなものはおかまいなしだった。

あの日――どうして、妹たちがいなくて、ぼくとママの二人きりだったのかはもう分からないが、ぼくは、ママと二人きりの帰り道、幸せだった。その感情を、どう表現すればいいのだろうか？ あたかも世界は、ぼくとママの二人きりのようだった。その中に、笑いも、幸せも、楽しい会話も、すべてが包み込まれていたのだった。

そして、もう日が暮れようとしている夕方、ぼくとママとは、ちょっとした小旅行から、家に帰りつつあった。そのとき、夕暮れの風景の中で、ぼくは見たのだった。家の近くの荒野のどまん中を、真直ぐに延びる二本の鉄道を。あの、感動の中で目にした風景を、ぼくは忘れることができない。我が家はもう間近で、その鉄道に平行して走る寂しい道を行けば、もうすぐそこだった。そのときぼくは、こんなに寂しくて、こんなに幸せな家族は他にない、と感じたものだった。だって、ママは、幼いぼくを喜ばせる為に、ちょっとした旅行に連れて行ってくれたのだったし、その旅の先々で目にした経験はぼくを感動させてくれたし、そして今、それらの楽しい思い出を胸に包み込みながら、帰路に着こうとしているのだったから。こんな楽しい経験なら、これから先、何度やっても、たとい大人になってからやってもかまわない、とぼくはそのとき、幼い胸の中で思った。ママの表情は、明るく、その目は輝いていた。ぼくだって、無邪気に、大げさな身ぶり、手ぶりをしながら歩いた。そんなぼくの元気に歩く様子を、ママは、少し遅れたところから、幸せそうに見つめているのだった。ぼくは、歩きながら、ぐるりと振り向いて、そんなママを見た。

――ああ、そんな時代があったのだ、とぼくは思い出したのだ。それなのに今ぼくは、なんと遠いところに来てしまったのだろう。急にママのことが思い出されて、情なくて、泣きたいような気持ちになって来た。というのも、ぼくはあのときも孤独だったが、今はそれよりももっと孤独であることを、感じたのだから。

そうだ、ぼくはあのとき、ママの孤独をもっと知るべきだった、と今になってぼくは思った。それなのに、愚かにもぼくは、ママが血のにじむような思いで、ぼくに、精一杯の幸せを与えようと努力していたことを知らなかったのだ。日帰りの旅の先々で、ぼくは野鼠のように飛び跳ね、おどけ、それらの子供っぽい、無邪気な行動は、ママを喜ばせたが、その裏で、ママが重い苦しみを引きずっていたことに、ぼくは気が付かなかったのだ。それでも、子供なりにぼくは幸せだった。ママといるといっただけで、幸せだった。だって、久しぶりに、ママと過ごせた一日だったもの。この日一日を、寂しい思いをせずに済んだんだもの。

そう、それは、この広い宇宙の中でも、ママと二人だけの体験だった。それが、どんな幸福に満ち、どんなに楽しげだったか、誰が知ろう？ 人々から遠く離れて、ぼくたちの生活が、そこにはあったのだった。あの快い日ざしが地面にくっきりとした影を落とす秋の日、ぼくたちは、互いに心を暖め合いながら、家路を急いだ。あの日もそうだったし、その後もずっとそうだった。ぼくとママとはいつしか、二人だけの世界を築き上げ、たとい世間の目には触れなくとも、まるで無人島にいるがごとく、二人だけの楽しい世界をつくり上げて行ったのだった。それは今から思えば、世間から忘れ去られたような、本当に孤独の道だったが、それでも、その中にある限り、ぼくとママとは、絶対に幸せだったのだ...

ぼくは、今日にしている光景が、不思議と、あの日の鉄道に似ていることに気づき、あるいは、ぼくたちのあの家が、すぐそこにあるのではないかという錯覚に捕らわれそうにさえなった。もしそうだとすれば、どんなに幸せなことだろう。そうだ、そして今、ぼくは、あの子供の日に戻って、ママのいる我が家へと戻ろうとしているのかも知れぬ。この不思議な世界では、何事も起こりそうな気がしたのだった。

そしてその瞬間、ぼくはかつて体験したある印象的な出来事を思い出したのだった。あれは夢だったのか、それとも現実だったのか？ 今となってはもう遠い出来事のように思え、確かなことは分からなかった。

遙か昔、その家で、ぼくは、とっても可愛らしい顔をした少女が、その家の中に入って行くのを目撃したことがあったのだ。その余りの可愛らしさに、ぼくはドキッとし、同時に、そばにいた仲間にも自慢したくなった。あの子は、自分と関係のある子だと。そしてすぐに自分の家に戻ればよかったのに、そうしなかったばかりに、少し反対方向に向かって歩きかけたときには、もうその少女は家から出て来て、隣の家へと一軒づつまわって歩いているみたいだった。そしてそのときには、残念なことに、もう後ろ姿しか見ることはできなかった。暖かそうなオーバーと、ベレー帽をかぶっていた。仲間のひとりは、そんな少女を見てから、様子を伺うようにぼくに目を向けたが、ぼくは、そんな少女のことなどなんとも思っていないぞと言わんばかりに、視線をそらして、さっさと先へ歩いて行った。

そしてもうその少女とはそれっきりとなった...

しかし、頭の中は、いなくなった少女のことでもういっぱいだった。彼女は、12、3才の年だったように思われる。ただしかし、驚くほど美しかったその少女の顔も、ほんの瞬間的にしか見られなかった為に、今やよく思い出すことができなかった。そのことを、ぼくは嘆く他はなかった。そしてそのとき、ぼくはただひたすら、その少女との再会を望んだ。来る日も来る日も、家の玄関で待って、またその少女が現れる日の来ることを待った。しかしついに、その少女は現れることはなかった...

そんな日のあったことをなつかしく思い出しながら、その我が家がすぐそこだということを感じた。あるいは本当に、その家がすぐそこを行けば、あるのかも知れない。ぼくは思い切って、鉄道に沿った道に向かって歩くことにした。

しばらく行くと、森の木陰から、さながらおとぎの町を思わせるような、静かな住宅街が姿を現した。それぞれが、思い思いの趣向をこらした、立派な邸宅の集まりだった。そして、一本の道がさっきの道とは直角にまっすぐ延びていて、そのずっと先には、おぼろにかすんだ神秘的な山が見え、なんとも言えない郷愁を誘うのだった。他に、洋風の木造家屋や、二階がガラス張りの家や、清楚な女学校や、幼稚園などがあり、結構、小さな町としては、賑やいでいることが分かった。

しかしぼくは、さらに奥へと行きたくなった。ぼくは歩いた。道はずっと先まで続いていた。やがて、道のずっと奥までやって来ると、左手に川が流れるようになって来た。その川は、ゆっくりと右側へカーブを描き、それにつれ、道もまた右へカーブを描いた。ぼくはどうかと一瞬ためらったが、やはりどんどん行くことにした。そうしてしばらく行くと、ある町の入口を示しているような看板が向こうに見えて来た。ぼくはその名を読み取ろうと、足を早めた。そしてついに、その文字が読めるところまでぼくは近付いた。そして、その文字を読んで、ぼくは心臓が止まる思いがした。

そこには、ぼくの生まれ故郷であるオディープの名が刻み込まれていたのだから...

ぼくの家まではすぐそこだった。ぼくは、込みあげるようななつかしさを感じながら、我が家へと向かった。昔、ママが入口で待っていたあの家――あの家に今もママが待っているのだろうか。ぼくは不思議な気分にかられながら、どこか見覚えのある雰囲気のある町並を歩いて行った。

そしてついに――ぼくはあのなつかしい我が家に着いたのだ！

ところが驚くべきことに、玄関の入口のところに、幼い頃の自分自身と見間違えるばかりの少年が、ちょこんと坐っていた。

ぼくはその少年に声を掛けた。

“君の名前はなんて言うんだい？”

“シレール。お兄さんは？”と、その少年は逆に聞き返した。

“いや”と、ぼくはそれに対しては答えなかった。“ところで坊や。ここで何をしているんだい？”
“少女を待っているんだよ”と、その少年は答えるのだった。“ちょうど一年前に見かけた、ベレー帽をかぶり、オーバーを着た少女を”

ぼくはその言葉で二度ビククリした。

“ところで、お母さんは家にいるのかい？”

ぼくは、母親と会えるかも知れないという期待と不安を込めて尋ねた。

だが、それに対する少年の答えは、冷たいものだった。

“ママはいないよ”と、少年は答えた。“家出して、それっきりさ”

“じゃ、他に兄弟は？”

“もう誰もいない。この家じゃ、ぼくひとりだけなんだ”

少年から返って来たのは、そんな悲しい答えだけだった。

“そう、じゃ、ここで一日中、その少女が来るのを待っているんだね”とぼくは言った。“でも、その少女が来るという確証があるのかね？”

“あるさ”と、少年はむきになって言うのだった。“だってあの娘は、また来ますとママに言って、去って行ったんだもの。何か大事な届け物をしようと来たらしいんだけど、十分にママと話すことができなかつたんだからね。でも今度はきっと、ぼくに話しかけてくれるに違いないよ。そら、来たじゃないか”

ぼくはその声で、驚いて振り向いた。

すると、ぼくは、自分の目を疑いたくもなったが、何年も昔に見たあの少女が、今、そこを歩いて来ているのだった...

彼女の様子は、あのときと少しも変わってはいなかった。赤いベレー帽に、あのマント。そして今や、あのとき、一瞬だけかいま見て、胸をドキッとさせた、あの可愛らしい顔を、正面から、まじまじと見ることができたのだった。予想にたがわず、彼女は、本当に、健康的な、美しい顔立をしていた。それを見失い、嘆いたときの少年時代の悲しみが、確かに本物であったことが、彼女のその美しさから分かるのだった。どうして今、ここへ彼女が現れたのか、そんなことは考えることもなかった。その幸運な場所に居合わせることができたことだけで、ぼくは幸せでいっぱいだった...

“約束通りやって来たわ”と、ベレー帽の少女は、少年に向かって言った。“お母さんは、家の中にいるの？”

“それが...”と、少年は、申し訳なさそうに言った。“実はいなくなってしまったんだ。突然家をあけてしまってね。それに、妹たちもいなくて、今はひとりぼっちなんだ”

“そう。じゃ、本当にひとりきりなのね”と、少女はがっかりしたように言った。“ところで、この

兄さんは？”

そう言って、彼女は、少年に、ぼくのことを尋ねた。

“ぼくも、さっき会ったばかりの人なんだ”と、少年は、力なく、正直に答えた。

“じゃ、みんな、偶然にここで会ったわけなのね”と、少女は言った。“とすると、みんなお友だちというわけよ。ねえ、分かった？ ねえ、今からみんなで、面白い舞台を見に行かない？ とっても面白くて、ひと月ごとに題目が変わるの。この前、あんたのお母さんにそのことを言ったら、今忙しいからって断られたわ。でも、とっても面白い内容で、きっとみんなに満足してもらえと思うわ。そして今、あのときと同じ題目の舞台が、ちょうどやっているときのよ。ねえ、いいでしょ。今度はみんな、その舞台を見に、来てくれるでしょ”

“舞台って、劇のことなのかい？”と、少年は、余り乗り気でなさそうに言った。“そんなの、あまり見たことがないんだけど...”

“初めてなら、なおさらいいことよ”と、少女は、少年の手をとるようにして言うのだった。“いいわ。今回はわたしのおごりよ。でも、もし気に入ったんなら、次回からはきっちりと払ってよ”少年はなおも乗り気でなさそうな顔をしていたが、そこへぼくが割って入った。

“そこまで熱心に勧めるんだから、行っておやりよ。意外と面白いかも知れないよ”と、ぼくは言った。

“じゃ、兄さんも行くのかい？”と、少年は逆に尋ね返した。

“もちろん！”と、ぼくは、笑顔を浮かべて答えた。

少女は、嬉しそうな顔をして、少年と、そしてぼくの手を取った。

“それじゃ、さあ行きましょ”

ぼくたちはいつのまにか、小さな劇場の椅子に腰かけていた。ぼくの左手には、ベレー帽の少女と、その向こうに少年の三人が腰掛けていた。ざっと見渡したところで、数百人もの観客が、舞台の方に目を向けていた。

舞台の上では、既に劇が進行していた。書割から見ると、舞台となっているのは、素晴らしい別荘の邸宅。そこはきり立った崖の上に建っていると見え、海が、はるか下の方に見渡せた。そこに、退屈そうな守衛が一人番をしていて、あくびをしながら今、立ち上がったところだった。この別荘には今主はいなくて、長いあいだ空屋となり、売りに出されていることはひと目で分かった。そこへ二人の登場人物がやって来る。ひとりは年老いた男。そして今ひとりは若くて、美しい娘だった。その二人に向かって守衛は、この家を買わないか、と話しを持ちかけた。長いあいだ買い手にありつかなかったせいか、守衛が持ちかけた値段は驚くほど安かった。それでも二人にとってはなお高かったが、その別荘の美しさといい、その立地条件の良さといい、これがチャンスだとばかり、その場ですぐOKをした。契約書をその守衛とかわすと、守衛は、やっとこれで自分の役目から解放されたとばかりに、ニコニコしながらそこを引き上げて行った。

さて、そこでやっと、この別荘地は、彼ら二人のものになった。広々とした庭があり、池や、ちょっとした滝もあって、それは川となって海まで流れていたが、それらすべてが、彼らの領地に属するものだった。家の中に入ると、彼らはくつろいだ気持になった。

それにしても、この二人の関係は、少し気になるところであった。その呼び方からして、親子でもなく、まして、夫婦ではない。そして、やがて、彼女が、この男の会社の秘書であることが明らかとなった。二人はこっそりと、この別荘を、秘密の愛の巣にするつもりでやって来た、という次第だった。

ところが、どうしてここをかぎつけたのか、そこへ、男の妻と称する女が駆けつけて来た。するとそのとたん、この別荘に、それまでの甘いムードとは打って変わったような、張り詰めた雰囲気支配した。プリプリした顔でやって来るその妻に、どうやらこの老人は、頭が上がらないらしい。それでもどうにかこうにか、その場をとりつくろうことには成功したようだった。夫人は、同時に出迎えた秘書の顔を、怪しげな目つきでジロジロと見つめるが、現場を押さえることには失敗してしまったのだ。やがて夫人は、失意のうちにその家から出て行った。

残された二人の表情には、再び笑顔が戻った。が、それは老人の方だけで、娘の方はそれほどもない、ということがすぐ分かるのだった。老人はさっそく、楽しいことをしようと娘に迫って来たが、娘は余り乗り気ではなく、むしろ、仕方なしにやっているという感じだった。

妻が出て行ってから程なくして、老人は娘を別の部屋に連れ込み、窓を全部しめるのだった。娘の表情はこわばったが、老人は臆することなく、窓という窓を全部閉め終えると、娘に近付き、悪ふざけを始めるのだった。

ところで彼女には、老人とは別に、一人のボーイフレンドがいたのだった。彼は友人に彼女が社長に連れて行かれたことを言い、こんな事態を招いた本当の責任は彼女にではなく、あの社長にあるのだということを告げた。だから決して、自分のガールフレンド、つまり彼女を責める気はないのだと。そしてさらに、こんなことをしたのも、実はお金の為で、自分の生活を助けるためだとも彼は言った。そして彼は、友人が制止するのを振り払って、

“あの男をたたきのめしてやる”と叫びながら、家を飛び出した。

間もなく彼は、この別荘地に姿を現した。狂気のように彼は恋人の名を呼び続け、ドアを叩き破るとその館の中になだれ込んだ。そこで激しい物がぶつかる音、娘の叫び声などが聞こえた後、やがて壊れたドアから、若い二人が姿を現した。男は髪の毛が乱れ、額に血をにじませていたが、出て来た二人の表情は、書割の、晴れ渡った空のようにすがすがしいものだった。

それから時が流れ、この別荘にも再び静けさが戻った。そこへ再びあの守衛が姿を現した。あくびをし、背伸びをしながら立ち上がる仕種は、以前と全く同じだ。だが、こちらへ向かって歩いて来るその守衛の顔を見ると、なんと、あの老人とそっくりの顔をしている。老人は、若者に殺されたのではなく、今となっては、地位も財産もすっかり失って、このわびしい別荘地の守衛と成り下がってしまっているのだった。

そこでこの劇は幕となった。

人々は、拍手をしながら帰る支度を始めた。

“どう、面白かったでしょ？”と、少女は、ぼくの方に振り向いて言った。

“確かにね。浮気はダメだという教訓まで入っていて...”と、ぼくは、にっこりしながら答えた。一方、少年の方へと見ると、少年は、どこかへ行ったのか、姿が見えなくなっていた。しかしどういいうわけか、少年のことはそれほど気にならずに、ぼくの関心は急に、自分のそばにいるこの少女の方に向かった。彼女はあのときと少しも変わっていない。同じ帽子、同じ服装だった。そして、本当に可愛らしい顔をしているが、あのとき見て驚いたのも、多分この顔だったのだろう。それから長い歳月が流れ、今再び少女と出会っているのに、ぼくの方はこのように年を取ってしまったにもかかわらず、少女の方は少しも成長していない。それなのに、ぼくはそれほど不思議なことだとは思ってはいないのだ。この見知らぬ世界では何事でもある。そんな気がしているのだった...

“どうもあのシレールとかいってた子、どこかへ行ってしまったらしいね”と、ぼくはそれとなく言った。

“そのようね”と、少女も、臆せず答えた。

“ところで君は、これからどうするんだい？”と、ぼくは尋ねた。

“そうね。どうしようかしら？”と、少女は、まだ何も考えていない風だった。

“ところで、あなたは？ シレールさん”

しばらくしてから、少女がぼくの名を呼んだので、ぼくは驚いて振り向いた。

“なんだって！ どうして君はぼくの名を知っているんだい？”

“だってあなたは”と、少女は平然として答えた。“あの子が成長した後の方でしょ。つまり同一人というわけ。だから二人もいたらややこしいから、片一方が消えたっていうわけ。だからもう、あの子のことは考えなくていいわけよ。今は、あなただけが唯一人、シレールさんなの”

ぼくは、何がなんだか訳が分からなくなったが、ともかく彼女の言おうとしていることだけは、呑み込めた。

“じゃ、あの子は、本当に消えてしまったのかい？”と、ぼくは念を押すように、その少女に尋ねた。

“そう”と、少女は、可愛らしい顔でうなづいた。

“じゃ君は、ほくの秘密を知っている君は、何者なんだい？”ぼくは再び尋ねた。

“あなたが見ている幻よ”

そう言って、その少女は微笑むのだった。

“まあなんでもいいや”と、ぼくは投げやりになって言った。“それはともかく、これからどうしよう？”

そう言っているうちに、ぼくたちは劇場の外に出た。外は寒く、またシーンとした街角だった。ぼくはこの不思議な少女を見失うまいと、常に彼女のそばから目を離さなかった。出しなに、少女は、チケット売場のおばさんに気安く声を掛けた。

ぼくは少し離れたところで、そんな風に話している彼女を見つめていたが、やがて彼女は、ぼくのところへ引き返して来た。

“知りあいなのかい？”と、ぼくは尋ねた。“そう言えば君は、チケットを売りに家々を歩き回っていたんだね。どうしてそんなことをしているの？”

“ええ、ここの劇場の人とは、みんな知り合いよ”と、少女は答えた。“今はね、色々と下働きをしているけど、そのうち舞台に立ちたいと思っているの。行く行くは、みんなに愛される大女優になりたいわ。それがわたしの夢——”

“そうかい”と、ぼくは感心するように言った。“でも、君ならなれるよ。その素質は十分君にはあるよ”

“そう、嬉しいわ”と、少女はぼくの言葉を、素直に喜んでくれた。

“ところで、どちらへ行けばいいんだろ？”

ぼくは、劇場の前を走る道に出て、ハタと困った。ここの地理に関しては、全く、なんの知識もないのだった。

“あら、あんたの家ならこっちよ”そう言って、少女は、ぼくの手を引っ張った。

でもぼくは、家に帰る為にここへ来たのだろうか。その疑問がずっと、ぼくの頭の片隅に残っていた。ぼくはどうしてこんなところに寄り道をする事になったのか、その理由が分からなかった。あるいはあの悪魔、それがこの少女を使って、ぼくをここへ踏みとどまらせようと画策しているのだろうか？ そんな疑問が頭にひらめいた瞬間、ぼくは覚醒したような気になった。この少女は、本当は悪魔の手先なのだろうか。無論ぼくは、そうでないことを望んだ。しかし今となっては、そのことを思い切って彼女に尋ねる以外、この疑問に答える手だてはないように思われた。

“あのう、君...”と、ぼくはそれとなく言った。“君はぼくのことを少しは知っているようだけど、ぼくは君についてほとんど何も知らないんだ。だから、君のことを教えてくれるかい。たとえば、君の名前は、なんと言うの？”

“わたしの名前？”と、少女は、なおもぼくの手を引きながら言った。“そんなの、ないわ。でも、呼ぶなら、フローラと呼んで。みんながそう、わたしのことを呼んでるの”

“フローラ！”と、ぼくは魅惑されたようにくり返した。“なかなかいい名前だね。ぼくはその名前が気に入ったよ”

“そう、ありがとう”フローラは、満足そうに笑顔を見せた。

“ところで、まだ質問させてもらっていいかな”と、ぼくは続けた。“フローラ、君はずっとこの町で暮らしているの？”

“ええ、でもなぜ？”と、フローラは振り向いて尋ねた。

“だって、なんだか不思議な気分だからさ”と、ぼくは答えた。“というのも、第一、君はあのとき、初めて会ったときからかなりの年数が経っているにもかかわらず、少しも成長していないだろ。第二に、どうして今頃、ぼくは急に君に会うことになったのだろう。何かそこには、深い訳でもあるのだろうか。そして第三に、ここで恐れられている魔王について、君はどう考えているのか、そのことを教えてもらいたいのさ...”

“そう？ そのことが気になっていたのね”と、フローラは真剣な顔になって言った。“その質問について、今は答えられることと、答えられないことがあるの。一番目の質問については答えられるわ。つまり、わたしがいつまでもこんなに若いのは、それはわたしが、あなたの幻影だからよ。そして二つ目は、それは、わたしたちは今、会うべくして会うことになったの。つまり、わたしたちは今、会うことが必要だったのよ。――でも今は、それだけしかわたしには言えない。いずれ、そのことが明らかになるでしょうけれど、今はどうしても言えないわ。そしてこれは、三つ目の質問とも関係があることだから、それも言えないの。だからお願い、今は、わたしのことを信じてもらうしかないわ。わたしの立場からすると、そう言うしかないの”

“でもどうしてさ？”と、ぼくは不思議に思って言った。“どうして口にすることができないの。それは、つまりは君が、あの悪魔の手先だからか”

ぼくはそう言って、無理やりフローラから腕を離した。今や、この少女のことが、少し薄気味悪く感じ始めていたのだった。

“わたしが悪魔の手先ですって？”と、少女は、驚いた顔をしてぼくを見た。

“だって、そうでないなら、どうして本当のことが言えないんだ！”とぼくは言った。“ぼくも君のことを信じたい。でも、本当のことを言ってくれないし、それに、どうしてあんな劇を見せて、時間を稼ごうとしたのか、その理由がぼくには分からないのさ。ぼくにはただ誘拐された妹を捜そうとすることに対する、妨害行為としか思えないんだ... つまり、悪魔が君を送って、ぼくをここへ引き止めようとする為の工作なんだ”

“あなたの妹さんが誘拐されたですって！”と、少女は驚いたように言った。“それは、知らなかったわ”

“知らなかったって”と、ぼくは叫んだ。

“だって、あなたに妹さんがいたことすら、余りよく知らなかったんですもの”と、少女は言

った。“それに――わたしのことをそんな風に考えてなされたのね”

“だって、他に説明のしようがないじゃないか”と、ぼくは言った。“君は、本当のことを言ってくれないんだもの”

“今は言えないの。それには、事情があるからよ”と、フローラはしんみりとなって言った。“でもいずれ、あなたの思っているようなわたしじゃないってことが明らかとなる日が来るでしょ。今は、そう信じて。そう信じてもらうように頼むしか、わたしには他に方法がないの”

“とするなら、ぼくはどうすればいいんだい？”と、ぼくは言った。“妹は悪魔にさらわれるし、初めて信じられそうな君に会ったのに、本当のことは言えないと言うし”

“あなたはまだ、この国の事情がよく呑み込めていないからよ”と、フローラは言った。“そのうち、分かるときが来るわ”

“じゃ今は、ぼくはどこへ行けばいいんだ”

“とりあえずはあなたのおうちよ”

そう言ってフローラは、再びぼくの腕を取り、ぼくを引っ張って行こうとした。

しかし、本能的というか、ぼくはとっさに彼女の手を振り払った。

“いやだ！”と、ぼくは叫んだ。“その手には乗らない。信じたくはないけれど、きっと君は悪魔の手先に違いない。ぼくは、自分の思うように行く。ぼくは、君の相手なんかしてられないのさ。ぼくには可愛い妹が待っているんだ。彼女を捜しに行かなくちゃならない。じゃあね、フローラ。もう会えないかも知れないけれど、さようなら！”

“シレールさん！”と、フローラは叫んだけれども、ぼくは道を駈けながら、いつのまにか、闇の彼方へと、吸い込まれるように消えて行ったのだった...

ぼくは、真暗闇を走った。ひたすら、この闇が消えるのを祈りながら。

そうして、夜明け近くまでぼくは走ったに違いない。できるだけ彼女から、あの悪魔の手先から逃げようという思いで...

うっすらと、白みかけた明かりで、ぼくは森の木陰にいることに気が付いた。少しばかり眠っていたらしいが、体はゾクゾクするほど寒かった。し〜んと、夜露にぬれた森の中に、やがて幻想的な朝日がさし込み始めて来た。同時に、森のあちこちで、小鳥たちの鳴き声が聞こえて来た。目が覚めると、ぼくは、自分の喉がすっかり乾き、腹がペコペコであることに気がついた。かろうじて、葉にしたたっていた水滴を、ぼくは舌でなめた。それから、やおら立ち上がると、よろよろと、当てもなく歩き始めた。

こんなところ、こんなところでくたばってはならない。でもともかく、何か食べ物が...

そうして、一時間も歩くと、林の向こうに、一軒の農家が見えて来た。ついに食事にありつけるのだ。そう思うや、無我夢中になって、ぼくは農家に向かって駈け出した。最初にたどり着いたのは裏口らしく、そこには鶏がいて、うまそうな生卵が三つ四つ、無造作に、テーブルの上に置いてあった。

それに、切れさしのチーズとパンと。これをほっておく手はなかった。ぼくはためらうことなくそれを手づかみにし、口にほおばった。

とそのときだった。まん悪く、裏口にひとりの老婆がやって来た。多分ここの住人だろうが、ぼくはとっさのことで逃げ場を失った。そうして、身をひそめるのも空しく、老婆と鉢合わせになるなり、

“ギャッ！”と老婆は叫声をたてるなり、その場で腰を抜かしてしまった。

“ちょっと待って下さい。お婆さん”と、ぼくは、老婆の方に向き直り、できるだけ落ち着いた表情で話しかけた。“ぼくは怪しい者じゃございません。ただちょっとこれを、失敬させてもらっただけです。でも安心下さい。ちゃんとその分は払いますから”

ぼくとしてはできるだけ穏やかに言ったつもりだった。だが、その場にへたり込んだ老婆は、体を震わせたまま止まらないのだった。

“あんたのことは...”と、老婆は震えながら言った。“よおく知っている。けさの朝刊に載っていたからな。で、でも命だけは、命だけはお助けを...”

“けさの朝刊？”と、ぼくは驚いて言った。“まさか、人違いじゃないですか”

“間違えるわけではない”と、老婆はなおも言うのだった。“間違いなくあんたじゃ。あんたとそっくりの顔じゃった。もちろんわたしや、誰にも何も言いません。だから、お助けを。お助けを...”

“じゃ、その朝刊とやらを、ぼくにも見せて下さい”と、ぼくは要求した。

“ええ、ええ、その奥じゃ”と、老婆は、部屋の奥を指さした。

ぼくは言われた通り部屋の奥へ行った。すると、別のテーブルの上に無造作に新聞が置かれてあり、ぼくはそれを手に取って調べて見た。

すると、驚いたことに、ぼくの似顔絵が載っているではないか！

しかも殺人犯と書かれ、お尋ね者で、懸賞金までかかっていたのだった。

ぼくは驚いて、その新聞を持ったまま老婆のところへとって返そうとした。だが、裏口を出ても、さっきの場所にはもう老婆の姿は見当たらなかった。逃げたに違いない！ ぼくはハッとなって周りに目を向けた。きっと老婆は、懸賞金目当てに通報に行ったのだ。ぼくはあわてて表の方へと向かった。すると、かろうじて、林の陰に、逃げて行く老婆の後ろ姿が見えたのだった。ぼくは猛烈なスピードで老婆を追った。林の向こうで、老婆は観念したのか振り向いて、恐ろしい形相をこちらに向けた。その老婆に向かって、ぼくは一撃をくらわした。

やがて老婆は、息絶えたかのように、その場にくずおれた。ぼくは、ぼうぜんとその場に立ち尽くすだけだった。片手には、しわくちゃになったあの新聞をつかんだまま...

どうして、いつのまにぼくがお尋ね者になっていたのか、その理由が分からなかった。だがこれで、ぼくが本物の犯罪者となったのも確かなことだった。今後はもう公に、ぼくは姿を現すことはできないだろう。町に出るにしても、みんなに分からないようにしなくてはならないのだ。

ぼくはその農家でたっぴりと食事を取り、鏡の前で変装を試みた。なかなかうまく行かなかったが、自分流につけ髭をつけ、サングラスをすると、なんとか別人になることができた。そして服装を変え、お金も少し足すことにした。

ともかく生き延びること——それだけしかもうぼくの頭にはなかった。

ここでの生活がどんなに険しいか、ようやくぼくはそのことを悟り始めていたのだった。

農家の車を失敬して、山道を走り、ぼくは町へ向かった。ぼくにはたった一つの遠大な目標があった。魔王がさらって行った妹を捜し出すことなのだ。その目的の為には、町で、なんらかの情報を聞き出すしかなかった。それなのに——今やぼくは有名人だった。お尋ね者で、しかも懸賞金まで掛かっているのだ。もしあの老婆が、まだ生きていて、息を吹き返したとしたら、今頃はきっと、村中が大騒ぎをしているに違いない。やはりあの男は凶暴で、その殺人は本物に違いないと。だが、ぼくは誰を殺したというのか？ あの老婆だって、あの程度では死ぬわけではないのだ...

そうしてぼくは再び、この幻想的な、オディープの町に戻って来た。ここには果てがあるのか、ないのか。しかし、町の中心は賑やかで、ちょっとした地方都市を形成しているようでもあった。中央には川が流れ、町を結ぶ対岸の間には幾つもの橋がかかり、車の往来も多く、市電も走っている。中心街には、デパート、ショッピングセンター、劇場その他のビルや事務所などが立ち並び、結構賑わっている。鉄道もあり、駅もある。車道は、碁盤目状に、町のあちこちを走り、ちょっと町はずれだと思えるところでも、まだそれなりの賑わいが存在していたのだった。ところによっては、学校や、静かな住宅街があったりで、その整然とした街の様子がぼくは気に入った。そしてぼくは、見覚えのある街の一角を走っていることにも気づくのだった。そうだ、ぼくの幼少の頃過ごしたことのあるあの庶民的な町の様子に...

ぼくは子供の頃に三度、家を引越したことがあったが、どの場所にも該当しそうな場所が、この町にはあるようだった。その意味でも、このオディープの町は、興味が尽きなかった。しかし、この町では、ぼくは異邦人であり、お尋ね者であることを片時も忘れることはできなかった。幸い、この変装が自分を全く別人に仕立て上げてくれていたおかげで、そう心配はしなかったが、この車だけは早く手放す必要があった。何度も車を走らせているうちに、段々と考えがまとまりつつあった。この町で行動を起こす手初めに、なにはともあれ、ぼくはもう一度、自分の家と思われるあの家に行ってみたいと思った。それが本当に自分の家だったのか、それとも別のものだったのか、その疑問がどうしても頭から離れず、もう一度、この目で確かめてみたいと思ったからだった。それにもしあのフローラがいるならば、彼女を、こちらから監視することができる。

逃げてきたときの記憶を頼りに、あちこち走り回ったあげく、ようやくぼくは見覚えのある町の郊外にさしかかった。確か昨晚、ここを通過して、あの山の中へ逃げ込んだのだった。

そこは、街の中央へと流れる大きな川の上流に当たる寂しい所で、車でその河原までやってくると、その茂みに車を乗り捨てることにした。周りには雑草と樹木しかなく、その寂しい光景の中を、川は、とうとうと流れていた。

車を乗り捨ててから、土手を一気に駆け上がり、ぼくは向こうに掛かる橋へと向かった。確か、あの橋を渡って、ぼくは逃げて来たはずなのだ。

橋の上に回り、橋を渡ろうとすると、対面から、それとなくざわざわするような子供たちの歌声が聞こえて来たかと思うや、直ぐに、その子供たちが姿を現した。大勢の子供たちが、整然と列を成して、橋を渡ってこちらへやってくるようとしているのだ。どうやら、引率の先生に引かれて、山の方へ遠足に行くらしいのだが、彼らの姿がハッキリ見えるにつれて、ぼくはハッとしました。というのも、その子供たちの中に、どうも見覚えのある顔がいくつかあるのが分かり、それが、もう十年以上も昔に別れたはずの幼友達にそっくりだと気づいたときには、身が凍る思いがした。どういうことなのか、さっぱり訳が分からなくなってしまったが、こちらにやってくるのは、間違いなくぼくの幼友達であり、しかも、ぼくはこんなに大きくなってしまっているのに、彼らはまだ小さいままで、学校に残っているらしいのだ。とするなら、後ろからやってくるあの引率の先生は、と目を向けたときには、自分が大きくなって、しかも変装しているのも忘れて、思わず顔を手で隠してしまったほどだった。先生は、あのときそのままの、ぼくの担任の男の先生だった。先生は、後ろの方の子供たちに囲まれて、楽しそうに何かしゃべりながらこちらに向かって来たが、なかなかハンサムな、素敵な容貌だけは、あのときそのままに、少しも変わってはいなかった。

ぼくは、すぐ自分が変装していることを思い出して、やってくる子供たちに道を譲ってやって、彼らが通り過ぎるのを見守っていたが、先生が、通りすぎりにぼくに軽く会釈をしてくれた。多分、ぼくとは知らず、道を譲ったことへの感謝の気持ちを込めて会釈をしてくれたのだろうが、ぼくの胸には既に、言いようのないなつかしさが込み上げていた...

彼らが去って行ったのを見送った後、ぼくは先へ進まねばならなかった。

今の出来事の意味を振り返ることもなく、橋を渡り切った。しかし、もう一度気になって、子供たちの行方を振り返ってみたが、子供たちは、ぼくが車を乗り捨てた河原へと向かっていた。子供たちは河原に降りると、そこで取っ組み合いをしたり、ボール投げをしたり、水をかけ合ったり、思い思いに遊び始めた。ぼくにとっては、車が見つからないかと少し心配だったが、車を置いた茂みまではまだ少し距離がありそうなので、とりあえずはほっとした。そして、車は大丈夫だということを見届けると、いそいそとその場から去って行った。

橋を渡ってから、川沿いの道をしばらく行くと、やがて静かな住宅街が姿を現すようになった。どれもこれもなかなか立派な邸宅で、門構えも素晴らしく、垣根も立派だった。そうこうしているうちに、小さな商店街にさしかかり、ぼくはそこで道を見失ってしまった。なにしろ夜のことだったので、記憶がハッキリしなかったのだ。それで、まるで外来者のように町の中をうろろしている、そんなぼくに声を掛ける者がいた。

“何かお捜しですかい？”

振り向くと、サングラスを掛けた、いかにもいかがわしそうな男だった。

“いや、別に”と言って、ぼくは、その男は相手にせず、そこから立ち去りかけようとした。

しかし彼はしつこく僕を追い掛けて来た。

“ちょっと、いいところがあるんですよ。寄りませんか。決して損はさせません”

そう耳打ちをして来たが、ぼくは相手にせずとっとと歩いて行った。

だが、彼もしつこくつきまとい、

“どうやら何かお悩みのようですね。どうです、そこの休憩室でゆっくり話してみるの？”というのにおよんで、ぼくもとうとう折れることにした。

“ほんの少しだけなら”という条件で、ぼくは彼の後について、休憩室とやらに向かった。

そこは雑居ビルで、一階は書店になっていて、客が何人か入っていた。そこの横の階段を登って行くと、どうやら二階が休憩室になっているらしかった。他にも幾人か、若者が坐り、煙草を吸いながら雑談をしている姿を見て、ぼくも幾らか安心した。男は、ぼくを安心させるように椅子に坐らせると、そのまま奥の部屋へ姿を消した。テーブルに置かれたコーヒを飲んでいるあいだ、しばらくして、男は、他の二人の仲間を連れて、姿を現した。

“それじゃ君、奥の部屋へどうぞ”と、彼は言うのだった。

そのとたん、しまった、はかられた！と思っはみたものの、今さらどうすることもできなかった。まるで連行されるように男たちに両脇をかかえられたまま、ぼくは別室へと向かった。

中に入ると、表とはガラリと変わって、いかがわしいムードに満ちていた。そこにはルーレットがあり、奥の舞台では、裸の女がいかがわしい踊りを披露していた。

“さあ坊や、ルーレットをするんだ！”男の声は、急に威嚇的な、スゴ味を帯びたものになった。

ぼくは、しづしづ従わざるを得なかった。せつかく農家で奪って来た逃走資金をここでムザムザ失いたくはなかったので、ルーレットのあいだ、ぼくは逃げることだけを考えていた。そして、そのときは、案外早くやって来たのだった。

トイレに行きたいと言って、ぼくはトイレにひとり向かった。中に入ると、逃亡にはおあつらえ向きの窓があることを知り、少々のけがは覚悟の上で、そこから脱出することに決めた。

二階の窓から、草むらに落ちたときはさすがに身にこたえたが、幸いたいたケガをすることもなく、そこを脱出することができた。

塀を乗り越え、裏通りをしばらく走って行くと、やがて、ぼくの逃亡に気づいた追手らしい男たちのあわただしい音が聞こえて来た。しかし彼らの姿は見え、彼らをうまく撒けたことに、ほっと胸をなで降ろした。でも、油断は大敵で、ぼくはなおも走り続けた。何度も後ろを振り返り、追手が来ていないことを確認しながら、それでも走り続けた。彼らはギャングに違いなく、もし今度見つけれたら、多分もう命はないだろう、という恐怖におののきながら...

やがて、ぼくは比較的賑やかな市電通りに出て、小高い丘の上に立った。そこからは、この町の様子が見渡せたが、幸いなことに、あのギャングどもの姿はどこにも見られないようだった。足下に広がる町は、ごく普通の活況を呈していた。やがてぼくは悠々とふもとへと坂道を降りて行ったが、途中の塀で、ある昔の偉人の生涯が、まるで絵巻のように描かれているのに出会い、目を止めた。彼が、単なる歌い手から出発し、どうしてこの国の大統領となり、ついには、建国の父と褒められるようになったか、ということについて描かれていたが、その人物については、ぼくの全く見たことのないものだった。

そんなものにみちくさを食らいながら、ようやくぼくはふもとに降りた。

再び広い川のほとりに出会い、対岸の、興味をそそる家々に目を向けた。そこも市電通りだったが、どこをどう行けばいいものか区別がつきかねた。

そのときだった。向こうからぼくに声を掛ける者がいた。

“バスコのお坊っちゃんじゃございませんか”

何を勘違いしているのか分からなかったが、多分この変装が、バスコなにがしに似ているのだろう、とぼくは思った。しかも今回は、さっきと違って、人の良さそうなごく普通の男だった。

“ここにいなすったんですか。随分捜したんですぜ...”

そう言いながら、彼はぼくに近付いて来た。

その瞬間、ぼくはこの際、間違われた男になり切ろうと決めた。

“さあ、帰りましょう”

そう言って、彼はぼくの手を引きながら、いそいそと車の方へ歩き始めた。

なかなか立派な車で、ぼくはその後部座席に坐らされた。車はすぐ出発し、ぼくは車窓から、連れて行かれる道筋を目で追った。しばらく川沿いの道を走ったかと思うと、橋を渡り、さっきのあの美しい対岸の住宅街の方へと車は向かった。それにしても、今日の川はなんと美しいのだろう。橋を渡るあいだ、美しい川の流れへと目をやった。そして、興味をそそる住宅街へ入って行ったとき、そこを歩いている一人の男の姿を見て、ぼくは思わず身を伏せてしまった。さっきのあのギャングの一味だったのだ。

“どうかなさいましたか？”と、運転している例の男は、ぼくに声を掛けた。

“いや、ちょっと...”と、口をにごらせたが、内心は、あの男に見られはしなかったかとドキドキだった。

まさか、あのギャング街へ再び行くのでは、と疑いもしたが、車はどんどんその街から遠ざかって行ったので、再びぼくはほっとした。

どこをどう来たのか、やがて街の一角ではあるが、立派な屋敷の立ち並ぶ閑静な場所へとやって来た。どれをとっても、目を見張るような豪邸揃いだったが、その中でもとりわけ大きくて、立派な御殿のような屋敷の前で車が止まったときには、すっかりぼくは興奮してしまった。これがその、バスコとやらの家なのか...

運転手はそこで車を止め、さっそくやって来て、ぼくのドアを開けると、うやうやしく礼をした。

“ようこそ、お帰りなさいました...”

ぼくは、ここを御殿だと思って、車を降りたが、中に入るとその通りだった。邸に仕える召使や女中たちがぼくを出迎え、その場に立って礼をした。こんな気分は生まれて初めて味わうものだったが、ぼくはまるで王子気分だった。

しかし、そこで彼らと別れて、さらに奥へと進むと、奥は薄暗くて、寂しくて、随分とガラーンとしたものだった。一体いくつ部屋があるものか推りかねたが、階段を上がって行くと、やがてバルコニーにぼくは出た。窒息するような邸内から出て、外の空気に触れたときには、さすがにぼくも気分がよかった。バルコニーに飾られている花や、なかなかきれいにしている、手入れの行き届いた中庭や、それから青い、美しい空を見上げ、ぼくはほっと深呼吸をした。

それからふと振り向いたとき、ぼくの後ろがすぐ部屋になっていて、出入りが自由な大きなガラスの扉で仕切られていることに気が付いた。それで何気なくその中に入って行くことにした。

中は、薄暗い、大きな部屋で、初め、誰もいないと思われたが、やがて目が慣れて来るに従い、ベッドに誰か眠っているように感じられた。それでさらによく見ると、なんと驚いたことに、そこで若い娘が、頭を伏せるようにして眠っていたのだった。髪の毛がおおいかぶさっているその横顔は、もちろん初めて見る顔ではあったが、なかなか美しい顔立ちをしていた。それにしてもこの女性は誰れだろう？

ぼくの音に気づいたのか、やがて彼女は目を覚ました。しかし、ぼくの驚きとはうらはらに、彼女はぼくを見ても驚きもせず、無表情のまま起き上がると、ごく普通にふるまった。

そしてぼくを見るなり、

“お父さんは？”と、彼女はぼくに声を掛けた。

ぼくは、胸の中ではドギマギしながらも、努めて平静を装いながら、首を横に振った。

すると彼女は、ベッドから立ち上がると、ガウンを羽織り、ぼくの前を通り、部屋を出て行った。

ぼくは、あっけにとられたまま、その場に立ち尽くし、そんな彼女の後ろ姿を見守った。そして、真剣に考えた。彼女とぼくとは、どんな関係にあるのだろうか？

ぼくはどうしてよいか分からず、もう一度バルコニーに出ると、手すりに腕をつき、ぼんやりと中庭を見やった。

と間もなくして、部屋の周囲が急にあわただしい雰囲気になって来た。何があったのだろうと部屋に戻ると、一人の召使が急にボタンとドアをあけ、中に入って来た。

“坊っちゃん。叔父さんはお亡くなりになりました”

彼は、ぼくを見るなり、そう告げた。

見たことも、聞いたこともない叔父の死を知らされて、ぼくは一瞬、あわてふためいた。

“さあ早く、おいでなさいませ”

彼に導かれるまま、ぼくは部屋を出たが、案内されたのは隣の部屋で、既に大勢の下男下女が立っているなか、あの彼女も起きたときそのままの姿で、そこに立っていた。そして、大勢の人が見守るその向うの、窓際のベッドの上に、一人の老人が、あお向けに、目を開いたまま、口からは血を吐き、横たわっていた。さらによく見ると、胸の辺りが、ベツリと血に染まっていた。

“明らかに他殺です”と、一人の男がみんなに向かって言った。“死後、そう時間は経っていません。恐らく、一時間か、その位でしょう”

“その頃に屋敷にいたのは？”と別の男が言った。

そして、彼らの視線が一斉に、あの少女の方に向けられたのだった。

少女は、身を震わせながら、必死に踏ん張ろうとした。

“わたしじゃありません”と、彼女は言った。“わたしは昨夜からずっと眠っていました。一度も目を覚ましたことはありません。それにどうしてわたしが、パパを殺さなければならないんですか？”

その言葉で、ぼくには、自分と彼女との関係が明らかとなった。つまり、彼女とぼくとは、従兄妹同士というわけなのだ。それに、ぼくも、彼女がぐっすりと寝込んでいたときのあの様子から、彼女の言葉を信じたかった。そこで、ぼくも口をさしはさんだ。

“彼女は無実です”と、ぼくは言った。“ぼくが彼女の部屋に入ったとき、確かに彼女はぐっすりと寝込んでいたんですから。それに、目を覚ましたときも、ぼくにお父さんのことを尋ね、お父さんのことについては、何も知らない風でした”

その言葉で、居合わせた人々は、そりゃそうだななどと、彼女に同情した。

やがて医師たちが駆けつけて来て、死体を白い布でおおい、外へ搬出しようとした。これから病院で司法解剖を行うのだという。その為に、死体は一時お預けとなるのだった。

みんなが見守るなか、死体が運び出されると、それぞれが、めいめいの持ち場へと散って行った。

そしてとうとうその部屋の中で、汚れた部屋の後片付けをする下女の他には、ぼくと彼女の二

人だけが残った。

彼女は、父親が死んだにしては、割としっかりとしていて、泣く気配すら見せなかった。‘しかし、何か考え事でもあるのか、その場にじっと立っていた。

やがて彼女は振り返ると、そこに立っていたぼくを見た。

“あら、まだいらっしゃったの？”と、彼女は言った。“でも、さっきどうして、わたしのことを名前で呼ばなくて、彼女などとおっしゃったの？ ちゃんと、アリーヌという名前がありますのに...”

アリーヌ！それが彼女の名前だったのか。

“いや、あまり突然のことだったのでね”と、ぼくは弁解した。

“でも、本当にずっと眠っていたのかい？”と、しばらくしてから、ぼくは気になっていた点を尋ねた。

“あら、あなたまで、わたしのことを疑っているんですか？”と、彼女は、怖そうな顔つきになって言った。

“いや、ただ少し気になっていたからさ”と、ぼくは言った。“だって、隣で殺人事件があったんだろう。何か物音とか、うめき声とか、そんな音が聞こえなかったかと思って...”

“わたし、本当にぐっすりと眠っていたんです”と、彼女は言った。“きのうの晩は遅くまでパーティがあって、それにあなただって、どこへ行ってたんですか？ 途中で抜け出したりして...”

身に覚えのないことではあったが、答えないわけには行かなかった。

“いや、少し用事を思い出してね”と、ぼくはなんとかごまかした。

幸いなことに、彼女はそれ以上、深く追求しようとはしないでくれた。

そうこうしているうちに、また一人、召使が駆けて来た。

“犯人が分かりました！”と、彼は息せき切るように、ぼくたちに向かって言った。“下男の本ボです。奴の部屋から凶器も見つかりました。盗みが目的だったようです。たった今、警察に逮捕されて、しょっ引かれて行きました”

そのとたん、彼女は、両手で顔をおおうように、ワッと泣き出した。

無理もない、父親を失い、しかも人々から疑われた辛い思いが、今、一気に吹き出したに違いなかった。ぼくは、そんな彼女の背中に手を当てながら、彼女の部屋へと彼女を送って行った。

部屋の中に彼女を入れ、廊下に出ると、見知らぬ若者の二人組が、ぼくに近付いて来た。さっきの人ゴミの中に確かにいたような顔ぶれだったが、今やその顔つきは、にこやかなものになっていた。

“おい、色男。彼女の具合はどうだ？”と、彼らのうちの一人が声を掛けた。

ぼくが色男だなどと思いもよらないことだったが、この変装がそうさせているのだろう。

“いや、相当ヒドくこたえているようだ”と、ぼくは、男たちの正体も分からないまま答えた。

“そうか”と、男は言った。“でも死体は病院だし、当分は帰って来そうにはないようだよ。こんなところでくすぶっていないで、みんなでいっちょう、パッとやらないか。どうだい？ 彼女も誘ってみては？”

“何をどうしろと言うんだい？”と、ぼくは尋ねた。

“おいおい忘れちゃ困るな。ドライブに行くって約束だったろ？”と、彼は言った。“それともなにかい？ おじきが死んだから行けないとでも言うのかい？ でも、そんなのは理由にならないぜ。世間じゃ、葬式が始まるまではお祭り騒ぎだぜ...”

そういうのも一つの考えだとぼくは思った。それにこの際は、彼らのやり方に従った方が得策のような気がした。沈んでいる彼女を慰めてやる為にドライブに誘う—それは決して悪いことをするようではなさそうなのだ。

“分かった。誘ってみる”と、ぼくは答えた。

“そうでなくっちゃ。じゃ、外で待っているからな”

そう言って、陽気に彼らは、廊下の向うへと去って行った。

ぼくはドア越しに立ち、やがてドアにノックをした。しかし中からはなんの音も、返事も返っては来なかった。それで思い切ってドアをあけた。

すると、彼女は、そこにいたのだ。半ばカーテンの閉められた薄明るい部屋のベッドのそばに、後ろ向きに立って、背中を震わせるようにすすり泣きながら...

“アリーヌ”と、ぼくはそんな彼女に声を掛けた。

しかし彼女は振り向こうともしない。

ぼくはそんな彼女のそばに歩み寄った。

“みんな、君のことを心配しているよ”と、ぼくはもう一度言った。“いつまでもこんなところでくすぶっているのは体によくないしね。それでどうだろう？ みんなドライブに行かないかと君のことを誘っているよ。きっといい気晴らしになると思うよ”

そう言っても、相変わらず彼女は答えようとはしなかった。

それでとうとうぼくは心に決めた。思い切って彼女のそばまで寄ると、そのまま一気に彼女を抱きかかえたのだ。

彼女はその瞬間、驚いた表情になったものの、べつに抵抗するのでもなく、すぐ平静さを取り戻して、ぼくに抱かれるままになっていた。ぼくは彼女を抱きかかえたまま、部屋のドアをあけて廊下に出、そのまま、みんなが待っている玄関へと向かった。

外では、あの二人連れ以外にも、大勢の仲間たちが、他の女友だちも伴って、彼女が出て来るのを首を長くして待っていた。

そこへ、彼女を抱いたままの姿でぼくが現れたものだから、みんな一斉に驚いたみたいだった。

“ヒョウー、スゴいぞ！”と、オープンカーの男たちは叫んだ。

ぼくはそのまま二人分の座席が空いているオープンカーに歩み寄ると、そこへまず彼女を降ろして、すぐ向うに回ると、彼女の隣の座席にぼくも腰を掛けた。すると一斉に車どもはエンジンの音を鳴らし、走り始めた。

空はよく晴れて、スピードにまかせて吹きつける風は、快い、というよりはきついぐらいだった。ときどき彼女の方に顔を向けると、さっきまでのあの悲しそうな表情は、いくらかでも和らいでいるようだった。

やがて車は、広々とした道路に出て、何台も車が並んで走った。そして信号のある交差点までやって来ると、そのライン上に、仲間の車は横一列に並ぶのだった。

“さあ、勝負だぜ”と、ぼくたちの乗っている車を運転している、さっきの仲間が言った。

多分、このまま、仲間の車同士でレースが始まるのだ。

やがて信号が青になると、めいめいの車は一斉にスタートを切った。

スピードもさることながら、それぞれが狂気のように叫び、車同士も互いにすれ合ったり、ぶつかり合うなどして、すさまじいばかりだった。

とても景色をのんびりと見ているどころではなかったのだ。ぼくたちの車も、隣の車の為に、かなりの被害を受けていたが、それはお互いさまだった。

やがて、美しい草原の中を走るようになった頃には、ぼくたちの乗った車が一、二位を争うほど速いようだった。

でも、もうそこがゴールだった。

ぼくたちの車がついに一着でゴールすると、次々と他の車も到着して来た。

そこでは誰彼となしに、草原に出て、持って来たボールでサッカーを始めたり、その向うには静かな川の流れがあって、カヌーに乗ろうと言い出す者もあった。今度はカヌーで競争をしようと言うのだ。蛇行する遙か川の向うは、どのようになっているのか、ここからはよく見えなかった。

二人ずつペアになるので、ぼくも彼女となら、という気がした。

しばらく仲間たちとサッカーを興じてから舟つき場に行き、カヌーの手入れを始めたが、そのときになって、彼女の姿が見えなくなっていることに気がついた。

周囲は広々とした草原で、いるのは一緒に来た仲間ばかりなのに、どういうわけか彼女の姿だけが見えない。ひょっとして、やはりつまらないので、一人帰ってしまったのだろうか。そんな不安にかられながらも、カヌーのレースは着々と始まろうとしていた。第一組の四隻が笛を合図に出発した。めいめい、思い思いの相手に乗せて、必死に漕ぎ始めた。オールのしぶきが顔に当たったりで、川岸にいる見物人どもは、爆笑につぐ爆笑だった。そのうちに、ぼくの順番もやって来るだろう。第二組に当たっている連中は、カヌー乗場にやって来て、

“へーイ、アリーヌは？”と、彼女のことを尋ねた。

彼らも知らないが、ぼくだって知らないのだ。

ぼくはとうとう心配になって、広い草原を捜し回る決心をした。ひょっとすれば、ここからは見えない岩陰や木立の陰にいるのかも知れない。

そうこうして仲間の群からかなり遠く離れまでして捜している最中に、仲間の車がたくさん止まっている所へ向うから一台の車が走って来る姿が見えた。何事だろうと振り返って見ていると、そこから一人の男が降りて来たが、その姿を見ると、なんと変装しているぼくとそっくりの姿をしていた。とうとう本物が到来したというわけなのだ。彼は、落ち着いた物腰で、舟つき場にいる仲間の方へと向かった。

これはヤバイ！とぼくはその瞬間思った。彼の出現により、ぼくの正体が見破られるのはもう時間の問題だった。いち早く察知したぼくは、逃げるが勝ちのことわざ通り、直観と同時に素早く行動をした。彼の乗って来た車の方に走って行くと、幸い鍵はかけたままになっていたので、すぐ乗り込んでそのまま逃げた。幸い彼は、ここから遠く離れた舟つき場に向かっていたので、車の音も聞こえず、このことに気づいて振り向くこともなかった。ぼくは車をUターンさせ、一目散にその場から逃げて行った...

彼と、彼の仲間たちがいる舟つき場から段々と遠ざかって行くにつれ、ぼくはほっと胸をなで降ろした。そして、それらがすっかり視界から消え失せた頃になって、ぼくは思った。多分今頃は、舟つき場では大騒ぎになっているだろう。だが、ぼくが既に、このように車を盗んで逃げているとは、誰も気づいてはいないのだ。

それにしても、とぼくは思った。彼女とカヌーを一緒に乗れなくて残念だったな。そのことが返す返す残念だった。いつまでもにせ者を演じ続けることはそもそも無理な話ではあったが、それにしても、彼女と束の間でも知り合いになれたことは、今となっては幸せな気分をもたらしていた。そして、そんな彼女ともう別れなければならないのかと思うと残念な気持ちがして来た。もっともっと彼女と長くいたかったのに、あんな男、来なければよかったのに。そう思ったとき、あんな彼女をものにしてしているあの男のことが、憎らしくさえ思われて来た。いっそのこと、彼をこの世から抹殺して、ぼくが本物になりすまそうか——ほんの一瞬、そんなことも想像してみたが、彼が現れてしまった今となっては、もう後のまつりだった。もうぼくのは、彼の仲間全員に知れ渡ってしまっているだろうから...

そんな風に、しょうすいた気持で車を走らせているとき、一瞬、幻ではないかと目を疑ったのだが、草原の向うの方に、一人の少女が疲れたような歩きっぷりで、草原を横切っている姿が見えて来た。その瞬間、彼女では？ とぼくは思ったのだ。とたんにぼくの心は、パッと明るくなった。さっきのときは、もうぼくのは全員に知れ渡っているだろうと思い、絶望もしたのに、そうではなかった。まだそのことを知らない人が一人いて、しかもそれがまさに彼女自身だったのだ。ぼくの心は希望に燃え上がった。

ぼくは嬉しさの余り、飛び上がりたいほどだった。彼女に対してなら、ぼくはまだ立派に本物で通用するのだ。そしてこのままずっと本物でいたい。いや、い続けたい。そんな願望が心の中に燃え上がって来た。彼女と一緒にいる為なら、どんなことでもできそうなそんな気がして来た。

ぼくの車が走り、その行き先に、草原を横切る彼女の姿が近づいて来るにつれ、彼女は、もう間違いなく、あのアリーヌだということが分かって来た。

広い、草が波打つような草原を、白いドレスを着て、優雅に、髪の毛やスカートをなびかせている彼女の姿は、まるで一服の絵画を見るように美しかった。

ぼくは、道路ごしに、そんな彼女に近付き、

“アリーヌ！”と声を掛けた。

すると彼女は振り向いた。青い空と、黄色い草原とを背景に、その顔は、まるで輝ける太陽のようだった。

“あら、レナート。どうしてここに？”と、彼女は、いぶかしげな表情で、ぼくを見つめながら言った。

“君のことが心配になって、捜し回っていたんだよ”と、ぼくは窓ごしに、彼女に言った。“やっぱり、ここへ連れて来たのは、いけなかったのかい？”

“いえ、あんたが連れて来てくださったのは、嬉しかったわ”と、彼女は言った。“でも、こんな気持のままじゃ、みんなに迷惑がかかると思って...”

“それで、ひとり帰ることにしたのかい”と、ぼくは言った。“分かるよ、君の気持。でも、せめて、一言ぐらい告げてくれればよかったのに。それに、歩いて帰るなんて、無謀だよ”

“悪かったわ”と、彼女は言った。“あんたが、みんなと、あんまり楽しそうにしていたものだから。それに、声は掛けたのよ。あんたには聞こえなかったようだけど。それで一人で帰ることにしたの。天気があんまりいいもんだから。草原を歩くって、本当に気持がいいわ”

“でも、どれだけかかると思うんだい？”と、ぼくはあきれて言った。“アリーヌ。ぼくの車にお乗りよ。そして、一緒に家に帰ろう”

そうは言ってみたものの、本当に家に帰れるかどうか疑問だった。もう無線か何かで、ぼくの正体は、家にまで通報が行ってるかも知れない。その瞬間、ぼくは、いっそのこと、彼女を誘拐して、どこかで自分の正体を告白しなければ、という気がした。自分の正体を告白して、そんな自分のことを、彼女に知ってもらうのだ...

何も知らないアリーヌは、まだもう少し草原にいたような表情だったが、ぼくのその誘いで、乗ることに決めてくれたようだった。やがて彼女はドアを開けて、助手席に乗り込んだ。

ぼくは黙ったまま、車を走らせた。

今や、ぼくの横には、あのアリーヌがいるのだった。このままぼくは、どこか遠くへ、遠くへ行きたかった...

しかし、走るとすぐに、草原のあいだにあの川が見えて来て、川の上ではまさにレースの真最中で、四隻のカヌーが、今や縦一列となって進んでいた。

いけない！とぼくは驚いたが、幸いなことに第一組の連中で、ぼくのかたちはまだ知らないかも知れなかった。

アリーヌは、車に乗りながら、そんな彼らに思い切り、手を振った。

ぼくはどんな反応が起こるか身構えたが、カヌーに乗っている彼らも、ぼくたちに気づき、素直に、力いっぱい手を振ってくれた。

やはり彼らも、アリーヌ同様、ぼくのかたちはまだ伝わっていなかったのだ。それで、ぼくも安心して、彼らに手を振った。

“レナート、ペドロの舟が一番よ”と、アリーヌは、興奮した面持ちで言った。“ゴールはどこなの？”

“さあ知らない”と、ぼくは運転しながら言った。“でも、もう帰らなくっちゃ...”

“いえ”と、そのとたん彼女は言った。“やはり、引き返しましょうよ。このまま帰るなんて、みんなに悪いわ。それにレナート、あんたも乗りたいでしょ？”

ぼくは、その言葉で、何かに殴られたときのような一撃を感じた。

“でもアリーヌ！”と、ぼくは言った。“もうレースは終わっているよ”

“それでもかまわないわ”と、彼女はなおも言い張るのだった。“みんなの待っているところへ行きましょうよ”

ぼくはもう、どうしていいか分からなかった。

このまま強引に、彼女の意に反して、車を走らせるべきなのか、それとも、みんなのいるところへもう一度引き返して... いやいやそれはできない相談だった。それは余りにも危険すぎる！

にもかかわらず、ぼくの手は、やけになって、ハンドルを切り返していた。車は、道路上でUターンをし、再び、みんなのいる方向へととって返した。

ぼくが黙ってそんな動作をくり返したので、アリーヌは、少しぼくのことを、気にかけてくれたようだった。

“あんた、あまり行きたくなさそうなのね”と、やがてアリーヌは、ぼくに向いて言った。“どうしてなの？”

“決まっているだろう”と、ぼくは、振り向きもせず、道を見つめたまま答えた。“君と、二人っきりでいたかったからさ”

“でもレナート、あなた少し変よ”と、彼女は、ぼくを見つめながら言った。

“何がさ”と、ぼくは、少し腹を立てて言った。

“あなたのそのお髭...”

そう言われて、ぼくはルームミラーで、自分の髭を見た。

すると、なんと、少しばかり、つけ髭がはがれかけているのだ。それに気づいた瞬間、ぼくは、ゾットしたが、それ以上に驚いたのは彼女の方だった。

“レナート、あんたは本当にレナートなの？”

今になってやっと気づいたのか、彼女は恐ろしそうに言った。

ぼくは一瞬、どう答えればよいのか分からず、じっとハンドルを握ったままだった。

“そうじゃない”と、やがてぼくは言った。“実は、そうじゃないんだ”

“なんですって！ レナート”と、彼女は、なおも信じられないといった表情で言った。

“ぼくはレナートじゃなくて、別人さ”と、ぼくはついに心に決めて言った。“実は、この町ではよく知られたお尋ね者さ。でもぼくは、何もしていない”

そう言ってぼくは、今や、変装のすべてをはぎ取った。

つけ髭を取り、サングラスを取ると、すっかりぼくの素顔が現れたが、それを見て、彼女は驚いたようだった。

“誰なの？ あんたは誰なの？”と、彼女は、ぼくから遠ざかるようにドアの方に、位置をずらしながら言った。

“じゃまだ、新聞の記事は知らないようなんだね”と、ぼくは言った。“ぼくを、まるで殺人者のように書きたてた奴がいるんだが、ぼくは、人なんか殺しちゃいない...”

“あんたが...殺人者...ですって...”

彼女は、もう声が出ないほど脅えながら言うのだった。

“それで...わたしを...どうしようって...いうの...”

彼女は今にも泣き出しそうだった。

そのときだった。ちょうど道の向う側から、恐らくぼくを追う為に走って来る車の群が見え始めたのは。

もう今さらUターンするのでは間に合わなかった。

あの車の連中こそは、もうぼくの正体を知って、大騒ぎをしているに違いないのだ。

頭にカーッと血の昇ったぼくは、ハンドルを切って、草原の中に突っ込んだ。そしてそのまま、力いっぱいアクセルを踏んで、無我夢中で、草原の中を走り始めたのだった。

おかげで車内はヒドク揺れた。今にも泣き出しそうな彼女も、車の中で、必死になって体を支えようとした。

車はどんどん道なき道を通り、草原を登って行った。体が揺れながらも、バックミラーを見ると、どういうわけか追手の群れは、道路の脇に車を止めたまま、それ以上追って来ようとはしなかった。

ぼくはそれ幸いとばかり、どんどん先へと車を進めて行った。

周りは青い空と、広がる草原とで、目を見張るほど美しかった。

今や完全に追手たちを振り切って、彼女と二人きりだった。

アリーヌは、恐怖を乗り越えて、今や疲労で、ぐったりになったように目を閉じていた。

それで、ぼくは少し気をゆるめて、車を止めると、その場で静かにタバコを吸おうとした。これからどうすべきなのか、ゆっくりと考えたかったのだ。

窓から見える限り、まだ草原は、ずっと上の方まで続いていた。ところどころ木立があり、小さな川が流れている。ぼくは、雲ひとつない真青な空を、ぼんやりと見つめた。

そのときだった。急にドアが開くなり、アリーヌが車の外に出て逃げ出したのだ。

“アリーヌ！”と、ぼくは叫んで、すぐ追いかけた。

彼女は、美しいドレスを着たまま、必死に逃げた。上の方へと、一度ころびながらもまた立ち上がって、必死に逃げようとした。

しかし、彼女に追いつくのは時間の問題だった。車から100メートルも走ったろうか、そのときになってとうとう彼女に追いついた。

彼女の手をしっかりと握ると、彼女は振り向き、髪の毛を振り乱しながら、まるで狂気のように、必死になって、もう一方の手で、ぼくに殴りかかろうとした。しかし、そんなことで、ぼくが参るはずもなかった。

“アリーヌ、落ち着いて！”とぼくは、防戦に努めながら言った。

やがて彼女は、とうてい勝ち目がないと観念したのか、その場に倒れ込み、そのまま激しく泣き出した。両手で顔をおおい、背中を震わせながら、その場にくずおれてしまった。ぼくはその場に立ったまま、そんな彼女を見守った。

“わたしを殺すのなら...早く殺して...”とやがて彼女は、そのままの姿勢で言うのだった。“早く...ひと思いに殺して...”

“ぼくが君を殺す？”と、ぼくは言った。“ぼくは君に何もしやしないよ。そんなつもりはない”

そう言うと、ようやく彼女は振り向いた。その目は、涙が枯れるほどに、真赤に泣き腫らしていた。

“じゃ、どうしてわたしを誘拐したの？”と、彼女は言った。

“仕方がなかったからさ...”と、ぼくは、うなだれるようにして言った。そしてちょっぴり、こうも付け加えた。“それに、君が余りにも可愛かったから...”

そう言うと、アリーヌは、涙顔ながら、わずかに微笑んだ。

“それじゃ、初めから誘拐するつもりじゃなかったんですか？”と、彼女は、少しばかり心の落ち着きを取り戻して言った。

“もちろん！”と、ぼくは答えた。“君をおどかすつもりなんて、ひとつもなかったんだ。ただ町を歩いていたら、誰かがぼくをレナートと間違え、成り行きでこんなことになってしまったんだ。ぼくはレナートを演ずることはもちろん、君と会うことさえ、知らなかった...”

“じゃあなたは、変装でレナートを演じたんじゃないんだと...”と、アリーヌは言った。

“レナートが誰だか、それすらぼくは知らなかったんだ”と、ぼくは答えた。

“でも、レナートと、余りにも似ていたわ”と、彼女は言った。

“それは偶然、全くの偶然の一致さ”と、ぼくは応えた。“自分でも、本物を見て驚いたぐらいだ”
“本物を見たって？”と、彼女は尋ねた。

それで、彼女を捜していたとき、本物が現れたので、その車を奪って逃げたときのいきさつについて、彼女に言って聞かせてやった。するとようやく、彼女も納得してくれたようだった。

“でもどうして、そんな変装なんかなさったの？”と、最後に彼女は尋ねた。

“だからさっきも言っただろう”と、ぼくは言った。“ぼくはいつのまにか、お尋ね者になっていたのさ。殺してもいけないのに、殺人罪という罪名で。だから、このままの顔で町に出歩くわけにも行かず、自分なりに変装したのがまずかったのさ。それがよりによって、君のレナートにそっくりだったなんて！——でもおかげで君に会えたんだから、ぼくは後悔はしていないよ...”

そう言うと、彼女もやっと笑顔に戻った。今や、草原に膝をつき、立ち上がろうとしていた。

さっきの乱闘のおかげで、無残にも彼女の白い、きれいなドレスは、泥だらけだった。

“じゃ本当に人殺しはやっていないのね”と、彼女はもう一度念を押した。

“ああ、やっていないと誓うよ”と、ぼくは、手を上げて言った。

“そして、わたしに対しても、何もしない”

“もちろんだとも”と、ぼくは答えた。

アリーヌは、それですっかり安心したのか、ようやく立ち上がった。

“それで、本名はなんとおっしゃるの、レナートのにせ者さん”と彼女はぼくを見て言った。

“シレール。シレール・ホールバラさ”と、ぼくは答えた。

“シレール！”と、彼女は言った。

美しいアリーヌの口から、ぼくの名がくり返されて、ぼくは嬉しい気がした。

“なかなかいい名前ね”と、アリーヌは言った。“それで、おいくつなの？”

“はたちだよ。それで君は？”と、ぼくは尋ね返した。

“十八よ”とアリーヌは答えた。

“そうか。やはり年下だったんだね”と、ぼくは嬉しくなって言った。

“どうして？ わたしが姉さんだったら困るの？”と、アリーヌは、そんなぼくを見て言った。

それからぼくたちはもう一度、自分たちのいる場所の周りを見渡した。

100メートルほど向うの下の方に、ぼくたちの乗って来た車が、草原に打ち捨てられている。そのそばに、栗の木立がある以外、見渡す限り、黄色の草の群れだった。この日一日を、あれほどまで照らし続けてくれた太陽も、今ようやく、西の空へと傾きつつあった。その光のせいで、ぼくたちの影が、草むらに二つ、映っていた。

“それで、これからどうするの？ シレールさん”と、アリーヌは言った。

“もちろん君を返すさ”とぼくは答えた。“それで一件落着、だろ？”

“それであなたは？”と、アリーヌは尋ねた。

“ぼくのことには心配ない”とぼくは言った。“もうレナートにはならないけれど、もう一度変装し直して、町に行くさ。もっともその変装が、また別の人と間違われちゃ困るけどね”

そう言ってぼくが笑うと、彼女も一緒になって笑った。

“おかしな人”と、彼女は、笑いながら言うのだった。“それで変装して、何をなさるおつもりなの？ 銀行強盗。それとも泥棒？”

“そうか。それを言うのを忘れていたね”とぼくは、頭をかきながら言った。“ぼくは、インゲルートへ行こうと思っている”

そう言ったとたん、彼女の顔は険しくなった。

“インゲルート！ またどうして？”と、彼女は尋ねた。

“だってそこに、誘拐されたぼくの妹が待っているからさ”と、ぼくは答えた。“ぼくには、君と同じ、十八になる妹がいたんだ...”

そうきり出してから、彼女が信じようと信じまいと、ぼくの身に起こった話しを、彼女に言って聞かせた。すべてを話し終えても、アリーヌは、信じられないといった顔で、ぼくを見つめた。

“こんなことを君に言ったのも”と、ぼくは最後に言った。“君なら、ぼくの話しを信じてもらえろと思ったからさ。実にバカバカしいと思うかも知れないけれど、これは、ぼくの身に本当に起こったことなんだ...”

アリーヌはしばらくぼくを見つめていたが、やがてふと言った。

“でもどうしてあなたが、指名手配なんかになったんでしょうね”

“知らない”とぼくは、吐き捨てるように答えた。

“でもおかしいわね”と、アリーヌは言うのだった。“それについて考えたことはない？ 何か、その裏に魂胆があるのかも知れないわよ”

“魂胆？”と、ぼくは尋ね返した。“どんなたくらみさ”

“さあ、分からないけど...”と、アリーヌは答えた。“でもおかしいでしょ。あなたがフローラという女の子を振り切って逃げたら、その翌日にはもう指名手配になっていたなんて。何か、そのフローラという女の子と関係があるのじゃないかしら。これは、わたしの勘ですけどね”

“あのフローラが、ぼくに何かたくらみでもしているとでも言うのかい？”と、ぼくは尋ね返した。“それじゃ一体何んの為にさ”

“ですから、そここのところは分からないと言ってるでしょ”と、アリーヌは答えた。“いずれにせよそのおかげで、あなたとわたしとは出会うことになったわけね”

そう言って、アリーヌはぼくを見た。

ぼくもそんなアリーヌを見つめた。

“そうさ”と、ぼくは、顔をほころばせて言った。“どこの誰かは知らないけれど、そんな記事を書いてくれた奴に乾杯さ。おかげで、可愛い君に会えたんだもの”

そう言うと、アリーヌもにっこりした。

その瞬間、ぼくは、アリーヌを抱き寄せると、その頬にそっとキスをした。

甘い、柔らかい風が、この明るい草原に吹き渡っていた。ぼくはしばらくアリーヌを抱いたまま、放しはしなかったが、アリーヌも、その行いに対して、抵抗する気配も見せなかった。やがてぼくはそっとアリーヌを放したが、アリーヌはじっとそんなぼくを見つめるだけだった...

“さあそれじゃ、車へ戻ろうか”と、ぼくは、やや力を落として言った。

ぼくがまず車のところへ戻って来ると、続いて彼女も、ぼくの後から車に戻って来た。

ぼくは彼女を車に乗せると、運転席に戻ってハンドルを握った。エンジンをかけ、スタートすると、再び車は、草原の中を、大きく揺れながら走り始めた。

“でも、あなたの冒険って、面白そうね”と、しばらくしてから、彼女はぼくに話しかけた。“このままわたしを家に帰す気なの？”

“そうさ。だって家ではきっと、君のことで大騒ぎをしているだろうから、一刻も早く返してあげなくちゃ”と、ぼくは言った。“それに、君のお父さんの葬式もあるだろうしね”

“でも、そんなことすれば、あなた、つかまるわ”と、アリーヌは言った。

“大丈夫。安全なところで君を降ろすからさ”と、ぼくは答えた。

ぼくも、このままアリーヌと別れるのは忍びなかったが、やがて、アリーヌがそれ以上に別れたくないと思っていたことが分かった。

“ねえ、こういうのはどう？”と、やがてアリーヌは言った。“いっそのことわたしがあなたの冒険にお供するっていうのは？ 一緒に、そのインゲルートまで、あなたの妹さんを捜しに行きましようよ”

そんなことをアリーヌが急に言い出したので、ぼくは驚いてしまった。

“正気かい？ アリーヌ”とぼくは言った。“でも君は、家があるだろ？ お父さんの葬式だって、まだ済ましていないし...”

“葬式なんて”と、アリーヌは少し悲しそうに言った。“死んでしまえば同じことよ。それに、家にはもう誰もいないわ。わたしと親しい人なんか、もう誰も...”

“お母さんや、兄妹は？”と、ぼくは尋ねた。

“いないの”とアリーヌ。

“じゃ、例のレナートは？ 彼がいるじゃないか”とぼくは言った。

“あのレナートね”と、彼女はため息をつくように言った。“きっと彼は、あの家をのっとるつもりよ。そして、遅かれ早かれ、わたしはあの家から追い出されてしまう...”

“でも君たちは、仲が良かったんじゃないのかい？”と、ぼくは意外に思って尋ねた。

“仲が良さそうなのは、あくまで表面上のことだけ”と、アリーヌは落ち着いて言った。“彼の下心ぐらい、わたしにはとっくに分かっていたわ”

“じゃ君は、あのレナートを愛してたのじゃなかったのかい？”

ぼくは、恐る恐る尋ねて見た。

“愛してた？”と、彼女は、ぼくに振り向いて言った。“とんでもない！ 心の底では憎みさえしていたわ”

それで彼女が冒険に連れて行って欲しいと言った理由が、よく分かった。

そして、レナートを愛していないと言ったことが、彼女をぐっとぼくに近付けた。だが、そんなに簡単には、彼女の気まぐれで、彼女を連れて行くわけには行かなかった。二人連れなら目立つうえに、彼女が足手まといになるかも知れないからだ...

“やはり君を連れて行くことはできないよ”と、やがてぼくは冷酷にも言った。

“どうして？”と、彼女は振り向いた。“家に帰ったって、わたしには、もう何もないのよ。愛していたパパはいないし、後は、親しくもない人ばかり。ねえお願い、そう言わないで連れて行ってよ”

彼女は、懇願するように、今にも泣き出しそうな顔になって言った。

“そんな、だだっ子みたいなことを言うんじゃないよ”と、ぼくは運転しながら言った。

そうこうしているうちにも、車は草原からやっと脱して車道に出た。もう奴らの車は、どこにもないようだった。夕陽はどんと沈みかけ、空の雲が、最後の美しい姿を見せていた。舗装道の脇に立つ一本のブナの木が、西陽を浴びて、ザワザワと激しく風に揺れている様が見えた。その木の葉の揺らめきが、ふと、いつか、どこかで見たような思いが、ぼくの心の中に立ち昇った。

彼女はとうとう車の中で、まるでだだっ子のように泣き出してしまった。

しかしぼくにはどうすることもできなかった。でもとうとう、この手のやける子にひとつの取り引きを思いついた。

“じゃあこうしよう”と、ぼくはアリーヌに言った。“この件で一段落すれば、必ず君を呼ぶことにするって。それなら別にかまわないだろ？”

“でもそれはいつのことなの？”と、泣き伏していたアリーヌは、突然顔を上げて言った。

“それは分からない”少し考えてから、ぼくは言った。

“そんなの、いやよ。いつになるか分からない約束なんて”

アリーヌは再び激しく叫び出した。そしてまた、しくしくと泣き始めたのだ。

全く困った子だ、とぼくはそんなアリーヌを見て思った。

このままじゃ、返すところに来て、彼女が素直に帰るかどうかわからない。それにもし彼女がぼくを憎みでもして、ぼくを誘拐犯呼ばわりでもすることになれば、それこそぼくの立場はますます危うくなる。

ところが車を走らせているうちに、それどころでないことが段々とぼくにも分かって来た。道に出たときからどうも変だとは思っていたが、どうも違う道を走って来たらしいのだ。予定の時間をとくに過ぎても、町らしい町には出会わなかった。辺りは、相変わらずの草原地帯で、もうほとんど薄暗くなりかけていた。

“アリーヌ、どうも道を間違えたらしいよ”と、ぼくは心配になって言った。

すると逆に彼女は、泣いていた顔から笑顔になるのだった。

“そう、じゃあもう少し長くあなたといられるわけね”とアリーヌは言った。

“引き返そうか。それとももう少し走って。待てよ、向うに何か見えて来た”

確かに、この寂しさでは意外なほどの一軒家が、沿道の少し入ったところに、窓明かりのともった姿で見えて来た。

ぼくはそのそばに車を止めて、車から降りた。

“ちょっと尋ねて来るからね、そこでじっとしているんだよ”

そう言うと、アリーヌは、車の中で、分かったというようにうなづいた。

見たところ、一見農家のような感じだったが、それにしても家畜がどこにも見られなかった。

玄関のベルを鳴らし、中の反応を伺った。すると、しばらくして、人の来る気配が感じられた。

突然ドアが開いて、中から姿を現したのは、あごひげを生やした、一見熊のような感じのする、人相の悪そうな男だった。

“なんだね？ こんな時間に”と、ぼくを見るなり、男は言った。

ぼくは、その男の荒々しさに圧倒されそうになりながらも、なんとか気を保とうとした。

“どうも道を間違えたらしいんです”とぼくは言った。“オディープへはどう行けばいいんです？”

“今からオディープかい？”と、男は車の中を覗き込むようなそぶりを見せながら言った。彼の目には、薄暗がりながらも、きっとアリーヌの体の一部が見えたに違いないのだ。“こんな暗がりなら、また道に迷ってしまうぜ。もうどこへも行かん方がいいと思うがな”

彼はきっとアリーヌを見てそう思ったに違いないとぼくは直感した。

“でも、急がなくっちゃならないんです”と、ぼくは強く主張した。

“いや、明るくなってからの方がいい”と男は今や冷静になって言うのだった。“悪いことは言わん。今晚は、ここで泊まりなさい”

“でもそんな、迷惑をかけるわけには...”と、ぼくは恐ろしくなって、声を詰まらせた。

ところが男は、薄ら笑いを浮かべながら言うのだった。

“迷惑なもんか。そりゃ、ホテルのように、というわけには行かないがな。でもお金は一銭も取

りやせんよ”

“でも、ぼくひとりだけじゃないんですよ”とぼくはついに言った。“ぼくには連れが、あの車の中にいるんです”

“分かってるよ”と、男はなおも冷静に言った。“二人連れなんだろう？ それぐらい泊まる部屋はあるさ”

どう言ってもこの男には通用しないことがぼくには分かった。でもその裏に、なにかたくらみでもありはしないかとぼくは心配だったのだ。

“分かりました。じゃ一度、ぼくの連れに聞いて来ます”

そう言って、ぼくはその男から離れて、車へ舞い戻った。

“どうだった？”と、車の中ではさっそく彼女が聞いて来た。

“なんだかあやしい男だ”と、ぼくは小声で話しかけた。“オディープへは、この暗さでは行けないんだって。それで今晚は、自分の家に泊まれだつてさ。どうする？ 泊まるとしても気をつけた方がいいと思うんだがな。宿泊料は無料だつて”

すると、ぼくの意に反して、意外とあっさりと彼女は言うのだった。

“面白いじゃない。泊まりましょ”

“――でも、なんだか不気味だよ”と、ぼくは驚いて言った。“それでもいいのかい？”

“だって他に方法がないじゃない”と、彼女は、車内から、男の方を見つめながら言った。“大丈夫よ。わたしだって、警戒はしているから”

“じゃ、ぼくたちはどういう関係？ 兄妹？ それとも恋人？”

“もちろん恋人同士よ”と、彼女はあっさりと言ってのけた。

“分かった。じゃ、そう伝える”

そう言って、ぼくは車から離れた。

再び男のところへやって来ると、ぼくはこう言った。

“本当によろしいんですか？ 今晚、ここに泊まらせてもらっても”

“もちろんさ。困っている人を見捨てるわけには行かないからな”と男は言った。

本当にそう思っているのか疑問ではあったが、この際、ぼくはこの不気味な、見知らぬ男に従うことにした。

“じゃあさっそく部屋へ案内しよう”と男が言ったので、ぼくはアリーヌに、手で合図を送った。

すると車の中から彼女が、初めて姿を現した。男は、入口に立ち止まったまま、そんな彼女をじっと見つめた。そのうち彼女がそばにやって来ると、男は、彼女のことは無視した様子で、ぼくを中へ案内した。

“食事はまだなんだろう？”と、中に入るなり男は言った。

室内は、粗末なテーブルが中央にあり、壁にはゴタゴタと様々な農機具や、狩猟用の銃などが置かれていた。テーブルには、まだ湯気の立っているスープがあり、ぼくの食欲をさそった。

“ええ、まだですが”と、ぼくは答えた。

“そりゃちょうどいい”と男は言った。“ちょうど今、晩飯を始めようとしていたところだ。君たちの分ぐらいはありそうだから、部屋を見たら、さっそく食事をするがいい...”

“それは助かります”と、ぼくは、男の好意に甘えることにして言った。

明かりは、ここまで電気が来ていないと見え、全部、灯油のランプだった。男は、そのランプの火を別のランプに移し変えると、それを持って、二階へとぼくたちを案内した。古びた木の階段を登り始めると、それは不気味な音をたててきしんだ。

“足下に気を付けてな。なにせ、この建物は古いもんでな”と、男は先導しながら、ぼくたちに言った。

彼が案内してくれた二階の部屋は至って簡素なものだったが、ベッドだけはちゃんと二つあった。念のためにドアの鍵を確かめたが、鍵だけはちゃんとかかっているみたいで、ぼくはほっと胸をなで降ろした。男は、部屋のランプに火をともし、

“それじゃなるべく早くな。スープがさめるといけないから”と言って、ひとり部屋から出て行った。

階段のきしむ音が次第に小さくなった頃、ぼくは初めて、ランプで照らし出されただけのこの薄暗い部屋にアリーヌと二人きりでいることに気が付いた。

彼女は、痛んだ板張りのできた壁のある部屋の隅に、薄明かりに照らし出されて立っていた。今晚は、この部屋で彼女と寝るのだと思うと、思わずドキリとした。

“今晚はここで泊まるようだね”

そう言ってぼくは窓辺に近寄り、そこから外を見た。

月明かりが草原を照らし出し、それは息を呑むような美しい夜の光景だった。しかし風は相当強いらしく、窓や雨戸をガタガタ揺らす音でそれは分かった。ぼくたちの乗って来た車が、窓の下の方に、打ち捨てられたように、置いたままになっているのが、ここからも見えていた。

“もし何かあれば...”とぼくは考えた。“この窓から飛び降りれば、あの車に乗って逃げることができるな”

しばらく外を見てからぼくは振り向いた。

するとアリーヌは、部屋の隅にあった鏡に向かって、薄明かりの中で、髪の手入れをしているようだった。その美しい顔が、鏡を通して、ぼんやりとぼくにも見えた。

ぼくは思わず彼女の傍らに歩み寄り、その両肩に手を当てた。すると彼女は、ほほえむような顔つきで振り向いた。

“嬉しいわ。今晚は、あなたと二人きり”と、彼女は言うのだった。

“本当は、そんな予定じゃなかったんだがね”とぼくは答えた。“でも気を許しちゃいけないよ。相手は、なんだか怪しそうなんだから”

“分かってるわ”そう言うと、アリーヌは、ぼくの手にはキスをした。

ぼくも、そんなアリーヌの頬にキスをした。

五分ほどして、ぼくたちが下に降りて来ると、遅いとばかり、男はテーブルで待っていた。しかしそのことについては何も言わなかった。

“さあそこだ、お掛けなさい”と彼は言って、二つの椅子を指図した。

テーブルの上には、うまそうなスープや、じゃがいも、肉などの料理が並んでいた。さっそくぼくたちは食事を始めた。腹が減っていた胃には、なかなかこたえる味だった。

“ところで君たちは”と、やがて男はポツリと言った。“オディープは初めてなのかね？”

“いえ、あそこから郊外へドライブに来ました”とぼくは答えた。“ところが帰るときになって、どうも道に迷ったらしいんです”

“そうか。じゃあ単にドライブに来ただけというわけか”と男は納得したように言った。“それじゃ今頃は、親が心配しているだろ”

“ええ、まあ...”と、ぼくは少しばかりぎこちなさそうに答えた。“そういうところですよ”

“でも大丈夫だ”と男は言った。“朝になれば道に迷うことはないからな”

それから、あまり会話もはずまず、ぼくたちは食事を終えた。男は、色々ぼくたちの関係をさぐろうとしたが、ぼくは適当な嘘も交えて、表面的に答えただけだった。

“じゃあ、どうもすみませんでした”と言って、ぼくたちは席を立った。

“ああ、かまわんよ”と、男は、ぼくたちを見て言った。“それから、部屋を間違わんようにな。奥にも色々部屋があるんでな”

薄暗がり、そんな風には見えなかったが、きっと男の言うことが正しいのだろう。

ぼくたちは部屋に戻って鍵を閉めると、ほっとした。これで今晚は、なんとかしのげそうなのだ。

“思っていたほど怪しそうな男じゃなかった”と、ぼくは部屋に入るなり言った。“いろいろとぼくたちのこと、詮索しようとしたけれど、うまくかわしてやった。だって、ぼくと君とは、けさ、会ったばかりなんだからね。——でも、こうしていると、ずっと前から一緒だったような気がするよ”

そう言って、疲れが出たせいか、ぼくは背伸びをした。

“わたしもよ”と、アリーヌも言った。“あなたとは、なんだかずっと前から一緒だったような気がするわ。それで、どちらであなたは寝るの？”

“どちらでもいいよ。君に任せるさ”とぼくは答えた。

するとアリーヌは、窓に近い方のベッドを選んだ。ということは、ぼくは反対に、ドアに近い方のベッドとなった。

“それじゃシレーンさん、少しばかり向うを向いて下さらない？”と、やがてアリーヌは言った。その意味するところが分かったので、ぼくは黙ったままドアの方に目を向けた。

ところが、その近くには鏡があり、鏡ごしに窓明かりに照らされたアリーヌの姿が映っているのだった。彼女が、服を脱ぐ姿が見えて、ぼくは思わず目を見張った。しかし、下着姿になっただけで、そのままアリーヌは、ベッドにもぐり込んだ。

“もういいですよ、シレールさん”とアリーヌが言ったので、ぼくは振り向いた。

“アリーヌ”と、ぼくは、窓明かりに照らされた彼女の寝姿を見て言った。“君はとっても可愛いね。なかなかの美人だ。こんなところで会えるなんて、思ってもみなかった...”

“会って、よかったと思う？”と彼女は尋ねた。

“思う”とぼくは答えて、それから彼女の唇にキスをした...

風の音がきつくて、なかなか眠れそうになかったが、疲れていたうえ安堵感が手伝ったせいか、やがてぼくは眠ったように思う。

気が付くと、もう部屋は明るくなっていた。明るい日ざしが窓からさし込み、どこからか、しきりに鳩の鳴く声が聞こえて来ていた。しかし、異常に頭が痛いのが気になった。多分、何か、薬物でも飲んだような、そんな気分だった。そして、その重々しい頭のまま、ぼくはアリーヌのベッドの方に目を向けた。

“アリーヌ”と、ぼくは声を掛けた。が、そのときになって、彼女のベッドに彼女がいないことに気がついた。どうしたのだろう？ 掛け布団が無造作にベッドの隅に打ち捨てられたようになっていたので、今しがたベッドから出て行ったような感じだった。それで余り気にも止めることなく、彼女は顔を洗いに行っているのだろうぐらいにしか、ぼくは思わなかった。

それからぼくはゆっくりとベッドから起き上がって、窓から外を見た。美しい草原だった。朝日を浴びて、木立が長い影を落としている。木の葉が風に揺れ、朝の光を浴びて、キラキラ輝いている。ぼくたちの車もそのままだ。要するに何も変わってはいないのだ。この頭痛と、アリーヌがいないということを除いては。

ぼくがアリーヌの消失に気が付いたのは、それから間もなくしてからだった。それどころか、あのヒゲづらの男も一緒にこの家から消えていた。ぼくが眠っているあいだに何が起こったのか、ぼくはそのときになって、自分が多分睡眠薬で眠らされていたことに気がついた。そして、アリーヌの身にどういうことが起こったのか、それはもう想像する他はなかった。

ぼくは、せめて何か手がかりになるようなものでも見つからないかと、もぬけの空となった家の中をくまなく捜し回った。

そして、ついに見つけたのだ、彼女の走り書きらしい紙切れが、昨晚のテーブルの下に捨てられてあった。そして、それにはこう書いてあった。

助けて。レナートの一味が、カリオンへ

ぼくはその紙きれをポケットに突っ込むと、そのまま家を飛び出した。そして、車のところに駆けて行くと、飛び乗った。

どこへ行けばいいのだろうか？ ぼくには分からなかった。しかし、無我夢中になって車を発進させた。誰もいない静かな舗装道路を、猛スピードで突っ走って行った。

アリーヌ！ とぼくは、心の中で、何度も何度も叫んだ。

ぼくは今や、二重の苦しみを味わっていた。ぼくのリサと、アリーヌと。どちらを捜し出せばいいのだろうか？ それとも、もうこんな苦しみを味わうのはイヤだと、きっぱりと諦めてしまえばいいのだろうか。だがそんなこと、できるはずがなかった。どうしても、どんなことがあっても、ぼくはこの二人を捜し出すだろう。

ほとんど自暴自棄になりながら、あちこち車を走らせたあげく、ぼくはついに見覚えのある道に出た。そうだ、オディープに通じる道に違いなかった。向うには、あのときカヌーレースを始めたあの川が流れている。まるで何事もなかったように、静かに、キラキラとさざ波をたてながら。

その道に沿ってしばらく車を走らせると、具合の悪いことに、先の方で車が停止を命じられ、どうやら検問が行われているらしいことが分かった。せっかくオディープへの道を見つけたのに、ぼくは引き返す他はなかった。

やむなくぼくは岩陰に車を置くと、歩いて草原を渡ることに決めた。検問所さえ越えれば、後はなんとかなるだろう。それにしてもあの検問は、まさか、ぼくを捕らえる為に行われているのだろうか？

長い時間かかってようやく検問所を突破して、再びぼくは道に出た。もう足も痛くなり、心身ともに疲れていた。

しかし幸いなことに、後ろから近郊バスがやって来た。ぼくが手を上げると、バスは、ぼくのすぐ横で止めてくれた。

車に乗り込むと十人ほどの乗客がくたびれた様子で座っていた。多くが農家のおかみさんらしく、膝に、買物かごを乗せていた。他に、収穫のことについて話し合っている老人が二人。ぼくは隅の座席を見つけると、そこに目立たないように腰掛けた。

しばらくすると、バスの行先に、あのオディープの町が見えて来た。静かな住宅街や、工場。そして商店やビル。

町の中に入ると、バスは頻繁に止まり出し、客の出入りも激しくなり、車内は少しずつ人が増えて来た。ぼくの座席も、もはや一人では坐っておれず、年配の男が、ぼくの横に座った。

そうして、窓の外の流れ行く街並を見つめながら、橋を渡って行くと、突然向うの方から刑事らしい男が二人、バスに近付いて来た。バスは突然停止を命じられ止まった。すると、前の入口から、その二人の男が乗り込んで来て、乗客の一人一人を確認しながら、こちらの方へやって来

ようとするのだった。

イケナイ！とその瞬間、ぼくは思った。これは何かの陰謀に違いない。幸い、バスの窓が半開きになっていた。それをもう少し開ければ十分脱出が可能な大きさだった。もう一刻を争うときだった。ぼくは思い切って窓を押し広げ、そこから身を乗り出すようなそぶりを見せ、次の瞬間には、パッとその外へ身をほうり投げた。隣に坐っている男もただあつけにとられるばかりの早わざだった。と同時に、車内は、乗客たちのどよめきが起こった。ぼくが一瞬、窓の外にぶら下がるような姿勢になったとき、例の刑事たちと視線が合った。刑事は、鋭い目つきでぼくをにらみつけ、ぼくを追いかけるべく、車内を引返し始めた。すっかりバスから脱出すると、ぼくはそのまま一目散に、後ろに向かって逃げた。振り向くと、バスの向う側から刑事が姿を現した。しかもその手には銃が握られ、ぼくに狙いをつけようとしているのだ。次の瞬間にはもう第一回目の銃声が轟いた。幸いにも弾丸はぼくをかすめて、すぐ脇の石の欄干に当たったらしく、それは鋭い音をたてて、煙が上がった。もう、絶対絶命だとぼくは思った。

しかしその瞬間、ぼくは、足元を流れる幅の広い川のことを思った。あそこなら、いや、もうあそこしかなかった。第二回目の銃声が轟いたとき、ぼくは欄干に駆け上がって、そのまま十数メートル下の川に向かって、決死のダイブを行った。

ぼくが濁流にのまれながらもやっと川から頭ひとつを出したとき、既に欄干からは大勢のやじ馬どもが、身を乗り出すようにして、ぼくの行方を見守っていた。ぼくは、いくらかは水を呑みながら、そのままゆっくりと下流へと流されて行った。ぼくが身を投げた橋は、みるみるうちに遠ざかり、ぼくを逮捕しにやって来た二人の刑事があわてふためいている姿が、こっけいなぐらいだった。

だがぼくも安心してはいられなかった。もうすぐ川では大捜査網が敷かれるのは目に見えていたからだ。なんとか早く川から這い上がらねば。しかし、川の流れが意外と早くて、思うに身を任せることができなかった。それでもあせる気持の方が強かったようだ。このまま、むざむざと逮捕されるわけにはいかなかった。逮捕されれば、多分、生きて帰ることはないだろう。その恐怖感が、ぼくを無我夢中にさせた。

そしてついに、ようやく川岸に這い上がることができたが、さすがに体はもうくたくただった。体はずぶぬれだったが、足を引きずるようにして、ぼくはその場から逃げて行った。

町の路地に身を隠しているうちに、瞬く間にもうこの辺りが警官たちに包囲されたことが分かった。どこへ行っても、制服の姿ばかりだ。ぼくは、ぬれねずみ同様、狭い路地から路地へと身を移す他はなかった。そして人目につかない箱積みの山の陰に身を隠したりして、警官の目を盗んだ。そのうち、助かる為には銃が必要だということを思いついた。誰かひとり、あの警官のうちの一人でも打ち負かすことができたなら...

その頃、包囲網が敷かれた町の片隅では、一人の少女が父の言いつけで、卸売り市場まで小型トラックに乗って、野菜類の買い出しに行こうとしていた。まだ年齢は、十三か十四の、幼さの抜けきらない生きのいい娘だった。その少女が、もう一人前に、車の運転を習い、自分で仕事ができるようになっていた。彼女は、父親に手を振りながら我が家を後にした。しばらく行くと、もうさっそく検問所にさしかかった。そこには若い警官がいて、彼女に話しかけた。

“一体、何があったんです？”と、少女は、その警官に話しかけた。

“凶悪犯さ”と、若い警官は答えた。“殺人に、誘拐に、暴行に、なんでもありさ。正確な名前は分からないが、奴はこんな顔をしている”

そうして、警官の差し出した似顔絵は、まさにぼくそっくりのものだった。

“へえ～、恐ろしいわね”と、少女は、おっかなビックリ顔で言った。

“まだこの近くにひそんでいるかも知れない。くれぐれも気をつけてな。買物かい？”

“ええ、そこの卸売り市場まで”少女はそう言って、トラックを発進させた。

小一時間後、少女は再び戻って来た。今度はどっさりと、野菜や果物を荷台に積んで。

“ああ君かい？”と、さっきの若い警官は少女に声を掛けた。“何事もなかったようだね”

“そちらこそ、まだつかまらないの？”と、少女は心配そうに言った。

“ああまださ”と、若い警官は答えた。“奴は凶暴性を発揮して、仲間のうちの一人がやられたんだ。銃が奪われたということだ。ほんの三十分ほど前のことさ。だから奴は銃を持っているんでね、気をつけなくちゃ”

“御苦労なことね”と少女は言った。“くれぐれも気を付けてね。じゃ”

そう言って、少女はアクセルを踏んだ。

“ああ、そちらこそ”と、若い警官は言い、仲間と彼女を見送った。

この警官は、少女と顔見知りになったせい、すっかり、初歩的なことを見誤ってしまったのだ。肝心の、彼女の積んで来た荷物の中身を調べることを怠ってしまった。

少女がしばらく走ると、ぼくは、山と積まれたダンボールのあいだから姿を現した。手にはしっかりと銃が握られていた。計画通り、警官から奪った拳銃だった。ぼくはさっそく運転席の方へ行き、少女を威嚇した。

少女は、驚きの声を上げて、振り向いた。

“声を立てるんじゃない！”とぼくは言った。

ぼくの手握られていた銃は、真直ぐ彼女の頭に向けられていた。トラックの荷台には、うまそうな林檎が山積みされており、そのうちのひとつを手にとると、腹が減っていたので、ぼくはそれをかじりながら続けた。

“命が惜しかったら、ぼくの言うことを聞くんだ！”

“あなたはあの...”と、おそろおそろ少女は言った。“いつのまに...”

“つべこべ言うんじゃない！”と、ぼくは銃口を少女に突きつけて言った。“いいか、ぼくの言う通りのところへ行くんだ”

そう言って、ぼくは、あのフローラと出会った自分の家へと、トラックを向かわせた。

少女は震えながらも、ぼくに言われる通りにハンドルを切った。ぼくは、周りからは見えないように、ダンボールの陰に身を隠し、銃口だけ彼女に突きつける形で、思うがまま彼女を操った。

そうしてやがて、あのなつかしい我が家へと帰って来た。

小さな生垣があり、庭の木や、屋根の様子から、すぐそれと分かる、なつかしい我が家だ。もう何年も帰ったことがない。少年の頃に過ごした我が家。家の中は今はどうなっているのだろうか？ 別の誰かが住んでいるのかも知れないが、まるで人を寄せつけないように、今はひっそりとしていた。

その少し手前にトラックを止めさせると、ぼくは、少女を車から引きずり降ろし、いやがる少女の手を無理やり引っ張りながら家に向かった。

庭の扉は簡単に開いた。なつかしい、あの、蝶番のきしる音をたてながら、庭は、以前ほど美しく手入れはされていなかったが、あの当時そのままの、なつかしい光景は残っていた。庭の花壇も、木々も、芝生も、みんなそのままだった。ぼくは、それらの光景をなつかしみながら、家の入口へと向かった。

玄関の扉も、まるで人がいないように、簡単に開くのだった。

そして、あのなつかしい内部が現れた。帽子掛けも、傘立ても、物入れも、鏡も、何もかも、あの当時そのまま、ひとつも変わってはいなかった。さらに奥に入ると、驚いたことに、居間のソファも灰皿も、何もかも当時そのまま、不思議な気持さえした。

“ねえ、もういいでしょ。わたしを返して”と、少女は、ぼくの手を振りほどこうとして言った。

“ダメだ”とぼくは頭を横に振った。“今から変装をするんだ。お前も一緒だ”

そう言って、ぼくは彼女を洗面所へ連れて行った。そしてぼくは、手当たり次第に道具を取って変装を始めた。

今にも泣き出しそうな少女に目をやると、

“お前も一緒に変装を始めるんだ！”とぼくは、強い口調で命令した。

少女はしぶしぶぼくに従ったが、それにしてはなかなかうまいメイクで、とても十三、四には見えない、もっと年上の、いい女に化けることができた。

ぼくの方もぼくで、レナートとはまた別の、今度はずっと控え目な感じの男に化けることができた。

鏡を見て、ぼくはニンマリした。どう見てもそこにいるのは、同じ年頃の、一組の恋人同士なのだ。

“ちょうどいい。ぼくたちは恋人だということにする。いいな”とぼくは言った。

すると少女は、鏡を見つめながら、しぶしぶうなづいた。

そのときだった、突然、ベルの音がけたたましく鳴り響いた...

なんだと思って、窓から表扉の方に目を向けると、制服の警官を従えた刑事がそこに立っていた。

“ホールバラさんですか”と、彼はぼくを見るなり言った。“少しお邪魔します”

そう言うが早いか、図々しくも、もう家の中に入って来た。

“実は、この近くに、ある家のトラックが見つかりましてな”と、刑事は、ごく事務的に言った。ぼくが応対に出、ぼくの後ろに彼女が姿を現しても、刑事は別段気が付く風もないので、内心、ぼくの変装は成功したと喜んだ。

“トラックを運転していたはずの少女も行方不明になってしまったんです”と、刑事は続けた。“それにはある大きな事件とかかわりがあるのではと見られるのでして、実はある指名手配の犯人が、そのトラックに乗って、包囲網を突破したと考えられるんです。しかしまだそんなに遠くへは行ってないはずですよ。何か不審なこととか、そういうことはありませんでしたか？”

そう言って刑事は、少女の方にも目を向けた。ぼくは、少女が今にもバラすのではないかと気が気ではなかったが、銃をポケットの中に忍ばせていたおかげで、少女は、何も言う気配はなかった。

それから刑事は、お決まりの、ぼくと、失踪した少女の、似顔絵と写真とを見せた後、

“少し家の中を見させていただきます”と言って、伴って来た警官に指図をすると、家の内と外とを見回りに走らせた。

そのあいだぼくと少女とは、刑事の監視下に置かれたが、この刑事は少しも、ぼくたちのことを疑っている様子はなかった。変装が、余りにもうまく行ったおかげだった。

捜索が行われているあいだ、刑事は、居間のソファに腰を降ろすと、立っているぼくたちに向かって、それとなく話しかけて来た。

“兄妹ですか？”と、彼は尋ねた。

“いや、彼女はぼくのフィアンセでして”と、ぼくは、わざと照れるように言った。

“そうでしたか。突然の失礼をば、お許し下さい”と、刑事は、ごく儀礼的に言った。

“じゃ、他に御家族の方は？”と、彼はまた尋ねた。

“親は外出中ですよ”と、ぼくは、当てもなく言った。“今は、ぼくたちだけです”

と言って、どこかの寝室で誰かが寝ているとも限らなかったのも、内心はヒヤヒヤものだった。

幸いにしてそういうことがないことがやがて分かった。家中を隈なく捜し回った警官たちがやがて戻って来て、刑事に告げた。

“不審なものは何もありません、警部”と警官は言った。“ただこれが洗面所に落ちていました”

そう言って、警官がさし出した物を見てハッとなった。例の変装用に使った靴墨だった。警部と言われた男は、それを物珍しそうに手に取ると、やがてぼくに向かって言った。

“靴墨のようですね”と、彼は言った。“あなたのものですか？”

ぼくは、額に汗をにじませながら、

“ええ”とだけ答えた。

すると警部は、意外にもあっさりとそれをぼくに返すと、

“それじゃ引き上げよう”とみんなに告げた。

“どうも失礼しました”と、彼は丁寧にぼくに礼を言うと、みんなを連れて、部屋から出て行った。

みんなが出てしまうと、ぼくはフーツとため息をついた。本当に一時は、逮捕さえ覚悟したほどだった。なんと人騒がせな...

それと同時にぼくは、何も口にしなかった少女の方に目を向けた。彼女がぼくに協力してくれたのは有り難かったが、これから先、どんな風に利用できるかが問題だった。単に邪魔になるだけならいっそのこと...

ぼくが彼女に近づくと、少女は殺気を感じたのか、驚いて逃げ始めた。さっきの警部たちを追いかけようとしたが、もう後の祭だった。ぼくはとうとう廊下の突き当たりで彼女に追いつき、彼女の首に手をかけた。少女は、まるで失神したかのように力をなくし、目を閉じた。

少女は失神したのか、床の上にあお向けに倒れてしまった。

そのとき、窓の外でワンワンと吠える犬の鳴き声があったので、ぼくは窓辺に寄った。すると、シェパード犬で、間違いなくあのセーレンだったのだ。セーレンは、尻尾を振り振り、ぼくのいる窓に伸び上がろうとした。窓をあけると、嬉しそうにぼくの手に顔をこすりつけて来た。

“お前は間違いなくあのセーレンだ”と、ぼくも嬉しくなって言った。“今までどこにいた？ 長いあいだ会わなかったなあ。本当に長いあいだ。お前はまだ生きていたのか？”

そう言って、ぼくも、セーレンの顔に頬ずりをした。するとセーレンは、精いっぱい、ぼくの顔をなめようとするのだ。ぼくもそんなセーレンの背中を力いっぱい、なでてやった。

ついにはセーレンは、窓を這い上がって、室内にまで入って来た。ぼくとうとう再会したのがよほど嬉しかったと見える。

“それにしても”と、ぼくはふと疑問に思った。“確かあのセーレンは、死んだのじゃなかったのか？”

でも目の前にいる紛うかたないセーレンを目にして、そんな疑問など、いっぺんにどこかへ行ってしまった。ぼくは嬉しさの余り、何度も何度も、セーレンを抱き寄せた。

“でもセーレン”と、ぼくはやがて、セーレンに向かって言った。“いつまでもこうしているわけには行かないんだ。

ぼくはもうすぐ行かなくっちゃならない。しばらくこの家を留守にするかも知れないんだ。そのあいだ、また寂しくなるだろうけれど、きっと戻って来るからね。ある問題さえ解決すれば、きっと戻って来るよ。だから、それまでの辛抱さ、セーレン。ひとりでも、寂しがっちゃダメだぞ”

何も分からないセーレンは、尻尾を振りながら、ひたすらぼくをなめるばかりだった。

ぼくはもう行かねばならなかった。セーレンをもう一度外に出す為に廊下を歩いて行くと、そこでのびている少女を見て、セーレンは激しく吠えたてた。しかし、無理やり、セーレンを、その少女から遠巻きにしながら廊下を渡り、やっとのことで外へ連れ出すことができたのだった。

それからもう一度部屋に戻って、扉も窓もきっちりと締めると、再び家の外に出て来た。するといつのまにか、パツパツと、あのセーレンの叫び声がしなくなったのはおろか、セーレンの姿さえ、もう見えなくなっていた。

静かな庭と、晴れ渡った空が、そこにあるばかりだった。

“セーレン！”とぼくは叫んだが、何んの返事も返っては来なかった。

やはりあれは幻だったのだろうか。傷心のような気持を抱きながら、ぼくは家を出た。すると向うから、再びあの警部が、こちらへやって来ようとする姿が見えたのだ。

あるいはもう、ぼくの正体を見破ったのかも知れない。ぼくはそう思って、庭の陰に身をひそめた。そして、こうしてはいられないと、庭を横切って、反対側の裏口からぼくは逃げた。きっと向うは、ぼくを捕らえるつもりでやって来たに違いないのだ。ぼくは必死で逃げた。

やがてぼくは、やっとの思いで、土手の上に線路が敷いてあるところへやって来たが、そこを登りつめたとき、危うく汽車にひかれそうになった。長い列車が通り過ぎると、先の方に駅があるのが分かったので、そこへ向かった。あそこから、通過する列車に乗り込めば、もうこんな危険な状態から脱することができると思ったのだ。だが駅までやって来ると、そこにまで既に警官が配置されていることが分かった。そして、銃をかついだ警官が、通りすがりの通行人に、身分証の提示を求めて、ひとりひとり検問を行っていることが、ぼくの位置からもよく見えた。

ぼくはすんでのところ、駅には行かなくて済み、駅の向かいに建っていた空ビルに逃れた。奥の方に駆けて行き、それから階段を勢いよく駆け上がった。そして、もう少しで屋上だというときに、ぼくを見つめるひとりの婦人に出会ったが、その場はそれにかまわずさらに上へと駆け上がった。しかし、屋上に出たとき、あの婦人の目は、ぼくを犯人だと知っている目だ、きっともう既に誰かにこのことを告げているに違いない、と気が付いた。ぼくは、屋上から、向う側に学校の校舎があり、さらにその向うには、まるで大きな壁のように立ちのぼるダムがあるのを確認すると、再び階段を駆け降りて、校舎の方へと向かった。

運動場では、多くの子供たちが、思い思いに遊んでいた。ぼくは、そんな子供たちが遊んでいる運動場を横切って、さらに奥の方へと駆けて行った。そのとき、校舎から、けたたましい警報器の音が鳴り出した。誰がそんなことをしたのか、子供たちは、くもの子を散らすように、一斉に、校舎に逃げ帰ろうとした。ぼくも一緒になって校舎に向かおうとすると、悪いことに、そこにはもう既に捜査員の姿が見えたのだ。必死になってぼくは校庭から出た。もう行くところとしては、あのダムの上しかなかった。下は、もうすべて、捜査員や警官に包囲されている。

ぼくは必死になってダムを上がって行った。そんなぼくに気づく者は、幸いまだいないようだった。

やっとの思いでダムに登りつめると、下の様子がよく見えた。さっきの駅や、ビル、そして近くに見える校舎や、その他の建物。ダムの反対側を見ると、水がなみなみとたたえられていて、それはずっと向うまで延びる人造湖となっていた。多分、この巨大なダムは、オディープの電力のかなりの部分をまかなっているのだろう。ぼくの家のある住宅街も、それからオディープの市街も、ここからは、まるでかすむように、ぼんやりと見渡せた。しかしもう、それらの町に帰れそうもなかった。

ダムの向う側には、寂しそうな山道が一本通じているだけだった。そこを行って、何が待っているのか、しかし今となっては、その寂しい道を前進する他はなかった。

歩き始めると、寂しいだけではなく、意外と険しい道であることも分かった。細い、曲がりくねった溪谷に沿って、きり立った崖道が、まるでへびのようにまとわりついている。ところどころ、上から垂れ下がっているつる草をつかまないと通れないと思われるほど、危なっかしいところさえあった。

道ははじめじめしてすべり易く、溪谷全体が森林でおおわれているせいか、薄暗くて、不気味な感じだった。だが同時に安心感もあった。これならば、おいそれとは、オディープの捜査官も追いかけて来ることはできないだろう...

それから間もなくしてからだった、ぼくがあの神秘的な、小さな村にたどりついたのは。

狭い崖道をやっとの思いで通り抜けると、急に、草や森におおわれた小さな盆地に出、どうやら向うの方には集落がありそうだった。すぐ足下をチョロチョロ流れている小川で、変装した部分をすべて洗い落としてさっぱりしてから、ぼくがその集落の方に向かって行くと、途中の美しい野原で何かの花を摘んでいる少女の後ろ姿が見えたが、彼女は、ぼくが来るまでもなく、突然その村の方に駆けて行った。村には虹がさし、淡い光がさし込んでいたこともあって、少女の駆けて行くその後ろ姿は、いっそう鮮やかに、感動的に、ぼくの目に焼きついた。

やがてぼくはその静かな集落のあるところにやって来た。どこからともなく、牛の鳴き声や、鶏や鳩の鳴き声もして、いかにものどかな田舎の風情がした。

村の家々は、心ぞろいな木の柵で囲われ、建物そのものも、いかにも年代味を帯びていた。不思議と静かで、神秘的で、人の気配もほとんど感じられなかった。あの少女はどの家に入ったのだろうか？ そんなことを考えながら、ぼくはその集落の表通りを歩いた。

とそのとき、一軒の家から、“キャッキョ”と叫びながら、一人の男の子が飛び出して来て、ぼくの方に向かって、猛スピードで駆けて来た。と、続いて、同じ家から、

“待ちなさい！”と叫びながら、年の頃、十四、五才の、可愛らしい少女が飛び出して来た。

その瞬間、さっきのあの少女だと思って、ぼくはドキリとした。服装からして、間違いはなかった。

が、彼女もこちらへ駆けて来るその顔を見て、ぼくの目は釘づけとなり、心臓が止まる思いがした。その少女の美しさに魅せられたからではなく、彼女が、紛れもない、あのベレー帽のフローラだったからだ。

男の子は、ぼくを通り過ぎてさらに向うの方へ駆けて行ったが、続いてやって来た彼女に向かって、ぼくは思わず口走った。

“フローラ！”

すると少女は、ぼくに気が付いて立ち止まった。

“フローラって、誰？”

“あれ、君じゃなかったのか”と、ぼくは意外に思って言った。

見れば見るほど、余りにも彼女に似ていて、ぼくにはフローラにしか見えなかった。しかしそういえば、年齢が、あのフローラよりは少し年上に思えるのだ。だが、彼女の輝きは、あのフローラの輝きに等しく、そこにフローラの輝くような匂いを見い出すのは容易なことだった。ぼくは、彼女を見たたん、昔の思い出が、いつときによみがえり、もう彼女を放したくはないと思った。彼女が、フローラでも、別の少女でも、それはもはや問題ではないのだ。

“ぼくにとっちゃ、やはり君はフローラだ”とぼくは言った。“ねえ、ぼくと一緒に暮らそう...”

この突拍子もない言葉に、少女はすっかり驚いてしまったようだった。しかし、この人里離れた村では余り聞くことのないこの愛の告白に、少女は、何か、未だ知れない未知な、神秘的な、美しいものを感じたらしく、意外にもあっさり承諾してくれたのだった。少女の、まだあどけなさの残る、きょとんとした表情を見つめながら、ついにこのフローラはぼくのものになったのだ、という喜びから、ぼくは天にも昇りたい気持だった。

“じゃさっそく、君の親に言いに行こうね”と、ぼくは、フローラの肩に手をあてながら言った。“多分、いい顔はしないだろうけど、君が承知してくれたんだから、かまわないではないか...” “彼女が出て来た家に、彼女を連れて入って行くと、予想通り、親の反対にはすさまじいものがあった。だがぼくは、彼女を手に入れた限りは、もうどんなことがあっても手放さないつもりだった。

親は、人さらい、とまでぼくのことを言った。でもフローラは、ぼくの方についてくれた。

“お前、本当に行くのかい？”と、年の割にはふけた母親が、心配気にフローラに尋ねたが、“ええ行くわ”と、フローラはきっぱりと答えてくれた。“わたしは、この人に付いて行く...”

“なんという親不幸者だ！”とおやじは怒鳴ったが、フローラは、ぼくの後ろに身を隠すばかりだった。

そのうち何かが飛んで来そうだったので、早々とそこを退散することにした。同意は得られなくとも、一応の礼は尽くしたつもりなのだ。ぼくが玄関を出るときになって、早くも物が飛んで来た。幸い当たらなくて済んだが、当たってれば大怪我をしていたところだろう。怒り狂ったオヤジの投げた物は、花瓶だった。それは壁に当たって、こなごなに砕け散った。

ぼくは、彼女の手を引いて外に出ると、気分は全く爽快だった。こんなに幸せで、天にも昇るような気分になったのは、めったにないことだった。本当はフローラと腕を組み、こののどかな田舎の通りをのんびり歩きながら、この幸せな気分を心行くまで味わっていたかったのだが、そうもしていられなかった。反対するオヤジが今度は、ぶっそうな鉄砲をぶっ放すかも分からず、一目散に、ぼくたちはそこを逃げて行くしかなかった。ぼくはフローラの手を引っ張り、できるだけ早く、その家から去って行った...

“ねえ、どこへ行くの？ え〜と名前は...”と、フローラは、一緒に息をはずませながら、言った。

“シレール。シレール・ホールバラさ”とぼくは答えた。“いや、ぼくにも分からない。むしろフローラ、君に聞きたいぐらいだ”

“フローラじゃないって。わたしの名前は、クレール”

“いや、フローラで十分だ。ぼくにとって君は、フローラなんだから”

“勝手にしなさい”と、あどけない少女は、ピッと言うのだった。“でも本当に、どこへ行くの？”

“カリオン”と、ぼくは冗談で言ってみた。

“ああ、カリオンね”と、フローラは言うのだった。

“知っているのかい？”

“ええ、この村のずっと奥のところ”と、フローラは答えた。“わたしも行ったことはないんだけど、噂では、目玉が硬貨ほどある大きなうなぎの住む村、という話しよ。どうしてそこへ行きたいの？”

“ぼくの知っている人がいるからさ”と、ぼくはアリーヌのことを思い浮かべながら言った。

“そう？ 面白そうね。一緒に行きましょう”と、フローラは、嬉しそうに、笑顔を浮かべながら答えた。まるで、ぼくと一緒に冒険するのを楽しんでいる風だった。

“でも君って、面白いね。好奇心が旺盛で”

“だってこんな楽しい冒険って、村では味わえなかったもの”と、フローラは、ケロツとした表情で答えた。

きっと、よほど退屈な毎日を過ごしていたに違いない。ぼくは、彼女に出会い、そして、プロポーズしてよかったと思った。

しばらく手をつないで走って行くと、やがて林の向こう側にパッと開けたところがあって、驚いたことに、そこには小型の飛行機が止まっていた。そこは小さな滑走路になっていたのだ。

“わーっ、飛行機だわ。これに乗りましょ”と、フローラはそれを見るなり言うのだった。

“でも操縦は？ 誰がするの？”と、ぼくは驚いて言った。

“大丈夫よ。任せといて”と、フローラは、簡単に言ってのけた。

そのときだった。向うの方から人の声が聞こえた。

“おーい、ダムが一部決壊したぞ”と、誰かが言ったので、一瞬、ぼくは青ざめた。

まさか、ぼくが登って来たあのダムが、と疑ったが、話しを聞いているとそのダムらしかった

。 “上から大岩が崩れて、一部壊れたらしいんだ。ふもとの町はもちろん水ビタシで、どんどん水かさが増えているという話だ。なお悪いことに、水が流した土砂が水の一部をせき止めて、ダム近くの町は、すっぽり水没してしまうという話だ。あの土砂を破壊して水の通しをよくすれば、あの町にいる人々を助けることができるんだがな。ただ飛行機を飛ばすには、崖になっていて危険なところなんだ。誰か、志願者はいないか。一刻を争うことだな”

しかし、そばにいるパイロットの中からは、名乗り出る者がいないらしかった。

“いいわ。わたしが行く”と、フローラは小声で言った。

“でもそんなこと”とぼくは言った。

“行かないんなら、わたしひとりでも行くわ”

“じゃいいよ。ぼくも一緒に行く”

そう言うが早いか、ぼくたちはさっさと飛行機に乗った。そして、フローラの操縦で、プロペラが回り始めると、初めて気がついた男たちが駆けて来た。

“おい、どうする気だ！”と男は怒鳴った。

それに向かって、フローラは言った。

“ちゃんと爆薬は積んであるんでしょ。わたしが救援に行く”

“でもこら、君たちは何者なんだ！”

男がそう言う間にも飛行機は、男の制止を振り切って滑走路に出、離陸の準備を始めた。

いつのまにそんな操縦を習ったのか、フローラの腕前はなかなかのものだった。小型飛行機はやがて滑走路を走り初め、離陸態勢に入った。

ダムの下町では、至るところ水没して、既に多くの人命が奪われていた。残った人々も、校舎やビルの屋上に逃れ、今や遅しと救援の到来を待っていた。だが、土砂やガレキで、さらに下流の一部をせき止められてしまった町全体の水かさ、とんとんと増えて行く一方だった。自宅の屋根に逃れた人などは、水かさの増加の為、もはや風前の灯だった。その割には、町の救援は遅々として進まなかった。ダムが決壊して三十分後にやっと一台のヘリコプターが現れたが、一人一人吊り上げるのでは、とてもそこにいる大勢の人の命を救うには足りなかった。

みんなは口々に、“わたしらを見殺しにするつもりか”と、そのヘリコプターに向かって、ヤジを飛ばした。

ところがそのときになって、ダムのある谷間の方から、まるでアクロバット飛行のように、一つのプロペラ機が飛来した。人々の目は、その飛行機に注目した。それは、町の上空を、二度、三度と旋回した後、下方の、水をせき止めている箇所に向かって、爆撃を開始した。その爆撃が起こるたびに、人々のあいだにはどよめきが起こった。何をやっているのか、最初、救援を待っている人々には分からなかったが、そのうち、人々は理解した。

“なるほど、なんと素晴らしいやり方だ”

みんなは、その見事な手際によさに、ため息まじりに感心した。

やがて爆撃が成功したと見え、水かさが増えなくなったばかりか、引く傾向にあるのを知って、人々は、その飛行機に向かって拍手を送った。

“よくやってくれた！”と、人々は、その飛行機に向かって、口々に叫んだ。

小型飛行機は使命を終えると、再び、元来た経路へと、決壊して、パツクリと口の開いたダムの方へと向かった。人々は、命の恩人である飛行機の行く末を見守った。ところが、狭い谷間を飛んでしばらく行くと、恐るべきことに、それは山に激突して火を吐いたのだ。

それを見ていた人々は、はっと息をのんだ。と同時に、深い悲しみが支配した。

命の恩人が、わたしらの為に殉死したのだ、とめいめい、心の中で思った。

かくして町は救われ、災害救助も軌道に乗って来た頃、人々の関心は、まだ崖下でくすぶり続けている救援機の方に向けられた。

“あれに乗っていた勇敢な男は誰なんだ”ということが、人々の話題となった。そしてせめてこの目で、彼らの最期を見届けようと、さっそく探検隊の一行が組まれた。めいめいが自発的に集まったパーティだったので、その数は一気にふくれ上がった。そして今や、その飛行機に関する情報も豊かになった。

“聞くとところによると、なんでもあの飛行機には、若い二人連れが乗っていたそうだ”“そうだ、そのうちの一人は、まだ十四の少女だという話だ”

“しかも相手の男というのは、本当か嘘か分からんが、札つきの悪党だったという話だぜ。も

し本当だとすれば、これはどういうことなんだろう”

“その十四の少女を無理やり連れて行ったという話のだが、良心でもとがめたんだろうか”

“そうだ、最後に、いいことをしようと思ったんだ、きっと”と、最後に、ひとりの男が締め括るように言った。“どんな悪党にせよ、最後に、あれほど多くの人命を救ったんだから、きっと浮かばれるよ。早く、彼らの最期を見届けてやりたいものだな”

事故現場はきり立った崖のさらに上の山の斜面にあり、そこへ着くまでに、人々は大いに苦勞をした。事故現場に近付くにつれ、人々の緊張は極度に高まった。早くも飛行機の破片が見つかり、事故の状況が相当激しかったことを伺わせた。

“可哀そうにな。その少女は悪党に魅入られたおかげで、たった十四の短い命を散らしてしまったんだ”と、誰かが悲しそうに言ったが、みんなの思いもそれと同じことだった。

破片の数が次第に増えて来たとき、ついに、大きな機体の残骸が、今もなおくすぶり続けている姿を、人々は向うに見た。人々はあわててそこへ駆けつけて行ったが、見るも無残に、機体は、その一部を残しただけで、こなごなに壊れていた。激しく炎上したせいか、中のものを確認するのは無理だと分かった。多分、乗っていた二人も灰となって、それを確認することはできないだろう。人々の中には、その無残な姿を見て、思わず膝まずき、祈り始める者もいた。

“なんとムゴい”と、人々は、それぞれの心の中で思った。

そうして、現場検証が行われるあいだ、断片の広範囲に散らばっている様子から、飛行機の激突のすさまじさを、それぞれ思い思いに、心の中に描いた。そして今さらながら、その事故の恐ろしさに、心が震えてくるのだった。

だがそのときだった、

“あれは？”と、誰かが指をさして叫んだ。

遠く山の峰の方に、陽を浴びて、まるで点景のように向うへ歩いて行く、二人の人影が見られた。彼らのうちの誰かが双眼鏡で、それが一組の男女であることを確認した。

“まさかあの二人では？”

“いや、そうに違いない”

“でも、どうして？”

と、事故現場は、またたくまに騒然となった。

そう、その二人は、まさにぼくとフローラだった。ぼくたちはやっとの思いで、ここまでやって来た。振り向くと、遥か下の事故現場に人々のいる姿が、ぼくのところからもよく見えていた。

“彼らは気が付いたでしょうか”と、ぼくは言った。

“大丈夫よ、気が付きやしないわ”と、フローラは答えた。

“これでぼくは、完全にお尋ね者からおさらばさ。なにせぼくは、死んでしまったんだからね”

“ついでにわたしまで殺してしまっ”とフローラは言って笑った。

その笑顔が、とてもあどけなくて、可愛いらしかった。

“もう、ぼくたちのこの幸せを、誰れにも邪魔させはしない”とぼくは言った。

“さあそれじゃ、君の言っていた、目の玉が硬貨ほどもある大うなぎの住むという、幻の村カリオンへ早く行こう...”

そうして夕映えの山の斜面を去って行くフローラとぼくの姿は、あっけにとられてそれを見る人々の目には一つの奇蹟、あるいは、おごそかな魔神のようにさえ、思われたのだった...

第3章

歩いているうちに、ぼくたちは美しい谷間の夕暮れを経験した。しばらくして日が沈み、やがて満天の星が輝き出すと、ぼくたちの山行きはそこで中断された。フローラとぼくは、そこで焚火をたきながら、一晩を過ごすことになった。

そして翌朝――それは、これまででも初めて味わうような、美しく、感動的な朝だった。目の前にある、枝を縦横に伸ばした立派な檜の木の葉には、朝の光がまばゆいばかりに当たって金色に輝き、大きな幹や太い枝の一部は、逆光の為か、まだシルエットとなって、黒い偉容をさらけ出していた。深々と森におおわれた谷間は、まだ眠りから覚めたときのように霧におおわれて、ぼんやりとかすみ、そしてその上方は、晴れ上がって、もうすがすがしいばかりの朝となっていた。草むらから起きて、最初にぼくはその光景を目にした。

長い道程の、激しい起伏ばかりが続く山行きを過ぎた後に、やっとぼくたちは、ほっとするような楽園に出会った。山から解放されて、平坦な地に出ると、その野原には一面、桃色の矢車菊や、白い小粒のカノコソウなどが咲き乱れ、平坦な斜面の上方には、杉並木がずっと続いていた。まだ人が足を踏み入れたことのないようなこの楽園を目にして、ぼくはほっとするものを感じた。

“カリオンよ”と、フローラはそれを見て言った。“わたしたち、どうやらカリオンに着いたらしいわ”

“そうか、これがそのカリオンなんだね”と、ぼくは、そこに何か胸をワクワクさせるようなものを感じながら、言った。

その美しい花々が咲き乱れる草むらを通して、ぼくたちは丘の上の杉並木のある所へと向かった。そしてその頂に立って向う側を見たときに、ふもとの方に広がるうねうねとしたその牧歌的な風景に、感動の余り、胸が震えるのを感じた。

余り広くない牧草地では、牛がのんびりと昼寝を楽しみ、急峻な山の裾の森林におおわれた一段と美しいところには、尖塔と、旗の翻った、美事なお城がそびえていた。広々とした、牧歌的な、城のある村。それがカリオンだった。牧草を貯えるサイロと思われる、石造りの背の高い建物の近くには、大きなプールが造られていて、真青な水をたたえたプールの内と外では、水着を着た少女たちが、思い思いに、泳いだり、日光浴を楽しんだりしていた。なんとこのびやかな光景だろう！と、ぼくはそれを見て思った。幾重にも重なるなだらかな丘陵地帯は、樹木におおわれたり、牧草地であったりしながら、どこまで続いて行くのか、その果ては見当もつかなかった。

“さあ、行きましょ”と、フローラは、ぼくの手を引くようにして言った。

ぼくとフローラとは、それぞれ手をつなぎながら、一気にその丘を降り下って行った。

やがて、プールのそばにまでやって来ると、水着姿の少女たちは一斉にこちらに振り向き、“やあフローラ、やっと帰って来たのね”と、少女に向かって声を掛けた。

なんだって？とぼくはそれを聞いて思った。この少女はクレールじゃなくて、やはりフローラだったのか？

“ねえ、君”と、ぼくは驚いた顔をしてフローラに言った。“君はやはりフローラだったのか、あのとき出会ったあの...”

するとフローラは、可愛らしい顔で笑い出すのだった。

“そうよ、わたしはそのフローラよ”と、少女は答えた。“御免なさいね。ずっとわたしはあんたをだまして来たの”

“でもどうしてそんなことを！”と、ぼくはあきれて言った。

“だってわたしがフローラだったら、あんたはわたしのことを警戒したでしょ”

“そんなことあるもんか”とぼくは言った。

“でも、あんたがわたしに結婚を申し込んだとき、正直言ってわたし、とまどったわ。あんなところであんたに会うなんて思わなかったうえ、いきなり結婚まで申し込むんですもの...”

“でも、嬉しかった？”と、ぼくは尋ねた。

“ええ、嬉しかったわ”と、フローラは、笑顔を浮かべながら答えた。

“でも冷たいな、フローラって。ひと言言ってくれればよかったのに”

“それができなかったの”とフローラは答えた。“あんたがフローラと知れば、また去って行くかも知れないと思って。それに、あんたが本当に味方かどうか、もう少し確かめる必要があったからよ”

“味方だって？”と、ぼくは驚いて言った。“それはどういう意味だい？”

“そう、まだ説明していなかったわね”と、フローラは、急に冷静になって言った。“あのときのことを覚えていらっしゃる？ 劇場からの帰り道、あんたはわたしに三つの質問をして、三つ目の質問でわたしを困らせたときのことを。あんたはあのとき、わたしに魔王についてどう考えているかって尋ね、本当のことを言えないわたしのことを、悪魔の手先だとまで言い切ったわ。でもあのときにはまだ、わたしには本当のことが言えなかった。だって、あんたのことについて、わたしはほとんど何もまだ知らなかったんだもの。あんたこそ、まさに魔王がよこしたスパイかも知れないって、わたしは疑ったくらいよ。そんなことがときどきあるのも事実ですからね。でも、そんなことで、わたしや、わたしたちの組織を危険に陥れなくなかったの。――でも、あんたの言うことには説得力もあり、それで、わたしたちの組織があんたをためすことにしたの。少々荒っぽいやり方だったけれど、あんたが仲間かどうか見極めるにはそれしか方法がなかったの。あんたが凶悪犯だというデマを新聞社に流して、あんたがどんな風な反応をするか見ることにしたのよ。もし悪魔の手先だったとしたら、あんたがあんなに追われることはないわ。当局と魔王とは結託しているんですものね。でも、あんたは必死で逃げた...”

“それで、そんなことをしたのか”と、ぼくは納得したように言った。“それにしてもヒドいなあ。おかげでぼくは、とんでもない目に会ったのに...”

“でも、わたしたちの組織を守る為には、それぐらいのことはしなくちゃならないのよ”
とフローラは、ごく普通の顔をして言った。

“でも、そのテストの結果、ぼくをどういう風に見たんだよ？”

“合格よ”と、フローラは笑顔になって言った。

“合格って、何に対する...”

“あんたは仲間だっていうわけよ”と、フローラは言った。“もうここまで来ているんだから、今こそ本当のことを言うわ。わたしたち、このカリオンに住んでいる者はね、みんな、魔王に対する抵抗組織なの。レジスタンスと言い換えてもいいわ。わたしたちはみな、魔王を打ち倒して、この国を魔王から解放して、真に平和な国家をつくろうと願っているの。これには何年かかるか知れないけれどね、でもみんな、その闘志に燃えているわ。普段はね、みんなそれぞれ下界に戻って、誰とも見分けのつかない普通の生活を送っているけど、何かあるときには、こうしてときどきカリオンに戻って来るのよ。このカリオンは、交通の便も悪くて、下界の人々にはほとんど知られていない理想の村なの。ここではみんなが仲間で、食事だって、労働だって、みんなのあいだになんの分け隔てもないのよ。そりゃ、ときにはもめ事もあるけれど、みんなの知恵を寄せ集めて、平和裏に解決している。カリオンってそんな村なの。そしてあんたはたった今、その一員となったわけよ”

“じゃぼくも、そのレジスタンスなのかい？”とぼくは言った。

“そう、魔王に反対している人、魔王に困らされて、憎んでいる人は誰でもレジスタンスになれるのよ”と、フローラは言った。“あんたの妹さんが、魔王にさらわれたことも本当だと分かったし、あんたが魔王を憎んでいて、決して当局の手先になってはいないことも、これでよく分かったわ”

“ぼくが当局の手先だって？”と、ぼくは驚いて言った。

“でもそういう人がいるのも事実よ”と、フローラは冷静になって言った。“魔王に困らされた人でも、やがて当局からの甘い誘いがあって、それに乗らされて魂を売り渡した人も数多くいるのよ。そんな人は逆に、わたしたちのような抵抗組織を潰そうと思っているの。だからわたしたちは一刻も、息を抜くことはできないのよ”

“そんな当局ってあるのかい？”とぼくは尋ねた。

“あんたを逮捕しようとしたあの警察が、まずもってそうなのよ”とフローラは答えた。“警察の幹部は、魔王から定期的に甘いしるをもらっていて、魔王のいいなりなのよ。ただひとつ、幹部の中に有能なのがないのが、わたしたちにとって救いなんだけど...”

“そうか... そんなことだったのか...”と、ぼくは感心したように言った。

“でもこれで、君に対する誤解も解けたというわけだ”と、ぼくはやがて笑顔に戻って言った。“やはり君が、クレールなんかじゃなくて、フローラでよかった”

“でも、ただ一つだけ質問させて欲しいんだ”と、続いてぼくは言った。

“ぼくが君に会って、カリオンに行こうと言い出したとき、カリオンが、こんなレジスタンスの村だと知っていたのに、どうしてそのときに本当のことを言ってくれなかったんだい。もし途中で、ぼくの気が変わって、カリオンに行かないとでも言い出したなら、どうするつもりだったんだい？”

“あんたがカリオンに行くことは信じていたわ”と、フローラは答えた。“どうしてあんたがカリオンを知っていたのか分からないけど、あんたがカリオンへ行くと言い出した以上、わたしとしてはただ付いて行けばよかったのよ。ことさらフローラを名のって、あんたを動揺させるよりは、むしろ名乗らないで、そのままそっとしておく方が得策だと思ったからよ”

“ということは、初めから君はぼくを、カリオンへ連れて行くつもりだったんだね”とぼくは、やっと理解したというように言った。

“そう。あんたをね、みんなに紹介する為に...”と、フローラは冷静に答えた。

“でもぼくが、どうしてカリオンに行きたいって言ったのか、分かるかい？”とぼくは言った。

“目玉が硬貨ほどもあるうなぎが見たいから？”と言って、フローラは、意地悪げに笑った。

“そうじゃないんだ”と、ぼくは言った。“そこにアリーヌがいると思われるからさ”

そう言ってぼくはポケットから、例の紙切れを、フローラに見せた。フローラはそれを手にとって読んだ。

“アリーヌって、誰なの？ それにどうして彼女が、カリオンを知っているの？”と、フローラは不思議そうな顔をして言った。

“アリーヌって、君のように偶然知った子なんだけど...”とぼくは答えた。

“いいわ、指令部に聞いてみる”そう言って、フローラはぼくの手を引いた。“お城の方へ行きましょ”

中世の城を思わせる古城は、山裾の森におおわれたところにひっそりとあり、周囲には静かな牧草地が広がっていた。奥の方は林の陰になっていて見えなかったが、フローラによると、そこでは、野菜や果物などの栽培が行われているという。ここの果物は、とれたてでとくにおいしいのだという。

“それからね”と、フローラは言った。“目玉の大きな鰻の話、あれはうそじゃないのよ。本当にいるの。もし暇ができれば、その川へあんたを案内してあげるわ”

“そうかい。スゴいなあ、そんなの”と、ぼくは答えた。“楽しみにしているよ”

城の前の芝生では、上半身裸になった若者たちがサッカーに興じていて、フローラが通ると、“やあフローラ、久しぶりだね”と、声を掛けた。“元気かい？”

“ええ、元気よ”と、フローラはにっこりとして、返事をした。“さあ着いたわ。ここよ”

立派な城には違いなかったが、思っていたほど大きくもなく、むしろ規模のそう大きくない建物だった。ただ、部屋の数はいくつあるだろう。見当もつかなかった。

しかしさすが司令部とあって、一步中に踏み入れると、銃を構えた兵士が身元の確認を行った。中は立派なホールとなっていて、荘重なシャンデリアが天井から吊り下げられていた。フローラは、ぼくも合わせて無事パスすると、正面の立派な階段を上がって、上階へとぼくを案内した。長い廊下に沿って、いくつもの似たドアがあったが、そのうちのひとつの部屋が、司令長官の部屋だった。

ドアを開けると、いかめしい軍服を着た中年の男が、平服の老練そうな男と何か話をしている最中だったが、二人ともぼくたちに目を向けた。

“やあ、フローラ、久しぶり”と、軍服の男は言った。“結婚したんだってね”

“ええ、この人と”そう言って、彼女はぼくを紹介した。

ぼくは彼と、形だけの握手をした。

“長官、さっそくだけど”とフローラは言った。“アリーヌって、御存知ですか？ あるいはこのカリオンに来ているかも知れないんですが...”

“アリーヌ？ 聞いたことがあるようだ”と、長官は答えた。“あるいは最近、誘拐事件に巻き込まれた少女のことも知らない”

“そうです、その少女です”と、ぼくは口をさしはさんだ。

“だったら、ここでは詳しいことが分からないから、情報室の方へ行きなさい。そこへ行けば何か分かるかも知れない”

長官の言葉で、ぼくたちはさっそく情報室へと向かった。

中に入ると、部屋の中は、これが城の中かと疑いたくなるような、通信機器その他コンピュータや、モニター用のブラウン管や、記録用テープなどの、最先端の機械でぎっしり埋まっていた。そこでは、数人の男女が、通信などをしながら、仕事に携わっていた。

“こんにちわ、軍曹”と、フローラは、そのうちの一人に声を掛けた。

“やあフローラ、久しぶりだね”と彼も答えた。

“あの、知りたいんだけど、いい？”とフローラは言った。

“いいよ。君の頼みだもの”と、軍曹は答えた。

“アリーヌという女の子のことでお伺いしたいんですけど...”

“アリーヌ！”と叫ぶような声をあげた軍曹の表情はこわばった。“今、K 2が追跡しているところだが、どうして君はそれを？”

“じゃ、アリーヌはここにはいないんですか？”と、ぼくは話しの中に割って入った。

軍曹は、げげんな表情でぼくを見た。“フローラ、この人は？”

“わたしの夫よ”と、フローラは笑顔を見せながら答えた。

“そうでしたか。よろしく”と言って、ぼくと軍曹とは再び握手をした。

“カリオンにいるということですか？”と、ひと息ついてから軍曹は言った。“カリオンにいないこ

とだけは確かです”

“でも、書き置きには確かに”そう言ってぼくはもう一度紙切れを取り出し、今度は軍曹に見せてから、そのいきさつに簡単な説明を加えた。

軍曹はその話しをじっと聞いた後、やがて冷静に答えた。

“あなたがカリオンに行くように、という意味にも取れますね。この文面からは、恐らくアリーヌは、自分の行き先については、知っていたとしてもそれを書く間がなかったか、あるいは、この司令部がきっと自分を捜し出してくれるものと確信していたに違いありません。事実、アリーヌがある男に誘拐されて、山小屋に泊まり、そこからさらに連れ去られたその先までは、こちらで調べががついているのですから。アリーヌの居場所が分かるのは、そう遠くないものと思われます。これも、我々の送ったスパイ、K2の腕前のおかげなんです”

“あの紙切れの意味はそういうことだったんですか”と、ぼくは、やっと納得したように言った。“でも、そこまで調査の進められているアリーヌって、彼女もやはり、我々の仲間だったんですか？”

“そうです。彼女は去年の夏、レジスタンスに入りました”と、軍曹は答えた。“母親が死んでから、彼女の家族が当局の弾圧の的になっていることに薄々気が付き始めたんです。その一つの理由には、彼女の一家が余りの繁栄を遂げた為、当局にねたまれたということが考えられます。彼女の父は、人望のあるなかなかの名士でした。彼女の一家の繁栄は、いわば当然のことだったんです。ところが当局は、彼らの親戚と手を組んで、彼女の一族を潰しにかかったんです。これは、彼らの親戚にとっても願ってもないことだったんです。気の毒に彼女の母親は、事業の行き詰まりから、狂い死にしました。――父親も最近暗殺されたことは、あなたも御存知でしょう。しかも奴らは、邪魔な彼女をその犯人に仕立てようと計画さえしたのです。彼女は彼女で、一番疑っていたレナートにさぐりを入れようと考えていたに違いありません...”

“そうですか。それでよく分かりました”とぼくは答えた。“でもぼくが彼女と会ったときは、とてもそんな風には見えませんでしたけど... それでアリーヌは、今、危険な状態なんですか？”

“非常に危険な状態だと思われます”と軍曹は、顔を曇らせながら言った。“K2の報告及びあなたのたった今もたらした情報によれば、レナートの仕業であることは、ほぼ間違いはありません。しかも誘拐したのがあなたであるから、なおさら都合がいいのです。あなたが彼女を誘拐したとき、彼等が殊更あなたの車を追わなかったのは、いずれあなたの車が道に迷って、奴らの仲間である山男の家に行くことが分かっていたからであろうと推察されます。いずれにせよ、彼らは、彼女を、あなたの手から奪い返すことに成功した。あなたをそのままにしておいたその理由については定かではありません。後で逮捕して、あなたを彼女の誘拐殺人犯に仕立てるつもりだったのかも知れません”

“殺人犯？”とぼくは驚いて言った。“アリーヌは、殺されるんですか？”

“今までのいきさつからすれば、ほぼ間違いはないでしょう”と、軍曹は冷静に言った。“だから一刻も早く、彼女を救い出す必要があるのです”

“じゃあぼくも”とぼくは叫んだ。“その救助に一役立たせて下さい”

“まあ、落ち着きなさい！”と軍曹は言った。“ジタバタしてもどうにもなりません。この件について探りを入れているK2の報告を待つのです。内容によっては、あなたの出動という事態があるかも知れません”

“分かりました”とぼくは言った。“でも、これだけ言わせて下さい。彼女は本当にまだ生きていますか？”

“生きています”と、軍曹はきっぱりと答えた。“奴らの仲間でも分裂が起こって、どうやら彼女は、安全な場所に隠されているようなんです。しかし詳しいことはすべて、K2の次の報告を待たねばなりません”

そう言って軍曹は再び、ヘッドホーンを耳につけると、新しい情報をキャッチすべく、通信を続けるのだった。

“そういうこと。分かった？”と、フローラは言った。“ここに来れば、たいいていのことが分かるのよ。――でもこここの設備はそれだけじゃない。他にも、最先端の科学知識や、武器や、その他なんでも揃っているの。さあ、出ましょ”

ぼくとフローラとは情報室を後にした。やがて、城内にあるエレベータに乗ると、フローラは、最上階の見晴らしのいい部屋にぼくを案内した。

“ホラッ見てよ。向うには飛行場だってあるのよ”

フローラの言う窓から外を見ると、確かにそこから立派な飛行場を見下ろすことができた。

“わたしもあそこで、何度も訓練を受けたわ”

“それでか”と、ぼくはやっと納得したように言った。“急に飛行機を操縦するなんて言い出すもんだから...”

フローラは、笑顔になりながら、室内のソファに坐った。

“わたしって、見かけよりはませているでしょ。そうは思わない？”と、やがてフローラは言った

。

ぼくは黙ってうなづいた。

“ここではね、子供も大人も分け隔てはないの”とフローラは言った。“だから、子供も自然しっかりしてくるの”

“確かにねえ”と、ぼくは、そのフローラの言葉を認めざるを得なかった。

“それでフローラ”と、ぼくも、彼女と向かい合わせのソファに腰掛けると言った。“ここは魔王に対するレジスタンスの総本山らしいけれど、魔王についてはどの程度のこと分かっているの？ 魔王の正体とか、魔王の弱点とかについて、分かっているのかい？”

“いい質問だわ”とフローラは言った。“ただ一つ言えることは、魔王も万能じゃないということよ

。

だって万能なら、もうとっくにこのアジトなんか、潰されてしまっているわ。でも、理解を越えた巨大な力を持っていることは事実よ。だから真実は、わたしたちの組織なんて、風前の灯なのかも知れない。それでもわたしたちは——つまり、一部の目覚めた人々は、抵抗せざるを得ない。こんな社会を容認するわけには行かないのよ。だって、みんなの運命は、魔王によって振り回されているんだもの。魔王を恐れるが為、なんでも魔王の言いなりになっている。魔王に反する言動は一切ダメなのよ。この支配から逃れたい——それは、誰しものが思う自然な感情よ。でも、長年の歴史が、そうではない方向へ進んで来たわ。魔王の力が、それほどまで巨大だったからよ。時たま現れた反対者には、かしゃくのないまでの弾圧が加えられたわ。それはひどいものよ。身の毛がよだつぐらい。しかし、みんなの反発を招くといけないから、魔王も、うまい方法を考えたの。一部を味方につけて、世の中を支配することを考えたの。そうして出来上がったのが、今の組織よ。そうすれば、彼らがわたしたちを弾圧し、魔王は、直接手を下さなくてもすむというわけよ。しかも、人々同士がいがみ合うなかで、魔王はその陰に隠れるという寸法よ。でも、そのことを知っていながら、わたしたちは、魔王の手先となって、わたしたちに弾圧を加える彼らと戦わざるを得ないの。しかも、その為、費やすエネルギーの消耗は、相当なものよ。おかげで、魔王との直接対決どころではなくなってしまった。魔王は、組織の陰に隠れて、遥か手の届かないところに行ってしまったのよ。でも——そんな悪条件の中でも、魔王に関する知識は、確実に増えて行っているわ。それは、幾多のレジスタンスを行って来た人々の血と涙の結晶のたまものなのよ”

“つまり、魔王って、なんなの？ その弱点は？”とぼくは身を乗り出すようにフローラに聞いた。

“一口に言って、永遠の命を与えられた化物なのよ”と、フローラは答えた。“しかもいろんな魔法を駆使することができる。気に入らない人なら、直接手を下すこともできるわ。でも今は、人の手の届かない、安全なところにいる、のうのうと暮らしていて、地上のことは、地上の組織の人に任せっきりのよ。そして——魔王の弱点は、今のところは分からない。でも、魔王が存在しない、という世界からときどき来る人がいて、もしその人たちの言うことが本当だとしたら、それはわたしたちにとって、とりもなおさず一つの希望であり、魔王の弱点でもある、ということになるわ。わたしはもちろん、そういう世界が実際にあると信じたい気持なの。そして願わくば、そういう世界へ行ってみたい。そこがどんなに平和で、いい世界か、この目で確かめてみたいのよ”

“そこだって決していい世界じゃない”と、ぼくはしみじみと言った。“争いはあるし、貧富の差もある。——でも、ここの、魔王による苦しみが無いのだけは事実だ”

“どうしてそんな事を知っているの？”と、逆にフローラは尋ねた。

“だって、ぼくがまさにその世界からやって来た人間だからさ”

フローラは、あいた口が塞がらないといった表情だった。

“まさか、あなたが...”と、フローラは言いかけたが、それ以上のことは驚きの余り、言えないら

しかった。

“ぼくは知らない場所でこの世界に踏み迷ってしまった”とぼくはしみじみと、自分の身に起こったことを、彼女に語り始めた。

すべてを語り終えたとき、フローラは嬉しそうな笑顔になった。

“じゃあ、やはりわたしが想像していたとおりだったのね。そしてあなたがその人だったのね。嬉しいわあ”

そう言ってフローラは、ぼくに抱きついた。

“だったら、魔王のいる世界と、いない世界との、あなたは掛け橋なのよ。あなたの奪われた妹さんもそう。だったら、そのあいだの穴をもっと広げればいいの。方法は分からないけど、きっとあるはずよ。その穴を広げれば、人々は、魔王のいない世界へと行って、そういう世界がどんな世界なのかについて知識を得ることができるかも知れないし、魔王の世界を消滅することだって、できるかも知れない。ねえ、いつか本当に、わたしをその世界へ連れて行って。お願い”

フローラはそう言って、ぼくに愛撫を始めるのだったが、ぼくだって、この世界からどうやって脱出できるのか、さっぱり見当もつかなかった。

“そんなことが可能ならばね”と、ぼくは言った。“本当のところ、ぼくだって分からないのさ。さっきも語った通り、ぼくは自分の意志で、ここへやって来たわけじゃないんだからね。全くの偶然、奇蹟といってもいいような出来事によってなのさ”

“でも、何か方法はあるはずよ”と、フローラは言うのだった。“事実あんたは、この世界へ渡って来たのでしょ。ねえ、努力しましょ。努力して一緒に、その方法を捜しましょうよ”

“でも、リサを置いては行けない”と、ぼくは言った。“アリーヌもまだ、ほっておくわけには行かないさ。仮にそんなことをするとしても、まだまだずっと先の話しさ”

“あなたの言う通りね”と、フローラは、微笑みながら言った。“今回は、あんたに一本とられたわ。シレールさん”

フローラは相変わらず、ぼくの向かいに、その小さい、可愛いらしい体のまま、ソファーに腰掛けていた。

“いいものをお目にかけてみましょうか？”フローラは、小悪魔のようににっこりすると言った。“いいって言うまでちょっとのあいだ目を閉じていてくださらない”

それでぼくは言われるまま目を閉じた。

“もういいわよ”という声でぼくはやっと目をあけた。そのあいだ、五分ほどが経過したろうか。声がどこか変な所からしたと思ったものの、目をあけると例のソファーにフローラの姿は見られなかった。

ぼくはハッとなって叫んだ。

“どこだ、フローラ！”

“ここよ”その声は確かに上からした。

それで、驚いて顔を上げると、フローラは驚いたことに、この広くて高い天井に頭がつかえんばかりに、宙に浮いていたのだった。

“フローラ！”と、ぼくは驚いて言った。“一体何が起こったんだ？ どうしてそんなところにぶら下がっているの？”

“ぶら下がっているなんかじゃないわ”と、フローラは、高さ7メートルはあろうかと思われる天井から、ぼくを見降ろしながら言った。“見てよ。なんの支えもなしに浮いているのよ。ホラッ、この通り”

そう言うなり、フローラはまるで風船のように、ふうわりと宙空を漂い始めるのだった。部屋の隅から隅へと飛ぶその姿は、ぼくが想像でしか知り得なかったあのピーターパンのウェンディを思わせた。

“信じられない”と、ぼくはそんなフローラを見上げながら、驚嘆のため息と共に言った。“どうしてそんなことができるの？”

するとフローラは、ゆっくりと宙空から舞い降りて来て、ぼくの向かいのソファのところに、ストンと軟着陸をした。

“どう？ 驚いた？”と、フローラは、微笑みながら言うのだった。

“あたり前だよ”と、ぼくはまだ興奮が覚めやらずに言った。“何か、種でもあるのかい？”

“これは、魔法や奇術なんかじゃないわ”と、フローラは、至って落ち着きながら言った。“歴とした科学なの”

“空を飛ぶことが科学だって！”と、ぼくはなおも驚きながら言った。

“そうよ。これはわたしだけじゃなく、あなたにだってできるわ”

“ぼくにだって？”とぼくは叫んだ。“どうして？”

“薬を飲めばいいの”と、フローラは、涼しい顔をして答えた。“わたしたちの仲間の長い研究が、人間を空に浮かび上がらせる薬を発明させたのよ。一步魔王に近づいたというわけよ。魔王だって、あるいはひょっとして、この薬を使っているのかも知れない。そんな気さえするの。ただし、――これは重要な点だけど、わたしたち人間は、薬の一回の服用で、せいぜいのところ一時間ぐらいしか、宙に浮いていられないわ。それ以上に浮くほど服用することは体に危険だわ。これが、今のところ、わたしたちの限界というものよ”

“へえ～、驚いたな”とぼくは言った。“じゃ、その薬を服用しさえすれば、ぼくだって、君のように空に浮かぶことができるのかい？”

“ええ、勿論よ。慣れるのに少し時間がかかるけどね”と、フローラは言った。

“そう、そんな薬があるんなら、是非このぼくだって、試してみたいな”

“後でね”と、フローラは、にっこりして言った。“その前に、あなたに見せたいものがあるの。ここは、外から見れば、一見のどかで、平和な村のように見えるでしょ。でも、それは、魔王やその手先に対するカモフラージュに過ぎないわ。地下に行けば、そうじゃないってことが、あなたにも直ぐ分かるようになるでしょ”

“地下だって！”と、ぼくは驚いて言った。

“そう、地下要塞と言い換えてもいいわ。それはそれはスゴイのよ”とフローラは言った。“地下1000メートルのところにね、一大都市が存在するの。そこは、工場であり、基地であり、また研究所でもあり、住まいでもあるわ。この存在については、わたしたちの最高機密に属するものであり、この世界でもほんの一握りの人しか知らないわ。もしここが、魔王に発見され潰されたら、それこそわたしたちはもうお終いよ。――だから、わたしたちの希望の要塞、と言ってもいいようなところなの”

“そう、是非行ってみたいね”と、ぼくは、目を輝かせながら言った。

“じゃ、さっそく行きましょ”

そう言って、フローラは、ぼくに手をさし出した。

ぼくはフローラの腕を取り、フローラに導かれるまま、その部屋を後にした。

簡素な飾り付けがされた城内の入り組んだ秘密の通路を通った後、ぼくたちは、大きなエレベーターの前に立った。それがこの城と地下とを結ぶ唯一の連絡口だった。

殺風景で、やたらと大きなエレベーターに乗り込んだのは、ぼくとフローラの二人だけだった。地下1000メートルにも達するというこんなに長いエレベーターに乗ったのは勿論初めてだった。数分間の息詰まるような時が経過した後、ぼくたちはやっと地下要塞にたどり着いた。エレベーターから降りて、まず目を見張ったのは、その空間の巨大さだった。天然の洞窟を利用したというフローラの説明通り、壁や天井は、剥き出しの岩そのままの状態だったが、その幅や、奥行き之の広さと言え、果てしがないように思われた。そこにはもうさっそく、最新鋭の戦闘機が配置され、作業服を来た人々が、補修や、訓練にいそしんでいた。その数は100以上、あるいは千を下らないかも知れない。要塞内は広過ぎて、簡便な車を利用する他なかった。フローラは、その一つを取ると、ぼくを助手席に乗せて、一つ一つ説明をしながら、運転を開始した。

“どう？ 驚いたでしょう”と、フローラは、生き生きと目を輝かせながら言った。“これはね、来たべき戦いに備えて、蓄積しているの。魔王に買収された軍隊がね、彼らに従わない村や町をときどき攻撃することがあるの。それに対する抵抗用に、わたしたちは、ここで製造された戦闘機や戦車を、それらの村や町に送り出しているわ。こちらには優秀な技術者がたくさんいるから、政府軍の戦闘機などに比べて決してひけはとらないわ。いえ、中には、ずっと優秀なのがあるぐらいよ。これで、政府軍部隊の連中を随分苦しめてやったわ”

“へえ～、そんな戦争がときどきあるのかい？”と、ぼくは少し驚きながら言った。

“最近は減ったけれどね”と、フローラはまじめな顔をして答えた。“魔王の軍隊は、最近、段々と手口が巧妙になって来たのよ。昔のように、おおっぴらにはやらなくなった。それで、何か別の原因があって、それで村が潰滅した、というような方法を取り出したのよ。それなら、他の地域にいる人々の非難も少なくなるというわけよ。

例えば、オディープの隣にあるあの小さな村――あの村が、ダムが決壊で水浸しになったのも、あれが本当に自然の破壊によるものか、確かなことは分からないわ。あるいはあれだって、魔王の部隊の仕業かも知れない。というのも、あの村が、魔王の政府の言いなりになっていなかったことは、確かなことだからよ。最近、あんな風に村がなくなるという事件が多いの。ダムが決壊の件数だって多いし、それは異常なことだとは思わない？”

“確かにね”と、ぼくも、まじめな顔つきになって言った。“君の説明は分ったよ。でも一つ気になっていることがあるんだ。これら、立派な戦車や戦闘機は、どこから運び出すんだい？”

すると、フローラはにっこりした。

“あのエレベーターからでは狭過ぎる、と言いたいんでしょ。大丈夫よ”とフローラは言った。“この地下の洞窟は、地を這いながら、遙か彼方まで網の目のように延びていてね、そこから搬出することができるの。たとい一つが敵の目に触れても、また別の出口があるわ。うまい具合に、そんな出口がたくさんあるのよ。――でも中心のここまでは決して到達はできないように工夫はしてあるわ。だからここは決して分からない。魔王の目にだって止まらない、絶対に安全な場所なのよ”

“そうかい。すごい所なんだね、ここは”と、ぼくは感心しながら言った。

そう言っているあいだにも、ぼくたちを乗せた車は、戦闘機の群れから、今度は、ズラッと並んだ壮々たる戦車の群れの間を走るようになり、さらにその奥には、最新鋭の銃火器がズラッと並んでいた。それらはいつでも用を足せる態勢になっていた。

“そして向うが工場で...”と言うフローラの説明で、大きな仕切りのある建物の奥を見ると、確かに、一つの戦闘機、一台の戦車が、人々の手によって確実に生産されている光景が目に入って来た。彼らは、防護用のマスクを付けて、溶接を行ったり、組み立てをしたりしていた。“それから、あっちが、様々な実験や試験を行っている研究所。わたしたちの空に浮かぶ丸薬も、あそこで発明されたものなのよ”

ぼくの視線も、今度は、その建物の方に向けられた。その内部は、レジスタンスの仲間でも極秘とされ、頑丈そうな扉が固く締められていた。

“それから、その横にある建物が技術者養成所。その隣には、彼らの家族の為の住まいや学校やショッピングセンターなど、なんでも揃っているわ。――でも、地下の生活だから、余り長くとどまっていることはないの。長くても一年かそれぐらい。それが終われば、また地上に戻って、彼らは、普通の暮らしをすることになるの。あっそれから、あの住宅街の遙か向うにはね、大切な原料を取り出す採掘場と、それらを精製する精練場とがあるわ。そこまでは遠くて、ちょっとやそとでは行けないわ”

“分かったよ”と、ぼくは、まるで夢のような出来事を振り返りながら、フローラに言った。

窓から射し込む日光が、こんなに恋しいものだとは思わなかった。

いくら魔王や、その軍隊の目を盗む為とは言え、地下暮らしはまっぴらだ、とぼくは思った。やはり太陽がいい。そして窓の外に広がる、あの美しい草原。

ぼくたちは再び地上に舞い戻って、城館の小さな部屋にいた。窓からは、ぼくが初めてこの村にやって来た時に目にした、若い少女たちが水着姿で水浴びや、日光浴を楽しんでいる。そんなのどかな光景が今もなお見えていた。

“いいねえ、地上は...”と、ぼくは、深々とソファーに腰を降ろしながら、うっとりするような面持で言った。“それでぼくはこれから、どうすればいいんだい？”

“とりあえずは、アリーヌを救出に行ってもらおうことになると思うわ”と、フローラは、表情ひとつ変えずに答えた。

“ぼくひとりでかい？”

“もちろんわたしもついて行くわ”とフローラ。“でも、救出そのものは、あんたひとりですもの。手順については、K2が説明してくれることになると思うけど。それ以上の手伝いは、わたしたちにはできないわ。もしわたしたちがつかまると、危険が大きくなるんですもの”

“そう、分かったよ”とぼくは言った。“それで、いつ出発することになるんだい？”

“多分、あした、朝早く出発することになると思うわ”と、フローラは答えた。

“じゃ、ここでのんびりしてられるのも、たった一日だけというわけだね”とぼくは言った。“こんなに素敵なおとこなのに、名残り惜しい気がするな...”

“ねえもしアリーヌを救出することができたなら”と、フローラは言った。“みんなで、うなぎの住む桃の谷へ行きましょうよ。そこは、レジスタンスで活躍した老人たちが住んでいる、本当に素敵なおとこなのよ。今頃だったら、桃の花がきれいで、わたしたちの理想郷だと考えているようなおとこなの。川の流れも静かで、それこそ本当に、目の玉が硬貨ほどもある大きなうなぎたちが、自由に泳ぎ回っているの。あんなに素晴らしい村って多分、他のどこにも見られないと思うわ...”

“そう、そんなに素晴らしいところが、このカリオンにはあるんだね”とぼくは言った。“フローラ、ぼくは君と結婚できて、よかったよ...”

初めて体験することになったこのカリオンの村にも、ようやく夕闇が迫って来た。

太陽が傾き、風も出て来て、あれほど賑やかにプールで泳いでいた少女たちも、いつしかプールから去って行った。農作業に従事していた人々も、その手を休め、もう帰り支度にかかるうとしていた。なんと素晴らしい、のどかな村。ぼくは、美しいフローラを抱き寄せ、静かに村が暮れて行くのを、遠くの空が、美しい夕焼けに変わるのを見守った。

夜会は、久し振りにレジスタンスが一名加わったということで、賑やかにとり行われた。

広いホールには、御馳走が並べられ、昼間見た指令長官や軍曹やその他の軍人たち、それに、プールで泳いでいた少女たちも、今やみんなきれいに着飾って、そこにいた。

フローラも、まだ小さいながら、精一杯のおめかしをして、その場にのぞんだ。ぼくは、みんなに紹介されるとあって、少しばかり緊張気味だった。

“それではさっそくですが”と長官は、ざわざわした雰囲気をもとめる為に、第一声を発した。“本日、我れ我れの厳しいテストに無事パスされて、我れ我れの仲間に加われたホールバラ君を紹介します。彼が我れ我れの仲間に入られたことは、まことに名誉なことだと申さねばなりませんまい。彼は、緊急なる、次の任務を持っておられ、うまくやり通すものと信ずる次第であります。しかも彼は、我れ我れの信頼厚い同士、フローラ嬢とつい最近、結婚されたところであります。みんな、拍手でもって、彼を暖かく迎えてあげようではありませんか”

盛大なる拍手の中、ぼくは壇上に立たされ、何度も何度も礼をした。

そうして、ぼくの歓迎会を兼ねた賑やかな晩餐会が始まった。シャンペンあり、ワインあり、ウィスキーありで、ぼくも知らぬ間にほろ酔い気分になった。昼間の少女たちのイヴニングドレスの姿が、ぼくの目には、まぶしいばかりだった。

“それでシレーン君”と、ぼくがフローラと話しているとき、長官が話しかけて来た。“さっそくだが、あす朝、出発してもらわねばならない。用件は、もう分かっていると思うが、アリーヌ救出の件だ。アリーヌの居場所は、K2が突き止めた。そこまでは、フローラ初め、我れ我れの仲間がお送りするが、それから先のことは、君ひとりでやってもらうしかない。ただ、その場所というのは、非常に危険な湯所で、戦闘が起こるかも知れんのだ。だから救出は、できるだけ手際よくやってもらいたいんだ。さもないと、君たちは戦闘に巻き込まれ、命を落とすハメにならないとも限らない...”

ぼくは長官の目を見つめ、黙ったままうなづいた。

その後も、賑やかな、目を見張るような夜会が続いたが、長官のこの言葉が、ぼくの頭から消え去ることはなかった...

翌朝、小鳥の鳴き声で、ぼくは目が覚めた。素晴らしい目覚めだった。ふと気が付くと、フローラが隣のベッドでスヤスヤと眠っていた。ぼくは、こちら向きに目を閉じているフローラの寝姿を目にすると、たまらなくいとおしく思った。

“フローラ”と、ぼくはつい声を掛けた。

フローラは、ぼくの呼び声で、しばらくすると目を覚ました。

“ああ、あんたなのね、シレーンさん”と、フローラは、微笑みながらぼくに言った。

“ねえ、フローラ”と、ぼくはまだ横になったまま言った。“君は二度目に会ったとき、確か将来は女優になりたいって夢を語っていたね。――でも、ぼくのおかげで、こんなことになってしまって、本当にすまないと思う...”

“なんのことよ？”と、フローラは言うのだった。“私があんたと結婚したこと？ それで家を追い出されたこと？ ――でも、わたしだって、祖国には役に立ちたいと思っているわ。レジスタンスの活動は、わたしの血のようなもので、あなたのせいではないわ。

――それに、女優の夢だって、決して捨てたわけじゃない。親許に帰れなくとも、暮らすところって、何処にでもあるじゃない。この戦いが小休止すれば、わたしはまた普通の生活に戻って、女優になる為の勉強はしたいとは思っているの”

“そうかい？ そんな風に思ってくれているのなら、ありがたいよ”と、ぼくは言った。“アリーンも、リサも、みんな元通りに戻って、君が女優になればいいね。こんな、魔王が支配するような国じゃなく、みんなのびのびと暮らせるような所でね”

“そう、そういう日が来ることを、わたしは夢見ているの”と、フローラは、微笑みをいっぱい浮かべながら言うのだった。

アリーンを救出に向かうその朝、窓の外を見ると、空は思いの外どんよりと曇っていて、何か、一抹の不安を感じさせないでもなかった。黒い雲が空に張り出し、冷たい風が舞って、嵐が来る前兆を思わせた。でも、遙か彼方、遠くの野の方には明るい所が一箇所だけあり、そこでは青空ものぞいていそうだった。見遙かす限り、この村の地平は、きのうとは打って変わったように、およそ救出の日にはそぐわないように、重く、暗く、沈んだものとなっていた。小鳥たちは、来るべき嵐に備えて、食事も早々に、古巣へと帰って行こうとしていた。

朝食は、ぼくとフローラだけの寂しいものだった。話しもはずまず、一抹の不安が、二人の胸を占めているのは疑いのないことだった。

朝の7時には、もうぼくたちは、その城を後にしていた。一機の小型飛行機が、城から出て来たぼくたちを待っていた。プロペラは、既にうなり声をたて、いつでも飛び立てる態勢になっていた。

上空から見るカリオンの村は、素晴らしいの一語に尽きた。山のふもとの城や、菜園や、放牧場。あの乙女たちのプールなどが、瞬く間に後方に遠ざかって行き、フローラが昨日口にした、老人たちの住むというカリオンの桃の谷も、それらしい所が向うに見えてはいたが、その上空は通らずに、カリオンの村全体から、飛行機は次第に遠ざかって行った...

ほぼ三時間ほどの飛行の後、ぼくたちが目標と思われる町へやって来たとき、ぼくは、その町の異様さに、思わず目を見張らずにはいられなかった。赤茶けた巨大な岩山がほぼ垂直に切り立っているその谷間の、樹木がおい茂ったところに白や赤い壁をした家々が散らばっていた。それが、岩山の真下からふもとの谷間に向かって散在しており、ドーム状の屋根をした教会も見える一つの町を形づくっていた。しかし、飛行場はそこからは少し離れたところにあるらしく、ぼくたちの乗った飛行機は、その町から遠ざかって行った。

飛行機から降りると、一台のジープがぼくたちを迎えに来ていた。運転していた男は、初めて目にするK2その人だった。

簡単なあいさつをかわした後、ぼくたちは彼の隠れ家へと向かった。

それは、岩山の町からは少し離れたところの砂漠の町の中にあり、大きなテーブルのある部屋の中で、ぼくたちは作戦を話し合うこととなった。

アリーヌが捕らわれていると思われる家は、彼によると、赤茶けた岩山の町の中でも、とりわけ上層の位置に属する集落の中にある、ということだった。そこへ達する道は、迷路のように入り組んでいて、試行錯誤をくり返した後、やっと到達できるというほど複雑なものだった。アリーヌがこんな所へ連れて来られたのは、裏切った仲間が、彼女を殺す代わりにひともうけをたくさんだせいであり、買い手がつきさえすれば、すぐ売り飛ばされる手はずが整っている、ということだった。だから、それまでのあいだ、彼女はそこに幽閉され続けるであろうし、そうである限り、彼女の身は安全なのだ。

その話を聞いて、ぼくはほっと胸をなで降ろした。少なくとも、あのレナートの一味に再び奪い返されることがない限り、彼女は命を失うことがない。それにしても、こんな平和な世の中で、人身売買が行われているのだとは、恐ろしい気がした。

“それで、ぼくはどうすればいいんです？”と、ぼくは尋ねた。

“彼らの家にもぐり込むことだ”と、K2は答えた。

“でもどうやって？”と、ぼくは驚いて言った。

“なに、すごく簡単なことだよ”と、K2は落ち着いた表情で答えた。“君は、オディーブの町では有名人だったかも知れないが、この町では君を知っている者はまずいない。アリーヌただ一人を除いてはね。これが非常に都合のいいことで、君は、ここの住民を装って、こそ泥を働きさえすればいいのだ。君は彼らにつかまるが、彼らは決して君を警察に引き渡したりはしない。自身が違法なことをしている手前、みだりに家の中を引っかき回されたりしたら困るからだ。それで、彼らのとる方法として考えられることは、君をしばらく家の中に幽閉するということだ。アリーヌと同じようにね。そして、君を売り飛ばすことだって、考えるようになるかも知れない。それで――それまでのあいだに、君は彼らの家の中で、彼女の居場所を突き止めることなんだ。そうなれば、わたしらの作戦の半分は成功したも同然で、後はわたしたちに任せてもらいたい。わたしらは、奴らの家に攻撃をしかけ、そのあいだに君たちは逃げてもらいたいと思っている。ただ、攻撃の時間だけは、前後の状況から、今のあいだに決めておかねばならぬのだよ。いいかい？ 三日後のこの時刻。このときに一斉に攻撃が始まる。だからそれまでに君はアリーヌと出会い、脱出の方法について考えてもらわねばならないのだ。いいかい？ できるね”

ぼくとしては、ただうなづく他はなかった。

“さあ、それじゃ作戦開始だ”と、彼は、声を弾ませて言った。

テーブルの上に地図を広げ、目標の家に行き、忍び込む手順について、くどくどと彼は説明を始めた。

最後にフローラが、ぼくを励ますように言うのだった。

“シレールさん、成功をお祈りするわ”

そう言って彼女はぼくに例の丸薬を一つだけ渡してくれた。

“これを服用するのは、非常のときに一回だけよ。まだ副作用があって、あまり勧められないの。効目があらわれるのは一時間だけ。それをくれぐれも忘れないでね”

“ありがとう。助かるよ”

そう言って、彼女から薬を受け取ると、ぼくは、フローラの手を握り、その頬にキスをした。

そんなぼくたちを引き離すかのように、K2の部下は、ぼくを隣の変装室へと連れて行くのだった...

仲間の数人と、商人を装って、背後に巨大な岩山のそびえる不思議な雰囲気のある、その町にやって来たときは、もう午後をまわっていた。こうして改めてその岩山の巨大さを目にすると、何か圧倒されるような、身に迫るものを感じないわけには行かなかった。その岩山の中腹辺りまで木が茂り、要塞のような家も見えていて、もしやあれがアリーヌの捕らわれている家ではないかと思われた。実際、頭に叩き込んだ地図を頼りに目でたどると、ぼくの勘が、ほぼ間違いでないことが分かった。あの一番上層に見える要塞のような壁をしたあの建物——それがアリーヌのいる建物に違いなかった。それと同時に、ぼくの胸はときめいた。

ぼくたちは、他の住人たちに紛れながら、谷間まで延びている町の入口へと向かった。ひとたび樹木におおわれた町の中に入ってしまうと、道は迷路のように入り組んで分からなくなってしまふ恐れもあったが、もう少しで別れることになる仲間は、そんなぼくを励ましてくれた。

別れ際、仲間の一人は、“頑張れよ”と声を掛けてくれた。

もう後は、頭に叩き込んだ地図を頼りに、一人で、その入り組んだ道を上がって行く他なかった。

建物は、それぞれが思い思いの方向に窓を向けており、どれもが同じで、似ているように思われた。その中の一つを見つけ出すことができるか、初め、不安にかられたが、特徴ある目印のことを思い出して、気を取り直した。狭い通路の上の方にまで、人々は露店を出して掛け声を叫び続け、往来の人々で賑わっていたが、彼らと同じような服装をしているぼくを怪しむ人はいなかった。

かなりの坂道を登った後、ぼくはついに目標とする建物にまでやって来た。

張り出したバルコニー、円く切れ上がった大きな入口や、その入口を支える、特徴ある柱の形などで、すぐそれと分かった。しっかりと閉ざされている木の扉を前にして、ここにあのアリーヌが閉じ込められているのだと思うと、ぼくは感動で胸が熱くなった。

しかし正面切って侵入することは不可能だったので、何か別の方法を考える他なかった。よく見渡すと、幸いなことに屋根伝いで、バルコニーの方からは侵入が出来そうだった。それで、屋根へ上がれる別の家を探す他なかった。幸いなことに、それに適当な家はすぐ見つかった。

真昼間と、余り都合のいい時間帯ではなかったが、ぼくは出来るだけ人々の目に触れられないようにしながら、屋根伝いに、その家に向かった。バルコニーには間もなく達した。

うまく手摺りを乗り越え、ついにテラスに立った。部屋の窓は開いたままで、偶然にも人気がなかったので、易々と内部に入り込むことができた。部屋の中は、見慣れない家具の他に、金や銀製品の食器や飾り物、その他、複雑なチューブとガラス器の組み合わせで出来た水たばこなどが、ごちゃごちゃと置いてあった。ぼくは泥棒を装う為、わざとその中でも高価そうな金製の食器を脇にかかえると、さらに廊下に出た。

建物の内部は広く、入り組んでいて、いくつもの部屋、いくつもの廊下がありそうだった。そして、人のいそうな、閉ざされたドアのそばを通り過ぎると、ぼくはわざとその食器を落として、大きな音を立てた。そのとたん、廊下の両側にあったドアが一斉に開き、何人もの男たちが、ドア越しに顔を覗かせた。

ぼくを見るなり、

“何者だ！ つかまえろ！”という声が、あちこちから響き渡った。

たちまち、数人の男たちが駆けつけて来て、ぼくは望み通り、彼らの捕虜となることができたのだった。

数人の男たちにかかえられながら、ぼくは、この家の主がいるらしい部屋に連れられて行った。

主は、もちろん見たこともない顔ではあったが、いかめしい顔に、勇壮な口ひげをはやしており、深々とした椅子に腰掛けて、例の水たばこを吸っていた。

“こいつ、家の大事な金の食器を盗み出そうとしていました”と、部下の一人が報告した。“さらに、家の中を物色しているときにつかまえました。こいつ、どうしましょう”

ぼくは、弱々しく、すまなさそうに主の目を見つめた。

主は、ぼくをきっとにらみつけるなり、

“今は大切なときだ。しばらく、地下室でもぶち込んでおけ！”と、部下に命令した。

ぼくは、有無を言わず、地下室に連れて行かれた。

ぼくがぶち込まれたところは、地下室というよりは、地下牢に近かった。単に、地面をくり抜いただけの、部屋というには余りにも粗末なものだった。

しかしぼくとしては、三日後の攻撃が分かっていただけに、余り猶予はなかった。

だが、そのじめじめした部屋の中ではどうもがいても脱出は不可能で、徒に時が経って行くばかりだった。

そうして、最初の晩を過ごし、二日目も、何事もなく過ぎて行った。ぼくの気持はあせるばかりだったが、どうすることもできなかった。

そして三日目、いよいよ味方の攻撃を目前に控えたその日の朝、新しい動きが出始めた。

ぼくが眠っている狭い地下室のドアが突然開き、ボスが、ぼくをお呼びだから上の部屋に行くようにと、彼の部下が告げた。いよいよ取り調べが始まるらしいのだ。すぐぼくは両手を縛られ、ロープで引かれながら、地下室を後にした。

暗い、ジメジメした、岩をくり抜いただけの通路を通って行くとき、どこからともなく女のうめき声があったので、ぼくはハッとなった。あれは、久し振りに聞く、アリーヌの声だ。

狭い通路が急に開けたところ、広い、物置に利用されている、薄明かりしか差し込まない部屋の奥の方で、なんと、アリーヌは、素裸にされていたのだった。彼女は、白いバスタブに入れられて、その周りを取り巻き、ニヤニヤして立っている男たちの中の一人の手によって、無理やりその浴槽から引き上げられる光景を、ぼくは目にした。

同じくそれを目にした、ぼくをしょっ引いている連中たちも、ニヤけた笑いをその顔に浮かべた。

アリーヌは、風呂から上げられ、一瞬、全裸となったが、すぐそばにいた女たちの手によって、布のようなものをかぶされた。

“なんだ、残念だったな。せっかくいいところだったのに”と、ぼくを引いている連中の一人が言った。

ぼくは、彼女がアリーヌだということを知っていたが、わざととぼけた表情で、

“彼女は誰なんですか？”と連中たちに尋ねた。

“お前には関係ねえ！”と、一人がぼくの方を向くと、向かっ腹を立てたように怒鳴った。

しかし、その場を過ぎてしばらく行くと、別の一人が、ぼくに話しかけて来た。

“お前、知りたいか”と、彼は言って来た。“実はな、よその町からさらわれて来た、超一級品の娘よ。しばらく買い手がつくまでここにいたが、とうとう買い手がついて、今日が晴れの出発式というところだ。それで、きれいにおめかししなけりゃならないのよ。どう、なかなかいい玉だろう。買い主は、なんだか、小さな国の王様だとかいう話しだぜ。おかげで、うちの大將も、ぼくぼく顔だぜ...”

“こら、そんなことバラしていいのかい？”と、向かっ腹を立てた男の方が言った。

“だって、どうせアレだろ？”と、バラした男は、不気味な笑顔になって言うのだった。

やがてぼくは、不思議な形をした、いくつもの扉のある部屋に連れて来られ、椅子に縛りつけられたまま、しばらくそこで待機するように、彼らに命じられた。そうして、彼らは、不用意にもぼくをその部屋に一人残したまま、そこから去って行った。

しばらく椅子を揺すっても、このぐるぐる巻きになったロープは、すぐにはほどけそうもなかった。それで椅子をゆするのをやめ、ぼくは、自分のこれからのことを案じた。しかしそれ以上に、彼女がどうなるかが心配だった。

そうして、しばらく静かな時が流れた頃、急に部屋の外がざわざわとし始めて来た。かろうじて彼らの声が聞き取れたところでは、どうやらあのアリーヌが逃げた、ということらしかった。

そのとたんに、ぼくの目は輝いた。彼女は助かるかも知れない、とそう思ったのだ。

そのときだった、突然ぼくの部屋の幾つもある扉のうちの一つがボタンと開いて、なまめかしい衣装を着せられて、髪の毛を振り乱したあのアリーヌが姿を現したのは。

ぼくが驚いた以上に、この部屋に誰がいるとは思わなかったアリーヌの方が、一層驚いたようだった。

しかしぼくは、椅子に縛られたままの姿で、間髪を入れずに、彼女に声を掛けた。

“アリーヌ！”

彼女は、ぼくを無視して、そこを通り過ぎ、別の扉へ向かおうとしていたが、その声で、ぼくの方に振り向いた。

“どうしてわたしの名を知っているの？”と彼女は聞いた。

“ぼくだよ”と、ぼくは必死になって言った。“あるときはレナート。そして今はこの町の商人だけど、本名はシレール。ぼくは、シレールだよ！”

“ああ、あの変装の名人さん？”と言いながら、彼女は、ぼくのそばに寄って来た。

そして立ち止まると、ぼくをつくづく見ながら、“そう言えば確かにシレールさんね”

“アリーヌ”と、しかしぼくは必死になって言った。“ぐずぐずしている場合じゃないんだ。早くここを立ち去らなければならないんだ。さもないと、味方がこの近くまで来ていて、もうすぐ味方の攻撃が始まるんだ。それまでにここを脱出しないと、大変な目に会ってしまう...”

“分かったわ。いい考えがある”とアリーヌは言った。“しばらくここにいたせいで、ここのことはよく分かっているわ。――でもちょっと待って。追手をまく方が先よ。わたしはあの扉へ行くから、別の扉へ逃げたって、追手には言って。もうぐずぐずしてられないわ”

そう言うなり、アリーヌは、あわただしく、別の扉から逃げて行った。

その扉が閉まるか閉まらないうちに、もうさっそく、アリーヌがやって来た方の扉が開いて、悪党どもがこの部屋になだれ込んで来た。手という手にはみんな刀を持っていて、それはスゴいけんまくだった。

賊は、ぼくを見るなり、ぼくの所に駆けて来た。

“今、尼が入って来たろう！ どこへ行った！”と、そのうちの強そうな男が、剣を振りかざして叫んだ。“言わぬとたたき切るぞ！”

“あっちです”と、ぼくは、違う扉の方を目くばせしながら言った。

“本当だな。嘘なら命はないものと思え！”と、男は捨てぜりふを吐きながら、仲間たちを引き連れて、どやどやとその扉の方へなだれ込んで行った。

その騒ぎがおさまってしばらくした頃、再び正しい扉から、あのアリーヌが姿を現した。

“ありがとう。助かったわ”と、彼女は、微笑みながらぼくに言った。

しかしぼくの方は、ほっとすると言うよりは、彼女のそのなまめかしい姿に目が奪われがちだった。

“出口に通じるいい道があるの”と彼女は言った。“ハイッ、これ”

そう言って、彼女は、隠し持っていたナイフを見せると、すぐそれでぼくのロープを切り裂きにかかってくれた。

ついにロープは切り裂かれ、ぼくは自由になった。

アリーヌはぼくを自由にすると、まだ開いたことのない五番目の扉へと、ぼくを案内した。

“この扉が、外へ出るには一番安全なの”と、彼女は言った。

そして、その扉の向うの、薄暗い通路に出ると、ほっとした為か、ぼくと彼女とはしっかりと抱き合い、キスをした...

細い、薄暗くて、ただ岩をくり抜いただけのような長い通路を通った後、やっとぼくたちは、光のさす、赤茶けた岩壁が真近に立ちはだかる裏山へと、抜け出た。その、凝灰岩でできたざらざらした岩膚は、日光に照らされて、まばゆいばかりだった。

“さあこっちよ”と、アリーヌは、ぼくの手を引いて言った。“ここに、山を登る小道があるの”
ぼくは言われるまま、彼女の後について行った。

ギラギラ照りつける太陽の下、ぼくたちは、汗をにじませ、息を切らせながら、その奇妙な形をした岩山を登って行った。

そしてほぼ山頂に近付き、山の向うへ逃げて行こうとした頃、ふもとの町では、攻撃が始まったのだ。ぼくたちはその光景を、眼下に見下ろし、目の当たりにした。

石造りの集合住宅のあっちこっちで、爆音が轟き、煙が立ち始めた。

人々が、泣き叫びながら、逃げまどう姿が、ここからもよく見えていた。

目標を誤っているのか、それとも総攻撃なのか、ぼくは、その理由については何も知らされてはいなかった。

ただ攻撃は、一段と激しさを増すばかりだった。町の破壊は一気に進み、内戦の様子すら呈して来た。味方の軍隊はどこにいるのか、まだ町に残っているかも知れないフローラは大丈夫なのか、それすらぼくには分からなかった。

そのうち、猛々たる煙の向うに、はっきりと見えて来た。

このマルーラの町をちょうど挟むかのように、広々とした砂漠地帯を、向う側の魔王の軍隊と、こちら側のレジスタンスの軍隊とが対峙している姿を――

幾百もの戦車、ミサイル、歩兵たち――それはもう、全面戦争とでも言える光景だった。ここが、魔王の操る政府軍部隊と、レジスタンス軍部隊との、一大決戦場になるのだとは、思いもよらなかったのだった。町を攻撃し、人々の虐殺をくり返しているのは、政府軍部隊の仕業に違いなかった。しかしぼくたちは、ただ山の上からそれらを眺めるだけで、どうすることもできないのだった。そして、部隊同士が、双方次第にその距離を縮めようとしているのだった。

“アリーヌ、ぼくはじっとしちやいられないよ”と、ぼくは言った。“味方の部隊の方へ行かなくっちゃ”

“でも、どうやって?”と、アリーヌは不安に駆られながら言うのだった。

そうしているうちにも、敵の陣地から、数機のジェット戦闘機が飛来して来て、マルーラの町や、味方の戦車隊に向かって、無差別な爆撃をくり返した。と思うや、今度は、味方の陣地の方からも、別の戦闘機が飛来して来て、それとの応戦を始めた。味方の戦闘機は、そのうちの一機を、ミサイルで撃墜し、味方の陣地からは大きな歓声が沸き上がるのが聞こえた。退散する敵機を追いながら、味方機は、さらに敵の戦車をも攻撃を始めるのだった。しかし戦況は一進一退で、どちらが優勢とも言えない様相を呈していた。いずれは、相対する戦車や歩兵たちが入り乱れて、乱闘のような状態になるのは目に見えていた。

“アリーヌ、ぼくは行くよ”そう言って、ぼくは来た道を引き返そうとした。

“待って！ わたしも行くわ”

アリーヌは、ふもとの、さながら地獄絵図におののきながらも、そう叫んだ。

ぼくたちは、せっかく逃げて来たのに、再び元の道を引き返し始めた。

やがてふもとに降りて来ると、そこはさながら地獄のようだった。家々は破壊され、多くの人々が、女も子供たちも、路上で息絶えていた。まだ煙がくすぶっている家、炎に包まれている家などが、至るところにあった。家の崩れた瓦れきが路上に散らばり、その下敷きとなってうめいている男の姿もあった。しかしもうぼくたちでは、手のほどこしようもなかった。しかもなお破壊は続き、砲弾やミサイルのさく裂する音が、あちこちで聞こえた。家を焼かれ路上に投げ出された子供が両手で目をふさぎながら泣いていた。

町に降りてしばらく走ると、瓦れきの向う側に、放置されたままになっている一台の戦車が目に止まった。中に乗っていた人はどうなったのか、ともかく、侵入口の蓋が開いたままになっていて、ぼくはアリーヌの手を引きながら、その中にもぐり込んだ。

中には、様々な機器やパネルがあり、でたらめにボタンを押し続けると、やがてガクンと戦車が動き始めたので、ぼくは驚いた。中から外の様子がよく分かり、そのうちぼくは案外と戦車の操縦が簡単なのに気が付いた。

しばらく向きも分からず走り続けると、やがて、ある方向に向かって進軍を続ける味方の戦車部隊に突き当たった。それでぼくはそれと合流し、一緒になって進むことにした。

操縦桿を握りながら、ミサイル発射のボタンや、砲弾の発射ボタンがどこにあるのかを、アリーヌと一緒に考えてた。

そうしているうちにも、敵の陣地が近付いて来た見え、敵の攻撃が一層激しさを増して来るのが分かった。望遠鏡を覗き込むと今やハッキリと敵の戦車を見ることが出来るのだった。

ついにぼくたちは、砲弾の発射ボタンがどれであることを知った。

ぼくは、照準を合わせ、ボタンを押した。

するとその最初の一発で、見事敵の戦車を破壊することができたので、中で、ぼくとアリーヌが、一緒になって歓声をあげた。

そのうち、砂漠の谷間で、ぼくの予想通り、戦車や歩兵たちの入り乱れての大乱闘となった。もう今や、余りにも相手が近すぎて、大砲が役立たず、戦車同士の体当たりの大乱闘となった。

ぼくと、もう一つの戦車とが、とりわけ、勇猛果敢に、敵陣内であばれまわっていた。時には機銃掃射を行い、ときには、敵の戦車に体当たりをくらわしながら、敵陣を突破して行った。しかし味方の被害も甚大で、多くの戦車がその役目を終えていた。

そんな大乱闘のさなかで、敵は、とてつもない大型の新兵器をくり出して来たことに、ぼくは気づいた。それはとてつもない大型の戦車で、文字通り、ぼくたちの乗っているような小型の戦車を、その場でバリバリと食ってしまうためのものだった。実際、味方の戦車が、その戦車によって呑み込まれ、食ってしまわれる光景を目にして、ぼくはおののいた。そんな化物のようにバカデカイ戦車とは、とても正面切っては勝ち目がない。しかもスピードもありそうだったので、すぐにでも追いつかれてしまいそうだった。絶対絶命のピンチに立たされ、ぼくは思い切って、そのモンスター戦車に向かって、砲弾を一発見舞ってやった。だが、高さは十メートルはあろうかと思われるその戦車の装甲は、ビクともしなかった。よほど分厚い鉄板におおわれているのであろう。そうしているうちにも、仲間の戦車たちは、次々と食われて行くのだった。

そしてついに、その戦車が、ぼくの方に向きを変え、ぼくの戦車にピタリと照準を合わせたときには、背筋に、何か冷たいものが走るのを感じた。

そうなっては、もう逃げるしかなかった。とうてい逃げ切れるとは思えなかったが、ぼくは戦車の向きを変え、全速力で退散を始めた。

しかし敵もすぐ追いかけて始め、しかもその距離はどんどん縮まって来るのだった。

ぼくもアリーヌも、そのモンスター戦車の余りの勢いの為に、目を閉じて覚悟を決めた。続いて、何かぶつかるような大きな衝撃を感じ、もはやこれまでだとぼくは思った。これで、ぼくも、アリーヌの人生も、全くの無駄になってしまうのか...

だがそうではなかった。ぼくたちも、ぼくたちの乗っている戦車も無事だった。

どうやら、珍しくモンスター戦車は、ぼくたちの戦車を呑み込むのに失敗したようで、逆に大岩にぶつかって、エンジン部から煙を出していた。

しめた！ 奴らの戦車は故障したのだ。このチャンスを逃す手はない。ぼくは再び戦車を少しずらせると、そのまま向きを変え、全速力で逃げて行った...

ぼくとアリーヌの乗った戦車は、戦場を離れ、ひたすら道なき道を走った。

岩がゴロゴロしている乾いた谷間を走っているとき、敵に見つかって、上からたくさんの岩を落とされ、危うく戦車が大破されるという危機をも見事乗り切りながら、とうとうもう敵のいない、静かな草原地帯へと、ぼくたちは逃れて来た。まだ戦いは続いているかも知れないが、少なくともぼくとアリーヌに関しては、もう戦争は終わったのだった。そして、広々とした草原を目にして、平和がこんなにもいいものだと思ったことはなかった。人間同士の殺し合いや、死の恐怖――そういうおぞましい思いから解放されて、ぼくたちは夢見るような平和と、そして自由とを味わった。

二人とも戦いのせいで心身とも疲れ果ててはいたが、未来に対する希望に燃えていた。

燃料の続く限り、ぼくたちを乗せた戦車は草原を走り続け、やがて草原は森に変わり、小川の流れる美しいオアシスへと変わって行った。

そして燃料がそろそろ切れ出して来た頃、ぼくたちは、一つの美しい村にたどり着いたのだった。

村人たちは、ぼくたちがレジスタンスの一員だと知るや、喜んで迎え入れてくれた。

このことによって、あのカリオンのような村が、この魔王の王国にも至る所にあるのだということ、ぼくたちは知った。魔王軍は、そのような村を次々に破壊しようとしてやっきになっているのだった。

やがてぼくたちは、村人たちに歓迎されつつ、最近建ったばかりの真新しいスタジオにやって来た。そこは、この村向けの放送番組の為の小さなスタジオで、村の中でも、とりわけ村全体を見降ろせる静かな高台に建っていた。ぼくたちは、歓迎のインタビューを受けるという約束だったが、スタジオには、もう一つ別の企画も待っていた。スタジオの別の部屋では、ゲストスターとして、美しい二人の女性が迎え入れられていた。今から、この村には著名な蠟細工師がいて、その人が、この二人の美しい女性をモデルにして、蠟人形をつくる現場を生放送しようとしているところだった。ぼくたちは、自分たちの番組が始まるまでのあいだ、その実演を見せてもらうことにして、椅子に坐って、それを鑑賞することにした。スタジオでは、二人の女性が、互いに朗らかに笑いながら、蠟細工師の指示通りに従い、ポーズをつけていた。それにしても少し気になったのは、彼女たちのはだけた服装から見える、美しく盛り上がった胸だった。彼女たちのうちの一人などは、胸のところのボタンをはずして、少しどころか、今にも全部が見えてしまいそうだったのだ。

“それにしても大胆だなあ”と言って、ぼくはアリーヌを見た。

しかしそのアリーヌからして、あの屋敷から出て来たままの服装で、決して控え目なものとは言えなかったのだ。

ぼくはテレビに出る以上、もう少し控え目な服装にした方がいいことを彼女に告げ、スタジオの人に、何か適当な服はないものかと尋ねた。

スタジオの人はさっそく手頃な白いドレスを持って来てくれて、アリーヌはそれを身につける

べく別室へと向かった。

ぼくたちの番組は短い時間で終わったが、主に、マルーラの町での戦いの経験について、ぼくは熱っぽく語った。インタビュアーたちは、ぼくたちを英雄とたたえ、またの活躍を期待すると言って、締め括った。

行事がすべて終わると、ぼくたちは外に出た。美しく芝生が敷き詰められたスタジオの庭にはプールがあって、よく見ると、さっきの美女たちがそこで泳いでいるのだった。しかも驚いたことに、彼女たちは、上半身裸のヌードで泳いでいるのだった。太陽光線を反映して、キラキラ輝く水面を、彼女たちは、惜しげもなく裸を見せながら、まるで人魚のように泳いでいた。

“どうです、あなた方も泳いでみては？”と、スタジオの付き人が、にこにこしながらぼくたちに語りかけた。

しかしぼくの目は、既に彼女たちの泳ぎに釘づけとなっていた。

そのうち、彼女たちのうちの一人が、プールサイドに立っているぼくのそばにやって来て、微笑みながら話しかけた。

“テレビで見たわ、英雄さん”と、彼女は言った。“なかなか素敵な方ね。一緒に泳がない？”

それでもぼくがなおもためらっていると、意地悪な彼女は、ぼくの足首をつかむや、思いっきり引っ張ったので、ぼくはバランスを失って、叫び声と共に、服を来たまま、プールの中へどぶんと入ってしまったのだった。

全身水びたしとなり、水中から頭を出して呼吸を整えようとしたときには、彼女がそばに立って、ケラケラとぼくのことを笑っていた。しかもなおもからかうかのようにぼくに水をかけて、向うへ逃げようとするのだった。

ぼくは顔にかかった水を拭き取ると、そんな彼女をつかまえるべく追いかけた。

彼女はキャッキョと笑いながら、プールのあちこちを自在に逃げ回ったが、服の重みのせいか、ぼくの方は思うに任せなかった。

その頃になると、いつのまにか水着に着替えたあのアリーヌが、プールサイドにやって来た。彼女は、他の少女のようにヌードではなかったが、それでも彼女のワンピースの水着は、彼女によく似合っていた。アリーヌは、プールサイドに立つと、いきなり、飛び込みの姿勢に変わって、ぼくたちのプールの仲間入りをして来たのだった...

いつのまにか、ぼくたち四人はすっかり仲良しになっていた。ぼくは幸福だった。今や、白いドレスに着替えたアリーヌや、その他のドレスで着飾った彼女たちと手を取り合って、ぼくは、春の、のどかな野道を歩いていた。ぼくは以前、こんな静かな村を愛し、こんな村に住みたいと願ったことがあった。ぼくたちはみんな、この村の部外からやって来た者だったが、みんなこの村が気に入り、みんなの心の願いは同じだった。

ぼくは、自分がまるでずっと以前からこの村に住んでいるみたいに、美しい彼女たちを、村の様々な幸せな場所に案内するのが楽しみだった。

遠くに、古びた教会の改修工事現場が見えている野道のところにやって来ると、ぼくたちは疲れたように、道端に積み上げられた土管の上で休憩することにした。

“素敵ねえ！”とアリーヌは、後ろ向きに大きな土管に手をつけて、幸せのため息と共に、身をのけぞって、美しい青空を眺めた。

他の彼女たちも、めいめいに土管の上で身を休めた。

“これはぼくの秘密だけだね”と、ぼくは突然口を切った。“本当は、ぼくはなんでもできるんだ。たとえば君を、あの雲の上に連れてってあげることもできるし、それに、この村を、ぼくたちたった四人だけの村に変えることだって出来る”

そう言い切るや、アリーヌを初め、彼女たちは驚いてぼくの顔を見た。

“へえースゴい！ でも嘘でしょ”と、彼女たちは笑いながら言い、全くとり合おうとはしなかった。

“全然信用しないんだねえ”と、再びぼくは言った。“じゃあ例えば、あそこを飛んでいるあの白い鳥、あの鳥がぼくの友だちだと言っても、君たちはまだぼくの言ったことを信じてくれないのかい？”

“だったらその証拠を見せなさいよ”と、彼女たちはぶっきらぼうに言った。

“よし、じゃあ、今すぐ雨を降らせてあげよう。しかも、あの小鳥が飛んだ所だけね”

そう言って、ぼくは、彼女たちのうち、アリーヌの手を引いた。そして、アリーヌを道の真ん中に立たせると、笑ってばかりいるだけで、全然本気にしないアリーヌに向かって、ぼくはこう言った。

“いいかい、全然心配することはないんだよ。君は今から、あの空にまでゆっくりと上昇して行く。ちょうどあの遠くに見える森の上空あたりまでだ。あそこへ行けば、さっきの、ぼくたちがいたスタジオが見下ろせるし、それに、この村の全貌を見ることだってできる。上昇したからといったって少しも恐れることはないんだ。決して墜落するようなことはないからね。あの小鳥が君を導いてくれるよ。さあ、それじゃ、目を閉じて。それから十数えるんだ”

アリーヌは言われた通り目を閉じた。

ぼくはすぐ彼女から数歩引き下がると、片手を天に差し延べて、呪文を唱えた。

すると突然、他の少女たちが見守っている中で、世にも不思議なことが起こり始めた。

さっきまで無邪気に空中を飛び回っていた白い小鳥たちが、まるで魔法にでもかけられたかのごとく、すぐ彼女のそばまで降りて来ると、彼女のすぐ近くで旋回を始めた。すると、小鳥の旋回の跡は、美しい虹となって、小雨を降らせた。小鳥の旋回の跡にできた虹はまた、次第に大きくなって、しかも上空に延びて行く螺旋を描き、それらの螺旋がアリーヌの前でラッパ状のトンネルを形づくった。彼女が、螺旋で組み立てられた虹のトンネル内を、ゆっくりと通り抜けるようにして、大空へ上昇して行くようになったのは、それから間もなくしてからのことだった。

そこで初めてアリーヌは目をあけたが、自分の体が大地を離れても、別におじけづく様子を見せなかった。それどころかむしろ、

“どこでこんな魔法を習ったの？”と、意気揚々とぼくに尋ねて来るほどの余裕さえ見せていた。

“そんなことはどうでもいいさ”と、ぼくは、啞然として声も出ないほどの驚きようを見せている他の二人の少女たちを尻目に、そっけなく答えた。“それよりか、ぼくにはすることが他にあるのでね...”

アリーヌは、ぼくの予言通り、どんどんスタジオのある森の上空へと飛んで行き、今や、ぼくに助けを求める余裕さえないほど青ざめていたが、ぼくはそんな彼女にはかまわずふもとの村へと駆けて行った。

思っていた通り、最初の揺れが、グラッと足下に来て、見ると、地面に大きな地割れが生じた。この調子だと、村の家もかなりな被害を受けているのじゃないだろうか、そんな不吉な予感がしながらふもとにやって来ると、確かに、村の家々は既に人々が路上に飛び出し、大騒ぎをしていた。

“なんだ？ 今の地震は！”と、彼らは口々に叫んだ。

中には大きく崩れた家もあったようで、外に飛び出した女が、崩れた家の前で泣いていた。

ぼくはさっそく、村の中央にある役場に飛び込み、村長に面会を求めた。

村長が姿を現すと、ぼくは、彼らを安全な場所に避難させるよう提言した。

地震がまた起こるかも知れず、あるいは他にどんな災害が起こるかも知れないからだった。

レジスタンスの英雄だとテレビで見て知っていた村長は、ぼくの言葉に素直に耳を傾けてくれ、さっそくその提言を実行に移してくれた。

村人たちは、村のマイクで呼び集められ、長い列をなして、村の安全な、丘の上の方へと、男も女も、老人も子供も、みんな避難を開始した。

ぼくは、避難の長い列のすぐ脇に立って、彼らが無事、みんな、猫の子一匹漏らさず、避難するのを見守った。

それから間もなくしてからだった、彼らが全員、一人のけが人も出すことなく、無事避難を完了してから、村で大龍巻が発生したのは。それは、不気味な、黒い煙をたてながら、もぬけの空となった村の家々を次々と襲っては、破壊を続けた。

丘の上に避難した村人たちは、一様に立ちすくんだまま、自分たちの村が破壊される様を、息を呑むような目で、見守っていた。

しかし、力の限りの破壊を尽くして大龍巻が去って行くと、丘に並んだ村人たちは、少し下に立っていたぼくの方を見ると、割れるような歓声と拍手で、ぼくをたたえてくれた。

家の破壊はまぬがれなかったが、避難を指導し、命を救ったのは、ぼくであることを彼らはよく知っていたからだった。

今や、レジスタンスの英雄から、村の英雄へと祭り上げられようとしていたぼくは、しかし、複雑な心境だった。

この不幸な天災を招いたのは、ひとえに、ぼくの例の魔法が未熟なせいであることを、ぼく自身、一番よく知っていたからだった。フローラの言っていたあの副作用が、実はこれに相違なかったのだ。美しい少女たちにいいところを見せたかったばかりに、村人たちに多大な被害を及ぼしたことで、むしろぼくは心が痛んだ。その中でも救いだっただけは、ただ一人の死人、けが人も出さなかったことだった。魔法に慣れない未熟な者が、あの不思議な丸薬の使用を誤ると、どんな結果になるか、なによりもこれはその例証だった。しかしこのことは、自分一人の胸に納め、誰にも、アリーヌにさえ口外しないことを、ぼくは自分自身に誓った。

村人たちは、地震と大龍巻のおかげで家々を破壊されたが、今やその復興に目が輝いていた。ぞろぞろと長い列を成して、再び彼らはふもとの村へと降りて行った。

そのとき、向うの方から、二人の例の美少女を伴ったあのアリーヌが、ぼくの方に駆けて来た。

“スゴイじゃない！ あんたは今や、村人の命の恩人で、救世主じゃないの。どうしてそんなことができたの”

そう言ってアリーヌは、ぼくのそばに寄り、ぼくの頬にキスをした。

そばに立っていた村長も、遠巻きに、そんなぼくたちのやりとりを見つめていた。

“そんな、人に噂されるほどの英雄なんかじゃ、ぼくはないさ”と、ぼくは、ちょっぴり気恥ずかしく思いながら言った。“アリーヌ、君は無事だったの？”

“本当に驚いたわ。あんたにあんな能力があるなんて”とアリーヌは、今やすっかり、ぼくを気に入った様子で言った。

それから、上空飛しょうをすっかり堪能していたとき、突然龍巻が発生して、上空からその龍巻を目撃したそのいきさつについて、ぼくに話してくれた。彼女は宙に浮いていたせいで、地震には会わなかったが、その後、ようやく無事、元の場所に戻って来たということだった。

“本当にあのときは驚いたわ”とアリーヌは言った。“もう少しで龍巻に巻き込まれるかと思って。だって、本当にスゴい龍巻なんですよ”

それを語るとき、彼女は少しばかり興奮気味だった。

しかしぼくは落ち着いて言った。

“アリーヌ、君はぼくの魔法に感心しているようだけど、そうしょっ中は使えないよ、残念だけど...”

アリーヌは、少し不満気にぼくを見たが、他の人々と同じように、ぼくをすごい人間だと見なしていることには違いなかった...

ぼくは村の救世主と崇められ、祝福もされたが、そう長く滞在することなく、その村と別れた。村長や、スタジオの人たち、それに美しい彼女たちや、その他の村人たちに惜しまれつつ、ぼくとアリーヌは、その村を去って行った。

ぼくには行くべきところがあった。あのカリオンへ。

そこではフローラが首を長くして待っているであろうし、彼女に、一刻も早く、この魔法の効目について語って聞かせたい、という気もあったからだった。

あの事件があってから久し振りにぼくはカリオンの村に帰って来た。まるで第二のふるさとのように思えるのどかで、美しい村カリオンへ。そこではフローラが、ぼくを迎えてくれるであろうし、しかもぼくは、美しいアリーヌを伴っていた。彼女も、カリオンへ来るのは初めてだと言って、その目は輝いていた。

カリオンの村は、まるで戦争などは知らぬかのように、人々はのんびりと耕作をし、牛たちは昼寝をむさぼり、少女たちは、プールで水浴びをしていた。すべてが平和で、のどかだった。

だが、一步、指令部のある城に入ると、様子はガラリと変わった。そこで働いている兵士たちの目つきも変わり、動きも事の他あわただしかった。ぼくはアリーヌを伴って、まっすぐに司令室へと向かった。

司令長官は、別の男たちと何か相談をし合っていたが、ぼくを見るなり、控え室へとぼくたちを案内した。

“アリーヌだね。君はよくやってくれた”と、ぼくの活躍を予め知っていたのか、長官は、労いの言葉を述べた。“それにしても...”と、長官の顔は急に暗くなった。“フローラの場合は、気の毒をした”

“フローラ？”と、ぼくは驚いて言った。“フローラが、どうかしたんですか？”

“あれ？ 君は知らなかったのか？”と、長官も、少し驚いた顔になって言った。“フローラは死んだよ。あの戦闘でね”

“なんだって！”ぼくは驚いた。信じられなかった。あのフローラが死んだなんて。

“彼女は、勇敢で、英雄的だった”と、長官は、頭を垂れながらも、フローラの死をたたえる言葉を、ゆっくりと述べた。

それから、フローラの死に至るいきさつについて、長官は簡単に述べた。

彼女は看護兵として前線に参加して、傷病兵たちの手当をしていたが、戦闘が激しくなった頃、最初は我が軍の戦況が有利だと思われていたが、新型の大型戦車が敵軍に登場して来るや、戦況は一変して、我が軍は敗退に到ったこと。その敗退の中で、臨時の病棟となっていた市庁舎などは捨て置かれたが、傷病兵を見捨てることのできなかったフローラは、他の医師たちと共にそこにとどまって、最後まで抵抗を続けたこと。そして、敵の魔王軍が攻めてくるに及んで、そこに残っていた者は全員、医師や看護婦はもちろん、患者までもが一斉に銃殺され、その虐殺の中で、フローラも、英雄的に死んで行ったことなどを、手短かに長官は告げた。

ぼくは悲しかった。あのフローラが死ぬなんて、考えられなかったからだった。

“フローラの遺影は、彼女の里の両親の家に飾ってあるよ”

と長官は、そんなぼくを慰めるように言った。

ぼくは、彼女が家を飛び出した、彼女の里へ行くことにした。

親の非難は覚悟の上だった。もちろんアリーヌは伴わずに、自分ひとりで行くことにした。

それから数時間後、彼女の里の家を訪れたとき、家は悲しみに包まれていた。

玄関に現れたフローラの母親は、ぼくを見るとすぐ誰か分かったようだが、いやな顔もせずに家に入らせてくれた。

フローラの遺影は、生前彼女が使っていた彼女の思い出の部屋に飾ってあった。

まだあどけなさの残る、ほんの十四、五才の頃の、どこで撮ったのか、楽しそうな表情をしている彼女の顔が、そこには写っていた。

他にも、彼女を忍ばさせる品々が――衣類や、愛用した花瓶や机や飾りものなどがあって、それらを見るにつけ、いっそうぼくの気持を切ないものにした。

やがてそれらをひと通り見まわした後、ぼくはその遺影の前で両手を合わせ、しばしフローラの冥福を祈った。

母親によると、彼女の亡骸のない葬式は、二日前に終えたのだという。生前、彼女と親しくしていた幾人かの村人が訪れた以外、尋ねて来る人もなく、それはしめやかにとり行われた、ということだった。彼女が、レジスタンスによって死亡したことは伏せられていたが、彼女が、親不幸にも、駈け落ちをしたことが、村人たちの敬遠するところとなったようだった。

“でもフローラは、死ぬ前に、あんたと結ばれて、本当に幸せな子だったと思いますよ”と、母親は、涙ながらに語ってくれた。

ぼくは言う言葉もなく、ただ母親の語るのを、じっと聞いていた。

そこへ外出していたフローラの父親が帰って来たようだった。

父親はぼくを見るなり、

“お前だな、うちの娘を殺したのは！”と怒鳴った。“お前がうちの娘を誘拐するから、フローラは死んだんだ。フローラを返せ！この人殺しめが！”

そう怒鳴るなり、父親は、母親の制止を振り切って、こぶしを上げながら、ぼくに殴りかかって来た。

ぼくは殴られても別に抵抗はしなかった。

“この敵は、きつととります”

ぼくは心の中でそう誓って、フローラの父親に追われるようにしながら、その家を後にした。

傷心を抱いたまま、ぼくがカリオンの司令部に戻ると、長官から、この前の戦闘についての一層詳しい説明を受けた。それによると、あのような戦闘があったのは、ぼくたちのいたマルーラ地域だけに限らず、レジスタンスの町の一斉蜂起にも等しく、至る都市であのような戦闘があったのだと言う。魔王軍にも、レジスタンス軍にも、双方の被害は甚大で、多大の死者を出したということだった。こちらの軍にも多くの損害を出したが、敵軍も、同じような被害を被っているに違いない。

しかしそうした蜂起の中で、ついに、魔王軍の総司令部とでも言える基地の存在が浮かび上がり、間もなくその基地へ攻撃に向かう作戦を立てている、ということだった。しかしそれは何分、初めての経験であり、非常な危険性を帯びる任務なので、なかなか引き受け手が見つからないのだ、と長官はこぼした。

“しかしこれは、間違いなく、魔王の心臓部に達するような大作戦だと考えてもらっていい”と、最後に長官はしめくくった。

ぼくはすかさず、

“行かせて下さい”と、長官に志願をした。“フローラのかたきの為だったら、ぼくはなんだってやりますから”

“そうか、行ってくれるか”と、長官は期待していたかのように言った。“多分そこまで行けば、君は、君の捜していた妹さんに会えることも、そう遠くはない。それは遥か遠い、魔王が住むと言われている、北の方にある基地なのだから...”

その言葉で、ぼくの目は輝いた。

フローラのかたき討ちができるばかりか、ぼくは、長いあいだ会えないで苦しんでいた、あのリサとも再会できるかも知れなかったのだから...

ただ北の基地は、神秘に包まれていて、そこがどうなっているのか、誰にも分からないのだという。その為に、攻撃を兼ねた偵察用の乗物としては、宇宙船以外にはなく、それも数機群れを成して行くのだと言う。

ここの地下の秘密基地に宇宙船まで揃っていたのだとは驚いたが、長官によれば、ある秘密基地では宇宙用のロケットまで建造されているということだった。

二日後が、その決行の日だと決まった。もちろん出発の場所は、カリオンから遠く離れた秘密の場所で、そこまでは、地下基地を通して何十キロも行かねばならない。ぼくが復讐戦に向かうことを知ると、アリーヌまでもがぼくと一緒に行くと言い出した。身の危険は承知で、それでも行くのだという。司令官はやむなく、アリーヌも行くことに同意した。

そしてついにその日、ぼくたちは、他の仲間と共に、岩だらけの地下洞を通して、秘密基地にやって来ていた。そこには壮麗としか言いようのないロケットが数機、その銀色の勇姿を日光に輝かせながら、既に発射台に据えられていた。小鳥どもが目覚めたばかりの朝早く、ぼくたちは、宇宙服に身を包みながら、発射台に向かった。周りは、山深い谷間で、決して人々の目には触れないであろうような、奥地だと思われた。それでも、樹木は青々と茂り、空は清々しいほど晴れ渡っていた。

指定の場所に坐って待つこと十数分、秒読みが終わって、宇宙船内が揺れ始めた。

すると急激な加速が生じ、窓の外の景色が瞬く間に変わって行った。美しい、山深い谷間が、

みるみるうちに、足下に遠ざかって行った。すぐに広々とした原始林の山々が視界の地平に現れたかと思うや、それすらも、瞬く間に消えて行くのだった。

高度数十キロに到達した頃、ぼくたちは、ともかく発射の成功に、ほっと胸をなで降ろした。噴射による振動はなおも続いていた。軍服に身を固めたアリーヌも、シートにもたれたまま、ちらっとぼくの方を向き、笑顔を投げかけた。

それから数日後、ぼくたちを乗せた宇宙船は、異様な感じのする場所に不時着した。全体に闇とガスとがおおい、見たところ、とても人の住めるような場所には思えなかった。この近くに北の基地があるのだろうか、ともかくガスがいっぱい、ぼくたちの前進ははばまれたのだった。とりあえずぼくたちは、宇宙船をそこに置いて、簡単な探査をすることにし、ガスの晴れるのを待ってから、再び出発することにした。ゴツゴツした岩や、ドロドロした沼のある、なんとも薄気味悪い場所だった。ぼくたちはお互い、テレビ受像機付きの交信機で交信しながら、それぞれの探査を始めた。それにしてもなんと不気味で、光の到達しない、薄気味悪いところなんだろう。こんなところに生物がいるなんて、とても信じられそうもなかった。そして早く退散しようと戻り始めたときに、突然交信中の、宇宙船内部の司令室からは、銃声やうめき声と共に、恐ろしい事件が報告されたのだった。

突然、不時着している宇宙船の中に、光線銃のようなものを持った敵がなだれ込んで来たのだという。敵は、味方を見つけ次第、片っ端から撃ち殺し、もう指令室を襲われるのは時間の問題だと、悲痛な叫び声で、それは交信を続けた。とすぐ、ドアを打ち破られたのか、叫び声が聞こえ、そのうちの一人は、

“こいつらは顔がない！”と叫んだ。

それっきり、交信は跡絶えてしまった。ぼくは、まだ交信が生きているテレビ受像機で、室内の様子を見続け、敵の姿が見えないものかと目をこらしたが、黒い影のようなものが見えたと思うや、とたんに、画像そのものも見えなくなってしまった。

ぼくたちのいたところは、宇宙船の停泊しているところから、ほんの数百メートルほど行ったところに過ぎなかったが、岩陰だったのと、このガスのせいで、敵の目をまぬがれることができたようだった。

第二、第三、第四の宇宙船に向かっても交信を続けたが、なんの応答もなかった。

“多分、全員が殺されたのだ”そう思って、ぼくたちは、背筋の凍る思いがした。

とするなら、生き残ったのは、ここにいる隊員たち、アリーヌを含めて、十人ほどしかいなかった。

どうしよう？とぼくたちはお互い相談をしたが、すぐにはいい知恵が浮かばなかった。

そのとき、どうも宇宙船の方から、敵のガヤガヤ言う声が聞こえて来た。どうやら戦闘も終わり、引き上げようとしているらしかったが、ガスを通して、かろうじて、彼らの黒い影が見えた。その黒い影が、向うの闇に、スーッと吸い込まれるように次々と消えて行くや、やがて、もう何んの音もしないほど静けさが戻った。

多分、その辺に、奴らの基地の入口があるのだろうということは、容易に想像ができた。

それにしても、ぼくらの宇宙船の内部はどうなっているのだろうか？　それが心配だった。

ぼくたちは、それぞれ銃を片手に、恐る恐る宇宙船に戻ることにした。幸いなことに、宇宙船は、ぼくたちが探査に出掛けたそのときのままの姿で残っていた。中にまだ敵が残っているのではないかと心配だったが、どうやらその気配もなさそうだった。しかし、ところどころ、激しい撃ち合いを物語る弾痕が、宇宙船についていた。

ぼくたちはようやく中に入り、一つ一つ点検して回った。ところどころ、破壊の激しいところもあったが、おおむね、よく保存されている方であった。整備士の一人は、これなら飛べると、胸をふくらませて、喜んだ。だが、さぞかし多くの仲間の死体と対面することになるだろうと覚悟を決めていたのに、その死体が、一つもないのには驚いた。どの部屋を見て回っても、激しい戦闘の跡は伺えるのに、死体はどこにもなかったのだ。多分彼らが持って行ったに違いなかった。それにしても、顔のない敵とはどんなだろう。――ぼくたちは、みんな不気味な思いがした。

残った仲間は、一刻も早く、ここを飛び立って帰ろうと言い出した。

だが待て、とぼくは押しとどめた。せっかくこの北の基地の入口までやって来たというのに、ぼくたちの任務はどうなったのか。ぼくは行くと主張した。

そこで話し合いとなったが、一部はぼくと同じく行動する者、そして残りは、いつでも宇宙船を飛び立たせるような準備をして、ここで待っている者の二つのグループに分けるということが決まった。ぼくは、さきのグループのリーダーとなったが、アリーヌは、後のグループに入ることになった。ぼくたちは、アリーヌや、残る仲間たちに別れを告げ、再び宇宙船を後にして、あの敵の群れが急に消えた謎の場所に向かうことにした。

ぼくたちの仲間は、全部で五人だった。それぞれが武器で身を固め、どんなことかあっても、お互い助け合うことを誓った。

ぼくたちが、深いガスの中、例の黒い影が消えたところまで近付いたとき、ふと、向うに再び黒い人影のようなものが見えて、心臓が止まる思いがした。しかしそれは、ぼくたちに気づいた風もなく、ガスの中をしばらく行ったり来たりした後、急に、例の場所で消えてしまった。

ぼくたちは、銃を構えたまま、慎重にその場所に近付いた。

するとそこは、大きな岩山となっていて、思っていた通り、一箇所、秘密の入口があって、今しがたいた敵が入ったばかりと見えて、固い鉄の扉が開いたままとなっていた。

ぼくたちは慎重にその中に入って行った。入ると、内部は、下の方へ傾斜している長いトンネルとなっていて、ほのかな照明が点々と灯っていた。ずっと先の方からは、そこを降りて行く敵の靴音がここにまで聞こえて来ていて、彼らとの距離がそう遠くないことを思わせた。

ぼくたちは、靴音をたたせず、静かにその長いトンネルを降りて行った。

それが行きついたところ、今度は、同じようなほのかな明かりが静かに照らしている、幾十段、いや幾百段はあろうかと思われるジグザグ階段が、遙か下の方にまで続いていた。

敵どもの、そこを降りて行く靴音が、空虚に、ここにまで響いて来る。ぼくたちも、思い切って、足音もたてず、降りて行った。

スピードを早めたせいか、段々と敵の靴音に近付いて来、ついには敵の最後の一人の後ろ姿が見えるまでに、ぼくたちは追いついてしまった。

ところが、そのときになって、思いがけないことが起こった。愚かにも仲間の一人が手に持っていたピストルを落としてしまい、それは、大きな音をたてて、何度も階段にぶつかりながら、下の方に落ちて行った。万事休すだった。このままじゃ全員が奴らにつかまってしまう。そこでぼくは一計を案じた。ここまで付けて来た生き残りはぼく一人だけだということにするから、君たちはもう少し向うに引き下がって待っていてくれて、ぼくにもしものことがあれば、そのことをすぐ宇宙船にいる仲間たちに知らせてくれるよう頼むと、大胆にも、自分ひとりだけが、敵に向かって降りて行ったのだった。

間もなく、すぐ下から駆け上がって来た敵と、銃を拾いに行ったぼくとがバッタリと出会ってしまった。驚いたことに、彼らを見たとき、彼らは人間の形をしていたが、そのどれにも、頭はある、顔はないのだった。しかもそのうちの一人は、ぼくに銃を向け、今にも撃ちそうな姿勢をとった。

そのときだった、下の方から、

“よしな！”と叫ぶ女の声が聞こえた。

ぼくは、その女の声に驚き、彼女をひと目見ようと目をこらしたが、大勢の敵の陰に隠れてよくは見えなかった。

ぼくを撃とうとした敵は、その声で、ともかくも狙いを定めていた銃を引っ込めた。

先頭を歩いていた彼女は、どうもこの集団のリーダーらしかった。

彼女の一声でぼくは命拾いをしたが、すぐ敵の手によってぼくはつかまってしまった。不気味な、顔のない集団の中に投げ込まれながら、ぼくは両手を縛られ、無理やり、さらに下の方へと連行されて行った。ぼく以外に仲間がいたのだとは誰も怪しまず、その限りではぼくの作戦はまんまと成功したのだった。

やがて、ようやく長い階段を降りると、広い廊下に出た。

そこは明るくて、なかなかきれいな、コンクリートで出来た廊下だった。地下にこんな基地があるのだとは、初めて見る驚きだった。

しかし、先頭に行く女は、相変わらずぼくにその姿を見せない。他の敵どもと何か話しをしている彼女は、その後ろ姿がなかなか素敵なくせに、やはり彼女も顔はないのだろうかと思ったが、その直後、彼女がときどき横を向くその横顔から、彼女にだけは顔があり、しかもなかなか可愛い顔をしているらしい、ということが後ろの方にいるぼくにも分かって来た。とするなら、どういうわけか、この並いる化物の中で、彼女だけは、どうやらぼくたちと同じ姿、形をした人間らしいのだ。

しばらく廊下を歩いた後、彼女を含めた先頭の集団が、ある一室にぞろぞろと入り始めた。

続いてぼくも無理やりその部屋に押し込められたが、中に入って最初に目に飛び込んで来たものを目にして、ぼくはすっかり驚いてしまった。

こちらに向いて立っている数多くの化物たちに混じって、ぼくを見つめている、例の命令を下した女は、なんと、死んだはずの、あのフローラだったのだ！

彼女は、まるで人が変わったみたいに、服装も、化物と同じ軍服を身にまとい、厳しい目でぼくを見つめていた。

しかし、化物たちに押さえられているぼくの胸は喜びに輝いた。

“フローラ”とぼくは言った。“フローラじゃないか”

だが、ぼくを見つめる彼女からは、なんの反応もなかった。

“こいつのことは、あたいが片をつける”と、彼女は、やがて、冷たい目で、口ぎたなく言った。“あたいはいい考えがあるんだ。殺さずに生け捕りにして、後でうんとこき使ってやるんだ。

でも、ピンピンさせておくわけにも行かないから、こいつで体を弱らせてやろう”

そう言って、彼女は、腰にぶら下げていたサックから小型の銃を取り出すと、それをぼくに向けた。

ぼくがハッとなったのも束の間、たちまち銃は発射され、激痛と共に、あっという間に麻痺が起こり、ぼくは意識を失って、その場に倒れてしまった。

それからどれほどの時が経ったろうか、ぼくが再び目を覚ましたときには、幻想的とでも言えるような場所に、ぼくはいた。ここは地下なのか、宇宙なのか、ぼくの直ぐ前には大きなガラス張りの壁があり、その向うの、薄ぼんやりした光景が見えていた。そこは、果しのないトンネルのようにも見えるし、地獄の墓場を思わせるような、荒涼とした光景でもあり、空には無数の星が瞬いているようでもあった。

ぼくは、そのガラスの壁のすぐそばで横たわっていた。

気がつくと、近くにはフローラがいたばかりか、見知らぬもうひとりの男がいる。

彼らはくつろいだ様子で、フローラは、軍服を身につけていたが、軍帽は脱いでいて、そのふさふさした髪の毛を、惜し気もなくさらしていた。そしてさらに、その軍服をも脱いで、普通の服装に戻ろうとしていた。

ぼくは起き上がろうとしたが、そのときになって、自分が、ロープでぐるぐる巻きになって、その場にころがされていることに気が付いた。それにしても、なんと明かりの少ない、ジメジメした、薄気味悪いところだろう、とぼくはぼくたちのいる室内を見回して思った。顔のない連中は、多分地底人で、明かりをそう好まないのだ、とぼくはそう勝手に解釈した。それにしても、フローラがここにいるのだとはどういうことだろう？

そのとき、ガラスの壁の向う側から、何か人影のようなものが見え、それが段々とこちらへ近付いて来た。ぼくがその人影の方に目を向けると、それは近づくにつれ、相変わらず顔はなかったが、その姿、形から、一人の老婆のように思われた。

その老婆が、壁の前に立つと、それまで固く閉ざされていたガラスの壁が、まるで魔法にでもかけられたように、スルスルと上に上がって行くのだった。

老婆はそのまま中に入って来た。

“お母さん”と、すると男は、老婆に声を掛けた。“任務は無事終了しました。そしてこいつが、あの宇宙船に乗り込んでいた生け捕りです。こいつをどうしましょうか？”

“お前の好きなようにするがいい”と、それに対して老婆は答えた。“ともかくその人を、壁のあちら側へ連れて行けば、永遠に我々の人となるんですからね...”

ぼくは目を閉じ、気を失ったふりをしていたが、その最後の言葉だけ、気にかかった。

永遠に奴らの仲間になるだって？ このガラスの壁の向う側に行くだけで！

ぼくにはなんのこともよく分からなかったが、この壁の向う側に恐ろしいことが待ち受けていることだけは、よく分かった。

すると、フローラも、フローラもそのせいなんだ！ きっとそうだ！ 彼女が、奴らの仲間になり切っているのもそのせいなんだ。いけない！ 彼女を壁の向うに行かせてはならない！ フローラを目覚めさせてやらなくては。そして、なんとかして、彼女を救い、一緒にここから逃げるのだ。

そんな思いが、電撃のように、ぼくの頭の中を駆けめぐった。

それにしても、体中、ロープでこうぐるぐる巻きに縛られていたのでは、身動きすらままならなかった。ぼくは抵抗できないまま、敵の言いなりになる他、ないらしかった。

ところがそのとき、突然、非常ベルがけたたましく鳴り響いた。

“お母さん。誰か敵が侵入したようです”と、男は言った。

その言葉で、ぼくの胸は希望に燃えた。ぼくの仲間が、何か行動を起こしてくれたに違いないのだ。

男と老婆は、その音であわてふためき、老婆は再びガラスの壁をあけて向う側に去って行くと共に、男は、やがて駆けつけて来た仲間と共に、あわてて部屋を飛び出して行った。

すると、この薄暗い部屋の中では、フローラと、ぼくだけが残ることとなった。

ぼくはもうぐずぐずしてはいられなかった。目を開け、体を起こそうとしたが、ぼくはフローラに声を掛けた。

“ねえ君、これをほどいてくれないか。君はどう見てもここの人間じゃない。いやむしろ、ぼくたちと同じ人種だ。君はきっと、奴らにあやつられているんだね。でも、それではダメだ。もっと目を覚まさなくっちゃ”

しかし今やすっかり女らしい服装にもどったフローラは、うつろな目で、ぼくを見つめるばかりだった。

ぼくはしかし必死になって、なおも続けた。

“ぼくは段々と分かって来た。人間が、ここではどんな風が変わって行くかがね。ぼくは顔のな

い人間を多く見て来たけれども、全部が全部顔がないわけじゃない。

半分ないのやら、少し欠けたのやら、もうほとんど無くなりかけているのやら、様々があるのに気が付いた。それでこういうことが分かったのさ。きっと最初はみんな同じ人間だったんだ。でも、なんらかの魔法により、つまり、この壁の向う側に行くことによってさ、だんだんとその人間性が失われ、それと共に本来の顔も崩れ、ついには、あの全く顔のない化物になってしまうんだとね。――でも君は違う。君は、その素敵な顔が、そっくりそのまま残っているし、まだあの化物になっているわけじゃない。君はまだこちら側にいて、立ち直すこともできるんだ。向う側に行って、君のその美しい顔が無くなってしまふことになるなんて、悲しいことじゃないか...”

ぼくはもう半分、泣きたいぐらいの気持だった。

“フローラ、そうだ、君はフローラだよ”と、ぼくは言った。“昔ぼくには美しい恋人がいた。ある村でひと目惚れして、すぐその場で結婚を申し込んだんだ。すると彼女は喜んで承諾してくれた。彼女は素晴らしい所へぼくを連れて行ってってくれた。それは、レジスタンスの住む城だった。そこでぼくは魔王の悪事に目覚め、戦いを志願したんだ。戦いにあけて帰って来ると、彼女はいないのだと聞かされた。彼女は敵に殺されたのだ、と。ぼくは悲しみ、彼女の家に行った。そこには両親がいて、ぼくのことをなじった。可愛い娘を連れ出して殺したのはこのぼくだとなじったのだ。でもぼくだって、彼らと同じぐらい悲しかった。だってぼくも、心の底から彼女を愛していたからだ。その子は、フローラという名の本当に可愛い子だった。ぼくは、その子は死んだものとあきらめていた。でも、その子は生きていたのさ。そしてそれが、ここにいる君自身なんだ。フローラ、ぼくのフローラ、君なんだよ、心を開いておくれよ...”

ぼくの必死の願いが功を奏したのか、やがて彼女は、ポロリと涙を流した。

“ならいいわ。あんただけ逃げて”と彼女は言った。“今すぐロープをほどいてやるから、あんただけ、うまく逃げるのよ”

そう言うなり、彼女はぼくに近付き、ナイフでロープを切り裂いた。

ぼくはとうとう自由になったが、その手をしっかりと彼女の両肩に当てると、彼女を目覚めさせるように、彼女をゆすり続けながら、なおもぼくは言った。

“そんなことはダメだ。君が罰を受けることになる。君をほっといて逃げるわけには行かないよ。ぼくたちがね、昔住んでいたところはね、こんなじめじめした所じゃなかった。それは素晴らしい、光に満ちた、美しい所だった。そしてフローラは、そこでもとりわけ美しい、老人たちの住むという、桃の谷へぼくを案内すると約束してくれたのさ。ねえそこへ一緒に行こう。ぼくと一緒にここを逃げるんだ。フローラ、こんな所に埋もれちゃダメだ。もっと目覚めるんだよ。こんなところにいれば、それこそ君の一生が、だいなしになってしまうよ...”

しかし彼女は、ゆすればゆするほど、いよいよ激しく泣きじゃくるばかりだった。

“だめよ。どうしてもだめなのよ”と彼女は泣きながら言った。“わたしはこの人間。永久にこの人間であり続けるわ。そうする他ないの。そういう運命になっているのよ”

“バカな！”と、ぼくは、そう言うフローラに対して叫んだ。“そんなのは奴らの魔法のせいさ。君自身の意志次第で、どうにでもなるのさ。さっ早く、今すぐその決意を決めるんだよ、フローラ！”

“だめ！早く逃げて”と、フローラは、そんなぼくに対して言った。“あの人が来るわ。もう今度見つければ、あなたも、もうおしまいよ。あっちへ連れて行かれれば、もう二度と、出られないわ。死ぬまでここで暮らさなくっちゃならないわ”

そう言っているうちにも、再び靴音が、この部屋に近付いて来た。

“でもどうして？”と言うなり、ぼくは一瞬、彼女から手を放して、その靴音の方に振り向いた。がそのときだった、

“さよなら”と言うなり、彼女は自ら、あの老婆が引き下がった壁の向う側へと、身を投じたのだった。

厚いガラスの壁は、彼女が向う側に去ると同時に、ストーンと下に降りた。

ぼくはドンドンとその壁を叩いた。そして、壁の向う側で、こちらを向いている彼女に向かって叫んだ。

“もう出られないのかい？ どうしてそんなことをしたんだ。ああ、なんてことを。なんてことを！”

ぼくは悲しくなって、何度も何度もその壁を叩いた。

一方、彼女の方も、ガラスの壁の向う側から、悲しそうに顔を曇らせながら言うのだった。

“あんたとはもうこれでお別れよ。さあ、あの人が来るわ。その前に早く逃げて！ 逃げる道は分かっているわね。そこを出て、廊下の左へ突っ走るのよ。しばらく行くとエレベータがあるから、それに乗ると、一気に地上に抜け出れるわ。さあ早く、逃げて！”

しかし、ぼくは首を横に振ってこう叫んだ。

“いや、君も一緒だ。君も一緒に逃げるまで、ぼくはここに残る”

“どうしてそんな分からないことを言うの！”と、フローラはぼくを見て叫んだ。“わたしはもう、逃げられないわ。だってこの壁は、絶対に開かないのよ”

その言葉を聞いた瞬間、ぼくははっとした。彼女がもう開かないと信じ込んでいるこのガラスの壁は、ひょっとすれば簡単に開くのではないか？ そしてもし、ぼく自らの手によってそうすることができたのだとするなら、彼女の抱いているすべての迷いが、晴れることになるだろう。

そう思うや、ぼくは、彼女の必死の願いも聞かずに、何か秘密のボタンでもあるのではないかと捜し始めた。だが、捜してもどこにも見当たらず、固く閉ざされたガラスの壁は、ビクともしそうにもなかった。もう時はなかった。追手の靴音は、すぐそばまで迫っていた。とうとうぼくはやけっぱちになって叫んだ。

“ああフローラ、ぼくは動かない。君を愛しているよ。君を死ぬまで離さないぞ！”

すると、その瞬間だった、ぼくたちのあいだに横たわるあのガラスの壁が、あれほど強固で、ビクともしないとされたガラスの壁が、突然、なんの前ぶれもなく、スーッと消えてしまったのは。

もはや、ぼくと彼女とのあいだには、いかなる障害、いかなる壁もなかった。目を閉じて涙に暮れていた彼女は、目をあけ、驚いた表情でぼくを見つめた。

“そうだ、この壁は、君が心に描いていた壁だったんだ。そうにちがいないんだ！”とぼくは、そんな彼女を見つめて叫んだ。“でも、それを君は取り払った。心の中で。すると、実際の壁もなくなってしまったのさ。さあおいでフローラ。君は今こそ、本当にフローラになったんだ...”

そう言ってぼくが手を差し伸べると、彼女は、ガラスの壁のあった仕切りをまたぐようにして、ぼくのところにやって来た。そしてぼくと彼女とは、今や、しっかりとその場で抱き合うのだった...

しかしそうして、歓喜に酔いしれている時間はもうほとんどなかった。敵の靴音が、一段と近く近付いて来る。

“思い出したわ。あんたはシレールね”と、彼女は、夢から覚めたように、微笑みながら、ぼくを見て言った。

彼女は今や、本来のフローラを取り戻したのだった。

“もうダメ。出口は全部ふさがってしまったわ”と、彼女は言った。“残るは、魔女の館を通して、魔王のいる塔へ行く道しかないわ”

“魔王のいる塔！”と、ぼくは驚いて言った。

“そう、魔王のいる塔”とフローラは言った。“あの仕切りをまたいで、再び向う側へ行くのよ。でももう決して、向う側の人間にはならない。わたしたちは、魔女のかけた魔法に勝ったんですもの”

しかしぼくはまだ、半信半疑だった。

“本当に大丈夫なのかい？”

しかし、すぐ後ろにまでやって来た靴音が、ぼくの決心を促した。

敵どもがドアを押し破ってこの部屋になだれ込んで来たとき、ぼくとフローラとは、手を取り合うようにして、仕切りを乗り越え、魔王の住む暗黒の国へと飛び立ったのだった。

確かに、一歩その仕切りを跨ぐと、そこはもうどこなのか、上も下も、右も左も分からない、ほとんど日の射し込まない暗黒の空間だった。

ぼくとフローラとは、しっかりと手を握り合ったまま、まるでフウワリと宙を漂っているような、不思議な体験をした。

“フローラ”と、ぼくは、どこへとも知れず、浮かびながら言った。“意識はしっかりしているよ。まだこちらの人間さ。決して向うの人間になんかにはならない。でも本当に大丈夫だろうか。魔

女に会えば、どう言えばいいんだ”

“わたしらは、魔女の魔法にかけられたのよ”とフローラは言った。“だから安心して向うの人間のふりをすればいいの。きっと彼ら、それにだまされるに違いないわ”

“魔女たちをだます？”と、ぼくは、フローラの発想の大胆さに驚きながら言った。

“そうよ。わたしは魔法を解かれたけれど、本来なら今でも、魔王の国の召使よ。だからその通りにふるまうの。――そして、魔王の塔に入れば、いい所を知っているの。地下牢よ。そこに、あなたの捜していた、あなたの妹さんがいるかも知れないのよ”

“妹がだって！”と、ぼくは、思いがけない言葉を、フローラから耳にして、叫んだ。

同時に胸は高ぶって来た。長いあいだ捜し求めて来た魔王の王国、そしてリサの居場所――それがもう、目前に迫ろうとしているのだった。

“じゃ万事、君に任せるよ”とぼくは言った。

“いいわ。わたしに任せといて”と、フローラは、弾んだ声で答えた。

やがて、フウワリと宙を漂っているうちに、向う側に、かすかな光に照らされて、深い森のようなものが見えて来て、よく見ると、フクロウが鳴いていた。

そのとき、何かが、上空をさっと通り抜けた。

“今のはなんだい？”と、ぼくはフローラに尋ねた。

“魔女よ”と、フローラは簡単に答えた。“ほおきに乘って空を飛んでるの。また来るから、よく見てよ”

確かにそれは、向うの方まで行くと、やがて旋回して、再びこちらに向かって来た。

そして今や、はっきりとその姿を見ることができたが、なんと驚くべきことに、さっきのあの老婆が、ほうきに乘って、ぼくがかつて、どこかで見たことのある中世の絵画さながらのあの魔女の姿で、ぼくたちのすぐそばまで飛んで来るのだった。

“やあお前、どこへ行くんだい？”と魔女はフローラに声を掛けた。

“魔王の塔よ”と、フローラは答えた。

“その男を連れてかい？”と、魔女は、ぼくをあごでさして言った。

“心配ないわ。もうちゃんと魔法をかけてあるもの”と、フローラは安心させるべく、魔女に言った。

“でもね、お前の魔法で大丈夫かね。もう一度わたしがかけ直すというのはどうかね”

“いいえ、大丈夫よ”と、フローラは、わざと、笑顔でとりつくろいながら言った。

“それじゃ、まあね”

そう言うなりヒィーと言う、声とも叫びともつかない、不気味な音をたてながら魔女は、猛烈なスピードを出して、向うの方へと消えて行ってしまった。

それにしても、なんと薄気味悪い、ジメジメした、光の少ないところなのだろう。やがて、ぼくたちが、もう地面スレスレにまで降りて来たところには、目を見張るような、おぞましい光景

が待ちかまえていた。それは、フクロウの黒い森を通り過ぎたところで、薄明るい月光に照らされてあった。

果てがどこにあるのかも知れない荒涼とした荒れ地の到る所に支柱が打たれ、その支柱を渡すように寝かせた横木からは、それこそ無数の人々の死体が吊るされているのだった。それは、見るも無残な光景で、男はもちろんのこと、女も子供までもが吊るされ、息絶えていた。それらは、片付けられることもなく、風化するに任せられ、そのまま朽ち果てたのもあったが、多くは、秃鷹の群れが片付けてくれているようだった。

そんな、墓場のような場所に来て、ようやくぼくとフローラは、宙に浮かぶのをやめて、ストンと地面に降り立った。ぼくは、胸がむかつくのをこらえながら、フローラと一緒に、それら、吊るされた死体の間を歩いた。多くの死体は古くなっていたが、少し向うに、まだ真新しそうな死体があるのに気づき、ぼくは駆け寄った。すると、そこに吊るされていた一人の若い女性は、驚くべきことに、もう見まいと思っていたあの看護婦のクレアだったのだ。彼女は死んではいたが、その表情は、まるで眠っているように安らかだった。そればかりではなかった。彼女が吊るされたその少し向うでは、ぼくたちと一緒に来たあの乗組員たちも吊るされていたのだった。その光景を目にして、ぼくは悲しくなった。涙が止めどもなくあふれて来た。だが、フローラは、そんなぼくを叱った。

“泣いちゃダメ！”と、フローラは言った。“ここではこれが普通の光景なんだから。魔王はそれを見て楽しんでいるぐらいよ。あなたに泣かれちゃ、わたしたちが魔法にかかっていないことが、バレてしまうわ”

“分かっているよ”と、ぼくは、泣きたくなくなる気持を押さえながら、かろうじて言った。

“でもこんなの、平気で見てられない...”

“そら、もう魔王の塔はすぐそこよ”

フローラの合図で、ぼくは墓場の向うを見た。

幾百も並ぶさらし刑の死体の向うに、闇夜の月光に照らされて、不気味にそびえる、古ぼけた石造りの塔が見え、松明のせいか、こうこうと揺れて見える窓明かりは、まるで悪魔の笑いのように、ぼくの背筋をゾッとさせた。塔のすぐそばには、ほぼ真黒な、三角帽子のような岩山がそびえ立ち、その岩山と塔とが、不気味なコントラストを形づくっているのだった。塔自身はまた、頑丈な岩の上にそびえ立ち、岩のふもとには、小さな、一軒のわらぶきの家が建ち、その窓明かりが、いろり火のせいか、ゆらゆらと揺れているのだった。

“あのわらぶきの家はなんだい？”と、ぼくは、フローラに尋ねた。

“あれは、魔女の住まいよ”と、フローラは答えた。“ここの墓地の管理を、あの魔女が一手に引き受けているの”

“そう、なんとも不気味な世界だ”と、ぼくは、それらの光景を目にして言った。

ぼくたちはやがて、魔女のわらぶきの家の前を通過して、ついに、闇夜に高くそびえる悪魔の塔の前に立った。

塔は、思っていたよりもはるかに巨大で、それを目前にすれば、威圧的にすら思われた。塔の入口までは、ゴツゴツした岩場を、少しばかり登って行かねばならない。今は魔王は、最上階にいると思われ、下の方の窓明かりが消えている中で、ぼくたちの所からは、遙か遠くに見える、最上階の窓だけが、こうこうと光に揺れているのだった。

“さあ行きましょ”とフローラは言った。“魔王に会うのよ”

ぼくはその言葉で足がすくみ、胸が震えるのを感じた。

振り向くと、魔女のいるわらぶきの家からは、魔女が、いろりの鍋でスープをすすっている、そんな不気味な姿がシルエットとなって、窓のカーテンに映っている光景が見えていた。

ぼくは、フローラに導かれるようにして、悪魔の塔の入口へと通じる岩場を登って行った。

塔の入口にある、いかにもいかめしい、鋼鉄の門は、開かれたままになっていて、そこから、内部の螺旋状の石の階段が、上階へと続いて行く様子が見えていた。ぼくたちが入口の敷居をまたいだとき、突然中から、何百というこうもりが奇怪な鳴き声をたてて、飛び出して来たので、ぼくは、心臓が止まるほど驚いた。それは驚くべき数で、塔の外へ飛び出すや、三角帽子の山の上方の暗闇の中へと消えて行った。ぼくの胸は高鳴った。本当にここが、あの魔王の住む住居なのだろうか？ ぼくは、自分で自分が信じられなかった。ぼくは夢でも見ているのではないだろうか？

塔の窓から差し込む月光の薄明かりをたよりに、ぼくとフローラとは、一步一步石の螺旋階段を上って行った。ときどき見える窓からは、こうもりの群がる三角帽子の黒い岩山が、闇の中に不気味に浮かび上がり、その上空に、まるで時が静止したように、白い満月が浮かんでいる様は、美しいとさえ言えるほど、神秘的な光景であった。三角帽子のふもとの方は、光のさし込まないほどの暗黒となっていて、そこは、どこまでも落ち込んでいる底のない淵なのか、あるいは地獄への空間なのか、見るも恐ろしいほどの光景で、ぼくは思わず目をそ向けた。

“あの向うはどうなっているんだい？”と、ぼくは、まるでブラックホールのような空間を指して、こわごわフローラに尋ねた。

しかしフローラは、“しーっ！”と、ぼくに口止めをした。それから小さく、ぼくに言った。

“声が高いわ。魔王の耳は敏感なのよ。――あの三角帽子のふもとのことは、わたしにも分からないの。そこまではまだ行ったことがないのよ”

そうしているうちにもぼくたちは、螺旋階段の最上階にまでやって来、いよいよ魔王の部屋の鋼鉄の扉の前に立った。フローラが、扉を軽くノックすると、扉は、ギョッときしるような音をたてながら、ゆっくりと内側に開いた。

ぼくは今や、目を皿のようにして奥を覗いた。内部は、別段変わった風のない、飾りつけの少ない、中世の暗い城の内部を思わせた。中では、暖炉の炎が、ゆらゆらと揺れていた。しかし、魔王は、まだ姿を見せない。ぼくの気持は、次第に高ぶった。

フローラと、ぼくとが一緒に入ろうとすると、そのときに初めて耳に響いた。

あのとき、そうだあのとき、リサが連れ去られた後、空から鳴り響いたあの魔王の笑い、あの魔王の声にそっくりだった。

“おう、フローラか、待っていたぞ”と、その声は言った。

中に踏み入れて、暖炉の方に目を向けると、玉座に坐ったような恰好で、その物はいたのだった。

目は異様なほど飛び出して、ギョロギョロと輝き、顔はしわだらけで、耳が異常に大きく、まさに、化物そのものの顔をしていた。それが、中国風の異様で、キラキラした服を着込み、ふしくれだって、鋭いつめのついた、細長い指のある手で、フローラにあいさつをしたのだった。

これが魔王の正体だったのか！とぼくはすっかり興奮していた。

“ちょうどいいところにやって来てくれた”と魔王は言った。“書類を整理しなければならんのでな。これが今度、処刑する者のリストだ。それを地域別に分ける作業をして欲しいんだ。たくさんあるから間違わないようにな。作業には別室を使うがいい”

そう言って魔王は、アタッシュケースのような鞆を、ポンとフローラに渡した。

それから、そばに立っているぼくを、その、人を射すくめるような目で、ジロリと見つめた。

“こいつはシレールか”と魔王は言った。“とうとうわしらの仲間になったのだな。いずれ魂を吹き込んで、適当な仕事を与えるがよい”

そう言うなり、魔王は、くるりと背を向けて、窓の外に浮かぶ、まるで死んだような満月を、じっと見つめ続けるのだった...

ぼくとフローラは、鞆を持って、魔王に言われた別室へと向かった。

そこは、三角帽子の山がすぐ目前に迫って見える、塔の真ん中のあたりにある部屋だった。

薄明るいランプが一つ、テーブルに置かれて部屋を照らすだけで、部屋の隅の方は暗くて、よく見えないほどだった。フローラは、持って来た鞆をその上に広げた。書類の他に、どういうわけか、懐中時計や、磁石、コンパス、定規などが入っていた。フローラはさっそく書類を見つめ、そのリストに載っている人の名を読んだ。その数多くの名が印されている名簿の中には、あのカリオンにいる司令長官の名や、軍曹の名も、キチンと印されていた。魔王は今や、総攻撃をしかけ、レジスタンスを、せん滅しようと考えているのだろうか。それは実に驚くべき内容だった、

“フローラ、こんなことをほっておくわけには行かない”とぼくは言った。“みんなに知らせなくっちゃ”

“だめよ、もう遅いわ”と、フローラは、冷静に言うのだった。

“じゃ、どうすればいいんだい？”

“分からない”と、フローラは、考え込むような、真剣な表情をした。

“でも、シレール”と、やがてフローラは言った。“あんた、妹さんに会いたって言ってたわね。会えるかも知れなくってよ”

とたんにぼくの目は輝いた。

“えっ？ どこにいるんだい？”と、ぼくは、せきたてるように、フローラに言った。

“ここの地下牢”とフローラは言った。“正確に言えば、あの三角帽子の山の下よ。あの山の下にある地下牢とは、洞窟で、この塔とつながっているの。でも、そこへ行くのは、非常に危険なことよ。塔の下には三つの入口があって、どうもそのうちの一つだけが、地下牢へ通じる入口らしいの。残る二つは、どこへつながっているのか分からない。あるいは、あの深淵の中へ、つまり、地獄へとつながっているのかも知れないわ”

その最後の言葉を聞いて、ぼくはゾツとした。

“それでもあなたは行く？”と、フローラは尋ねた。

“行くよ、もちろんだとも！”ぼくは震えながら叫んだ。

フローラは、やっと微笑んだ。

“じゃ、わたしも行くわ。シレールさん”

ぼくたちは、長い螺旋階段を降りて、地下の入口へと向かった。ジメジメとし、ゴツゴツとした岩だらけの、塔の地下に当たるところに、それはあった。どれもが同じような鉄の扉で閉ざされ、同じ大きさの三つの入口があって、どれ一つを選んでもおかしくないように、それはできていた。しかももし選択を誤ると、とんでもない運命が待ちかまえているのだ。

“さあ、どうする？”と、フローラは言った。“引き返すのなら、今のうちよ”

“いや、引き返さない！”と強気を言ったものの、ぼくにはどうしていいか分からなかった。

もし間違ったら、これまで味わって来たすべての苦勞が、水の泡と帰すのだ。ぼくはもう、天にも祈りたい気持だった。ああ神様、神様。ぼくによきお導きを...

ぼくは思い切って決断した。真ん中の扉だ。

フローラが前に立つと、それは静かに不気味な奥の内部を見せながら開いた。

“さあ入るのよ、シレール”と、フローラは言った。

“怖くはないのかい？”と、ぼくはフローラに言った。

“そら怖いわ”とフローラは言った。“入ればすぐ分かることよ。もし違えば、わたしたちはそれでお終いよ。すぐにわたしたちは、あの深淵の中に突き落とされてしまう。それから先のことは、もう何も分からない...”

ぼくは恐怖で身をすくめながらも、目を閉じるようにして、その入口に向かった。

不気味に、パツクリと口を開いた、暗黒の洞窟。

ぼくが、フローラと手を取り合って、その洞窟の中に足を踏み入れると、扉は音もなく、再びしっかりと閉められた。

すると、とたんに、洞窟の奥の明かりが見え出した。

“洞窟よ！”と、フローラは、歓喜したように言った。地獄じゃない。わたしたちは助かったのよ”
そう言って、フローラとぼくとは、歓喜したように抱き合った。

ぼくとフローラは、お互い手を取り合って、長い、曲がりくねった洞窟の中を、全速力で駆け抜けた。

そしてついに！ 急に洞窟がぽっかりと口を開いた。暗いが、しかし広くて大きな空間に、ぼくたちは出た。ここが、あの三角帽子の岩山の、真下にあたる場所なのか、それはそれは広い空間だった。しかし奥の方はどうなっているのか、薄暗くてよく見えなかったが、フローラは持って来たライトで照らしてくれた。すると、様々に入り組んだ岩壁のところどころに、まるで動物園のおりのように鉄格子がはめられ、それが一つ一つの牢となって、その中に、見たこともない美しい顔の、若い娘が閉じ込められているのだった。その一つ一つが、フローラのライトで照らし出されると、暗い闇の中から、おびえた顔や助けを求める顔など、様々な顔が、光の中に浮かび上がった。ぼくたちは、その中に、見覚えのある顔を見つけ出そうと、さらに前進を続けた。前進を続けるうちに、その娘たちの数が、おびただしい数にのぼることが、すぐぼくたちにも分かって来た。彼女らは、過去何千年に渡る、いけにえの、犠牲者たちなのだろうか。だとするのなら、いつまでも若い彼女たちの年齢は、どうなっているのか？

そして、何十、いや何百もの岩の牢を通り過ぎた後、ぼくはついに見つけたのだ！

フローラのライトに照らされ、牢の隅で絶望したようにうずくまり、ふと、そのやつれ切った表情で、こちらに向けられたその顔は、間違いなく、ぼくの、あのリサだった。

“リサ！”と、ぼくはその牢に向かって叫んだ。

するとリサは、希望が一度に燃え上がったように、牢のこちら側の、声のした、ぼくの方に目を向け、さっと立ち上がるなり、すぐ鉄格子まで駆けつけて来た。

“今の声は？ 兄さん、兄さんなの？”と、リサは言った。

“そうだ。ぼくだよ。シレールだよ”

ぼくも、鉄格子いっぱい、体をすり寄せた。

リサはやって来て、ぼくだと確認すると、目に涙をいっぱい浮かべて、鉄格子ごしに、ぼくに抱きついた。

それは、未だかつて味わったことがないほどの、感動的な再会だった。

“兄さんなのね...”と、リサは、喜びに我を忘れながら言った。“ああ兄さん。会いたかったわ。会いたかったわ...”

リサは、喜びいっぱいになり、頬にしずくがたれているその涙の目を閉じた。

リサは、少しやつれていたとは言え、以前のあの可愛らしさは少しも変わってはいない。ぼくも鉄格子の隙間から腕を伸ばし、そんなリサの背中をしっかりと抱きしめた。

フローラは、そんなぼくとリサの感動的な対面を、牢の脇に立って、所在なく見つめていた。ぼくとリサとは、鉄格子ごしにしっかりと抱き合ったまま、数分のときが流れた。それは、陶酔の、本当に幸せのひとつきだった。しかし、いつまでもそうしているわけにも行かず、やがてぼくとリサとは、抱擁の手を解いた。

“兄さん”と、リサは、まだこの感動が、信じられないような顔をしながら言った。“よく来れたわね。どうしてここまで...”

“それを説明している暇は、今はないよ”と、ぼくは言った。“それよりここからお前を出すには、どうすればいいんだい？”

“この鍵は、あの魔王が持っているの”と、リサは悲しそうに言った。

“なんてこった！”と、ぼくは叫んだ。“それじゃ、どうにもならないじゃないか！”

すると後ろでフローラが、にっこりして言うのだった。

“シレール！ ほら、これ”

そう言って、フローラが高々と差し出したのは、まさに地下牢の鍵の束だった。

“どうしてそれを？”と、ぼくは驚いて言った。

“こんなことがあろうかと、こっそり魔王の部屋からくすねて来たのよ”とフローラは、いたずらっぽく笑った。

“有り難う、よくやってくれた”ぼくは心から礼を言い、フローラからその鍵の束を受け取ると、さっそく、牢の鍵をあけにかかった。

何種類かの鍵をためしているうちに、ついに錠は、カチリという音をたてて、開いたのだった。

リサはとうとう解放されたのだった。

牢から出て来たリサとぼくとは、今度こそはもうなんの障害もなく、もう一度しっかりと抱き合った。

抱擁が終わると、リサは言った。

“他の人は出してあげないの？”

“もちろんみんな、これから出してあげるさ”

“あのね”とリサは続けて言った。“この近くに、兄さんを知っているという人が閉じ込められているのよ。最近入って来た人で、名前はアリーヌって言うの。知っている？”

“アリーヌだって！”と、ぼくは驚いて言った。“どこだ。案内してくれよ”

ぼくたちはさっそくその牢に駆けつけた。

再び、フローラのライトに照らされると、牢の中に、あのアリーヌがいた。

彼女はすぐぼくだと分かって、駆けつけて来た。

“アリーヌ”とぼくは言った。“どうしてここへ？ 他のみんなは、みんなはどうなったんだ”

“みんなは殺されたわ”と、アリーヌは悲しそうに言った。“あれからまた、あの仲間たちがやって来て、今度はわたしたちの宇宙船を、徹底的に破壊したわ。そして、わたしを連れ去り、仲間たちを虐殺したの。――でもその前に、わたしたちは、あなたの報告を受け取り、すぐ近くまで飛んで来ていた第二弾の援軍たちに、このことを知らせておいたわ。その後のことは何も分からない。それよりどうしてあなたはここに？”

“それもすべて、あのフローラのおかげさ”

そう言ってぼくはフローラを指そうとしたが、彼女は既に、ぼくから鍵の束を受け取って、アリーヌの牢の鍵をあけにかかっていた。そしてそれは間もなく開いた。

アリーヌはやがて牢から出て来たが、それは、アリーヌと、フローラと、リサとの、初めての、奇妙な対面だった。それぞれが、ぼくを通じて知り合い、お互いについては、ほとんど何も知らないのだ。それでも彼女たちは、お互いを見つめ合い、理解をし合ったようだった。

それからぼくたちは、他に娘たちが閉じ込められている牢に向かい、片っ端から鍵をあけ、彼女たちを解放しにかかった。娘たちは、歓喜の声を上げて、次々と牢から出て来、その数はふくれ上がるばかりだった。

が、そのときだった。

“ワッハッハッハッハッ”と笑う、あの悪魔のこう笑が、洞窟の天井高く響き渡った。

“お前だな、フローラ。そしてシレール”と、姿の見えないその声は言うのだった。“まんまとだまされたが、そんなに簡単に行くと思っているのか”

“どこにいるのだ！ 姿を見せ！”と、ぼくは、その声にためらい、一瞬立ち止まって叫んだ。

すると、揺ら揺らと燃える松明の光に照らされて、大きな洞窟の壁面いっばいに、その魔王の、巨大なシルエットが突然浮かび上がったのだった。その魔王の巨大な影は、威嚇的で、みんなの気力をくじくに十分なぐらいの効果上げた。

だが肝心の魔王はどこにいるのか、姿を見せない。そのままに、魔王はさらに続けた。

“フローラ。どうしてお前は魔法を解かれたのか。わしはお前が好きだったのに、裏切りよって。この仕返しは必ずするからな。それから、脱走しようとしている他の者、みんなよく聞け。ここから出ると命はないものと思え。お前たちが不老不死で生き長らえているのも、ひとえに、ここにいるからなのじゃ。それこそここから出ればたちまち、お前たちは消滅してしまう。お前たちの年齢のことを考えよ。お前たちの知り合いで、今も生きているものなど、一人もいないはずじゃ。それほどお前たちは、実際は年をくっているんだということを、よく肝に銘じよ。だから、ここから出れば、その魔法は解かれ、お前たちはたちまち腐食土となって、消滅してしまうのだ...”

魔王がそのように演説をぶっているあいだ、ぼくは、その声のする方向へと、一步一步音もなく近付いて行った。どうなるか分からない。だが、こうなった以上、もう魔王と対決する以外、ぼくの道は残されてはいなかった。

ついにぼくは魔王を見た！ あの、塔の上にはいたはずの魔王が、今や、牢への入口のところに立ちはだかるようにして、あの魔女のかかげる松明に照らし出されながら、立っていたのだった。

ぼくはついにその前に立った。

魔王は、そんなぼくをにらみつけるようにして叫んだ。

“お前だな、シレール。どこから来たのかは知らないが、こ憎らしい奴じゃ。ただではすまないことを肝に銘じておけ！”

ぼくは、魔王の威嚇的な目に、負けそうだった。

しかし、しっかりしろ、しっかりしろ、と、心の中で自分を励ました。負けるなシレール。何かいい知恵を絞るんだ！

魔王は、ぼくに向けてすごい形相をすると、何か魔法をかけるべく、両手をふりかざすと、大声で呪文を唱え始めた。

もう絶対絶命のピンチだった。ぼくにはどうすることもできない。

そのときだった。ぼくはふと思い出した。あの老人が、別れ際にぼくに言ってくれたあの言葉。

“それは旅の幸運を祈るためのお守りじゃ。それを首にかけておれば、魔王の邪魔が入ることはあるまい。きっと、何かの役に立つこともあるう”

そうだ、あの首飾りだ！とぼくは思った。

長いあいだ忘れていた、あの太陽のようなお守り。それが今でも、ぼくの胸の内に、しっかりとつけられていた。ぼくはそれを取り出すと、魔王の方に向けた。

すると、思いがけないことが起こったのだ。ぼくのネックレスの金属の太陽からは、強烈な光線が発射され、それは呪文を唱えようとしている魔王を直撃した。

魔王は、両手でその光線を遮るようにして、ギャッと叫んだ。

“覚えておれ、お前”と魔王はその光線にあわてふためきながら叫んだ。“こんなちやちなもので、オレにたちうちできると思っているのか。この仕返しは必ずするからな！”

しかしそうは叫ぶものの、魔王がぼくのお守りの光線でひるんだのは事実で、出口から離れたスキに、ぼくは引き連れて来たみんなを、その出口から逃がせることにした。

“お前たち、分らんのか！”魔王はひるみながらも、なおも叫んだ。“外に出ればみんな、死んでしまうんだぞ！”

だが、逃げたい一心の娘たちは、なだれを打つように、その出口の洞窟に殺到した。

“さあ、早く！”と、ぼくは娘たちをせき立てた。

“畜生、こいつめ！”と、魔王は、ぼくのお守りの光線に、金縛りになりながら、そばにいた魔女に向かって怒鳴った。“おい魔女！　なんとかしないか！”

“はい、パンプルネル様”魔女は、あわてふためきながら答えた。

それが、初めて聞く、魔王の本当の名前だった。

“さあ早くフローラ、君も行くんだ！”と、ぼくは叫んだ。

“でもシレール！　あなたは”と、フローラは言った。

“ぼくは最後まで残る”と、ぼくは叫んだ。“君はみんなを引き連れて行って欲しいんだ。出口を知っているのは、君しかいないんだからね。お願いだ、さあ、急いで！”

“でもシレール！”フローラはなおもためらった。

ぼくを一人残すのが、忍びないようだった。しかしやがて決心を変えると、フローラは言った

。

“分かったわ。じゃ行くことにする”

そう言ったフローラは、本当に幸せそうな顔をしていた。

“うまく出られたら、向うで会いましょう”と、フローラは微笑みをいっぱい浮かべて言った。“そしてみんなで、カリオンの桃の谷へ行くのよ、シレール”

そう言うとフローラは、別れ間際に、ぼくの頬にキスをした。

“さようなら...”

フローラは、他の娘たちと、洞窟の出口へと立ち去ろうとした。

そのときだった、

“フローラ！”と、再び魔王が叫んだ。“お前は行けない。行かすわけには行かない！　そこに立ち止まるんだ”

するとフローラは、行きかけた足を、パタリと止めた。彼女には、明らかにためらいがあった

。

が、意を決して、再び歩み始めたとき、魔王は再び叫んだ。

“おい魔女！　やるんだ！”

すると魔女が、鋭い爪のついた両手をふりかざすなり、出口に向かおうとするフローラに向かって、ギャッと叫んだ。

フローラはそれでも駆けて行った。必死に命に向かって、幸せが待っている洞窟の方へと。

が、フローラが、その洞窟に行きつくか行きつかないうちに、彼女の体は、まるで霧が晴れるように突然スーッと消えてしまい、後にはもう何も残らなくなってしまったのだった。

再び魔王が、ワッハッハッと大声で笑い出した。

“見たかシレール。これが、お前の仕打ちに対するわしの返礼だ。彼女は消えた。もう生き返ることもない。だがそれだけじゃない。よく聞け！”と魔王は叫んだ。“お前の妹も、アリーヌも、みんな同じ目に会わせてやる。だが、命だけは助けてやる。ただし、二目と見られぬ姿に変えてしまつてな。分かったか。ワッハッハッハッハ...”

その、いつやむとも知れない不気味な魔王のこう笑と共に、グラリとぼくの足下か揺れ始めたのだった。

ぼくのそばにいた、リサとアリーヌが、怖そうにぼくを見た。

魔王はなおも笑い続けた。おかしくて、腹の底が痛むかのように、笑いころげるようにして、笑い続けた。

ハア、ヒィ、と笑い続ける魔王の声が、この広い洞窟の中で、果てしなく響き渡った。

“ハハハハッ”と、三たび魔王は言った。おかしくてたまらないというようなそぶりをしながら...

“わしに勝つとでも思ったのか。このまぬけめ”そして再び笑いで中断される。それからまた魔王は言った。“わしに勝つものは、この世のどこにもいない。そんなわしに戦いを挑むなんて、おかしい限りだ。お笑い種だ。お笑い種だよ。本当におかしい。腹の皮がよじれてしまいそうだ”

そうして笑いながら、魔王と魔女は、フウワリと宙に舞い上がった。

“さらばだよ。シレール。さらばだ”

そうして再び魔王は、大声で笑い続けた。やがてその姿は、天井高く、暗闇の中に吸い込まれて行った。

そのとたん、三たび足下に地割れが生じた。

今度は致命的だった。パツクリと口を開けた岩の下には、あの恐ろしい暗黒の深淵が待ち構えていた。

足下が何度も激しく揺れ、ついには地割れで生じた落石と共に、とうとうぼくたちは、その深淵へと投げ出されてしまった。

一瞬血も凍るような恐怖がぼくを襲ったが、もう後の祭りだった。

ぼくは、リサともアリーヌとも離れないようにとその手をつかもうとしたが、ひとたび虚空に舞った体は、その願いも空しく、それぞれが引き離され、恐怖の叫び声と共に、ただあの不気味な、暗黒の深淵が口を開いているその下へと、落下して行くばかりだった...

終章

1

厚い雲が空のところどころをおおい、春の日光が、そこから射したり射さなかったりする微妙な天候の風の強い日、向うの草むらでは、春の美しい花々が、黄色いのや、白いのや、赤いのなどが一斉に咲き匂っている。広々とした湖のなぎさの岩場で、ぼくは腰を掛け、じっとさざ波を立てる湖の方を見つめていた。再び空からはパッと日光が射し、それまで暗かった木々の葉も、花々も、一斉に光を浴びて、風に揺れながら、まぶしいほどに輝いて見えた。青い空が顔をのぞかせ、やがて空が晴れて行くのは、時間の問題だろう。

ぼくはふと立ち上がり、幅の狭い帯状の砂の渚を二、三歩歩きかけた。

その手には、小さな小瓶が握られ、その中には、一匹の可愛いらしい色どりをした小魚が泳いでいた。

そのとき、渚の向うの方で音がした。一人の若い娘が藪の中から逃げ出して来、続いて一人の若い男がその娘を追いかけて来た。波打ち際で、男はとうとう娘に追いつくと、いやがる娘に無理やり抱きつき、彼女をからかいながら今にも、水の中へ沈めようとしていた。

その光景を見るや、ぼくは小瓶をポケットに入れて、現場にかけつけた。

そして男に向かって怒鳴ったのだ。

“こらやめろ！ ヒドいじゃないか”

すると男は、いやがる女の子をほどいて、ぼくを見た。

“なんだとこいつ”と男は言った。

そして向き直ると、ぼくの方に近付いて来た。ポケットに入っている小瓶を見ると、それを珍しそうに眺めた。

“ほお、いいのを持っているじゃないか。中に何が入っているんだ”

そう言うや、男はぼくの手をつかみ、ぼくのポケットから、その瓶を取り上げようとした。

しかしぼくはすぐポケットに自分の手を突っ込み、それを渡すまいとした。

“なんだいそれは。よっぽど大事なものでも入っているのかい？”と男は言った。それからちらっと中を見ると、続いて彼は言った。“なんだ、ただの魚じゃないか。それを大事そうに持って。さあ放しな、オレが処分してやる”

そう言って男は、力づくでもぼくの瓶を取り上げようとしたので、ぼくはついに叫んだ。

“いやだ、死んでも放さないぞ。絶対に渡すものか！”

“なんだこいつは。気が狂っている”と、男はそんなぼくを見て言った。“こんな男など相手にしちゃられない。さあ、オレはもう帰るぜ”

そう言って男は、逃げて来た娘に向かって、ちらっと目くばせをした。

少し離れた所にいる娘は、気の毒そうな目で、そんなぼくを見つめていた。彼女も、男に言わ

れるまま、そこを立ち去ろうとした。そして別れ際、彼女はぼくを見て、同情するようなまなざしで言った。

“助かりましたわ。本当に、なんとお礼を言ったらいいか...”

彼女が去って行くと、再び渚には、静寂が訪れた。

ぼくはそっとポケットから、例の小瓶を取り出した。中では何事もなかったように魚が静かに泳いでいた。ぼくはそれを見ながら、やがて目には涙がこぼれて来た。

だって、この中にいる魚は、実はぼくの妹のリサだったのだから...

それだけではなかった。向うで咲いているあの可憐なクローバの花は、それは風に揺れて、一つの花に過ぎないけれども、実はそれは、あのアリーヌだった。

姿を変えられたリサ、アリーヌ、その他諸々のものが、この周りにはあった。春の日を浴びて、咲き匂う花々の一つ一つが、また、水辺に漂う水鳥たちの一羽一羽が、姿を変えたあの娘たちだった。

ぼくは何日も、彼女たちのそばで過ごした。しかしどうすることもできなかった。

そのとき、数日前に知り合ったばかりの、ここへキャンプに来ている、年の頃、フローラほどの姉妹が再び姿を現した。

彼女たちを見れば、ぼくは、いやでもフローラを思い出してしまうのだった。

その姉の方が、ぼくを見て言った。

“あら、またいるわ。あの人。いつまでいるつもりなのかしら”

続いて妹が言った。

“それにあの瓶だって、まだ持ってるわよ。よっぽど大事なものらしいわね”

それから彼女たちは、肩を組んでぼくのところにやって来た。

“お兄さん、一緒に遊ぼう。あたしたち、いいところ知ってるのよ。そこへ行きましょうよ”

無理やりぼくの手を引っ張る彼女たちにぼくは折れて、彼女たちの行くところに付いて行くことにした。

やがて同じ湖でも、うっそうと樹木が茂り、昼間でも光が届かないような所へと、彼女たちは、ぼくを案内した。そんな森をしばらく歩いた後、やがてパッと、眼前に、あの湖が立ち現れた。そこから見る湖は、あそこから見える湖に比べて、美しい、というよりも、むしろ不気味な印象さえ与えた。

“お兄さんって知ってる？”と、姉娘の方が、湖が見えた頃、話し始めた。

そう言ってから、彼女の語り始めた話しは、ぼくにとって興味のあるものだった。

彼女の話しによると、ここは昔、その時代としては最も栄えた文明の都が存在したということだったが、今から数百年も前にある魔物たちがやって来たために、たちまち滅び去ってしまったということだった。そしてその魔物たちは、今でもなお、この湖底に住んでいると言った。なるほどそのせいか、辺りは魔物を恐れてか、人気はなく、全く静かだった。

“ところで、向うに小さな島が見えるだろう。あれは何んだい？”

とぼくは、湖の中央にポツカリと、頭だけ出したように浮かんでいる島をさして尋ねた。

“あそこにかつて王宮があったの。でもあそこへ行くまで大変だから、今では誰もあえて行こうとはしないわ”

“でも、向うにボートがあるよ。あれを漕いでなら、島にも行けそうだな”

何気なく、森の開けた岸边につながれているボートを見つめながらぼくは言ったが、姉妹たちは、湖底に住むという魔物を恐れてか、まだ少しためらいがあった。

“お兄さん、本当に行く気？”と、姉娘が尋ねた。

“もちろんだとも”と、ぼくは、何も恐れることなく答えた。“君たちも本当は行きたかったんだろ？ でも行くのが怖いんだというのなら、ぼくひとりでも行ってみるよ”

すると、彼女たちも急にあわて出した。

“それならわたしたちも行かせて。一緒にお伴するわ”

“よし決まった”

ぼくはボートを漕ぎながら、二人の姉妹を乗せて、一步一步湖の中央に浮かぶ小島に近付いて行った。途中の湖は、死んだように静かだったが、何事も起こらなかった。

そしてとうとう目ざす小島の岸にボートをつけたとき、ぼくは自慢気に彼女たちに言った。

“ホラッ、別に何事も起こらなかったろう。これは、ぼくの神通力のおかげさ。湖底に眠るとやらの怪物さんは、ぼくのこの神通力のおかげで、目が覚めなかったんだ”

すると、彼女たちもにっこりして、

“まあ、冗談のうまいこと”と言った。

それにしても、島に着いたのはよかったが、上陸するや否や、見るからに気味の悪い島であることが分かった。そこらじゅうに、人間の骨や、正体の分からない巨大な骨などが、ゴロゴロしていた。まるで島全体が一つの墓場のようでもあった。

しばらく行くと、確かに昔の宮殿の跡らしい廃きょが見られたが、ほとんど解体して、自然に帰ってしまったというか、今ではほんの少ししか残ってはいなかった。それでも、誰かが寝起きをしたらしい寝室の跡などは、ほとんどそっくりそのままの形で残っていた。だが、期待したほどには、見るべきものがなかったようだ。ぼくたちは、上陸して間もないのに、もう日がかげって来たせいで、帰ることにした。

島の波打ち際で、主のいないボートがひっそりとつながれている様を見て、ぼくはもう一度、自分のいた島を振り返った。

この島と、湖にまつわる伝説は、ぼくの体験したあの魔王の国と、どんな関連があるのだろうか。ぼくは不思議な気持ちに打たれながら、再びボートの方に目をやった。

すると驚いたことに、あの姉妹の他に、もう一人見慣れない少女が、彼女たちのあいだに混じって立っていたのだった。

“君は誰だ？ いつのまに！”と、ぼくはギクリとなって言った。

すると姉娘は、落ち着いた目で、ぼくを見つめて言った。

“この子、魔女なのよ。知らなかった？”

“魔女だって！”と、ぼくは驚いて言った。

“信じられないでしょうけれど、本当に魔女なのよ”と、続けて姉娘は言った。“でもここへ来る男の人は気を付けなさい。この魔女は、次から次へと男の子をさらって行くんだから。さらわれたらもう最後、二度とこの世に戻ることはできないわ”

“でも君”と、ぼくは、姉娘と、そして魔女と呼ばれた女の子の方を見て言いかけた。

魔女は、小さくて、可愛い女の子にすぎなかった。ぼくに対しては、ただ愛想よく微笑みかけている。その円くて、大きな瞳が、なんとも言えず魅力的だ。ぼくは、魔女と呼ばれた子をつぶさに観察した後、再び話しかけた。

“とても信じられないな。だって、君たちは、魔女でもなんでもないんだろ。じゃあどうして友だちなんだ”

“知らないわ”と言うなり、魔女でない姉娘は笑い出した。“でも、女の子には危害を加えないから、わたしたちは友だちな。ねえ、知ってる？ この子は夕方にならないと現れないのよ。だから、さっきまではどこにもいなかったでしょ。そりゃそうよ。魔女は夜しか、いられないものね”

“ねえ君、もう帰ろう！”と、ぼくは、もうそんな話しは、聞きたくないとばかりに叫んだ。“早くここを去ろう！”

そう言うなり、ぼくは、二人の姉妹の手を取って、ボートの方にとって返した。

もやいをほどくと、ぼくたちのボートは、魔女と呼ばれた子を、その島に一人残したまま、静かに、その島から離れて行った。

再びぼくたちは湖上を前進した。

その頃になって姉娘が、ぼくに話しかけて来た。

“今頃あの子、しょげているに違いないわ。せっかくのママへのプレゼントを、だいなしにしたんですもの。今頃はきっと、ママのところへ帰って、ママからさんざん、おしおきを受けているに違いないわ”

“へえ～、ママがいるのかい”と、ぼくは感心したように言った。“でもその、プレゼントというのはなんだい？”

“まだ分からない？”と、姉娘は、笑いながら言うのだった。“あんたのことよ”

ぼくは、その言葉を聞くなりギョッとなった。ぼく自身のことと共に、リサのことも思い出したからだった。リサは本当に、そのようにして奪われ、ヒドイ目に会ったのだ...

“あの子はもう少しであんたをつかまえるところだったのに、危ないところであんたは助かったのよ...”

もうほとんど、この湖にも夕闇の迫る頃、ぼくたちを乗せたボートは、静かに岸辺に向かっていた...

岸に着くと、西陽の当たる山の頂や、美しい夕焼けに彩られた茜雲を見ながら、ポケットに入っていた瓶の魚を、湖に返してやることにした。いくら待っても帰ることのないリサ、そのリサを、自由にしてやる決意を固めたのだ。そして同時に、ぼくはここを去る決意をした。

“お兄さん、いよいよお魚を逃がせてあげるの”と、ぼくの動作を見ながら、妹娘の方が言った。

“そうだよ”と、ぼくは瓶の蓋をとって言った。“湖に返してあげるんだよ。自由になる為にね”

それから、ぼくは、その場にしゃがんで、瓶の中の水ごと、その小さな魚を放流した。

少女たちは物珍し気に、ぼくが魚を放してやる様子を見つめていた。

湖に放たれた小魚は、しばらく波打ち際を漂いながら、名残惜しそうにしているように見えたが、やがて急に向きを変えると、湖の奥深くへと、静かに消えて行った...

“さあすんだ”と、ぼくは晴れ晴れとした気持になって言った。“ぼくはもうあきらめたよ。“失ったものは、もうどうすることもできない...”

“それ、なんのこと？”と、妹娘は尋ねた。

“いや、ひとり言さ”と、ぼくは言った。

それからぼくは背伸びをし、晴れ晴れした気持になって言った。

“君たちはまだここにいるんだろ？ でも、ぼくはここを去るよ。お父さんたちにもよろしくな。そしてくれぐれも体に気を付けることだね”

“あたしたちはまだ当分、キャンプでここにいるわ”と、姉妹は、明るい顔をして答えた。

“じゃ、さようなら”

“さようなら...”

姉妹たちは、去って行くぼくに向かって、いつまでも手を振り続けてくれた...

...このさわやかな春の晴れた朝、ぼくの帰って行こうとしたところは、

そう、ぼくの耳には今でも聞こえていた。

“ねえ、この戦いが終わったなら、みんなで、うなぎの住むカリオンの桃の谷へ行きましょうよ。そこは、老人が住んでいて、本当に素敵なおとこなのよ。今頃だったら、桃の花がきれいで、川では、本当に、目の玉が硬貨ほどもある大きなうなぎが自由に泳ぎ回っている。あんなに素晴らしい村って、多分、他にはないわ...”

それは、まだ生きていた頃のフローラの声だった。

それに対しては、

“へえーすごいな。そんなに大きなうなぎが本当にいるの。行ってみたいな”とあのときのぼくは答えたのだ。

そうだ、ぼくはその声に魅きつけられるように、遠い空の白い雲を見つめながら、カリオンの桃の谷へと向かった。

本来ならばそこへ、フローラ、アリーヌ、リサなどを伴って、みんなで行くつもりだった。

しかしその幸せな夢だけは、見事打ち砕かれ、果たし得なかった。

だが、たったひとりでも、フローラが夢を語った、カリオンの桃の谷へ行くことは、価値のあることだろう。

心地よい風が夢を誘いながら、ぼくはとうとうカリオンの谷へ近付きつつあった。

ぼくが初めてカリオンの地に足を踏み入れたときには、まだ存在していた、司令部のあるあの美しい城も、少女たちがまばゆいばかりに泳いでいたあのプールも、農場や牧場も、魔王軍に滅ぼされて、今は跡形もなく消えていたが、しかし、その破壊された廃きよのそばを通り過ぎて行くぼくの目は、決して悲しんではいなかった。今は石のかけらとなった司令部のあった城跡には、寂しげに雑草が、風に揺れていた。

だが、カリオンの谷だけは、破壊からはまぬがれたのだ。

今や、草が伸び放題の農場跡まで来れば、カリオンの桃の谷までは、もうすぐそこだった。

それを告げるかのように、農場跡を、少し山の方にたどれば、きれいな急流が森の間をぬって流れる小川に突き当たった。この川を、上流へ向かって行けば、もうそこが、カリオンの谷なのだ。

ぼくは、その素晴らしい急流を目にして、こんなに寂しい森にたったひとりやって来た自分の胸が高鳴るのを感じた。

のどかな春の日ざし——そしてこの柔らかな風。

まるで夢のようなところに立っているのを確認すると、ぼくは流れに逆らって、歩き始めた。

そしてついに、長い険しい森の中の道のりを歩き通した後、その流れが急に止まって、まるですべてが嘘のように静まり返ったところへやって来たとき、ぼくは自分が、桃の谷へやって来たことを確認したのだった。

桃の谷は、別名を、美しい花園とたとえればいいのだろうか。

流れがすっかりなくなった、緑がいっぱいの山の谷下の小川には、めがねの形をした石の橋がかかり、岸边には、今が盛りとばかり、あの匂うような桃の花が、目を円くさせるほど、それこそいっぱい咲いていたのだった。

フローラが言っていたことは間違いではなかった。とするなら、この淀んだような小川に、あの、目の玉が硬貨ほどもあるという大うなぎが生息しているのだろうか...

ぼくは、今が盛りとばかり満開に咲いている桃の木のひとつひとつに驚きながら、一步一步さらに奥へと歩いて行った。

山あいの、頭上から降り注ぐ春の日ざしや、絶えず吹き寄せるさわやかな風といい、ふくいくたる桃の香りといい、すべてがまるで夢のようで、夢のような光景に目を奪われてここが現実だとは、とても思えなかった。

だがそのとき、それまでまるで死んだように静かだった川から、急に何かが踊り出て、ぼくはとうとう見たのだった。

目の玉が硬貨ほどもある大うなぎが、水面を飛びはねて、一瞬その姿を見せたかと思うや、再び水につかって、水面深くもぐり込んで行った。

それは、その場でぼくを立ちすくませるほど、驚くべき光景だった。

“見なされたか”

そのとき、老人の声が後ろの方でしたので、ぼくはハッとなって振り向いた。

すると、桃の木に囲まれた、小高い山小屋の方から、一人の老人がぼくの方へと近付いて来た。

“あんな光景など、めったに見られるものじゃない。あなたはよほど運の強い方じゃ”

近付いて来る老人の顔をよく見ると、それは見覚えのある顔で、ぼくたちはお互いに顔を見合わせた。

“あなたはあの！”と、ぼくは驚いて叫んだ。

“そうか、やはり君だったのか”と老人も、ぼくを見て言った。

老人は、今もあのときと変わらぬ顔や服装をしていたが、ぼくが初めて、魔王について相談に向かったあのシンクレール老人その人だった。

“どうしてここへ？”と、ぼくも驚いて、老人を見て言った。

“いやわしもな”と老人は言った。“レジスタンス時代の活躍が買われて、この桃の谷に住むことを許されたのじゃ。向うには、ここから200メートルも行ったところには、カリオンのあの総司令長官も、今は引退して住んでおるよ”

“あの司令長官もですか？”と、すっかり殺されたものとあきらめたのに、驚いてぼくは言った。

“そうじゃ。君のことを、実に勇敢な若者だと褒めていたよ”と老人は言った。“また後で、会いに行くがいい。きっと君を見れば、喜んでくれるに違いない。しかしその前にわたしの家に来なさい。つもる話しがあるじゃろうから”

そう言って老人は、質素な木造の山小屋へと、ぼくを案内した。

山小屋の周りには、目を奪うほど美しい桃の花々が、春の光と風とをいっぱいを受けて美事なほどたくさん咲いていた。

老人の小屋に入る前に、そのひとつを見つめながらぼくは言った。

“美事な花ですねえ。本当にここは素晴らしい、いい所です”

“ここは、わたしたちの理想郷だよ”と、老人は答えた。“ここには、年がら年中、なんらかの花が咲いておる。しかし中でも一番素晴らしいのは、この季節、ここで咲く、この桃の花じゃ。この桃の花が咲くとき、わたしたちは、ここに住んでいることを、本当に、心の底から、幸せに思うものなんじゃ。こんなに幸せな場所など、他のどこにもありゃせんと思ってな...”

“おじいさんの言うこと、分かります”と、ぼくは、胸がつまりそうな思いになりながら言った。

本当にここへ、リサやアリーヌを連れて来たかった。そして彼女らに、一目でもいいから、この素晴らしい村を、その美しい、今が盛りの桃の花を、見せてやりたかった...

老人はぼくを、家の中へではなく、軒下のテラスにしつらえた円テーブルへと、ぼくを案内した。テーブルには、黄色いテーブルクロスが掛けられ、円テーブルの中央には、花瓶に活けられたバラの花が、さりげなく飾られている。木で組まれて、長く張り出した庇は、がっしりとはしていたが、いかにも素朴であった。壁際の、石で造った棚には、様々な瓶や、壺などが賑やかに置かれ、この質素なテラスにも色どりを添えていた。しかしなんとといっても、テーブルの椅子に腰を掛けて、桃の花や、その他、名も知らない紅い花が草むらいっぱい咲き誇って、風に揺れている、ふもとの小川へと延びる、素晴らしい眺望が見られるのが一番だった。

“どうだ、いい眺めだろう”と、老人は、椅子にぼくを腰掛けさせると言った。

“ええ、素晴らしい眺めです”と、ぼくは、うっとりするようなまなざしで答えた。

春の、冷たい、柔らかな風が、絶えずこの庇の下にも吹き寄せていた。こんなにいい気分を味わうのは、めったにないことだった。

“今、婆さんが、ハーブ茶を持って来るからね”と、老人は言った。

そう老人が言うか言わぬかのうちに、もう一人の老婆が、室内から、お盆にお茶を持って現れた。

この前は、確か留守だったので、今回が、この老婆との初めての対面だった。

簡単なあいさつをすると、老婆は、お茶をテーブルに置くなり、再び家の中へと姿を消した。

お茶を飲むと、この前と同じ、いい味がした。それが、このさわやかな春のふんいきによく合っていた。

“それでどうだった？”と、最初に切り出したのは老人の方だった。“妹さんとは会えたのかね？”

“ええ、会うには会えました”と、ぼくは、過去をなつかしむように答えた。“でもその妹は、魚に姿を変えられてしまったのです...”

“ほおう、初めて聞く内容だ”と、老人は、ぼくの悲しみなどどこ吹く風で、ぼくの話しの内容にだけ、関心を持つように言った。“じゃ、君は、魔王にも会ったのかね”

それで、ぼくは、あったことの一部始終を、この老人に語って聞かせてあげた。ただしあのロープで吊るされたクリアの痛ましい姿だけは、老人がショックを受けるといけないと思って、うまく避けながら...

ぼくが話し終わると、老人はただ、感心するばかりだった。

“だったら、そのフローラも、アリーヌとかいう娘も、その他、魔王に連れ去られたすべての若い娘たちがみんな、花になったり、鳥になったりさせられてしまったのか——そんな話を聞くのは初めてのことだ。ふむ...”

“いえ、フローラだけは、突然、魔女によって消されてしまいました”と、ぼくは、老人の言葉を訂正した。“一度生き返ったフローラが、今度こそ本当に殺されてしまったんです。こんな悲劇など、もう味わいたくもないし、思い出したくもありません。魔王は不死身で、決してぼくたちがたちうちできるような、そんな相手じゃないんです。彼を甘く見たぼくが、結局バカでした。おかげでぼくの恋人も妹も、みんな失ってしまったんですから...”

“そうか、実に興味のある話しじゃ”と、老人は、しきりに感心しながら言った。

庭には、さっと光がさし込み、桃の花や、その他の花々が、一層鮮やかに、ぼくの目に映った

。

“...だが、君の見たことは、多分本当だろうけれど、それが全面的に魔王の真理だ、とは限らない”と、老人は言った。“わしとしても、魔王と対決した生き証人とじかに話すのは初めてのことで驚いているんじやが、魔王の塔が、そんな冥界のようなところにあり、いけにえとなった娘たちがみんなそんなほら穴に一箇所に閉じ込められている、なんてにわかには信じられんのじやよ。というのも、これまでの資料や記録によれば、この前君に話したように、一人一人が広大な宮殿に住んでいる、ということだからだ。それと、君が体験した話しとは、明らかに矛盾している。これをどう調和させればいいのか...”

そう言って、老人は悩むように頭をかかえた。

それから、老人は、急に、何かを思いついたように、ハッと頭を上げた。

“そうだ。きっとそうに違いない！”と、老人は叫んだ。“そうだよ、君”と、老人はぼくを見つめた。“君のおかげで、ある謎が解けた。きっと彼女たちは、君への見せしめの為に、一時的に姿を変えられただけで、そのうちわしの言う、魔王の宮殿へと連れて行かれるに違いない。魔王が恋した、そんなきれいな娘たちを、いつまでも別の姿に変えておくわけではないのだよ。

だから君の妹も、アリーヌも、今頃はまた元の姿に戻って、どこかの宮殿で幸せに暮らしている。そう、きっとそうに違いないんだよ...”

“でも”と、ぼくは驚いて言った。“そんな確証があるんですか”

“いや、確証は何もない”と、老人は否定的に言った。“――でも、その可能性は否定できないし、それに――こう考えることで、君は少しでも慰められるのではないかな。彼女らは、花や小魚に姿を変えられた。それは君の話しから確かなことだ。しかし再びまた元の姿に戻って、今度は素晴らしい宮殿で、幸せに暮らしている。そう考えれば、君の重い気持も、少しは和らぐことができる――そうじゃないかな？”

“でも、そんな話だけでは...”と、ぼくはポツリと言った。“それに、もしその話しが本当だとしたら、その宮殿はどこにあるんです？ そしてぼくはまた、そこまで捜しに行かなくちゃならないんですか？ そんなことはもう御免です。ぼくは妹を捜し出そうとして、もう十分に苦しみを味わったのですから...”

そう言って、ぼくはガックリと頭をうなだれた。

“君はとうとうあきらめる気になったんだね”と、やがて老人は、ポツリと言った。“そう、魔王に関しては、それだけが真理なのじゃ。戦いを放棄し、あきらめるしかない。――君もとうとう、その真理が分かって来たらしいね。しかしこのことは、悲しいことかも知れないが、大切なことなんだよ...”

“ぼくはあきらめました”と、ぼくはきっぱりと言った。“何もかも、妹のことも、フローラやアリーヌのことも、今となっては、なつかしい思い出だけです。ぼくは運が悪かったんです。そう思って、あきらめます...”

“そう... それで、君はこれからどうするのだね？”老人は穏やかに尋ねた。

“分かりません”と、ぼくは答えた。“まだ決めていないんです。これからどうするか... とにかく、一からやっ行って行かなければなりませんので...”

“それなら、いいことを教えてあげよう...”と、老人は最後にそう言った。“聞くところによると、君は、この国ではよその人だ。この見ず知らずの国で、たった一人で生活して行くのは、さぞかし辛いことだろう。だから、帰るのじゃ。帰ることだ。この国であったことは、何もかも忘れて、帰ることなんじゃ”

“でもどこへ？”

“君がそこから来たという、その国へじゃ”と、老人は答えた。

“でもどうして？”と、ぼくは尋ねた。

“いや、その気になれば、帰ることは簡単だ”と、老人は答えた。“わしらには出来ないが、その国から来た人間なら帰ることは簡単じゃ。わしがその場所へ導いてあげよう。さあ来なされ”

そう言って老人は立ち上がった。

ぼくも老人の後について行くと、やがて老人は、ぼくをあの、水が鏡のように澄んでいる桃の

谷の小川へと案内した。

“ここがそうなんじゃ”と老人は言った。“この、大うなぎの住む川じゃが、人が飛び込めば不老不死の命が与えられる、という言い伝えがある。だがわしはそんなことは信じないがな、だが、君なら飛び込めるだろう。この、一見何んの変哲もない小川は、別の言い伝えでは、別世界とつながっているという話しじゃ。もちろん、わしらにとっては、それは普通の小川でしかない。――だが、別の世界からやって来たという君にとっては、ここは、現在では唯一の、その世界との連絡路となっているはずなのじゃ。なあもし、まだこの国に未練があるというのなら、君は飛び込めんだろう。だがもし、何もかもすっかりあきらめて、この国に未練がないのだと考えるのなら、そのときは、君は飛び込み、君の元いた国へと戻って行けるはずなのじゃ...”

ぼくは老人に言われるまま、死んだように静まり返った、桃の谷の水面を見つめた。

そこには、岸辺に立っているぼくと、老人と、そして、美事に咲き誇っている桃の花――そして空に浮かぶ美しい雲とが映っていた。

“最後に言うておくがな”と老人は言った。“もし向うの国へ行けば、もう二度と、こちらへ戻ることはない。そのことをよく肝に銘じたうえで、決心することじゃ”

ぼくは、自分が今いるところはどこだろうと考えた。ここは桃源郷だった。桃の花や、その他の花が咲き誇り、きれいな谷間があり、しかも老人が住んでいる。ここでは釣りも楽しめるかも知れない。だが――もうリサも、フローラも、アリーヌも、永久に帰って来ることはないのだ。それならばせめて、ぼくは、自分の生まれた故郷へ、このインゲルートに迷い込む前にいた世界に戻りたかった。

“やはりぼくは行きます”と、ぼくは、水面に映る自分の姿を見つめながら、ポツリと言った。“お爺さん、いろいろとお世話になりました。本当に、ありがとう...”

“それじゃ、決心が変わらぬうちに、飛び込むんじゃ”と老人は、ぼくを励ました。

“今じゃ、さあ...”

“さようなら...”ぼくは勢いよく飛び込んだ。水底は深く、突然何者かがやって来たかのように思えたが、そのままぼくは意識を失ってしまった...

エピローグ

ぼくが目を覚ますと、明るい日ざしの近くに小さな池のある花壇の中に、自分が倒れていることに気が付いた。まばゆいばかりの太陽のきらめきだった。

ここはどこだろう？ と周りを見回した。すると向うに、どこかで見たことのあるようなホテルの群れが立っている。人々が幸せそうに通りを行き来していた。

ぼくはハッとなって立ち上がり、美しい花々が咲いている花壇から外に出た。

ここは、そう、コアンベルだ、とぼくは思った。

これこそ、あのニセものではなく、本当のコアンベルの町なのだ。それが証拠に、ホテルの向うには、素晴らしい海が広がっていた。波打ち際の砂浜では、日光浴を楽しんでいる人、泳いでいる人、あるいは、サーフィンを楽しんでいる人の姿などが見られた。

ぼくはあわててホテルへ向かった。予約していたパレス・ホテルだった。

フロントに行くと、予約していた部屋が空いているかどうか尋ねた。

“はい。空いております、ホールバラ様”と、フロント係は言った。“さきほど連れの方が来られまして、既に部屋でお待ちです”

“連れだって！”と、ぼくはドキリとした。

さらにフロント係が何か言おうとしたが、もうそのときにはぼくはエレベータに飛び乗っていた。エレベータの中で、ホテルのボーイは、ぼくを不審そうなまなざしで見つめていた。無理もない、花壇に倒れていたおかげで、せっかくのぼくの服が泥だらけになっていたのだから。ぼくはわざとしらを切って、自分の階が来るのを待ち続けた。

部屋のドアをノックして、しばらくすると、急にドアが開いた。

中から姿を現したのは、なんと、リサだったのだ。

ぼくは、自分の目を疑った。彼女は、本当に、リサなのか？

“兄さん、待ったわ。どうしてたの？”

見ると彼女もせっかくの白いドレスを泥で汚し、その可愛い頬にも、まだ幾分汚れが残っていた。

“どうしたも何も”と言いながら、ぼくは部屋の中に入った。“お前は本当にリサなんだね。生きていたんだね”

“変なことを言う兄さん”と言って、リサはにっこりした。“兄さんこそどうしたの。どこへ行ったのよ”

“ああよかった。お前は確かにリサだよ”と、ぼくは、リサの手を握り、その顔を確認しながら言った。“魚のままでなくってよかった...”

“わたしが魚ですって！”と、リサは驚いたように言った。“一体何んのことよ。説明して。わたしはずっと兄さんを捜していたのに...”

“ぼくを捜していたんだって！”と、ぼくは驚いて言った。

“まあ落ち着いて。そこへ座りましょうよ”そう言ってリサは、ぼくをソファーに坐らせた。

ぼくはソファに坐るなり言った。

“お前は、魔王の塔の下の地下牢に閉じ込められていたのじゃなかったのかい。そして、ぼくと一緒に脱出しようとして。そう、他にも、アリーヌやフローラがいて...”

“魔王の塔？ 地下牢？ アリーヌ？”と、リサは、不思議そうな顔をして言うのだった。“それになんだっけ、フローラ？ なんなの、それ？ 変なことを言う兄さん。頭が狂ったんじゃない”

“でもあのとき確かにお前は、地下牢にいたじゃないか！”ぼくはいらいらして叫んだ。

“そんなこと言ったって、知らないものは知らないわ”とリサも叫んだ。“わたしはずっと兄さんを捜していたのよ。それなのに、兄さんったら、いつも先に姿を消してしまうんですもの。魔王だなんて、そんなものはいなかったわ。あれが嘘っぱちだということが分かったんですもの”

そう言ってリサが語ってくれた中身は、およそぼくが経験したものと、似ても似つかないものだった。ぼくたちが、見知らぬ世界へ踏み迷って、ウィロビーの研究所にたどり着くまでは、共通の認識で一致した。だが、リサが姿を消してから、それ以後にリサが経験した世界は、ぼくが経験したそれとは、およそなんの共通性もないものだったのだ。リサは、魔王に連れ去られたのではなく、ウィロビーの研究所で突然消息を絶ってしまったぼくの後をずっと追いつけていたのだという。そして、いろんな町でいろんな人に会いながら、ぼくを捜し続けたあげく、ついに、リサも一人の老人にめぐり会い、その老人の進言によって、ぼくを追うことを断念して、その国を去ることを決心したのだという。

すると、ぼくのいたあの花壇にリサも倒れていて、そばにはきれいな泉が沸いていたが、リサはその足ですぐ、このホテルにやって来たのだった。

“魔王なんて、そんなものいなかったわ”と、リサは最後に言った。“兄さんこそあのウィロビー研究所からいなくなるんですもの。わたし驚いたわ。せっかくシャワーを浴びて、服もきれいにしておいて出て来たのに、肝心の兄さんが消えているんですもの。それからずっと、あの親切な研究員の方が、わたしと一緒に消えた兄さんを捜してくれて...”

それは、ぼくにとっては驚くべき内容だったが、あの魔王ならやりかねない、とぼくは思った。つまりあのときから、ぼくとリサとを、全く別々の世界（その世界を、今となっては、イングルートそのもの、と名付けてよいだろう！）へと引き離したに違いないのだ。ぼくの体験を、リサに話しても、多分リサは信じないだろうとぼくは思った。

“そうかい、お前の話を聞いていると、ごく常識的な、追跡の物語だったんだね”とぼくは言った。“そして魔王もいなかったし、素晴らしい宮殿もなかった。そうだろ？”

“宮殿？ それ、何？”と、リサは、訳が分からないように尋ねた。

それで、ぼくはぼくで、自分の驚くべき体験をリサに話してやることにした。

話し終えてもリサは、まだ信じられない、といった顔をしていた。

“結局、ぼくたちの体験したことって、なんだろうね”と、ぼくは最後に言った。

“しかし今となって言えることはただひとつ、それが素晴らしい経験だった、ということさ。そうは思わないかい？”

するとリサも、同意したようにうなずいた。彼女にも、彼女の体験の中に、素晴らしい人との出会い、そして悲しい別れなどが含まれていたのだった。

“結局、インゲルートって、夢の世界のようなものさ”とぼくは言った。“そして魔王は、そんな素晴らしい世界をぼくたちに見せてくれたのだから、決して悪者と決めつけるわけにも行かないね。――いずれにせよ、お前もぼくも無事でよかった...”

“本当にね”とリサも言った。“途中で辛い経験もあったけど、今となっては素晴らしい思い出に思えてくるわ”

それから、リサとぼくとは、お互いをつくづくと見やった。

“会えてよかったわ”

“ぼくもだよ！”

そう言って、ぼくたちは、お互いの再会を心から喜び合いながら、しっかりと抱き合った。その目からは、いつのまにか、嬉し涙が流れていた。

しかし、そうして喜び合っているぼくのまぶたに、やがて浮かんで来たのは、あの消えてしまったフローラであり、アリーヌの思い出だった。

素晴らしい経験だったな。でももう二度と会うことはない、とぼくは思った。そして、まぶたに浮かぶ彼女らに向かって、今度こそ本当に、“さよなら”を言う時だった。ほんの束の間だったけど、ぼくの人生に潤いを与えてくれた彼女たち。ぼくは、君たちと経験した思い出を、永久に忘れることはしないよ。本当にありがとう。そして、さようなら...

“ねえ、お前に会えたのは嬉しいけど、でも一方では辛いね”

それは、そのときぼくが思った、本当の気持だった...

フローラ、アリーヌ、今こそ彼女たちの名は、しっかりとぼくの胸に永遠に刻み込まれたのだった。

しかし間もなくして、ぼくたちの再会の興奮も覚めて来た。ぼくたちは冷静に、自分たちの体験したことを考えるようになった。そして、お互いに、一つの結論に達した。

“ねえリサ”とぼくは言った。“これだけは確かなことだ。ぼくたちがそれぞれに経験したこと――それは確かに事実には違いないけれど、それを話して分かってもらえる人っているだろうか？多分誰も信じやしないだろう。そしてきつこう言うに違いない。お前たちは頭がどうかしているって。だってさ、こんなに科学が発達し、交通戦争や情報が氾濫しているこの20世紀にだね、魔王だなんて、そりゃ確かに気が狂っているよね。だから、誰にも話したって、ダメだっていうことさ。だからいいかい、これは、ぼくたち二人だけの秘密にしておこう。二人だけのものさ。そして、素晴らしい思い出として、いつまでも心の中に留めておくのさ...”

リサもうなづいた。

ぼくは、ほっとして彼女の手をとった。

“さあそれじゃ、過去は過去として、ぼくたちはこれから、未来に向かって歩もうじゃないか”
空は晴れて、すがすがしいほどだった。

ぼくたちは、しばらく窓の外の美しい海を見つめ合った後、さりげなくぼくは、ホテルのテレビのスイッチをひねった。

すると、テレビ画面には、あの「第三の男」の映画の最後のシーンが映し出された。

ぼくとリサは、お互いに、その画面を食い入るように見つめた。

こうして、ぼくとリサとは、再び、普通の生活に戻ったのだった...

(完)